連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol.6 No.4

第24号

対人援助学会

NO. ２４　M O K U J I

目次		002
ハチドリの器	見野　大介	003
執筆者＠短信	執筆者全員	004-013
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	014-019
臨床社会学の方法	中村　正	020-030
ケアマネだからできること	木村　晃子	031-038
街場の就活論	団　遊	039-042
カウンセリングのお作法	中島　弘美	043-048
映画の中の子どもたち	川崎　二三彦	049-050
コミュニティを探して	藤　信子	051-052
蟷螂の斧　Part2　No. 7	団　士郎	053-061
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	062-064
学びの森の住人たち	北村　真也	065-066
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	067-072
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	073-078
先人の知恵から	河岸　由里子	079-084
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	085-088
対人援助学＆心理学の縦横無尽	サトウタツヤ	089-102
日本のジェノグラム	早樫　一男	103-105
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	106-111
七日参り	竹中　尚文	112-116
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	117-118
男は痛い！『さよなら渓谷』	國友　万裕	119-125
援助職のリカバリー	袴田　洋子	126-129
周旋家日記	乾　明紀	130-131
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	132-136
役場の対人援助論	岡崎　正明	137-142
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	143-146
十代の母という生き方	大川　聡子	147-153
電脳援助	浅田　英輔	154-158
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	159-162
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	163-168
周辺からの記憶	村本　邦子	169-178
病児保育奮闘記	大石　仁美	179-181
ラホヤ通信	高垣　愉佳	182-185
知的発達障害の家族の日々	大谷　多加志	186-188
対人支援点描	小林　茂	189-192
「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	193-198
清武システムズ	しすてむきよたけ	199-213
新連載　S. V. 羅針盤のない航海	川崎　二三彦	214-215
東成区の昭和・思い出ほろほろメモ	柳　たかを	216-223
編集後記	編集長＆編集員	224-226

ハチドリの器　7

見野　大介

Mino Daisuke

右上　：花器　- 呟き -
中央左：蒼天釉抹茶碗
中央右：桃花鳥釉水盤
左下　：花器　- 糧 -

第24号 執筆者@短信

柳　たかを

私的なことなのですが、2016年2月末で2015年2月末から続いてきた勤務先(宝塚大学)との不当解雇の訴訟に決着がつき、ひとまず様々な責任から解放されました。

職は失いましたが、結果は実質勝利和解なのでホッとし納得しています。

11年間のマンガ担当教員としての生活は予想以上に時間とエネルギーが必要でしたが、つきあう相手が若い未来に夢をもつ若者達であったおかげで、会社勤めのようなストレスに悩むことはなく、だから続けられたのだと思います。

3人一緒に闘ったうちの若い先生は、4月から新しい職場で教員支援員としてリスタートされることが決まっており、もう一人の先生は語学の非常勤講師としてすでに複数の大学で教壇に立たれています。

私もマンガ(カートゥーン)の指導で、また若者と共に学びたいという希望もあるのですが、それとは別に約20年以上昔から夢みていたプランがあります。

それはDIYでアトリエとして使うことを目的にした10坪ほどのログハウスを建てたいというものです。

「なら建てたらいいやん」なのですが、設計・建築確認・基礎工事・ログ材の加工・組立て・内装・電気工事も全部自分でやりたい、全く建築の知識はないのでゼロから人に尋ね勉強しながらですので、はたしていつ出来るのか、そもそも完成するのかいっぱい不安もありますが始めようと考えています。

さいわい建築予定地である妻の実家は広い敷地で建てる土地の選択に悩む必要はありません。

60代後半、腰痛の持病はありますが、夢みて前進する情熱はまだあると思っています。

ど素人が始めることなので、心がまえとしては、よく調べて準備計画をすること、焦らない、無理しない、怪我しない、しんどい時ほど楽しむ気持ちを忘れないようつとめて頑張ろうと思っています。次の号の執筆者短信でちょっぴりでもDIYのご報告を書けたらと思います…

齋藤　清二

京都に来て、ほぼ 1 年が経過し、ようやく交通手段や地理感覚なども頭に入るようになり、それを利用して、色々なところを見て廻ったりしてエンジョイしている。1 月から 2 月にかけては、専ら修論指導に勢力を投入してきたが、色々私も学ぶところが多く、学生さんから力をもらったように感じている。私が関わった学生さん達の修論はほとんどが、質的研究法を用いたものだったこともあり、一緒に論文を仕上げていくプロセスに伴走することで、しばらくなまっていた思考を再度鍛えられたように感じた。興味はあるが身近過ぎるようなテーマについて、出来る限りの精緻な分析と考察を加えつつ、言語化し発信できる何かを創り上げていくような作業を、学生さんに負けないように、私自身も続けていきたいという意欲をもらったことに感謝したいと思っている。

石田　佳子

今回は、身辺に変化があって忙しかったので、連載をお休みしさせていただきました。変化というのは、C 型肝炎が治った(らしい)こと、はじめて自宅を購入したこと、引っ越しに伴い大量の資料を捨てたことです。

C 型肝炎の治療については、昨秋からハーボニーという新薬を飲み始め、8 週間目の検査で「ウイルス検出せず」という結果を得ました。この治療には副作用がほとんどなく、従来のインターフェロンによる治療と比べると、夢のように楽でした。ウイルスが消えても長年積み重ねた肝臓への影響があるため肝癌になる可能性はゼロにならない(普通の人よりは高い)のですが、以前よりも身体が軽くなり、なんとも言えない解放感を噛みしめています。

自宅の購入は、日本国内で行いました。まだ当分、私たち夫婦が元気に動き回れる間はマレーシアを本拠地にする予定ですが、高齢の義父母が日本に住んでいること、今後も肝臓の経過観察が必要なことから、今後もたびたび帰国する必要はあるでしょう。また、海外に住んでいると、政治・経済、テロやヘイズなどで状況が急変することがあるため、やはり「いざという時には日本に帰れる(帰る場所がある)」のは、非常に心強いと感じます。そのため、帰国時に利用できるホテル替わり/ 海外へ出るためのベースキャンプとして、関西国際空港の近くに中古のマンションを購入しました。

そしてその引越しを機会に、仕事(心理・建築)関係の資料を大量に捨てました。仕事を辞めてすぐ引っ越した時には、「また使うかもしれない」と考えて捨てられなかった文献や図面などです。あれから約 3 年間が経ち、自分の中で残すべき物がはっきりしてきました。心を込めてお会いした方々との記録や何度も読み直して影響を受けた文献などは、いまだに捨てられませんが、専門的な学術的議論や詳細な検査マニュアルなどは、「もう必要ない」と考えて処分しました。

そのような訳で、今回の日本での生活は、当初予定していた 3 か月から半年に延びましたが、これが出る頃には再びクアラルンプールへ戻っています。ずっと気

がかりだった問題がひとまず解決されて、心身ともに身軽になり、今後は本腰を入れてマレーシアでの生活を味わいたいと思っています。

しすてむ♪きよたけ

前号で一区切りとなった「猫」の小池は、僕の後輩です。一区切りの話は、今回から連載助走を始めた奥野（小池の同期）から聞いていました。社会人としてステップアップしている小池に、喜ぶ思いとここでの連載を休憩する切なさがありました。

でも、奥野と「こういう転機って、うまくは言えないけど…大事な意味がありそうだ」「俺らにとっても何かもたらしている」的な話しをしました。

何かを止める時の決断って、勇気がいることだと思います。したいことや大事にしていること、楽しんでいることだったらなおのことかな。

今更だけど、小池！応援してまっせ〜！また、ここで会える日を。そして、奥野〜〜君とは頻繁に話しまくっているけどここで再会できること、嬉しいです。修論終わってから、僕ばかりが話していると思うし、何か変わるんじゃないかと思って楽しみにしてます。せっかくだから、小池も誘ってみようよ〜。ということで、そうだ！小池に聞いてみよう！？

小林茂

対人援助学ガジンの連載を始めてから1 年が過ぎました。もともとテーマを決められないまま見切り発進したわけですが、連載というものを始めると単発で、特集などテーマが決められているものとは違った心構えを使うものだと知りました。

正直、毎回話題をまとめるのも、なかなか難しいものだと感じつつ、この連載という機会を上手に活用したいなぁ、と思います。

そして短信については、遊び心をもって楽しい近況報告にしていきたいと考えています。気持ちも新たに取り組みたいと思います。よろしくお願いします。

水野スウ

出前紅茶は、私がピンで（一人で）語る場合がほとんどだけど、先日珍しく、親子で話して、のご注文をいただき、「おやこらぼ・けんぽうぶっくトーク」と題して、娘と私、漫談スタイルで語ってきました。「あなたとわたしの・けんぽう BOOK」の文章を書いたのは私ですが、編集とデザインを担当したのは娘。この親子コラボがなければこういう本にはならなかったと思うので、そのあたりの話を。

SNSなどでお知らせしてない短期間のよびかけ企画にもかかわらず、ぎゅうぎゅうつめの40人越え。いらしたみなさんはすでに本を読んでる方たちなので、中味は文字通りのぶっくトーク。

去年5月、安保法案が通るまでに憲法の本をつくりたいから手伝って、と私が言いだした時、「え、なんで？憲法の本なら専門家の書いたのが今いっぱい出てるし、ましてそんな短い間に、しろうとが憲法の本を書くなんてとうてい無理だよ」と難色を示した娘。

そう言われてもひかない私。うん、もちろん専門家じゃない私だけど、それでもここ10年余りずっと憲法を語ってきて、みんなにとって憲法がいかに遠いとこにあるかや、13条と12条のこと、こんなふうに語ってる人はほかにいない、って確信したから、こういう私が憲法の本をつくることにきっと意味があると思う、と。

それからひと月半おくれで、娘の、本づくりモチベーションが自分ごとになりました。自分がよく行く親しい場所や、一番みぢかな存在のパートナーと、政治の話をするのが、どうしてこうもむずかしいのか。安保国会を見ていてもわけがわからず、もやもや、ざわざわしたきもちを抱えてるママたちにこそ、読んだら少し頭ん中がすっきりする、夫と話す時の材料にもなる、そんな本を、自分も勉強しながら一緒につくりたい。そう思えた日から、娘は俄然、とても強力な、本づくり協力者になりました。

頭のつくりの丸い私と、四角い娘。私が感情的になって怒りながら書いた文章はバッサバッサときられ、私が少しあいまいな記憶で書いた部分は、娘がしっかり調べて裏付けをとり、いつ誰が何を発言したか、の注釈を入れ。そういうコラボ作業の積み重ねで、けんぽうBOOKはできあがっていったのでした。

この本ができた後、娘はいくつもの憲法カフェに参加しました。そこで感じるのはやはり、いわゆる、せいじの話って、なぜこうもひとと語りにくいんだろ、ってことでした。

娘も私も、この日何より伝えたかったのは、相手を責めるような、攻撃的な口調やことばでは、本当に伝えたいことは、それがどんなに正しいことでも伝わらない、というこの一点。政治の話をする時も、「わたし」を主語に、誠実に、相手に伝えていく努力。とりわけ、選挙に関する話はその「段差」が大きいけど、あ、そこ、段差にどうぞお気をつけください、みたいなきもちで語っていくこと、いっそう大事だね、と。

語りにくさの違和感をこそ否定しないで、答えが出ないことでも一緒に考えていきたい、語りあえる場をつくりたい。そう思う娘のつくった言葉が、「すきま12条」。覚悟きめた人たちがする、立派で大きな、「不断の努力」の12条も大事だけど、そんな12条のすきまをうめるような、ささやかな12条を、自分はしていこう、そんなこと語れる場を自分ではじめよう、って、娘は今思っています。

さてさて、平和を創っていくのに必要な、いくつかの「しょん」って、何でしょう？と、私からみなさんに質問。これが答えだ！というのはないと思うけど、私の考えたのは、communication＋imagination＋action。ほかにも、negociation,education,vision,motivation,mission,attention,,,などなど、きっといっぱいありそうなので、これからもみんなで考えていこうね。あ、「しょん」はつかないけど、もちろん、そこに「愛」は、必須です！と。emotionも、愛のひとつですね。

「♪13条のうた」の親子デュエットのあとは、いらしたみなさんに、今日持ち帰りたい言葉か、自分のできるすきま12条を書いていただいて、それをもとにグループトーク。最後に、各グループのお一人から、みな

さんの言葉を発表してもらうシェアリングタイムを経て、終了。

2 人でうちあわせは一応していったけど、ところどころ言うこと忘れたり、ずっこけたり。その分、みんなにいっぱい笑ってもらい、考えてもらいの、ノンストップ 2 時間半。私たち自身、終わるなり、おもしろかった～楽しかった～～！と思わず声にでて。大爆笑と、なぜか涙もいっぱいの、親子漫談トークでした。

高垣愉佳

やっと修士論文を提出しました。これから口頭試問、その後合否発表と続くので、結果がどうなるのかは現時点では分かりません。今はやりきった爽快感とやり切れたのは周りの方々のおかげだという感謝の気持ちでいっぱいです。結果を思い悩んでも仕方が無いので、今は今出来る事をやっていこうと思います。手始めに、対人援助マガジンの原稿を期日内に提出する事から(笑)。

浦田雅夫

実弟のような存在であった甥っ子が若くしてガンで亡くなりました。でも久しぶりにゆっくり話せたね。ありがとう。がんばったね。もう安心してゆっくりしてください。

早樫一男

「日本のジェノグラム」として連載していますが、中央法規出版より「対人援助職のためのジェノグラム入門」として発刊することになりました。ジェノグラムに関する内容をまとめたいという思いがやっと一冊の書物になります。発刊は4月20日。気軽に読めるものですので、ぜひ、ご購読ください。定価は1600円です。

中島弘美

対人援助学会研究会
第 17 回（通算 41 回）の感想

研究会の準備等を、千葉さんや山口さんとともに担当させていただいています中島弘美です。2015 年 12 月 25 日は牧師の遠藤勇司さん【来談者は素敵な先生：ナラティブ・セラピーのワークを通して】でした。

当日、「クリスマスのこの時期は特にお忙しいのでは？」とたずねると「さっきまで、釜ヶ崎のおんちゃんたちへのクリスマスプレゼントとして、お弁当をつくったあとここに来ました」と、微笑まれました。教会での活動だけでなく、路上生活者などへの支援もされています。

まずはワークをやっていただきましょうと、ペアになって「二つの自己紹介」が、スタートです。参加者約 35 名の表情がみるみる豊かになり、会話がはずみます。感想を発表したあと、ナラティヴについての説明がありました。続いては「あなたの考える、超！完璧な対人援助職、超！完璧な来談者(被援助者)とは？」のワークです。個人作業のあと 4 人ずつになってディスカッションし、発表です。グループでの話し合いや発表の時間がたっぷりあるので、しっかりとシェアすることができます。ここで、あらためて対人援助への姿勢についての解説です。もしも、あなたが野球少年だとします。イチローにインタビューをする機会があるとすれば、たずねたいと思うことを一生懸命に質問をして、その返事を一生懸命に聴きますよね、それと同じで、「被援助者に学ぶという姿勢が援助者にとって大切だ」ということを強調されました。まったくその通りだなぁとワークを通して体験することができました。いつも、ゲストスピーカーの話からの学びが多いのですが、参加者とともに作り上げていく研究会であったと思いました。

アメリカやドイツの留学話も聞きたいなと早くも次の機会があることを願っています。

木村晃子

この 1 月、石川県で継続開催されている、「いしかわ家族面接を学ぶ会」に参加させていただきました。マガジンの執筆者である、水野スウさんとは、2 回目の出会いでしたが、今回は、ジェノグラム面接を通して、確かな出会いになりました。出会いというのは、実に不思議だと感じます。世の中には、こんなにたくさんの人がいるのに、「今、出会ったこと」が奇跡のような、必然のような・・・とにかく、元気をいただいたのでした。

学ぶ会が終了してからは、金沢の駅でお土産巡り・・・すると、今度はマガジン執筆者のきよたけさんと出会った。「マガジン」でつながるご縁。昔で言うと、「同人誌」みたいなイメージだけれど、同人でもないような、あるような・・・改めて、「マガジン」の面白さを感じたものです。そして、きっと、この後も、まだお会いしていないマガジン執筆者との出会いが待っていると思います。ワクワクな楽しみです。

藤信子

これまでは大体毎冬に 1 回風邪をひいていたのに、今年の冬は 12 月のはじめにひいて、今週の初めからまた鼻かぜになった。いろんな仕事がそろそろ片付いたと気が緩むと風邪をひくようだ。ただ 2 回目となると、年齢のせいで無理がきかなくなっているのかもしれない。ところで自分の年齢を自覚することは、どんな時だろう。話をしていて「この間のこと」と言い、何年くらいのことかと聞かれ、考えてみると 20-30 年前のことだったということがあり、質問してきた人との年齢を考え、その人にとって「この間・・」は何年くらい前だろうか、あるいは年単位ではないのだろうかと考える時である。そんな時以外も、年齢のことを考えて、もう少し体を大事にしようと少し思っている。

中村周平

怪我をして以来、母校の試合やプロ野球の観戦などは行く機会がありましたが、「スポーツをする」という点ではまったくと言っていいほど関わることはありませんでした。自分にとっては「ラグビー」が一番で、それ以外に「もう一度チャレンジしよう」という気持ちにさせてくれるスポーツ(もちろん、運動機能との関係で物理的に不可能な種目もありました)と出会うこともありませんでした。

そんな中、ある団体の新年会で糸賀享弥という方と出会いました。それから約一年、気が付けば「Wheelchair Football」とい

うスポーツを一緒に盛り上げていくことに…。久しぶりにスポーツに打ち込む日々を過ごしています。その経緯についてはマガジンでまた触れさせていただこうと思います。
http://www.yomiuri.co.jp/osaka/news/20160221-OYO1T50009.html

浅田英輔

新しい部署にきて１年が経つ。この１年、「県庁にきたの初めてなんです」と言ってきたが、毎回驚かれるし、自分でもなんとかなったのかなと感じている。電脳に関することを書いているが、まだまだ普段の仕事の中で、考える必要がないことで自動化できることがたくさんあるように思う。政策を考えるだとか、事業を進めていくということも大きな仕事であるが、書類を作ったり数字を並べたりといった仕事が非常に多いことに驚いた。考えるべきところに時間をかけて、それ以外のところはどんどん自動化していきたいと思う。もっとパソコンをいじる時間を増やさないとね！！

中村正

院生の卒業時期である。毎年ユニークな修士論文ができあがり、2 年間にわたる成果がでてくる。今年も多産であった。衛生的な理由でなくマスクをつける人の研究、訪問精神科看護師のエスノグラフィー、自宅が交番という日本に独自な駐在所の研究、女性の精神障害者ばかりの就労支援事業所の組織分析、在日韓国人と日本人の出会う場所で起こっていることの研究、視覚障害者とガイドヘルプをする人の身体接触の微細な奇妙さについての調査、妊婦体験のインタビュー調査、母娘関係のオタク的趣味と距離化についての研究、中国の一人っ子政策での子育ての諸相の研究と続く。在日朝鮮・韓国人も入所する高齢者介護施設で調査をしている韓国からの留学生の研究は継続していくこととなった。学部からのストレート院生、留学生、対人援助の現職社会人が入り乱れた演習だった。実に多様な対人援助学の諸相である。教員が教えられることも多い。指導をしていて楽しい。リサーチすることと将来の職業選択はかならず相関していき、こうした視野で研究課題が見据えられるということは、目先の技術や狭い研究課題ではないその人の大きさを感じる。専門的力量と言うよりも教養の大切さをいつも思う。そしてつくづく思うことは問題意識の広がりと課題の深まりに応じて行く過程が大切なことだ。そこでは、①学術的であるということは偏狭さも意味するので中途半端な先行研究は読まない方がよいこと、②どんな方法を採用するのかは研究対象と問題意識によるべきこと（指導教員があれこれいってもやりたいことをやること）、③院生は偉いという頑なに見える変なプライドを捨てること、④誰からも認められようとする優等生的な態度は捨てること、⑤オフィスアワーでの対話を楽しむゆとりをもつこと、⑥教員の批判的コメントを全否定されたようにとらえないことである。

これらののりこえと共に研究成果は訪れる。もちろん院生ばかりに課題があるのではなく、大学という制度自身も課題が多い。教員たちも変化を求められている。そこで次の計画を考えている。大胆な対人援助職者向けの大学院リサーチプログラムである。教員とシステムが出かけていくという発想だ。大学に来てもらうという形態の学びは、少なくともリサーチをしたいという社会人には間尺に合わないと思うようになった。現場にいく動く大学院である。対人援助の知は現場にこそある。いずれ構想を提案できると思う。ご期待あれ。

牛若孝治

昨年の 8 月、京都市北区千本北大路の視覚障碍者施設のライトハウスで、10 数年ぶりに視覚に障碍のある友人 M と再会した。恥ずかしいことに、私の周囲には、視覚に障碍のある友人はほとんどいない、というより、これまで私が積極的に視覚障碍のある人たちと関わろうとしなかったので、友人がいないのは当然である。だが M は、10 数年前に、私と喫茶店で会ったことを覚えていてくれた。どうやら私が M の相談に乗ったらしく、そのときの私の対応がよかったようで、いつか私に会いたい、と思っていてくれていたようだ。私たちはしばらくの間、10 数年間の空白を埋めるようにして、あれこれと思い出を語り合った。

その後私たちは、ライトハウスで定期的に食事をしたり、電話で話し合ったりしている。月に 2 度の割合で、M は私にいろいろと差し入れもしてくれる。「今日は寒いから風を引かないように」などと、M は私に何かと世話を焼くことも多くなった。もともと世話焼きやおせっかいが大の苦手な私は、その度に「はい、はい」と言って、なんとかその場を治めようとしている。

だが、よく考えてみると、今の時代、私のように独り暮らしをしていると、M のような人がいてくれるのは心強い。今、「無縁社会」や「無縁死」に関する本を読んでいるのだが、単身世帯が増えてきている昨今、この私だっていつでもどこでも「無縁社会」に陥りやすい状況を意識させられているこのごろ。

袴田洋子

かくかくしかじかで、自分の独立型事務所を作ることにしました。またピンに戻ります。今、事務所用賃貸物件を借りるところです。法人も作ります。雇われている組織で、理念そっちのけになってしまうのは、百歩譲って仕方ないとすることが可能かもですが、自分が経営者の立場では理念そっちのけ、って、自分には無理でして。組織理念って、やっぱり大事だと思うんです。私は、私らしく実践します。はい、すっきりしました。ということにしておきましょう。

団遊

長年の課題であった自分の英語力の無さ。これに改善に兆しが見えています。ことの発端は、新しく、昨年 9 月から参加し始めた「ぷれいご」というワークショップです。このワークショップは、英語でお芝居するワークショップなのですが、肌に合いました。これまで、ベルなんとでくじけたり、お金を GABA っと取られたり、英語への意気込みは毎度散々な結果に終わり続けていましたが、「ぷれいご」は違いました。

毎週水曜日、集まった 12 人で英語劇「12 人の怒れる男」を稽古します。もちろん発音のレッスンや英語でのショートスピーチなどもありますが、メインはあくまで英語劇の練習です。本番の舞台に備え、必死に台本を覚えないといけません。また、

演出家の指導が入りますから、控えめな口調でぼそぼそしゃべっていては怒られます。彼の演出プランに沿った「演技」を「英語」でしないといけないのです。

台本には日常で良く使う英語がふんだんに散りばめられています。結果的に「使える英語」をフレーズごと覚えていくことになります。また、自分のセリフだけでなく、きっかけをつかむために他人のセリフも頭に入れなければなりません。稽古の目的がはっきりしていますから、無目的に、興味があるのかないのかわからない先生と 45 分間しゃべらないといけない、という苦痛はありません。人生でプロの演出家の指導を受けて演技を学ぶ経験も始めてですから、とにかく面白いのです。

9 月からはじまった稽古は 3 月で終了を迎え、月末には本番が待っています。あまりのハマりように、これを止めるわけないは行かないと思い、4 月からのコースも早速継続受講することにしました。

乾明紀

歯の痛みが無くなり食べたいものが食べられるようになったのですが、今度は腰痛と乾燥肌に悩まされることになりました。腰痛は、デスクワークと子育てが原因で、乾燥肌は床暖房の効いた畳の上で仕事をすることが原因のようです。お仕事があり、かわいい子供がいて、床暖房のあるお家に住んでいるというのは、とても幸せなことなんですけどね。ストレッチや保湿などのメンテナンスで身体を労わることも大切ですね。

大石仁美

ワンちゃんを飼いはじめて 9 か月。ワンは満一歳になりました。何をしても可愛い！と思う親ばかですが、この間、ワンちゃん育ては失敗の連続でした。本当に人間の子育てとよく似ていて、改めて教えられることばかり。

教本通りにはいかないのです。本によると、ワンが甘えて鳴いても、無視するように。我儘が通るということを学習させてはいけない。と書いてあります。ワンと人間の関係は上下関係ですから、常に人間が上でないと、制御出来ないことになっては大変です。しかし、鳴くのにはそれなりの理由があるということも分かりました。

6 ヶ月の時、真夜中に大声で鳴き続けるので、どうしたものか、しばらく無視していましたが、近所迷惑になるので、根負けして見にいくと、すごい下痢で、体中ウンチまみれ、かわいそうにおなかが痛かったのでしょう。シャワーで洗った後、朝まで付き添ってやると落ち着きました。

10 カ月のときは、夕食を食べた後なのに鳴き始め、無視して放っておくといつまでも鳴きつづけ、2 時間後に根負け。タオルを使って短時間引っ張り遊びに付き合うと、なんとか納得して、入眠してくれました。ところが今度は、毎朝のように 4 時頃から鳴き始め、ほとほと弱っていましたが、もしかしたら、餌が足りないのでは？とトレーナーさんに言われ、規定の量に野菜や肉などのトッピングもしているのに・・・・？と半信半疑でおもいきつて 2～3 割近く増やしてみると翌日からピタッと鳴きやみました。人間でいうと、思春期の成長著しい時期だったのです。そういえば我が家の息子たちも、中学生の時はご飯 4 杯ぐらい食べたときがありました。

ワンも激しい運動をしていて、おなかが空いていたのでした。本当にかわいそうなことをしました。おかわりちょうだい！と言っていたのですね。

犬語が分からないからと無視せず、犬の気持ちになってみることの大切さを学びました。

振り返ってみると、いたずらするときは、人の顔を見て、わざと怒られるようなことをして逃げていきます。「僕の方をみてよ。もっと遊んでよ。」と言っているのですね。叱ると、つまらなそうな顔をしますが、一向にいたずらは止まりません。ますますエスカレートします。そのうちふと反対の対応をしたらどうだろうと思いつきました。

「良い子だね。グッド！持ってきてくれたのね。グッド、グッド。」というと、銜えていたものを口から離すようになりました。「叱るより褒めろ」です。

ワンを叱るときは間髪いれず低い声で。くどくど言わない。褒めるときは、弾んだ声で大げさに。スキンシップを忘れずに。これ人間も一緒ですね。

一歳近くになって、やっとお互いに気心が分かるようになり、相手がなにを望んでいるのか、目を見て推し量れるようになりました。私が忙しそうにしていると、そばに座ってじっと待つこともできます。

コートを着ると、お出かけだぁ～と嬉しそうについて来て、彼とお散歩の時につかう軍手をくわえてきて「さあ、行こう」と誘います。

賢くて、人の気持ちを先読みするのには参りますが、信頼しきった目を見ると、ほんまに可愛い！

大型犬で見た目にはツキノワグマ風なので、知らない人は怖がるでしょうが、彼の方は、人は誰でも大好き。だから番犬にはなりませんが、これからの私の人生のよきお伴になってくれることは間違いありません。

犬は一年余りで大人になります。自分の子育てをする前に、一年間ワン育てをしておけば、その失敗を教訓に、子育てで失敗する悩みも半減するだろうなと思ったことでした。

村本邦子

ハワイに滞在中である。研究テーマをたくさん抱えてやってきたのだが、ここには今なお、定期的に東北へ通っている人たちがたくさんいることに驚いている。マッサージをしたり、フラを踊ったり、焼きそばを焼いたりと、その活動内容も様々。震災を機に東北に思いを寄せ駆けつけた人たちが、その地で人々と出会い、行くたびごとに、その関係を大事にしたいという思いを強めていくということのようだ。

そう言えば、東北で「どんな支援が一番役に立ったと思いますか？」と尋ねると、皆が口を揃えて、「何をもらった、何をしてもらったということは関係ない。継続して来てくれて、親しい関係になれることがありがたい」と言う。

昨年6月に実施した「ココロかさなるプロジェクト」のインタビューで、「禍福は糾える縄の如し」と言った方があった。災害がもたらす禍を帳消しにできなくても、福をもたらす側面もあるという事実が人を支えるのかもしれない。

3月末には、親を亡くしたハワイの子どもたちと、東日本大震災で親を亡くした子どもたちが合流するキャンプを手伝う。大災害を機に、遠く離れた人々が絆を結べるのは現代ならではだろう。そこからまた新しい可能性が生まれ育っていくことを楽しみにするとしよう。

國友万裕

春休みは、ぼくのような大学非常勤講師にとっては時間がたっぷりある時期です。一応、書かなくてはならない論文はあるのですが、一日中論文や勉強ばかりというわけにもいかないので、映画を観に行ったり、スポーツクラブに行ったりしながら、毎日過ごしています。

誰かにかまって欲しくて、色々な人に飯行かないか、風呂行かないかと誘っているのですが、他の職業の人はこの時期は休みではないので、なかなか付き合ってくれません。あー、寂しい。今年の春休みは、かつての教え子と1回食事しただけで、あとはほとんどお一人さまで過ごしています。

でも、まだこの原稿を書いている時点では春休みは半分も終わっていません。これから誰かと会えるのを期待しているところです。ちなみにあと1週間でぼくは52歳になります。2月27日生まれです。

魚座、九紫火星、辰年、木星人プラス、数秘術では4タイプです。どの占いを見ても今年は人気運と書かれているので、期待しているんだけど……。きっと 27 日にから運気が変わるのかもしれませんね。この原稿がアップされる頃には、色々な友人とあえて、ニコニコ状態になっていることを信じましょう！

北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森知誠館」代表。（http://tiseikan.com）
もう年度末。毎年１年が早く感じるようになるのは、歳のせいでしょうか？フリースクールをめぐる新しい法律の話。若者支援に対する社会の意識の変化。さまざまなうねりの中で、私たちの活動も続きます。

古川秀明

この原稿を書いている時に、シリアで連続テロがあり、死者が184人になったというニュースが流れた。ほぼ同じくして、日本では東京で地方から出てきた若者の自殺がまた増えているというニュースも流れた。報道にいちいちこころを動かされてはいけないのだろうが、いろいろ考えてしまった。
シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

西川友理

京都西山短期大学で講師をしつつ、色々と学生支援に関わる事をさせていただいています。

このところ、頭で考えるよりも、体が感じる感覚…よさ、楽しさ、呼ばれている感じ、あるいは違和感、気持ち悪さ、近づいてはいけない感じ…に、耳を澄ます、ということを意識的にやっています。「～ねばならぬ決断」が多い日々だからこそ、「自然に湧き上がる気持ち」を大事にして、行動を決める、とでも言いましょうか。そうすると、1 つ発見がありました。

それは、長いこと「サボる」と「休む」と「遊ぶ」をごっちゃにしていたのかもしれない、ということです。休んでいると、「なにサボってんねん」と自分にツッコミを入れる自分がどこかにいる。「休む」ことと「遊ぶ」事の違いがわかっていない。

自営業で、休みの日という概念がほぼ無い家で育ちました。居間とお店の作業場は、障子一枚隔てた所。見たいテレビ番組も最小の音にして、父母等が働いているお店の忙しさを気にしながら、「なんかほんとすんません、テレビを見ててごめんなさい、でもこの番組だけ見たいねん、見させてな」と思いながら、子どもの頃、アニメを見ていたなぁという過去も思い出しました。なんでテレビ一つ見るのにそんなに恐縮せなあかんねん（笑）休むことや遊ぶことはサボること、イコールごめんなさい、といった感じがどこかにあったのかもしれない、と気づきました。

「サボる」と「休む」と「遊ぶ」を意識してから、しっかり休むという意味もなんとなく解るし、休むと決めた日は遊ばないし、遊ぶ日は全力で遊ぶ。
遊ぶのって楽しい。言葉にしたらだいぶアホみたいですが、最近、本当にそう思います。

坂口伊都

この間、久しぶりに前の職場の方 2 人と食事をしました。お一人は、私と同じ時期に辞職された方で、もう一方は、この 3 月末日で辞職をする方です。風の噂で、この 3 月で辞められる方がしんどそうだと聞いていたのもあって、会おうかという事になりました。

私が、養育里親をするために辞職してから、もう 3 年になります。久しぶりに顔を合わせて話しましたが、何か 3 年も会っていなかったなんて嘘のように一緒に働いていた当時の感覚に戻っていました。話題も、今の生活とは違うところの話が多くなります。積もる話が多くて、里親の話なんて微塵も出てこなくて、それが何か新鮮でした。

その一方で、養育里親として話をして欲しいと頼まれることも徐々に増えてきました。7 月 2 日、3 日に大阪で全国児童養護問題研究会全国大会が開催されるのですが、児童養護施設の職員さんと養育里親である私が対話をしながら、社会的養護の場で生活をする子どもの支援につながるヒントを見つけていく分科会をする予定です。子どもを中心に据えて、同じ方向を向ける場になればと思っています。

河岸由里子

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし主宰

『本音』：今年の冬は、余り酷い雪にあっていない。道路の雪も多くないし、走りやすい冬である。寒さもさほど厳しくない。北海道と言えども、温暖化の傾向は否めない。きっと数十年後には、北海道が軽井沢の様な避暑地になるのかもしれない。「今のうちに別荘を持っては如何？関東や関西は暑くて住めなくなりますよ。」なんて話もちらほら。一方で、東京にマンションを買いませんかと言う話も舞い込んでくる。千歳に別荘を買う方が東京にマンションを買うよりずっと安いし、使い勝手も良いだろう。千歳は空港の町。我が家から空港までは車で 10 分。出発前 30 分に家を出ても間に合う。この便利さと、夏の涼しさと、自然と、美味しい食べ物と。更に冬も雪が減るのであれば、こんなに住みやすい場所は無い、と感じつつも、生まれも育ちも東京の私は、やはりどこかで東京に帰りたいと思っている。

団士郎

最近の関心事というと二人の作家。共に話題になっている事態があるから、流行だと言えなくもない。浦沢直樹は漫画家。連載中に愛読していた作品もあるが、「YAWARA」を読みたいとも,「HAPPY」を読みたいとも、「20 世紀少年」を読みたいと思ったことはなかった。

それがＢＳで「漫勉」を見た。トップランナーの漫画家である彼が、若い漫画家に関心を向け、番組の進行役として制作現場を訪れ、自分とは異なった作画や技を語っている。

大昔、手塚治虫さんに一度だけお目にかかった時。それは東京のギャラリーでのマンガ－ト展と題したものに私も作品を出していた時のことなのだが。他の多くの著名漫画家は、みんなその道の成功した大先輩の酒飲みだった。展示中の作品を熱心に見てくれた人はなかった。

手塚さんだけが来場して、作品を一つ一つ見て行かれた。自作の前で少し話もした。その空気に似たものが浦沢直樹にある気がした。更に、NHK switch インタビューで小室哲哉と対談している時の姿勢がとても素敵に見えた。

そんなことを思っていたら作品が目につき始めた。「Master キートン」は連載中に読んでいたが、改めて作品を読みたいと思った。そして「20 世紀少年」から手にし始め、「YAWARA」はamazonの中古で大人買いで、読み始めた。

もう一人は若松英輔。出会いは Ｅ テレ「100 分de名著 代表的日本人・内村鑑三」の回である。内村鑑三のことは三〇年以上も前のことだが、岡山県津山市にある奇妙な博物館の向かいの文書館をたまたま訪れたときに意識した。無教会、独力での聖書研究誌発行、各地での聖書勉強会、事業家としての才等の事が書かれた資料に触れた。キリスト教に格別関心があったわけではないから、心惹かれたのは氏の行動原理である。

その後、折に触れ内村鑑三の名は目にした。しかし具体的な何かへの時期が充ちた気はしなかったので、断片的関心に過ぎなかった。それがここ数年、このマガジンの継続発行、全国各地での長期に渡る継続WS開催。基本的な学びの世界には属するが、アカデミズムの大樹には寄りかからないこと。そして、漫画「木陰の物語」連載の独自ルート開拓と、小冊子の継続的無償配布など、知らないうちに強く内村鑑三流を意識していたのではないかと思う展開がある。

だからいよいよ私にとって、内村鑑三の時が来たのかなとなんとなく思っていた。そんな時に目にした番組の解説に登場していた若松英輔。この人の言葉がなんとも興味深かった。

そこでまず番組のテキストを読み、彼の書いた物をネット検索し、「悲しみの秘儀」ナナロク社刊に出会った。これは心ふるえる一冊だった。好みがあるだろうから、誰にでも薦めるものではないが、私にはかけがえのない一冊に思える。今のところはまだ内村ではなく若松だ。

岡崎正明

先日研修会に出た。毎年なるべく出るようにしている研修で、その名も「児童相談所と近接領域における家族療法・家族援助の実際」という。

やたら長くて覚えにくい。略称も無くてよぶとき困る。よくこの名前で25回も続いているなあ、というのが正直な感想。しかし特に主催団体があるわけでも、開催義務があるわけでもなく、毎年各都道府県の有志が持ち回りでやっているというのだから、なかなかすごい。

いろんな講師のいろんな話。共通しているのは実践的で前向きなところだ。本誌にも執筆中の中村正先生の話は、特にしびれた。アカデミックだけど分かりやすくて、品が良いのに高飛車でない。

既成の研究や学問から世の中を見ていては、新しい発想は生まれてこない。「どうして問題ばかりを研究するのか？」というまっとうな問い。nulearn（脱学習）という考え方に思わず「我が意を得たりっ」と心の中でつぶやいた。

昔から教わったままにするのが嫌いなへそ曲がりだ。仕事の引継ぎでも、言われた通りやればいいのに、自分なりにアレンジしたり「もっといい方法はないか？」「それする意味あるんか？」と、早い段階で独自の手法を考えたりしてしまう。だってその方が「自分のもの」になるから。もちろん考えが足らずに失敗も多くなるが、失敗を重ねたほうが「自分のもの」になりやすいのも経験済み。

普段から「バカでもいいから地頭（じあたま）で考えろ」と思っていた私に、脱学習のお話は本当に嬉しかった。勝手に親近感を覚えたりして、ついトイレで先生に話しかけたりする無礼者なのでした。

buimen0412@yahoo.co.jp

千葉晃央

◆京都国際社会福祉センターで新しい研修を担当することになりました。「事例から学ぶソーシャルワーク ～明日から使う具体的な働きかけ 導入編・基礎

編～」のなかの「対人援助の仕事とは？対人援助職は利用者をどうとらえるのか？」「援助職の陥る問題　救世主願望と罪悪感、保護と配慮等」という全体20回のうちの2回です。どちらも好きなテーマだし、他にもたくさん大切なテーマをラインナップしていますので、興味がありましたらよろしくお願いいたします。

◆http://www.kiswec.com/enjo.html◆

◆私の父はよくテレビで落語を観ていた。桂枝雀が好きだったような記憶がある。「笑点」をはじめ演芸番組をよく観ていた。そのため、そこそこ落語家さんの名前と顔はわかる。きっかけがあり、落語を通勤の車のなかで聴くようになった。その時ききたい！と思った落語家さんは古今亭志ん朝さん。そんなことあらためて意識したことがなかったけど、自分自身にきいたらこの答えだった。ききはじめると本当におもしろい。学ぶことも多い。志ん朝さん、今何やっているんだろうと思ったら、すでに故人だった…。ショックである。

大川聡子

拙著「10 代の母というライフスタイル－出産を選択した社会的特徴に着目して」が、2/28 に晃洋書房から出版されました。内容は、4 年前に執筆した博士論文を加筆修正したものです。2016 年の年末年始は、博士論文を通してひたすら 4 年前の自分と対話していました。前段の内容からここまで言えないでしょ、と思うようなところもあれば、こんな表現は今できないな、と感心するようなところもありました。自分自身は退化しているのか進化しているのかわかりませんが、学位授与時に 2 歳、5 歳だった子どもたちはそれぞれ 6 歳、9 歳になりました。成長していく彼らがうらやましく思える今日この頃です。

博論執筆中、執筆後、そして出版に際して、対人援助学マガジンに関係する沢山の先生方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

大谷多加志

息子が 4 月で小学校に入学します。今は体験入学があり、体操服や文具の購入がありと、入学に向けての準備を日々こなしているところです。大人からすると、毎日のびのび楽しく過ごしていた保育園生活が終わってしまうのを名残惜しく思ってしまいますが、息子も含め多くの子どもは学校に行くのが楽しみで仕方がないように見えます。子どもって、成長する、大人になっていくことを嬉しく思うんですね。そういえば、自分もそうだったような気がするなぁ・・・。そのうち「大人なんかなりたくない」「仕事なんかしたくない」と思われないように、楽しく仕事と生活を送る大人の姿を見せられる親でありたいと思ったりしています。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

先日、ローマ法王の「人と人の間に壁を作るのは、キリスト教徒ではない」という発言が報道された。大いに賛同するところである。それなりの教義を有する宗教は、人と人のつながりを必須としている。このつながりの基礎になるのは平等である。多くの宗教は、その勢力維持のために権威主義と手を結んだ。近世のヨーロッパ社会では、基本的価値観が権威から平等に移行した。キリスト教はその時、本来の平等へ戻れなかった。そこに宗教的空白ができた。それを埋めるようにナショナリズムが発生した。◆日本でも仏教は、平等を大切にしていた。この時代、仏教は政治権力とは異次元の存在であった。江戸初期に、意図的に無宗教が作り出された。一方で、仏教は権威主義にドンドンと傾倒していった。宗教が形骸化していけば、人の気持ちは離れる。精神的空白にナショナリズムはいとも簡単に発生する。◆今、ローマ法王が平等を大切にしようとされている姿勢には、とても共感できる。現代の宗教は本来の姿勢に戻り、平等と共感に基礎を置いた人のつながりを作らねばならない。この数百年間、ナショナリズムの元にどれほどの命が失われた事だろうか。今こそ、坊さんの出番である。テレビで袈裟を売って、糊口をしのぐ坊さんが跋扈するばかりだが。

川﨑二三彦

新連載

年が明けてからというもの、twitter や Facebook への投稿もすっかりご無沙汰していて、一部の人から「生きてますか？」という心配の声がかかるかと思ったら、そんなことはこれぽっちも起こらず、当方、相変わらずの生活ぶり。そこで覚えに twitter 不定期連載「呆け日誌」風に近況を報告しておこう。

＊

〇某月某日「呆け日誌／優先座席」

最近は電車に乗っても、割と平気で優先座席を利用する。この日も堂々と座っていたら、年配の男性が杖をついて乗り込んでくるではないか。反射的に席を譲ったら、怪訝な顔してこちらを見る。そこで再び眺めたら、杖と思ったのはキャリーバッグの伸縮ハンドル。おまけに年の頃私とほとんど変わらない。合わす顔がないとはこのことだ。

〇某月某日「呆け日誌／転倒」

夜間の会議。主催者との打ち合わせが長引き、駐車場を抜けて急ぎ会場に向かったのはよいとして、「ここ、低い垣根があるので注意してくださいね」と言われて軽々とまたごうとしたら、いきなり転倒。垣根の一歩手前の駐車止めブロックに躓いてしまったのだ。親指を捻挫して今も不自由を託っております　　。

〇某月某日「呆け日誌／新カラマーゾフ……」

こんな本につかまって往生した。驚くべき小説だが、作者の新訳になる「カラマーゾフの兄弟」を読んだのが数年前だったので、呆けた頭にはドストエフスキーの原作がほとんど残っておらず、十分消化できないまま上下巻合計 1400 ページあまりの本作を読了。それにしても東京外国語大学の学長だった人がこんな分厚い本を書けるのか？

＊

というようなことを書き連ねていても、き

りがない。近況はそれぐらいにして、今回は、新連載のお知らせをしなくてはなるまい。

前号の著者短信欄で、

「連載『映画の中の子どもたち』は、今号で 22 回を数えるのだけれど、諸般の事情でそろ終結もしくは断続的投稿として、新しい連載を始めることに、

しようかどうしようか、現在思案投げ首沈思黙考鋭意熟考迷妄瞑想真っ最中でございます。とりあえずのお知らせでした」

と記したのだけれど、いよいよ決断、ついに今号から新しい連載を開始することにした。ただし、最初は準備号とでもいうしかない内容で、第１回とも付けられず「序」としている。

ついでにここでタイトル解題。児童相談所の、おもに児童福祉司を中心としたスーパーバイズをテーマに考えているので、「S・V」というのは特に説明の必要もないだろうが、副題の「羅針盤のない航海」が問題だ。むろんそれは、私の S・V 自体がそうであったということだが、それだけでなく、この連載も、実はどこをさまよい、どこに寄港し、どこに漂着するのかさっぱりわからぬ羅針盤のない連載になるという危うさによる。途中で、（意外と早く）難破するかも知れず、皆さまに白眼視されることを覚悟の出航であることを、最初に告白しておきます。

また、これまで続けてきた「映画の中の子どもたち」は、今後は気まぐれ連載ということで、不定期、断続的に掲載し、そのうち誰知らぬ間に沙汰やみになるかも知れませんが、その点悪しからずご了承ください。

（2016/02/28 記）

荒木晃子

こころ穏やかにお正月を迎え、あわただしく日常のスタートを切った。新年度は、新たに次のステージを目指すことになるので、日々、健康維持には留意せねばと肝に銘じている。

今年は、新領域へ足を踏み入れ、新たに出会った仲間と共に、新しい試みに挑戦することになるだろう。そこでは、これまで私が目指してきた先の、遥か向こうにそびえ立つ、想像もつかないほどの大きな壁が、いつか身近に迫ってくることもあるだろう。現に、過去に経験したことのないほど、自分の不勉強さと力不足を感じはじめ萎縮気味の自分が、いま、ここにある。こころが小さく窄み始める時、いまは亡き両親の笑顔を脳裏に浮かべ、こころでつぶやく。

「お父さん、お母さん、どうか私に勇気を与えてください。ふたりは、私の内に、渇くことのない希望を授け、尽きることなく歩むからだを与えてくれた。でも、もうひとつ、願わくば、勇気のシャワーを、どうか天国から降り注いでほしい。あなたの娘は、自分という人間を仲間とともに十分に使い果たし、悔いのない人生の幕引きを願っているのです。」

さあ、今年も一年、頑張るぞ！どうぞよろしく。

サトウタツヤ

前回、思わぬミスで原稿が不着となり、一回休載となりすみませんでした。しかし、原稿は手元に残っているので一回得した気分です。こんな怠けた感想ではダメですね。。。

見野 大介　みのだいすけ

正月気分も全く無いままに、もう二月が終わろうとしております。餅つきは結局４件回りました。いずれも応援を依頼されての餅つきでしたが、回を重ねるごとに餅つきの奥深さを知り、ますます楽しくなってきました。そのうち自宅でも餅つきイベントやってそうで怖いです（笑）

さて、本職のお話ですが三月に京都高島屋で個展をします。普段使いの器を作ることが多いのですが、高島屋という場所でもあるので今回は花器や茶器、酒器などを中心に展示しようと考えております。会期中はずっと在廊しておりますので、ぜひ茶化しに来てくださいませ。

【 陶 見野大介展 】

会期：2016.3.23－3.29　10：00－20：00（最終日 16：00 まで）

会場：高島屋京都店　６階美術工芸サロン

鶴谷主一

毎年年度末はやたらに忙しい。仕事の処理能力も落ちているらしく机の上に次々と仕事がたまっていきます。幼稚園の先生たちも保育の準備や卒園進級に向けて準備をしたり、個人的に園児にプレゼントするものを作ったり、毎日遅くまで仕事をしている。

今回取り上げた生活発表会に取り組む先生たちも、一生懸命準備や練習に注力しているに違いない。その努力が先生も子どもも保護者も、みんなが納得いく形で実を結ぶことが大事なのだと思います、そのためにはリーダーがしっかりと方針を立てることが肝要でしょう。

原町幼稚園 http://www.haramachi-ki.jp

メール　osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター　haramachikinder

新連載決意表明編

奥野景子　理学療法士

おくのほそみち

～ ご挨拶 ～

「奥野、お前もマガジン書かなあかんぞ」『……う、実は最近、マガジンの連載をしたいなって思ってたとこなんです…』「そうか！じゃあ書けかけ～」『…わっ、かりました(ついに書くのかぁ…)』

2015 年 11 月 7 日(土)夜、岩手県宮古市のカフェバーでの団先生と私のやり取りである。なぜ岩手！？と思う方がいるかもしれないが、その日は立命館大学大学院応用人間科学研究科が東北四県で行なっている東日本・家族応援プロジェクトに参加する為に宮古に行っていた。団先生と院生二名、修了生一名と私でカフェバーに行くことになり、どういう流れでこの話になったのかは思い出せないが、有難いことに気が付いたらマガジンを書くことにな

っていた。

どんな連載になっていくのかは、自分でもよくわかりませんが、ぼちぼち続けて行ければな～と思っています。それではみなさん、これからよろしくお願いいたします。

＊助走＊

0. 「はじめまして」を始めます

はじめまして、次回から連載を始めさせていただくことになった奥野景子です。まずは「おくのほそみち」なんていうよくわからないふざけたタイトルにも関わらず、読んでいただいている方に感謝を申し上げます(笑)。今回は助走ということで、自己紹介と今の段階でこれから書いていきたいなぁと思っていることについて簡単に述べたいと思います。

1. ここでの名乗り

連載を始めるにあたって最初に決めたのは「理学療法士　奥野景子」と名乗ることでした。なぜか？と聞かれると、まだ上手く答えられない自分がいますが、強いて言うなら「奥野景子」として書くには、少しまだ恥ずかしい部分があるからとでも言えば良いのでしょうか…。

理学療法士という自身の職業を枕詞にすることで、少しだけ胸を張れるような気がしています。理学療法士という自身の職業を通した方が、自分自身のことを少しだけ上手く書けるような気もしています。

2. 「えっ？おくのほそみち…？」

さて、次はよくわからないタイトル「おくのほそみち」についてです。始めは全く違ったタイトルにしようと決めていました。でも、結局このタイトルで書いてみることに…。正直、自分でもびっくりです。

2015 年 3 月に立命館大学大学院応用人間科学研究科を修了してから、私は自分自身の変化に気が付くことがちょろちょろあります。マガジンを書いてみようと思ったこと、それを自分の口から団先生に伝えられたこと(本当は団先生発信の話だったけど)、今までは読んだことのない分野の本を買いあさっていること(読めていない本がたくさんあるのに買い足してしまうことも)、職場の人とちょくちょく飲みに行くようになり(お陰さまで焼酎も覚え始めました)、一緒に旅行にも行ったこと、少し引っ掛かりがある物件にも関わらず引越しを決めたこと(それでも楽しみ♪)、そして、この連載のタイトルを「おくのほそみち」に決めていたこと…。これ以外にも今までの自分であればやらなかっただろうなと思うことがちょろちょろあります。そんな自分に気が付くたびになんだか嬉しかったり、恥ずかしかったり、不思議に思ったりしている自分もいて、それもまた新鮮です。

はじめに決めていたタイトルには「リハビリテーション」という言葉が入っていました。自身の言葉を通して自分なりのリハビリテーションについて考えたいと思っていたからです。ただ、何について書いていこうかと考えているうちに、自分なりのリハビリテーションを通して自分自身について考えたいと思うようになっていました。その結果、ある人から提案されたこのタイトルになっていました。タイトルについては、まだ腑に落ちていない部分もありますが、このタイトルで結局書き始めていること、こんなことも楽しめるようになった自分の変化も感じています。

3. これからのこと

それでは、この連載を通して何を書いていくのか？について、ですが…。…え～っと、何について書いていきましょうか(笑)。決してノープランという訳ではありません！ただ、まだちょっと上手く言えないだけです(たぶん…)。でも、仕事を通して感じたこと、考えたこと、今までの自身の経験が仕事につながっていること、仕事に全く関係のない自分のこと…などなど、いろいろと書きたいことはあるので、それらについてぼちぼち書いていきたいなと思っています。それが何になっていくのかは、よくわかりません。それでも、書きたいことがあって、書ける場所があることに感謝しつつ、細く長くやっていきたいなと思っています。

ここまで読んでいただいた方の中には、うすうす感じていらっしゃる方もいるかもしれませんが、私にはまだまだ上手く言えないことがたくさんあります。また、上手く言おうと思っていないこと、上手く言いたくないこともた～くさんあります。綺麗な言葉や耳あたりの良い言葉を並べてそれらしく書いたり、わかった風を装ったりしまうくらいなら、胸を張って「私にはよくわかりません！！」と言いたいのです。「よくわからないけど、今はこう思っているんですが…」といった感じで書いていきたいと思っています。時にはのんびり、時には真面目に、時にはなんとなく…。それでは、これからよろしくお願いいたします。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

24：　施設がもとめる「障害者像」はあるのか？

千葉　晃央

ルールと居心地

集団生活にはルールがつきものである。人は学校という場で、そのことを実感することが多いだろう。私は 15 歳の頃、高校の入学願書を取り寄せたことがありました。そこには髪型に関する校則を伝えるために入れられていた書類がありました。そこには校則に従った髪型をしたモデルの男子学生の写真が掲載されていました。前髪、もみあげなどの長さや形状、そしてパーマの禁止という注意書きが写真の横のスペースに丁寧に書かれていました。今も同じような書面があるのかもしれません。その当時、私がみたそこには「テクノカット禁止」と書かれていました。「テクノカット？！」私はその当時その言葉が何を指すのかわかりませんでした。今みたいにインターネットがない時代なので、どこで？誰に？きいていいのやら…。でも、確かにその頃は、「もみあげ」がないのが普通でした。それが坊主頭でも、そうでなくても、それが普通。その頃、大人気のチェッカーズのメンバーも確かに「もみあげ」がありませんでした。もらったその「髪型指示書」の男の子のモデルには…「もみあげ」がありました。そこが唯一、まわりの男性の髪型と異なっていました。ですので、どうやらそのことを「テクノカット」というのだということが想像できました。「テクノミュージック」といわれる音楽をしていた YMO（坂本龍一、細野晴臣、高橋幸宏）がその髪型をしていたからかな？と長年思ってきました。今回調べてみて、やはりそういわれているようでした。ルールと言えば、80 年代後半の私の学生時代は「テクノカット禁止」という言葉が印象に残っています。「もみあげ」があるなんてとにかくダサかった。中学生でも自分もまわりもテクノカットなのに！…なんでそんなダサい髪型をしなくてはならないのだろう…。とにかく決まりが細かい学校は嫌だ！と思い、私はその学校には進学しませんでした。

「考えない」から「意味を忘れる」

ルールが細かく設定されているという環境では、自分の頭で様々なことを考える機会が減ります。そして、ルールにしたがっていると衝突やトラブルを回避できるという結果を手に入れます。逆にいいますと、

自分の頭で考える機会、そして人との衝突をすることから学ぶ機会を失っていることになります。これはある側面では損失ともいえます。

また、そのルールに関して、自分たちでコントロールができるのか？できないか？という点も大きく居心地というところで影響を与えることは言うまでもありません。

再び、余談ですが私の通っていた中学校は教室も土足でした。下足室というのがありませんでした。いや、私の入学以前数年前まではあったそうです。しかし、それを生徒会の力で、校則の変更を提案し、選挙の結果、廃止にしたそうです。この時期ですと（これを書いていたのは 2 月）靴箱にチョコが！ということがよくある話です。私がいたところでは、それがありませんでした。はやく登校して、チョコを好きな男の子の席に行き、その子の机のなかに入れるというのが、結果として起こることでした。それを本人がみつけるのか？友人が見つけるのか？そして、本人が見つけた場合、見つけたことが他の生徒にわかるのか？そのあたりもバレンタインデー後の話題の大きさを左右していました。

チョコは？

この時期の施設では「バレンタインデー禁止！」ということを施設側で決めていることもあります。誰かのことを大切に思うこと、人が人に惹かれることこと、人が人をすきになることは、人生において欠くこ

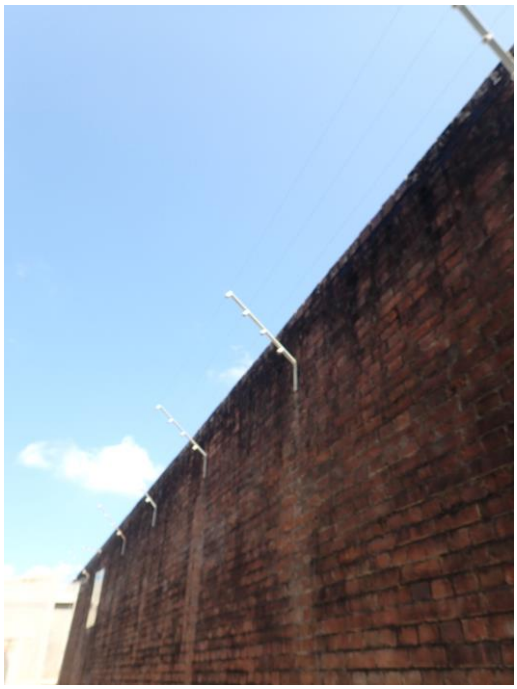
とができない要素です。生きる希望になり、そのことしか考えていない時期が人生には多くの人に必ず訪れる。それがある意味健康です。もちろん人によってその時期の過ごし方は様々です。そういうことに興味が少ない方、もしくは興味があるということを表に出さない方もいますよね。知的な障害をお持ちの方も同じように様々です。

このバレンタインデーの時期にはいろんなことが起こります。先ずはテレビ等のコマーシャルや、まわりの人の影響もあってなのでしょうか、チョコをあげなければならない！と強迫的に思ってしまう方もおられます。そして「義理チョコ」という習慣が、またそれに拍車をかけます。時には施設の利用者全体の半分ぐらいに、チョコをわたした話もありました。すると今度はもらう側の男性の利用者さんも「なぜあの人はもらえて、私にはないのかな？」とか「私も欲しい！」と思う方も当然おられます。「チョコは？」とたくさんの女性の利用者さんに尋ね回るということも…。その尋ねられることに困ってしまう方もおられます。知的な障害を持つ方にとって、このようにあいまいな慣習というのは非常にわかりにくいです。そこにさらに職員にチョコをプレンゼントしたい利用者さんがいたり、それを面白くない！と思う利用者さんが間に入って、怒ってしまわれたり。職員はチョコを受け取らないということを決めていることもありました。職員によっては、そういったチョコのやり取りを、他の職員、施設にわからないところで行う…ということも起こって…。こういう事象が混とんとして、その結果とにもかくにも端から「バレンタインデー禁止！」ということに行きついたりするわけです。それはそれで何も起こらず、スムーズです。しかし、味気ないといわれれば味気ないのかもしれません。家と施設との往復が毎日のなかでこのようなジャンルの話題がないというのも個人的にはさみしいと思ったりもします。何もかも白黒はっきりするというだけでは人生の様々なことが埋め尽くされないわけです。福祉という人の生活を扱う仕事において、このあたりのテーマをどう扱うかは常に懸案事項です。

ルールを破ると…

ではバレンタインデー禁止などの施設の決まりを破った場合どのように対応するのか？ということを考えてみたいと思います。決まりに関して、守っているのか？いないのか？ということを考える場合、事実として、実態として遵守しているかどうかで利用者さんをとらえていきます。これが当然基礎になる考え方です。遵守されていない時には、働きかけを行うことになります。実際、事実があったのか？なかったのか？どのような経緯でそういうことになったのか？そういうことで利得を得るのは誰？で、そのことで得るのは、どういうよろこびなのか？等考えていきます。

私たち援助職は警察や裁判官ではありません。事実の追及だけが私たち福祉職の考え方ではないのです。目の前におられる方の発言を信じ、その利用者さんが語る物語に沿って対応していく。時にはそれが事実とは異なっているようであっても。「ソーシャルワークはプロセスである」という言葉



があったように、事実であったかどうかよりも、この件で実際に利用者さんと話し、かかわっていく過程こそがソーシャルワークであるという側面です。施設でのこういったかかわりは施設ソーシャルワークといわれています。別の言い方ではレジデンシャル・ソーシャルワークといっています。レジデンシャルは「一定の長い期間」という意味が含まれています。支援がある状況の、ある場面でのよりよいかかわりや判断をし、短期的に終わる支援、つまり面接だけとかではなく、何度も時には何年もその場所での支援（ソーシャルワーク）が継続するということが大きな特徴になってきます。

そこでは当然一人の利用者さんに長くかかわることで様々なライフイベントがその利用者さんには起こります。自分の病気、親の病気、さらには親の死…。そういったその人のまわりを取り巻く環境も含めて対象者をとらえていくのが、現在のソーシャルワークの考え方です。楽しい時、うれしい時、苦しい時、悲しい時、厳しい時、体がつらい時にも施設に通い続けるので、さまざまな精神的状態、身体的状態で施設を利用します。時には自暴自棄になりそうだったり、時にはどうしても心の躍動が押えきれなかったり、時には体が苦しくていつもはできているまわりにやさしくすることができなかったり…。

100 年前の支援

こうしてみてくると、起こった「事実」を精査して支援をするという方向性だけでは不十分なことは明らかです。事実を扱い、実証主義に基づいた支援の考え方自体は 1900 年代の初めの頃、つまりソーシャルワークの歴史が始まる頃を起源としています。今から約 100 年前の考え方です。

この考え方に基づいたエビデンス・ベースド・アプローチは福祉がそれまで経験主義的で、前近代的な考え方へのアンチテーゼとして、重要な援助の姿勢として整理されました。一方では実証主義的な考え方の限界は指摘をされています。実証の根拠となるデータがある尺度からのデータだけに限られていて不十分であること、つまり別の尺度での結果が新しく明らかになることで、根拠が否定できてしまうことが指摘されています。ルールを守ったのか、守っていないのかというような、健康であるのか？そうでないのか？というような二分律、つまり 2 つのうちのどちらかであるという考え方がこの実証主義の特徴のひとつです。守ったか？守ってないか？は、ひいては施

設にとって理想的な障害者なのか？そうでないのか？というところに集約されていきます。

つまりそれは施設にとっての理想的な障害者像があり、そこに目の前の障害を持った人がはまっているかいないのか。職員はそれにはめ込むことが仕事…？というところです。このように施設にルールがあれば、そこでの期待される障害者の姿は自ずと一定決まっていきかねません。どんな利用者さんもあらかじめ存在する理想の枠に近づけるよう期待される存在になりかねないと。それ自体が少し乱暴ではないのか？それは施設が提供するサービス自体に過剰に画一的な対応があるのではないか？多くの方を対象に障害者の働く権利を保障する機能を持っているのか？というところになってきます。

トイレに行っている時間を計る

では、実際に施設のルールに対応していない場面に出会った時、どのように対応するのでしょうか。具体的に一言目になんといいますか？「すいませんけど、それは…」「こらっ！」「なにしてんの？」「調子悪そうやね」「大丈夫？」「どないしたん？」「なんかあった？」「なんかあったんちゃう」「なんかしんどいんちゃう」「よっぽど腹が立つことがあったんやね」「ほんま嫌やったんやね」「ストップ　ストップ」「…」（黙って近くに立つ）などが浮かんできます。

話しかけるタイミングも相手の視界に自分がいて（つまり、声をかけることで相手がギクッと驚かない）、相手が自分に話しかけてくるタイミングを生かすのが一つの定番の選択肢です。とはいえ、なかなかそんなタイミングはないので、それに近いタイミングを探します。しかし、起こったその時にすぐ伝える方が伝わるというのも知的障害という特徴から言える側面であることは確かです。そのあたりを総合して判断して行動に移します。

さて、何かしら働きかけました。では次回、障害を持った方が施設の約束を守るという行動の生起を産むでしょうか？この問いをもつことができるのかがまず重要です。そして同時に、援助職にはこれからも同じようなことがあっても冷静に対応し続けることが私たち援助職に期待されています。むしろ「こうしなさい！」と言われて「はいわかりました！」といい、次回からその行動が起こらないということがなかなかない。そういうところがあるのも人間です。

原因があって結果があるだから、原因を取り除くとそういうことが起こらない。これが実証主義の考え方です。やったか？やってないか？が重要な考え方となります。その行き過ぎた例を過去にきいたことがあります。利用者さんがトイレに行くために作業を離れている時間を計測していた事業所（職員のトイレ時間も図っていたそうです）、他にも荷物検査の定例化、防犯カメラ映像でやったかやっていないかを確認する等いろいろと頭に浮かびます。

事実は１つ、真実は複数

基本的には相手が話したことを信じて、対応していくというのが王道であるのが福

祉です。それなのに「話す」ということを大切にし、「信じる」ということを大切にすることを、自ら否定する側面がある状況になってしまっているともこれはいえます。

そして、支援では身体化よりは行動化、行動化よりは言語化することが健康と言われている中で、福祉はそれを当然促すことが仕事です。つまりそれは目の前の対象者が発した言葉を信じるところから始まるといえます。

現在の社会福祉士の教科書ではこの実証主義の医学モデルとナラティブモデルと双方の考え方を場面にあわせて行き来できることが重要であるというジェネラリストソーシャルワークが大切だといっています。つまり、ソーシャルワークの考え方は一つでは無理だといっているのです。

家で、例えばこういうことがあって…というナラティブ（物語）があって、その続きで今日は施設でこう過ごしたい！という物語を持ってくる利用者さん。同時に、施設側が求めるこう過ごして欲しいという物語も一定存在します。その施設側のナラティブと利用者さんが持つナラティブが一緒ではないのは当然です。その摺合せ、もしくは融合が起こっていくというのがいいようには思います。

BACK ISSUES

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(12) プランド・ハプンスタンス

―計画された偶発性―

中村正

1．ある社会人院生の研究―ユニークな「問い」

この道30年になるベテラン精神科訪問看護師が社会人院生として自らの実践を省察して論文にした。彼女の問いは「うまくいった訪問看護はどうしてなのか」というものだった。これを明確にしたいと考え、カルテのようではない自らのノートに記していた私的な記録をもとにして訪問看護の全体についてじっくりと振り返りながらこの問いに応えていく計画をたてた。その私的な記録には生活に関わる訪問看護師らしい着眼点が満載だった。医療の枠をもちつつも、それを超える関係性の取り方に専門家の腕が光っていた。

たとえば、なかなか看護師に会ってくれない患者とのコミュニケーションをとる工夫は電気メーターから始まった。何度訪問しても玄関を開けてくれない。ひきこもり気味だという患者の記録から中にいる気配を感じる。さてどうしたものか。最初はこんなものかとあきらめずに気長に訪問を繰り返す。しかしそれでも安否は確認したい。そこで電気メーターが回転している様子を確認し、安心して帰ることとした。「面会不能」だったが自らの備忘録にはこうしたメモがたくさん残っていく。彼女はこれを一種のバイタルサインと名付けた。バイタルチェックはできないので考案した実践の知である。電気メーターというライフラインをとおして生きていることの確認ができる。

この話のオチはその電気メーターが電力自由化の影響で、ぐるぐる回るというわかりやすいものからデジタル式に変わり、生きているという実感がないものへと変化していったということだ。ある日突然出現したスマートメーターに看護師はあたふたする。こうした微細なことに社会の動態が映し出される。便利なようなデジタルによる集中管理はこうしたアナログな相互作用の襞を崩していく。

しかし努力の甲斐あって、首尾良く玄関が開かれていく。もちろんその後も苦労が続く。その記録は一個の小説のように奇想天外なものであり、二人がやりとりしながら構築した

現実でもある。「事実は小説より奇なり」の論文にしあがった。その患者さんは高齢であったので最後は適切な高齢者介護施設への入所となった。

もちろん論文なので、概念が欲しい。整序していく必要があるからだ。しかし通例の学術論文の様式にするとこの記録は死んでしまう。講演しながらもう一人の自分が筋書きをナレーションしつつ見直しているような「メタ物語」風の分析的な声が随時挿入されていくかたちの論文に仕上がった。ポイントは「看護の知」とは何かである。実践の知であり暗黙の知であるが、自問自答的な省察をとおして、概念と分析が生成し、個性的な患者との生きる場におけるやり取りの仕方（実践のやり方）が浮かび上がる。

抽象的な看護理論をもとにして、その前提が真であれば結論も真であると仮定して実証する演繹という方法でもなく、また事例や個別性をもとにして一般性を導く帰納という方法でもないもう一つの推論、「アブダクションabduction」のやり方である。個別の出来事をより適切に説明することのできる言明（仮説）を導こうとする思考の方法である。発想や直感、想像的思考、臨床実践等を考察する際にとても大切な論理的推論方法である（これ自体は別にキーワードとして取り上げることとしたい）。

２．プランド・ハプンスタンスの考え方

カルテのようではない記録は訪問看護師の智恵とアイディアの宝庫である。何かを創造する原石のようだった。そこから見えないものを見ていく作業を行う。あるいは見ているが気づかれていないものを掘り起こしていく作業のようでもあった。アブダクションである。いつも発見があった。

手がかりにした研究方法はいくつかある。指導担当者という役の伴走者としての私の内言のようなものでもあった。現象学的看護事例分析、臨床の知についての理論、エスノメソドロジー（会話を含む日常的実践の分析）、マイクロ・エスノグラフィー（微視的な過程の観察）等の研究手法についてのアドバイスとともに、訪問看護とは何かについての基本的なものの見方が大切なように思い、いつも基本となる問いかけをしていた。

さらに訪問看護記録を一つの物語に編んでいくための思考の補助線のように作用した言葉の一つがプランド・ハプンスタンス（計画された偶発性）である。米国のスタンフォード大学、教育学・心理学教授であるクランボルツによるキャリア論である（『その幸運は偶然ではないんです！』J.D.クランボルツ他、ダイヤモンド社、2005年）。

プランド・ハプンスタンス理論は、個人のキャリアの８割は予期しない偶然の出来事の連続を一つにつないでいく諸力によって形成されるというアプローチである。偶然は、意識や努力によって、新たな機会へと発展させることができるという。

プランド・ハプンスタンス理論は通例のキャリア論を批判的にみている。一般に、キャリアは意図的で計画的に築いていく動機によって導かれていくとする理論が主流である。目的に従って合理的に努力する道程としてのキャリア形成という考え方である。いわば直線的な発展モデルである。

しかし、現代社会は予定調和ではない。変化の激しい時代である。予期しない出来事に遭遇する。絶えず選択をしながら、ある状況

のなかを生きていく。進路変更の連続であり、問題解決に迫られながら、物語を後からつくっていく。学習機会ともなり、行動しながらキャリアを形成することになる。変化への対応力、修正しながら軌道を描くこと、それを学習移転しながら次の状況で対応する力へと展開していくこと、さらにそれを後からひとつの物語として意味づけていくことができる過程を表す概念である。次の５点がここで作用している力だと指摘されている。

①好奇心 Curiosity（新しい学習機会を模索し、知らないことや関心外のことに関与していく姿勢）、②持続性 Persistence（努力し続けること。首尾良くいかなくても継続していくこと）、③楽観性 Optimism（予期せぬ、期待とは異なる結果についても受け入れること）、④柔軟性 Flexibility（常識にこだわらないこと、先入観を廃すること、オープンマインドな態度で接すること）、⑤リスク・テイキング　Risk-taking（不確定な結果や失敗を次の学習の機会と捉えること）である。

彼女の実践にはこれらの特徴がすべて垣間見える。「うまくいった訪問看護はどうしてなのか」という問いに対しては、もちろんうまくいくまで工夫を重ねているからうまくいくのだが、それでは説明したことにならないのでこうした思考の手がかりを使って解釈をくわえていく。

その試行錯誤は訪問看護の理論に基づくというよりは偶然担当した患者の生きる地域と生活の場と状況から構成されていくものであり、相互作用の過程をとおして絞り出されていく、智恵ある看護師の職人的な技である。暗黙知として作用する見えない能力として蓄積されていた。看護理論では習わない非認知的な能力が上記諸点である。これは関わる当事者のもつ非認知的能力との呼応関係でもある。

この能力はいろんな分野で関心をもたれている。たとえば「マシュマロ・テスト」が有名だ。幼児を対象にして目の前のマシュマロに手を出すのをがまんすることができる子どもの将来を調査したものだ。非認知的な能力のひとつである自己コントロールを変数にして追跡調査が展開された（『マシュマロ・テスト：成功する子、しない子』ウォルター・、ミシェル、早川書房、2015 年）。

また別の例として、大学には GPA という試験の成績の平均値を出す仕組みがあるが学生の能力の知的な部分しか評価できていない。キャンパス文化、学生文化という隠れたカリキュラムをとおして得られる能力と知的な学業成績の関係はまだまだ未知数である。

３．非認知的領域のことも含めて

対人援助職者がプランド・ハプンスタンスとして取り出せる実践知や暗黙知をもっているとしたら、対象となる当事者はプランド・ハプンスタンスのなかを生きているといえる。もっと無自覚的であり、大変な事態や状況のなかを生きていて、それらと何とか苦闘し、対峙している人たちだと考えることができる。

たとえば、逸脱行動や問題行動の当事者たちは、その行動過程をみると、そうした行動へと吸い寄せられるような過程があり、その都度、分岐点に立ち、どちらかといえば問題行動へと至る道を選択して生きているようにみえる。そうではない行動へと至る選択肢がない、あるいは少なく、問題解決の方策や資源も稀少で、周囲の対人関係も支援的ではなかった等という状況をみることができる。生

きる過程で実践してきた習慣、対人関係の取り方、社会制度への対応、感情の処理の仕方、社会資源の保持具合、その行動による欲求の充足のさせ方、そしてそれらを一つに統合していくパーソナリティの構成の仕方の総体がある。その選択された行動は偶然というよりも予定されたようにその人に降りかかる。対人援助実践者の暗黙知と同様に、逸脱行動や問題行動として発現させているその暗黙の知が取り出せるようだ。この連載、「臨床社会学の方法」の第１回目で言及した「暗黙理論」は別の言い方である。

問題行動に関係する心理臨床ではこの「暗黙理論」を重視する。代表的には、認知行動療法があり、介入し、変容すべき対象を「認知の歪み」cognitive distortionとする。認知行動療法は、当事者のもつ「白黒思考」や「べき思考」等をとりだす。それらを変化の対象にし、認知再構成を支援する。

もちろんそうであったとしても、「認知の歪み」という定義よりは「個人の理論」とした方が、とくに暴力臨床で取り組む場合は当人の主体性や回復への努力が見えやすいと私は考える。「認知の歪み」としてだけ定式化しない方がよい。そうではない言い方も考慮して当事者との対話を試みている。

なぜなら、「歪み」という表現に対しては「正しい認知」「適切な認知」が想定されることになり、さらに誰がそうした歪みを判定するのか、それはたんに矯正の対象として浮かび上がるだけではないか等の疑問が生じるからである。

第１回目の「臨床社会学の方法」に記した「暗黙理論」でも紹介したニュージーランドの司法臨床心理学者、トニー・ワードは、犯罪者の更生保護の理論や臨床心理の領域で同じような観点から、「暗黙理論」として「認知の歪み」を位置づけるべきことを提案している。歪みという定義だけだと加害者のリスクばかりに焦点があたるからという理由である。

たとえば性犯罪者の「暗黙理論」をとりだし、加害者更生の対象にすべきことを指摘している。子どもらしい行動が性犯罪者の認知の仕方では別様に意味づけられていく。たとえば、人の膝の上に座る、下着をみせて遊ぶ、加害者に抱きつく等の行動が性的に解釈される。子どもが泣くことでさえそれは子どもが関心をもって欲しいという願望であると解釈されることがある。加害者の隣に座ることは愛着をもとめている行為だと意味づけられていく。子どもが私を誘惑した、セックスを望んでいた、子どもは傷ついていない、子どもは性を探索している等として子どもの自然な振る舞いが都合のよいように解釈されていく。女性のフレンドリーさは性的な欲望があるものとして意味づけられていく。

また、子どもが多くいる環境も好む。子どもに関わるボランティアを好む加害者もいる。そのような環境を組織して生きている。

同じ類型の意識としては、性犯罪者の意識のなかに「ナンパして一緒になる時間をもったのだから強引なセックスは合意のうえだ。」があり、だから自らの責任はないといいはることがある。

こうして、特定の子どもや女性像をもって日常の接触が行われ、犯罪へと展開されていく様子を「暗黙理論」にもとづく日常実践としてワードは描き、そこで満たされている欲望の内容とその実現手段の逸脱性の関連を分析し、両者が乖離しているので、より適切で

健康的な手段を選択することへの支援を暴力臨床として想定している。

こうして、「暗黙理論」が台本のようにして作用し、行動を導いていると想定する。「暗黙理論」はその暴力、逸脱行動、問題行動が偶然ではなく当事者のプランド・ハプンスタンスとなっていることを説明している。また、「臨床社会学の方法」第22号で記した「マトリックス」はそうしたプランド・ハプンスタンスが生成する「図」の部分にあたる。蜘蛛の巣のようにしてプランド・ハプンスタンスは問題行動の渦中の当事者を拘束し、当事者もそこに生きることを余儀なくされている悪循環をみる。

こうして問題行動や逸脱行動として表現する人たちはその問題を呼び寄せるように生きているといえるだろう。暴力臨床をしているとその暴力や行動は偶然ではない様相がみえてくる。そのことへの自覚が暴力臨床の第1歩となる。問題解決からの疎外、問題解決力の貧困、問題を必要として生きている様子があるからだ。

さらにイメージや意味づけも加わる。自らの欲望を肯定し、問題行動を中和化するような想像をし、意味づけを行っている。「暗黙理論」はこうした非認知的な部分も含むので、たんに認知的なことだけではない対象をみるべきだ。自らの生活や人生における意味づけが妄想や理想として観念化され、行動を駆動する。そして感情的な満足を得る。プランド・ハプンスタンスはキャリアについてのポジティブな概念だが、逸脱的キャリアの構成にも応用できる。

4．家族のプランド・ハプンスタンス—「家族は小説より奇なり」

対人援助職者であれ当事者であれ、個人のプランド・ハプンスタンスはさらに対人関係のなかで錯綜していく。なかでも家族（家族類似的な関係として親密な関係性も含む）は「わたしとあなた」という二人称的関係が錯綜する場であり、相互に構築するプランド・ハプンスタンスがある。

家族のプランド・ハプンスタンスは、「家族は小説より奇なり」の状況をつくりだす。家族が営む日々の現実は、学問の言葉よりも、芸術の描写が優れているし、家族を主題にした小説、映画、ドラマ、漫画、演劇が数多いことからも理解できるだろう。芸術の家族表象は、臨床の言葉と相性がいい。「臨床家族芸術」論として知見を積み上げて生きたいと密かに目論んでもいる。

実際の家族問題の現実は複雑で、輪郭の明瞭な定義である不登校・ひきこもり、虐待やDV、認知症や発達障害の介護や介助の課題が主題となるが、現実は複雑に問題化する。消費生活、相続問題、貧困と格差の拡大、離婚と再婚の繰り返し、その連れ子との相性が悪いこと、親のギャンブルやアルコール、薬物への依存と生活の乱れ、家庭内離婚状況、逆ギレした妻の復讐等として、ドラマのように浮かび上がる。

こうした「家族の現在形」は常に「羅生門的現実」をつくる。家族は親密な関係性のなかを生きており、習慣となる行動のかたちをつくる。求めあって成り立つカップルは共生体のようにシンクロする。子どもはそこで社会化されていき、全体として家族構成員は、習慣となった実践共同体をつくり、独自の問

題解決の方法を身につける。

家族は生き物なので人生の出来事が交差するごとに葛藤や苦難が生じ、家族はそれぞれに物語をつくる。中心には親密な関係性（だと相互に思いこむことも含めて）の物語がある。親密であるが故の「病みと闇」が存在する。日本社会で家族は、多様な社会問題への対応を期待されている安全基地のようであるからだ。教育や子育てと介護、衣食住の基本生活の場所、精神的な愛着の場等として社会の基層のように観念される。

しかしその基層に宿る事柄が暴かれだした。そこから虐待と DV が劈開されていく。以前とは異なる暴力への介入が家族を開いていく。離婚や子どもの親権をめぐるストーキングや誘拐、離婚と親権問題・財産分与の争い、家出、ひきこもり、親離れや子離れ等の葛藤は、暴力の様相も呈して、家族問題を構成する。家族関係の危機や病理という物語として現前化する。もちろんその暴力を表面化させたり、隠蔽したりするストーリーは社会のもつ人権や社会問題の認識の仕方にかかわる物語構造の反映である。

いずれにしても家族というフィルターをとおして意味が生成し、隠され、定義される。人生の揉め事の多くは家族の出来事として組成され、問題を解決することにも、逆に防波となることも、そしてまた緩和することもあり、増幅することもある。変圧装置のようだ。

こうした葛藤が家族関係をとおして表現される。親密な関係性にある者同士なので、相互に傷つけあう（と観念される）こともあり、その思いこみは「家族心理的外傷」のように観念される。

５．家族的不安をもたらす「体感治安」という表現とそれを生起させる社会の諸力

私は暴力臨床の領域で実践を行っている。そこには家族関係が濃厚に反映される。もちろん、マクロにみても、少子高齢化等、家族のかたちは激変とでも言える渦中にあり、格差や貧困の拡大についての現実的なリスクも横目にみながら、個々の家族は生き抜く戦略をもち、自らの欲望をもとにして動く。家族は内側にリスクを含むこともあるし、逆に、外的なリスクの防波堤となることを期待される二面性を持つ。

そのリスクは不安の予期といえる。家族の相において不安が顕現するので、それは家族不安となる。揉め事の内容は、歴史的には、質的にそう変わるわけでもない家族間葛藤であるが、個人主義の台頭、親族関係の変化、コミュニティの衰退、家族の孤立、母への育児の押しつけとともに、家族問題の解決力の衰退をもたらし、しかもそれに変わる別のかたちの問題解決の制度と技法が未形成なこともあり、社会全体として家族不安を高めていく。

このことの不幸の連鎖を体験した。2003年頃に内閣府が社会意識調査で用いた「体感治安」という言葉だった。奇妙な言葉だと思っていたら、その後、「安心・安全」という言葉として流通し、各地で「生活安全条例」が制定されていくことになる。その契機にいろんな事件が組み込まれていくが、それが私の身近で事件として発生した。「奈良・入川さん事件」である。

奈良県に住む知人の夫が逮捕された。彼は熱心な大学の教師で、PTAの活動にも積極的、近所の子どもたちにも「がんばれよ」「気をつ

けて」等と声をかけていた。そんな時、2004年に「奈良女児誘拐殺人事件」が起き、それ以後、地元ではあちこちに監視カメラがつけられるようになった。

ある日、彼がいつものように子どもたちを見ていると、ふらふらと国道に出てしまいそうな小さな子を見かけたので、「あぶない！」と声をかけた。すると、それを見ていた女性が彼を誘拐犯だと思い込んで通報した。寒い日であったのでその時の格好も災いした（目出帽子をかぶっていたという)。彼は任意同行に応じ、自白を強要され、脅迫罪で逮捕された。大学での講義ももてなくなり、裁判で冤罪と認められるまでに一年かかった。当時、その殺人事件のこともあり、むやみに子どもに声をかけないようにという主旨で不審者を排除するための「声かけ防止条例」ができており、彼は条例違反をしたことになったのだ。

こうした条例のもとになったものが先に指摘した「体感治安」という言葉である。「体感治安」が悪化しているから、「安心安全条例」をつくり、よその子に声をかけず、家族で子どもを守っていきなさいというものだ。その流れは今も変わらず、そのために地域がもっていた人間関係力が衰退してしまった。

「体感治安」とは、実際の安全や危険ではなく「感じる」もの、つまり極めて主観的なものである。それが制度や政策を動かしている。それによって地域内の人間関係が寸断され、「余計なお世話」をする人が犯罪者にされてしまう。つくられた不安や恐怖が現実を構築している。安心を強調する社会ではそのシャドー（影）として絶えず不安がつくりだされる。不安は実態をともなうことなく一人歩きする。仮想的な不安の種が創出される。それは憎悪へと昂じていきがちだ。憎悪は人々が脅威と感じる意識から養分を得ている。その憎悪は排外や排除と結びつきやすく、恐怖心がつくりだされる。安全な社会であればあるほど些細なことに敏感になり、不安意識が先行する。

疑心暗鬼と相互に監視しあうことが奨励されていく過程における象徴的な事件であった。起こるべくして起こった事件、つまりプランド・ハプンスタンスだといえる。こうしてプランド・ハプンスタンスは、単なる偶然ではなく、その社会のもつ相互作用と関係性に関わるマイナスの傾向が社会的諸力として作用し、個人へとふりかかることも示す。

６．家族のプランド・ハプンスタンスを構成する社会的諸力―その５つの特徴

家族が遭遇するプランド・ハプンスタンスは複数の構成員から成る錯綜となる。家族は社会制度なのでプランド・ハプンスタンスは社会的諸力の影響を受ける。その諸力の傾向をいくつか列記しておこう。

第１に、「教育家族」という特徴がある。団塊世代以降の親たちは子どもたちに高等教育を受けさせた。その前の世代は高等教育への進学率がまだ低く、「教育ゼロ世代」（高等教育を受けていない親世代）と呼ばれる。だから余計に子どもに高等教育を受けさせることに熱心だった。その世代が今度は子どもを持ち、大学に通わせる。「教育第１世代」という。さらにその子どもは「教育第２世代」となる。戦後の３世代をかけて、教育の世代交代が進んだ。上の世代の教育や学校への関心は高まる。クレームをつけ、監視するという行動も増えてくるはずだ。

また、1980年代以降、持続的に不登校にな

る子どもが現れ、背後にあるいじめも散見され、加えて、その後も継続してひきこもり現象が指摘されたことも重なり、家族は子育てを基軸にして、子の成長とともに教育ゼロ世代では想定できなかったようなわが子の行く末の不安を抱えるようになる。もちろん教育をとおした階層の上昇移動に期待をかけたことも駆動力となり、家族が子どもと教育を中心に運営されるという意味で、これを「教育家族」と呼ぶ。その「教育家族」の原動力は、たえず業績的価値原理において機能し、その成果が首尾よく達成できないリスクもあり、不安定さを抱えることとなる。家族不安は構造的となる（「奈良県医師宅母子3人放火殺人事件（2006年）」等が典型的）。なぜなら「教育家族」は、すべての人が到達できるわけではないピラミッド型組織の上部を目ざそうとするからだ。

第2に、「ケアする家族」が登場した。育児と介護が家族依存になっている日本の特徴である。子どもが不登校になり、ひきこもりがあれば家族がなんとかすべく動く。非行に走る子ども、薬物を使用した家族がでれば責められ、非難され、時には引っ越しする等、排除されることもある。広い意味でのケアを期待される家族という意味である。家族の福祉的機能の一環として観念されやすく家族の責任としても位置づけられる。

しかし事態は逆で、ケアニーズの顕在化をとおして家族関係の脆弱さが目立つ。期待される程にケア役割を発揮できる家族ばかりではない。

またケアは感情的な人間関係を伴い、陰性感情や陽性感情に付随する葛藤が生成する。家族は感情共同体である。その中心にはこうしたケアしあう関係がある。ケア行為は、プライバシーやパーソナルな領域を超えて相互作用する営みであり、相互信頼が不可欠な関係である。

他方では、コントロールという事態も生起する。うまくいかない状況では相手に対する否定的な処罰的感情である陰性感情も生成し、時には憎しみへと至ることもある。そこを起点に暴力が誘発される可能性が高まる。

家庭内暴力問題は「関係性の病」の典型としてみることができる。家庭内暴力は、家族ならびに家族的類似性をもつ集団や特定の二者関係において発生する。その中心にあるのは、親密な関係性・非対称な関係性という特質であり、それが葛藤を経て、暴力へと至るような脆弱性vulnerability（虐待誘発性）を宿すことになる。ケアする家族の持つ脆弱性をもとにして家族不安が生じる。

第3に、問題行動や逸脱行動に伴い「責任をとる家族」が前景化しつつある。自己責任論が根強くあり、加害者家族には排除の力が働く。あるいはいじめや体罰を告発するには勇気がいる程に学校化社会は被害者家族を囲繞している。これは家族的責任論といえるだろう。子どもの非行は親の責任という風潮もある。この考え方は、国際的なものともいえる。イギリスでは犯罪を起こした少年の親も処罰や賠償責任を負うべきという考えが広まり、具体的に政策化されてきた。個人主義だけではなく、家族責任が強調され始めている。自己責任論の延長にある家族的責任論である。各種の解体的事態（＝アノミー的状況）、たとえば、離婚の増加、非行の増加、躾の欠如、傍若無人な若者たちの現実が家族の無責任さ示唆する事態だとされる。

第4に、ここにジェンダー作用が加味される。父性の欠落があり、今こそ家族の絆の強

化、そして父性の充填が必要であるという。日本社会でいえば、思春期、青春期暴力、非行、その予兆としての「子どもたちの荒れ」が目立つ状況と家族的無責任(母性欠如と父親不在)が重なり合って、強い絆、厳格な規範、強力なリーダーシップの必要性とかかわり父性の強調がなされる。福祉国家の再編と関わる新自由主義的な政策動向の焦点に父親の責任が奇妙かかたちで位置づく。責任ある父親をめぐり子どものしつけから非行防止まで、親の責任が強調される。男女共同参加へのバッシングともなり、いきすぎた平等批判も見られるようになる。

第5に、「心理化する社会」を家族は生きている。心的外傷が「家族心理的外傷」という相において感受されるような観念が、俗流化した臨床心理や精神医学の言葉において人々の意識をとらえている。小学生さえもトラウマという言葉を何気なく使うような事態に示されている心理化社会はつとに指摘されているが、そこに「家族心理的外傷」という観念が覆っていることも見逃せない。家族中心社会 family-centered society では当然のことであるが、社会が押しつける個人の苦難や生きづらさが家族関係に環流して意味づけされていく。母娘関係、親への恨みや子どもへの叱咤、家族への八つ当たり等は日常茶飯事で、親密な関係性であるがゆえの不幸を生み出す人間関係の典型として家族が位置づく。

家族問題は社会の動態を反映する。家族のプランド・ハプンスタンスはそれが問題の重層化になるリスクもはらみつつ、葛藤を乗りこえようとする努力をもひきだす。その際に、当該の家族だけで問題を解決できるわけではないので、家族をめぐる社会の関係性が大切となる。ここに列記した5つの社会的傾向は家族を孤立させるようにも機能し、プランド・ハプンスタンスが家族問題へと転じていくリスクとして作用する。

7. 異なる関係性と相互作用を見いだす—アロマザリング、アロケアリングに学ぶこと

家族のプランド・ハプンスタンスをよりよい方へと転じていくには家族を取り巻く関係性が鍵となる。阪神淡路大震災や東日本複合大震災後に「災害ユートピア」を体験した。新しい絆の感覚だった。こうした被災体験は、同時代体験のなかでも心理的連帯感を得ることのできるものだ。NPO も含めた新しい絆の形成に社会の関心が向かう。

私は「絆に敏感な世代=連帯新世代」だと考え、多様な NPO 活動の推進に努力してきた。つながりの意識の醸成は、NGO や NPO、社会的起業への関心、新しい生活の仕方の意識等として現象している。絆の新感覚は、家族にだけ還元されないような親密な関係性への関心ともいえる。共有できる関心を基にした社会的な縁としての関係性の多様な創出という方向性であろう。地域の子育てサークル、悩みや苦労を共にする当事者組織、ネットでつながる関係、多様な形態のシェアを試みる取り組み等があり、こうした組織のかたちは今後も重要な機能を果たし、不安を解消していく手がかりとなるだろう。

こうした変化を見据えつつ、家族の諸困難に示唆されている、新しい関係性に向かう手がかりを家族問題のなかに探り、それを社会において必要なサービスと支援のあり方として指示する方へと「翻訳」する責任が専門家や研究者にはあると思う。私にできる実践は家庭内暴力をめぐる家族のやり直し支援や男

性の脱暴力支援である。家族にかかわる臨床はその変化を察知するセンサーのようであり、それを社会の課題として「翻訳」して伝える仕事があり、社会的役割だと思っている。私はこれを権利擁護のための専門家 advocacy oriented professionals と呼んでいる。

「絆に敏感な世代」を支援するための例示であるが、家族関係でみると、少子化を念頭に置いた「斜めの関係」の創出という課題がある。私の両親の世代はきょうだいが多かったため、必然的におじやおばが多かった。つまり、親子という「縦の関係」ではない「斜めの関係」をもつことができた。たまに会うと、おじやおばが「お前の親父は偉そうにしとるけど、小さい時はこんなんやったで」と冗談めかして言う。そうすると子どもは、親を尊敬する反面、相対化して見ることもできた。

しかし、次第に家庭の子どもの数は減り始め、現在も続いている。そのため、今の子どもたちは「斜めの関係」をつくることがむずかしくなり、家族だけで閉じてしまっている。「斜めの関係」を別の形でつくることが重要となる。地域の子育て支援はその典型である。その翻訳する課題のひとつを中国からの留学生の研究課題とともに意識した。

一人っ子政策のもとでの家族の変化を研究したいという四川省出身の彼は、地元に帰って子育て現役中の母親にインタビュー調査を試みた。2015年11月、中国は一人っ子政策を廃止し、二人まで子どもをもつことができる政策へと変化をさせた。それでも中国の家族のかかえる課題の本質は変わらないという主張となった。その過程で、アロマザリング allo-mothering という言葉の大切さについて検討した。母親以外の人たちの関与する母性的養育のことで霊長類に見られる共同養育の仕方のことである。

母親だけに育児の負担を負わせないために、広く社会が養育を保障する仕組みをつくる際の理論的な支柱となるコンセプトがアロマザリングである。どこの社会でもアロマザリングがある。

しかし近代社会は家族を孤立させ、ジェンダー作用をとおして育児を女性に負担させる。ペアレンティングだけだとこの構造に巻き込まれる。すくなくともアロマザリングとセットでペアレンティングを位置づける必要がある。子ども虐待と高齢者虐待で家族のやり直しをすすめる際にもこの区別と連環、そして父親の位置付け方、家族のやり直しの際の拡大家族の活用、保育所や学校、仲間集団や親のつながり等、アロマザリングとしてみていくといろんなものが関連していく。この点での基礎的条件づくりこそが家族問題対応力となっていくだろう。

家族問題は、家族のプランド・ハプンスタンスが不幸の重なりや課題の呼び寄せのように作用して生成する。そこには家族に負荷をかける問題解決の仕方があり、社会が家族依存に陥っている様相がある。社会問題の重層化である。

家族をとおして負の連鎖が層を成していく。子どもの貧困には母子家庭問題がつきまとう。離婚の原因には父親の暴力問題がある。こうした問題連鎖はプランド・ハプンスタンスそのものである。その過程がプランド・ハプンスタンスの経過をみることで可視化される。訪問看護師のプランド・ハプンスタンスは当事者の問題の重層化というリスクとなるプランド・ハプンスタンスと並行して、それが悪循環にならないような支援的な関与となって

いた。

こうしたことは彼女が習ってきた教科書には書かれていないことだった。臨床の知はこのプランド・ハプンスタンスそのものだろう。訪問看護師の対象者は育児ではないので、アロケアリングという。他者の存在の大きさを表現したものがアロマザリング、アロケアリングである。看護師のプランド・ハプンスタンスと当事者のプランド・ハプンスタンスは地域訪問看護として交差した。訪問看護の知は小説よりも独自なものだった。

なかむら　ただし
（臨床社会学、社会病理学、社会臨床論）

ケアマネだから
できること

23

「認知症の人への理解」を入口とした地域づくり

木村晃子

居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

地域包括ケアシステム構築・推進に当たり、ケアマネには、個の支援(ケースワーク)だけでなく、個を支える地域づくりの実践(コミュニティソーシャルワーク)が、より強く求められるようになりました。個と地域の一体的支援を目指し、ケアマネとして認知症の人と家族を支えるために地域住民とつながり、社会資源開発につなげたプロセスを通して考えたいと思います。

～始まりは、一人ひとりの声～

「ディサービスではなく、好きな人とちょっとお茶を飲みに行けるようなところがあったらいいのに・・・」

「認知症と診断された人の家族は、どのように介護しているのでしょうか。同じ立場の人と話がしてみたいです」

こうした声が若年性認知症の人や、認知症の人を介護する家族から寄せられました。本人の声からは「認知症カフェ」、家族の声からは介護者と共に歩む会（家族会）が行っている「介護者の集い」が浮かびました。

地域で様々な活動をしている人からも、「これだけ認知症という言葉が出回って、テレビなどでも放送されるようになると、自分や家族も認知症ではないかなどという相談を受けることが増えました。どのように対応してあげたら良いのかと、考えることが多くなりました」

という声を聞く機会が増えています。

地域で暮らすさまざまな立場の人の想いと、既にある地域資源、地域の課題をつなぎ合わせることで、「共に生き、相互に支えあうことができる地域」(ケアリングコミュニティ=Caring Community) をつくることができないかと考えました。こうした地域づくりを推進する重要なポイントは、「タイミング」です。「今」という声をつかみ対応する時期を逃さないこと、ひらめきや思いつき以上の計画性や継続性を備えていることです。これらの素地は、一朝一夕ではない、地域とのネットワークが必要なことは言うまでもありません。ケアマネは、日頃から地域の資源や、地域活動をしている人たちとアクセスしている必要があります。

～立場、社会的役割を考えた連携～

前述した三者（認知症当事者、介護者家族、地域活動をしている住民）の声から、ケアリングコミュニティをつくる第一歩として、既存資源や、組織の役割などを整理し、具体的な手段として、「認知症カフェ」開催を検討しました。当時（２０１４年)、私が管理者を務めている居宅介護支援事業所の運営主体はNPO法人でした。同じグループには、社会福祉法人があり、ケアマネとして、ケースワークを超えて動くためには両法人の立ち位置と社会的役割を考えることが大切で、法人の理解とバックアップが活動を支える大きな柱となりました。居宅介護支援事業所として１４年度事業計画に掲げたのは、法人内の他の事業所（共生型地域福祉ターミナル、共生型地域オープンサロン）との連携です。そして、「認知症カフェ」を法人の拠点（オープンサロン：就労継続支援B型事業所）で開催することで、高齢者や認知症の人の理解を進めるだけでなく、障がい者の理解、誰もが主役となって活動に参加できる地域を目的としました。

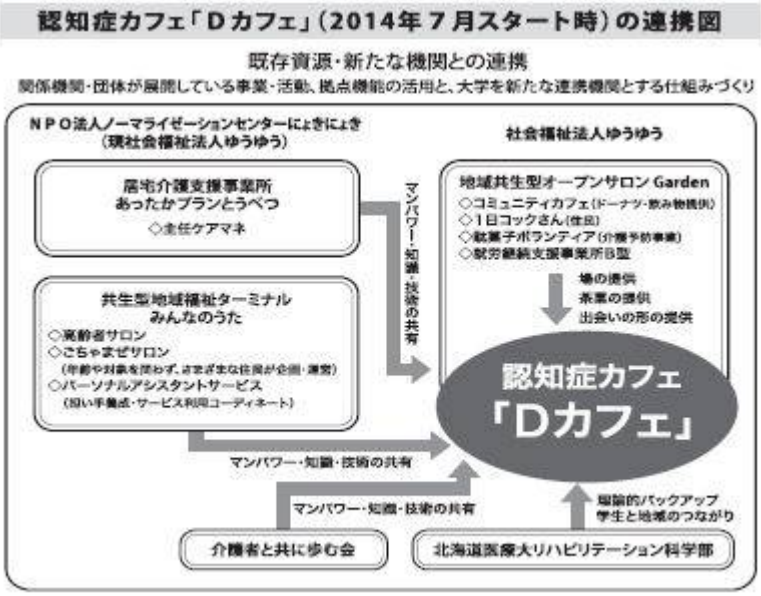
外部の連携先に考えたのは、認知症当事者や介護者を支える組織「介護者と共に歩む会」です。年数回の「介護者の集い」に取り組んでおり、介護者が気持ちを語り合える場を設けていましたが、これまでのケースワークや集いへの参加を通し、地域課題として介護者が相談や思いを吐露する場所に出てくる難しさを感じていました。「家族が認知症であることを知られたくない」という思いが強い地域性から、家族会役員らは「認知症の人や介護者が気軽に地域に出てきて気持ちを話し、遠慮なく周囲の手助けを受けてくれるといいのだけれど・・・」と考え、当事者や介護者、地域のための企画を検討していました。

新たに始めようとした「認知症カフェ」と、既存の「介護者の集い」は、開催頻度や場所

が異なっても、協力関係を築くことでケアリングコミュニティを目指すことができます。当別で展開する「認知症カフェ」はＮＰＯ法人が主催し、ケアマネが事務局機能を担当しながら、当事者と介護者を主役とする場を前提としました。１４年７月にスタートした「認知症カフェ」は、家族会の役員や会員の協力のもと、毎月継続して開催できています。

「認知症カフェ」を運営する中で、新たに融合できる機関を模索しました。地元にある北海道医療大が１３年度にリハビリテーション科学部を新設したため、同学部と連携できるとカフェの参加や活動が促進されるのではないかと考え、同学部教授に、相談、連携を依頼しました。１５年度に「地域包括ケア演習」として授業に位置付けられ、学生と地域住民との新たな出会いの場を作り上げることにつながりました。

このように、ケースワークを担うケアマネが、コミュニティへと活動を広げていくためには、所属法人、地域団体・機関の理解と連携協力がかかせません。



「認知症カフェ」が、各地域に展開されつつあります。「認知症カフェ」は、どのような目的をもって展開されているのでしょう。２０１４年７月から継続開催している当別の認知症カフェは、試行錯誤を重ねながら歩んでいます。

～「認知症」に特化はしない。けれど、本来的な意味も忘れない～

認知症カフェ（通称Ｄカフェ）開始にあたっては、矛盾をもってスタートしました。「認知症カフェ」とうたいながらも、「だれでもどうぞ」のスタイルで、参加対象を必ずしも、認知

症の人や家族介護者に特化しないことでした。それは、私の所属する法人の理念でもある「共生型」を意識していたこと、何かに特化しない方が、出会いの幅も広がり、地域資源を生み出す効果も実績として得ていたからです。

では、「認知症カフェ」とうたう必要があるのか、という疑問もあります。認知症カフェを開催する意味は、認知症に対する偏見をなくすこと、認知症の当時者や家族の孤立感を解消することで、地域とのつながりの中で実現することにあります。

『社会脳からみた認知症』の中では、認知症の人に生じる「心の変化」について、「記憶の障害や知的能力の低下だけでは説明しきれず、他人の気持ちを理解し、周囲とうまく生活していく『社会的な能力の低下』と捉えなければ、十分のその原因を究明することはできない。」と書かれています。

私たち人間は、「関係性」の中で生きています。認知症になってしまった人は、その関係性を保つことに困難が生じてしまうことがあります。日々の介護に、介護者までが社会関係を弱めてしまう現状も否めません。介護保険制度のサービスは、「介護」は担えても、親しい人との関係性までは代わることはできないのです。「認知症カフェ」をうたうこと、存在することの意味は、社会的能力の低下する状態にあっても、「社会関係を持ち続ける場がある。」ことで、人として尊厳ある暮らしの継続が地域の中で成り立つことだと思います。

～カフェへの参加から、地域へつながる～

初回のカフェでは、若年性認知症と診断をされている当事者が参加し、ご自身の言葉で診断の話、現在の気持ちだけでなく、これから病気が進行しても「優しくしてほしい」「今の自分を忘れないでほしい」と話されました。参加者全員でそれぞれの私らしさを話し合い、もし認知症になっても、「私らしさ」を周囲に理解してもらいたい、という気持ちを共有しました。

介護サービスにつながっていない当事者と介護者は、何をどのように相談したら良いのかを、介護経験者から情報を得たことで、介護サービスの利用につながりました。

「認知症でも本人の意向や状態を考えると、介護サービスの利用は考えられない」。そうした介護者の声を受けて、カフェ参加者が自宅を訪問し、「友達」として当事者と交流するようになり、介護から離れた自由な時間を確保できるようになった人もいます。個の課題が地域の人たちの中で共有された時、新たな地域資源を生み出したり、既存の地域資源につながったりします。

毎月開催されるカフェは、知識を共有する「認知症ミニ講座」から始まり、身近にあったことを自由に語り合います。その中から、介護や対応のヒントを考えることもあります。時には、「活動」を通して体験を共有します。「お弁当作り」を行った時は、午後から集まって、お弁当をつくり、出来上がったお弁当をそれぞれが自宅で夕食にするというプログラムでした。カフェで企画するプログラムは、「集う」「語る」「聴く」「活動する」ことを意識しています。

本年度（２０１５年）の大学との連携で、学生がカフェに参加した時には、「若い人の話を聞いてヒントがもらえるとは期待していなかったけれど、話をしてみたら、若い方のお話からたくさん勉強させてもらいました。」と、参加した高齢者は嬉しそうに話してくれました。

10月に開催したカフェでは、さまざまな人たちがお弁当づくりを通して、「時間」「場」「体験」を共有

▲Dカフェの開催案内。裏面では前回の様子を紹介し、参加できなくても内容や雰囲気が分かるよう工夫

「認知症の人が地域の人と出会う」「介護者が別の介護者や地域の人と出会う」「自宅以外の場と家族以外の人のいる中で、本人と介護者が『再会』する」など、出会いの形もさまざまです。大変でつらいことも、場が変わることで、リフレーミングされることもあります。これが、「社会関係」がもたらす変化です。このような場をつくり出すことや場につなげることが、ケースワークからのコミュニティソーシャルワークなのです。

カフェが、街中のサロンで開催されていることにも意味があります。認知症カフェの開催日でなくても、気が向いた時に立ち寄れる場になる可能性持っているからです。「お天気が良くて散歩をしていたら、認知症カフェの日だったので、寄ってみました」と、当事者と介護

者の方がふらっと立ち寄ってくれたことがありました。これは、理想的な展開だと考えています。カフェの開催を通して、なじみの場所、なじみの人をつくっていくことが、認知症になっても安心して暮らし続けられる地域づくりにつながると思います。

２０１４年７月から取り組みを始め、現在も継続している当別での「認知症カフェ（D カフェ）」は、今後どのように歩むことで、真のケアリングコミュニティとなっていくのか、現状と課題、展望を考えます。

～一人のニーズが生み出した地域資源～

地域（コミュニティ）とは、そこで暮らす方たちにとって、さまざまな機会を得られる場です。出会いを通して、参加・活動することで、自分が地域の一員であるという意識が生まれます。地域に対する帰属欲求が満たされ、孤独・孤立の解消にもつながります。

しかし、疾病や障害が地域に参加する機会を奪い、あるいは、参加へのハンディを生み、地域の一員であることすら感じることができない場合があります。地域には本来、「お互いさま」の意識から自然発生的に存在する関係性と場がありますが、ちょっとしたお節介が生まれづらい現代社会では、誰かがそのきっかけをつくることも必要になるでしょう。

ケアマネの仕事は、個別ケースの支援から始まります。個のニーズを地域で共有すること、困っている人も困っていない人も、「お互いを知る」ことができます。そうしたつながりから自主的な活動が生まれ、ケアマネや地域の関係機関は活動が継続されるよう、多面的に支えていかなければなりません。

多くの人に届く必要がある事柄は、ケアマネが地域ケア会議で個人や地域の状況を発信し、制度・政策に位置づけられ公共化していくような働きかけが求められるでしょう。大切なのは、一般論から地域ケア会議をスタートしないことだと思います。「認知症の人へのケア」といっても、あまりにも扱う幅が広すぎます。認知症になった人が地域で暮らす時、どのような課題が存在し、どのように解決してくことができたのか、個別事例の積み重ねこそが、地域課題を明確化していくでしょう。ここに、ケアマネの大きな役割があります。

今から数年前、認知症になった女性を担当しました。娘さんが１人で介護していましたが、片時も目を離すことができず、介護サービスだけで支えることは困難な状況でした。当時、地域で活発に行われていた認知症サポーター養成講座の受講者アンケートには、「できることがあれば地域の人の役に立ちたい」という言葉が書かれており、認知症サポーターを具体的

な活動へ展開することで認知症の人と家族を支える体制を構築できないか、と考え「あったかサポーター」が地域に誕生しました。

あったかサポーターは、そのご本人にとっても介護する娘さんにとっても大きな支えとなっただけでなく、在宅で暮らしている他の認知症高齢者や家族の支援、入所施設で行われる活動、グループホーム入居者の畑仕事など地域活動に参加する時のサポートと、さまざまなニーズに応えています。

～「出会い」が互を育み、ケアマネも支えてくれる資源に～

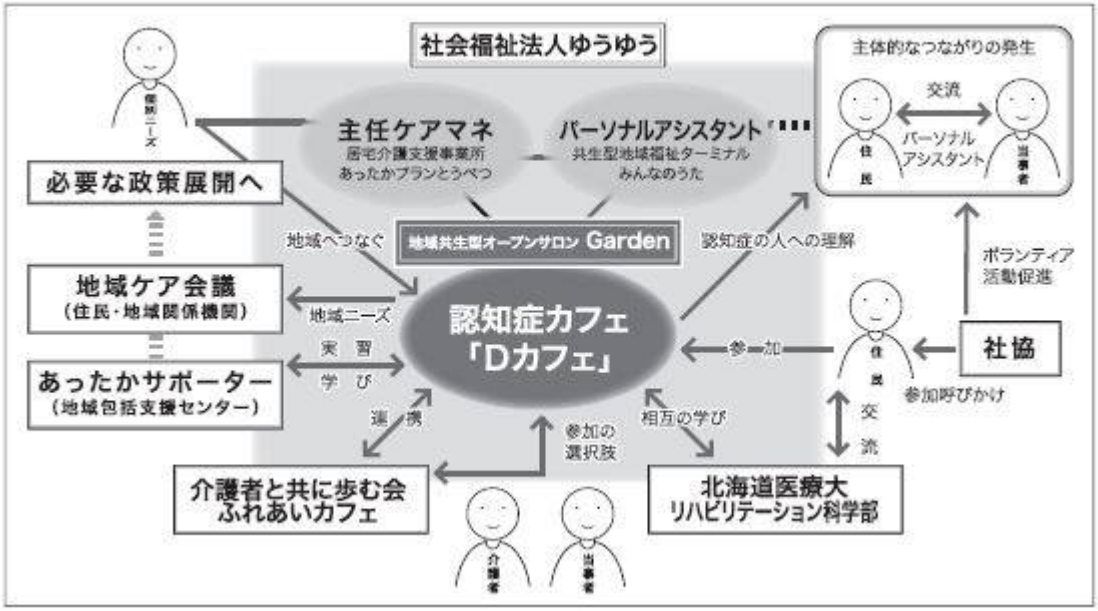
当別で開催している認知症カフェには、当事者の参加や介護をしている人の参加が多いわけではありません。本来の目的を達成するためには、より広くカフェを周知し、気軽に足を運べるようにしてくことが課題となっています。カフェの参加者同士で話し合ったところ、①開催日が決まっていると予定も立てやすく参加しやすい。②なじみの人から誘われると参加しやすい③保健師さんなどがいてくれると相談しやすい④認知症予防の話題があると参加しやすいーなどの意見が寄せられました。

こうした意見を形にしていくには、一法人の企画だけでは困難です。今後は、社協や地域包括支援センターなどと連携した活動が一層必要となります。個のニーズを地域につなぐ機能だけでなく、これまで以上に地域ニーズ・地域課題を把握する場、人材育成や活動・参加の機会としての役割も果たしていくことができればと考えています。

１５年度後半は、あったサポーターの継続実習の場として、認知症カフェを位置付けることになりました。あったかサポーターが、認知症カフェに参加することで、当事者が参加した時のサポートも可能になり、当事者から学ぶこともできます。出会いがお互いを育む機会になると感じています。

私は、地域住民とのさまざまな活動を共にすることで、住民の方々に力を貸していただく機会が増えました。「お互いさまの地域づくり」が、ケアマネをも支えてくれる資源になっていくと思います。

「Dカフェ」が目指す地域展開図



＊参考文献：地域福祉援助をつかむ　有斐閣　岩間伸之・原田正樹―著、クリエイツかもがわ＝認知症カフェハンドブック　武地一編者・監訳、講談社＝社会脳からみた認知症　伊古田俊夫著

＊『「認知症の人への理解」を入口とした地域づくり』は、北海道医療新聞社発行の週刊介護新聞に、２０１５年１０月～11 月に連載されたものを、一部改変したものです。

街場の就活論 vol.24

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団（だん） 遊（あそぶ）

コンビで応募、コンビに内定、コンビで入社の【コンビ採用】

3 月 1 日のナビサイトオープンを皮切りに、今年も新卒者の就職活動の火ぶたが切って落とされました。
もちろんこれ以前より新卒者の採用活動をしている企業もあり、私の授業を受けている大学生の中にも「すでに 3 つの内定を持っている」というツワモノもいますが、公式には 3 月 1 日がスタートということになっています。
学生たちは、リクナビやマイナビと言った、通称「ナビサイト」に登録し、気になる企業にエントリーを済ませ、その企業からの情報を受け取り、説明会の予約を始めます。

▼ ▼ ▼

私が代表をするアソブロック株式会社も 5 年ぶりに新卒採用活動を行うことにしました。
新卒採用活動を例年やっている会社は、いい意味で仕事が「ルーチン化」されているのでしょうが、うちのように「時々」する会社にとっては準備が大変です。
お金も 100 万円以上かかりますし、採用プロジェクトチームを作って、文字通りひとつひとつ決めていかなければなりません。

・エントリーしてくれたらどうアクションを返すか？
・説明会の流れとプログラムは？
・会社を知ってもらうための広報活動はどうするか？

決めなければいけない細かいことだらけです。その設計に緻密さに、学生の心をつなぎとめておく秘訣がありますので、「なるようになる」と思って始めると、だいたい悲劇な結果

が待っています。中でも一番の大きな決断は、どういう採用方法にするかです。

▼ ▼ ▼

プロジェクトチームで散々話し合った結果、アソブロックの 2017 年度の新卒採用は「コンビ採用」という手法で活動をすることになりました。
文字通り、二人一組のコンビでエントリーしてもらい、一人一人ではなく、コンビに対して内定を出すという方式です。

・もし選考途中で一人が辞退をすると言い出したら…、コンビで辞退してもらいます
・もし内定後に一人が別の会社に行くと言い出したら…、相方の内定も取り消しにさせてもらいます

今回は、そんな一風変わったコンビ採用を取り入れた背景をご紹介します。

▼ ▼ ▼

そもそもアソブロックは毎年新卒採用活動をするような会社ではありません。
一般的には、企業活動の永続性を担保するためや、組織活性のために新卒採用活動をする会社が多いのですが、アソブロックはいつ潰れても、その時はその時だと思っていますし、すでに在籍メンバーたちと会話しているだけで十分に刺激的です。
そのため、新卒採用活動を「なぜ」するのか、理由を明確にするところから始める必要がありました。

言い換えると、新卒で入社してくれる学生さんに何を期待するのか、その期待を明確にする必要があるということです。
アソブロックでは他社の新卒採用支援の仕事もたくさんしていますが、ここの認知が不十分なまま、単に高学歴な学生を追い求めている企業も多いように思います。
新卒採用も中途採用も同じですが、採用活動において一番重要なのはこの期待の明確化と、そのような期待に応えられる人材をどのような要件で見極めるかの明確化です。

▼ ▼ ▼

議論の末に出てきたアソブロックの場合のそれは、「育てたくなる若者に出会いたい」ということでした。
在籍メンバーのキャリアがそれぞれに高まり、個々人で生きていくに十分なスキル・経験

を積んだ状況になるに従い、「若者を一人前に育てる」ことで存在価値を発揮していきたいという思いが募ってきたのです。
そんな個々の思いが集約して「新卒採用活動でもしてみましょうか」となったことが確認できたのです。

▼ ▼ ▼

理由が明確になると、ではどういう採用手法を採れば

・育てたくなる若者に出会える機会が増え
・実際に育つ可能性が高い環境を準備できるか

を考える必要が出てきました。
プロジェクトチームでは、さらにこれまでの新卒採用や中途採用の履歴や、その後の個々人の成長・活躍具合などを鑑みて分析しました。
その結果、コンビで採用することでより早く成長してもらえる環境作りができるのではないかという仮説が立ちました。
理由としては主に以下の三つが挙げられます。

1：ライバルの存在は成長を加速させる
仮に別々に二人を採用しても、その二人がライバル関係になるか、お互いが認め合う存在になるかどうかは分かりません。また、企業が二人を選ぶと、「タイプが違う子にしよう」など、学生の成長都合ではなく、企業都合で二人を選びかねません。それであれば、元々ライバル関係にあるような刺激し合える二人で入社してもらえればいいのではないかと考えました。

2：一人では重い仕事や決断も、二人でなら乗り越えられる
人は、少し背伸びをしないと乗り越えられないような仕事や、不安に潰されそうになるような決断を下すことなどを通じ成長します。しかし、一方で過度なプレッシャーを与えその子を潰してしまっては意味がありません。しかし一般的に一人では抱えきれないことも、二人でなら乗り切れる可能性が上がりま。そのため、絆の強い二人を採用すれば、結果としてより高度な仕事に早くからチャレンジしてもらえ、それを糧にできる可能性が高まると考えました。

3：二人いることで雰囲気に染まり過ぎない
これは新卒の学生に限ったことではないと思いますが、一人で入社すると「早くなじむ」

ことに頑張ってしまいます。しかし、その組織に馴染むことと成長とは別の要件であり、実は、組織に違和感を感じられるくらいの距離感で自分の仕事観を高めていった方が成長は早いのではないか。仮にそうだとすると、コンビでいることはその助けになると考えました。

▼ ▼ ▼

以上のような議論や思考を経て生まれた、おそらく日本で初であろうコンビ採用。
3 月 1 日よりマイナビでエントリーを開始し、説明会を 3 月～4 月に。選考を同時に進め、5 月末には内定コンビを決める予定です。果たしてどんな出会いがあるのかは、また機会を見て報告します。

文／だん・あそぶ
「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第六回

カウンセリングへの期待

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

これまで、カウンセラーがクライエントさんやご家族を迎えるまでに、どのような点に気をつけて準備をしているのか、土台作りについて、話してきました。

では、カウンセリングの予約日時が決まって、面接に来られるとき、実際にどのようなことが面接室で起きているのか、今回は、クライエントさんのモチベーションや期待という点に、注目します。

期待と不安の広がり

カウンセリングに関心がある人は、関連の本を読んだり、ネット情報を調べたりして、おおよその様子を知っています。しかし、いざ、自分が、カウンセリングに行こうとすると、どんな気持ちになるでしょうか。

カウンセラーってどんな雰囲気の人なのかとか、どんなことをきかれるのか、手厳しく指摘されて嫌な思いをするのではないかなど、不安がひろがります。

カウンセリングは日本ではまだまだなじみがありません。解決したい気持ちがあったとしても、カウンセリングに行くこと、そのものが弱者の証というイメージから、行こうとする気持ちをうやむやにすることもあるでしょう。

ましてや、学校などから指示された場合は、表面に出すことはないにしても、反発心が湧く人もいます。

子どもの問題で、学校の先生から保護者に対して、どこか専門機関に相談に行ってください、などと言われると、学校から見離された、やっかいもの扱いをされたと、ある種の寂しさや悲しさを感じることもあります。

来所をねぎらう

このように、カウンセリングが始まるまでに、それぞれの気持ちの中や、家庭内で小さな嵐が起こります。

必要に迫られて、あるいは指示されて来所する場合には、来所そのものが負担になっています。

初めてお目にかかる面接では、紹介者について触れ、カウンセリングへの期待はどのようなものなのか、不安の広がりはどの程度なのかを察しながら、それぞれの来所をねぎらい、カウンセリングの目的を説明します。

担任の先生からカウンセリングを紹介された

期待？　不安？　悲しい？

行ってみたい気もするけれど、カウンセラーってどんな人？お姉さんみたいな人だといいけど、男の人だったら、いやだなぁ

カウンセリングに行きなさいって言われた。担任の先生から見離された気がする。悲しい。わたしって、迷惑かけているのかも。

はてな子さん　カウンセリング初学者

カウンセリングにいやいや行く人もいるのですか？

ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

はい、複雑な心境の人がいます。特に、子どもさんは教師や医師などからすすめられて来たという人が多いです。どのようなモチベーションで来られているのか、来所までの気持ちの移り変わりを理解することが大切です。

初回面接の壁　いやいやカウンセリングにやってきた子ども

困っていることだけでなく、得意なことや好きなこともバランス良く話をきく

少し傷ついているかも

カウンセリングに喜んでやって来ましたという子どもさんは、まずいません。

家族に連れてこられた人、学校や医師の指示で来た人など、動機はそれぞれ異なります。

中学高校生の女子のなかには、一度行ってみたかったという生徒さんもたまにおられますが、多くの子どもたちは、どちらかというと、少し傷ついて、カウンセリングにやって来るようです。

学校でうまくいかないことがあって「問題児」扱いをされたり、先生では手に負えないからカウンセリングに行きなさいと紹介されてやってくるなど「やっかい者」のレッテルを貼られたりしていると感じているようです。

子どもの得意なこと好きなことをつかむ

カウンセリングは生活指導ではありません。悪いところ探しの話題に偏らないよう、子ども全体を理解するために、好きなこと、得意なことをつかみ、どんなふうに過ごしているのかについて、生活の様子を理解します。

紹介者とクライエント家族との関係

電話予約の時点で大まかな様子は把握していますが、初めてお会いしたとき、改めて、来所の経過をうかがいます。

「○○先生からのご紹介ですね」

と確認をしたあとは、ご家族に充分話していただき、その内容をしっかりと受け止めます。

事前に子どもさんが、紹介者からの指示に納得せずにカウンセリングに行くことが分かっている場合は、要注意です。

「今日はここに来るというだけで、大変でしたね」と様子をみながら伝えます。

過度の緊張などが感じられる場合は、

「気分が悪くなったら言ってくださいね」

と声をかけ、子どもさんのペースにできるだけ合わせます。

いろいろな壁を乗り越えて初回の来所につながっていることが推測されるときは、動き始めは不満や不安を小さくすることが大切です。

子どもさんに少しずつゆとりが見られていくと、カウンセリングは、プライバシーが守られていることや、解決のためにまわりの人が協力して応援する場所であることを強調します。

カウンセリングへ行くことに

納得？　それとも　拒否？

わかった、行ってみるよ。

行ったらきっと気持ちが軽くなるよって、学校の先生が言っていたから。

いやだ！

カウンセリングなんかに行きたくない。

ぼくは悪い子じゃないし、何も困っていない！

別になんとも思わないよ。

行けばいいんでしょ、行かないと、かあさんがうるさいからね。

おれってそんなにヤバイの？

考えるのもめんどうだ～どうでもいいや

と、内心は、複雑な気持ち

やる気がある？やる気がない？
モチベーションはカウンセラーとの関係により徐々に変化する

やる気がある？なし？

カウンセリングに大いに期待をして、どんなことでもトライしますと、意欲的にやってくるクライエントさんがいるとします。反対にカウンセリングについて、非協力的というか、納得しない状態で来られる人もいます。

問題を抱えているご本人だけでなく、家族も同様です。

たとえば、母親は子どもの問題解決のためなら何でもしようとします。しかし、家族面接に同席している父親は、母親ほどモチベーションは高くないかもしれません。

来所前は、やる気のある人、やる気のない人と区別できるかもしれませんが、カウンセラーとの関係性によって、そのモチベーションは変化していくと考えられています。

家族それぞれのモチベーション

家族カウンセリングに来られているとき、子どもさんの問題をめぐって、両親がお互いの態度を責めて

「こうなったのはあなたが悪い」

と、信じきっています。子どもの問題は、この人のここが原因なので、改善すべきだ、とパートナー批判になります。批判される側も居心地はよくないので、子どもの問題は気になるけれど、参加するのが煩わしくなります。

日頃、それぞれが感じている問題点や反省点について受けとめながらも、いまの状態を継続したいわけではないこと、なんとかしたいという家族の思いあることを、しっかりと押さえます。この作業が重要です。

その上で、今後、進んでゆく方向性について、家族とともに考えます。

「これからどうなったら良いと思いますか」

と、投げかけます。

決して、子どもさんに対して、どうしてこのような態度をとるのですかなどと指摘をすることはありません。

あくまでも、これからについて、それぞれの家族が望んでいる具体的なイメージを確認して、方向を定めていきます。

もちろん、すぐに一致することはむずかしいため、これまでの経過や学校での出来事、家での様子などを共有しながら、同じ土俵に徐々に上がっていき、歩調をそろえていきます。

そのプロセスを経ることで、解決に取り組む家族のモチベーションが安定してきます。

なんとかしなくてはという家族の思いをもとに

どうなると良いのかの方向性を確認する

また、ぼくのことでケンカしているみたい

母　親「夫は、仕事ばかりで、協力的ではありません。こんなことになったのは、父親がかかわらないからだと思います。夫は、私が口やかましいから、子どもが黙ってしてしまうというのです。このことで、ケンカになってしまいます」

父　親「話しあっているうちに、いつも大きな声になるので、子どもはケンカだと思っている気がします」

カウンセラー「子どもさんへの対応をめぐって、話しあっているうちにケンカになるのですね。それは、お二人ともが、この状況をなんとかしたいという強い思いの表れですね。その思いは大切です。その思いをもとに、**ここから先、どんな点に気をつけて親が接していけばよいのかを考えていきましょう。**　子どもさんが少しでも、落ち着いているときがあるとしたら、それはどんなときですか？、、、」

映画の中の子どもたち

第23回 サウルの息子

－愛か、狂信か？－

川﨑　二三彦

顔の映画

カンヌ国際映画祭グランプリをはじめ、数々の賞を獲得したというから、とにかくすごくいい映画なんだろうと期待して出かけてみた。

と、どうであろう、映画は冒頭、主人公の顔を大写ししたのはよいとして、場面が変わり、ストーリーが展開しても、画面の大半はいつまでも主人公の顔に占められていて、背後の情景がどうなっているのか、今どんな状況であるのかがよくわからない。おかげで、客席の私は次第にストレスが強くなっていく。

アウシュビッツ。

主人公サウルは、囚人としてガス室に送られる順番を待つ身だが、今はゾンダーコマンドとして働いている。耳慣れぬ言葉だが、ゾンダーコマンドとは、同胞であるユダヤ人の死体処理に従事する役を負わされた特殊班のことらしい。いずれ誰もが殺されるとしても、彼らの順番はいくぶん遅くなるというのだけれど、死体を運び出し、焼却し、遺灰を運び出して川に捨てるという仕事は過酷というほかない。

大写しの顔の合間に現れるそれらの様子や、断片的に知らされる彼らの生活ぶりを垣間見ていて、私にも、ようやくカメラワークの意図が見えてきた。簡単に言えば、観客にわざと状況を俯瞰させないのである。そしてそれは、とらわれの身となって明日の命も定まらないユダヤ人の置かれた境遇を否応なく想起させる。

「どうなっているんだ、もっと説明してくれ」

思わず湧き上がった内心の声が、そのまま彼らの叫びに繋がっていくカメラワークの見事さが、受賞の理由だったのだろうかと推測した。

それにしても、全編アップで出続けるサウルの一挙手一投足が観客を惹きつけなければ決して成立し得ない作品だというのに、彼を演じたのが、目下長編小説を執筆中の詩人だというから脱帽。

息子はいない？

ところで、ガス室送りにされても、稀には死にきれず、生存している者がいるらしい。むろん、そうであっても死体を処理する際には発見されるし、発見されれば、軍医によって直ちに殺害され、解剖に回される。物語は、そうして生き残った一人の少年を、サウルが目撃したところから始まる。

ゾンダーコマンドは、その特殊な役割から、アウシュビッツの中でもある程度の自由が与えられているらしく、サウルは、殺害された少年が運ばれた部屋に赴き、担当の医師に解剖しないでほしいと依頼する。このあたりから、ようやく私は、この少年がサウルの息子だと確信する。とはいえ、解剖医のところへ行くだけでも無謀な行為だから、医師は驚き、当然のことながら、彼の希望を拒絶する。

「私も囚人なんだ」

ナチによるアウシュビッツの管理は、効率を極めている。囚人が囚人を監視し、囚人が囚人をガス室に誘導、後始末も囚人が担う。だから、囚人の解剖も囚人医師が行い、ナチは結果について報告書を要求すればよい。映画では（そして現実でも）、「部品」と

いう言葉が囚人を指しているらしく、それがごく普通に飛び交うさまに、却って戦慄を覚えてしまう。

それはさておき、依頼を拒否されたサウルは、ならばと、後刻あらためてその場に足を踏み入れ、遺体を持ち出してしまうのである。

彼は一体何をしたいのか。実は、ユダヤ教の教義に従って、息子をきちんと埋葬するつもりなのだ。

「そのために、これほどの危険を？」

無信仰の私には理解できないが、仲間のゾンダーコマンドまでをも危険にさらしながら、追悼の祈りを捧げるべくラビ（ユダヤ教の聖職者）を探し求めて求めて走り回るサウル。

そんな展開が続く中、見ている私が混乱する台詞が語られる。

「お前には息子はいないじゃないか」

＜一体どういうことだ？　息子じゃないのか？＞

「妻の子じゃない」

サウルは控えめにこう呟くけれど、わが子を愛するが故の行動だと考えていた私には、もう何がなんだかわからなくなってしまった。

絶望の檻で

ところで、恥ずかしながら本作を観るまで何も知らなかったのだけれど、アウシュビッツ（ビルケナウ強制収容所）の歴史上、たった一度ではあるが、武装蜂起があったという。1944 年 10 月 7 日、ゾンダーコマンドの集団が 3 人のナチの兵士を殺害して遺体焼却炉を爆破し、数百人の囚人が脱出したというのである。映画はそれを描いており、サウルもその一員だった。

とはいえ、蜂起に勝算があるはずもなく、いずれは死す運命にあることは、誰もが自覚していただろう。X デーが迫る中、サウルもさまざまな任務を果たすよう促されるが、彼はあくまでも少年の埋葬にこだわり、任務よりも優先させる（ように感じられた）。

狂信？

という言葉が私の脳裏をかすめ、わりきれなさが解消されないままので、映画館を出てからも、しばらく彼の行動の意味を考え込んでしまった。

そして思う。アウシュビッツに移送されたユダヤ人は、まさか彼らが「部品」と呼ばれ、町工場のありふれた作業のようにベルトコンベア式に次々とガス室に送られ、殺害されて燃やされ、灰となって川に捨てられるなんて思いもよらなくとも、それに従事させられるゾンダーコマンドは、そこが絶望の檻であることを最も痛切に理解している人たちであろう。

では、大量殺人に従事させられ、明日は自身も死ぬ身の彼らが、今日を生きる意味は何なのか。死した者を生かし、自らが生きた証を確認する唯一の行動が、息子（と信じる少年）を手厚く埋葬することだったのではないだろうか。

生の究極の意味が、究極の殺害現場で浮き彫りにされた映画、それが本作品なのかも知れない。

＊ 2015/ハンガリー
＊鑑賞データ　2016/02/22 京都シネマ
＊公式 HP http://www.finefilms.co.jp/saul/
＊ Twitter への投稿　http://coco.to/movie/40106

＊題名を　click すると本文へジャンプします。

＜これまでの連載＞

第 1 回 プレシャス
第 2 回 クロッシング
第 3 回 冬の小鳥
第 4 回 その街のこども
第 5 回 八日目の蝉
第 6 回 いのちの子ども
第 7 回 ラビット・ホール
第 8 回 サラの鍵
第 9 回 少年と自転車
第 10 回 オレンジと太陽
第 11 回 孤独なツバメたち
第 12 回 明日の空の向こうに
第 13 回 旅立ちの島唄
第 14 回 くちづけ
第 15 回 もうひとりの息子
第 16 回 メイジーの瞳
第 17 回 ファイ
第 18 回 思い出のマーニー
第 19 回 ショートターム
第 20 回 真夜中のゆりかご
第 21 回 きみはいい子
第 22 回 エール！

コミュニティと集団精神療法（４）

― デイサービスセンターで ―

藤 信子

Ａデイサービスセンターにクイズを持って訪問していることは、「コミュニティを探して（９）」に書いている。そこでは、デイサービスセンターを「居場所」としてのグループと考える時に、クイズを介して話し関係の作り方について考えた。この頃、訪問を始めた時と比べ、デイサービスセンターの利用者の変化を感じているので、そのことを考えてみたい。

このデイサービスセンターは、京都の町中にあり、以前は友禅などの絵を描いたり、染めの仕事や、着物関連のお店をしていた利用者が目立った。そんな中で話を聞くと、友禅染めの工程が、幾つにも分かれていることを知り、着物のお店が映画や TV の衣装を用意した話を聞き、京都の町中の産業に触れる思いがしたものだった。ところが最近、利用者の話を聞いていると、九州弁だったり、標準語だったりという人が増えてきたように感じる。クイズをしながら聞いた話では、子どもと同居、あるいは近くに住もうということで、京都に転居して来た方が増えてきているようである。住んでいたところは、九州だったり、関東だったり、また京都府下の町ということもある。この地域は、ここしばらくマンションが増えたが、利用者の方はそこに住んでいる方も多いようである。他所の土地から転居してきた人だけでなく、京都育ちの人も近所のマンションに住んでいると話されていた。

私が学生の頃は、堀川に水は流れていた記憶は無い。今のような親水公園ができたのは最近である。だから友禅染に堀川の水を使った頃というのを直接は知らないのだけれど、友禅染と堀川のことは知っていた。だからデイサービスセンターの人たちの話を聞いて、ここは友禅染の場所だったということを体験した思いだった。一緒に行っている大学院生は、そんなことは知らない。話をすると時代

が移っていくことを感じる。マンションが建っているところは、友禅染の家があったのだろうか。それはどこに行ったのだろう？京都の織物の工場が海外に出て行ったということを聞いたことがあるけれど、友禅染もそうなのだろうか。それとも、着物離れが進んでいるので、よほどの高級品でない限り、作っていないのだろうか。地域の産業の事にも拘わらず、何も知らないことに気が付いた。産業の変化の結果がマンションなのだろうと見ると、この町の 30-40 年ほどの間の急激な変化を感じる。

府下のB市から転居してきたというCさんは、一人になって畑をするのも大変になったし、子どもが一緒に住もうというので、市内に来たと言われた。以前親が亡くなって住む人が居なくなったので、家と土地を農地付きで売るという話を知り合いから聞いたのは、そのB市のことだったことを思い出した。若い人が仕事を求めて都会にでる以外にも、こうして地方の農村は人口が減っていくのかと思った。Cさんは穏やかで、「京都のクイズ」をわたした時に、「京都で暮らしていないから、よく知らない」と言われ、最近転居してきたことを話された。知らないと言われながらもクイズには参加し、答を聞いておられた。そして「漢字クイズ」では、解き方を理解すると答を探して考えて正答すると嬉しそうである。Dさんは関東で暮らしていたが、やはり子どもが京都に一緒に住もうというので、転居されてきた。「京都のことは知らないから・・」と言われるので、「私も知らないことが多いから、少し知るようになりましょうか」と言いながら、京都育ちのメンバーの話を聞きながら考えて回答される。この方も漢字クイズの方が得意である。

「京都のクイズ」は、京都の人に教えてもらおうということもあって、持って行くことにしたけれど、京都以外で生活してきた利用者が増えてきた時に、どうしようかと考えた。今のところ、CさんやDさんのように、京都には最近来たということから、自分のことを話されることもあるので、コミュニケーションツールとしては利用できると考えている。ご当地ものとして話題づくりになり、また他所から来た人には、自分の暮らす近所のことだということを知る機会になればと思っている。時には他のクイズも考えようかと思う時もあるけれど、なかなか替わるものが見つからない。

デイサービスで行うクイズから、京都の町、産業の変化に気が付いていった。京都の産業の問題だけでなく、高齢化社会、地方の人口減少などとも関連しているようなことが、この小さなグループから見えてくるようだ。そのような社会の変化やなども考えさせられるグループの中で、メンバーの話を少しずつでも聞きながら大事なことは何かを考えていきたい。

蟷螂の斧

第二部

トークライヴ2001

第七回

団　士郎

仕事場D･A･N／立命館大学大学院

よろしくない現象だ。書き下ろし原稿に気が入らない。特に新規に始めようとした「続・家族理解入門」の動機が高まらない。一方で回顧記述は活性する。老化だろうか。しかし、昔話がしたいわけではない。今のことを語りたい。でも今だけの情報を語るような上っ面話はしたくない。

昨今の世の出来事が、今初めて起きたことであることは少ない。大半はこれまでにあったことであり、未来にもきっと繰り返されることである。人間の営みとはそういうものだ。だから、日付のある昔を取り上げて、それと今日を重ねて考えてみたい。

何となく昔は良かったなんて話は信用しない。自分の人生(つまり過去)を美化していたいのは、年取った人間の常だろう。忘れてしまいたいことや、忘れてしまったことも沢山あって、語らずにいる内になかった事のように感じられる。そうやって穏やかな記憶に包まれた老後を迎えるのが、御身安全の加齢スタンダード、なんて流れにのりたくもない。

戦争に行った私の父は、野戦病院で麻酔なしで痔の手術をされた話を何度もした。敗戦後、帰国になるまでの間も食料調達はしなければならなかった中国中央部の街での、情けなかった話をおもしろおかしく語るのが好きだった。しかし、戦闘の話はしなかった。聞かなかったからなのか、私が聞けなかったのか、前線には出て行かなかったのか曖昧なままだ。

私の時代、徴兵されるような戦争はなかったが、それでもなにかはあった。それなりに頑張ってきた世代であることも否定される理由はない。でも、この期に及んで、自分の老後(今だってもう十分老後だよ！)不安ばかり語っているようだと、自己中のうんざり世代として一括りにされても仕方ないが、それは本意ではない。簡単に一括りになんかしてはいけない。何事もディテールだ。だからこんな記述形式に拘るのかもしれない。今回、書いていてそう思った。

赤字が2001年9月の日誌

（今から１５年前。私は５４歳だった。）

09/03　イスタンブールからの帰路機中。「ブリジッドジョーンズの日記」（字幕あり）、「恋する遺伝子」（英語のみ）をやっていたが、鑑賞できる態勢にない。朝10時過ぎに関西空港到着。はるかで帰宅。

専門学校の夏休みで帰省していたこと葉(娘)は、一人で無事留守番をしていた。今日、東京に戻るらしい。入れ違いである。

こんな風に書いていた一週間後、９．１１が起きることなど夢にも思っていない。私達の未来は、いつもこんな風に直前までなにも知らせてはくれない。

仕事場に10日ぶりに出る。メールの整理や旅行中に書いた原稿をパソコンに落とす。夕刻、幼なじみのAくんから電話。京都に来ているというので、久しぶりにあう。大手N社では出世頭の彼もリストラに怯えるという。役員寸前で年収1200万円の会社員。五十歳を過ぎて、サラリーマンはこの時代辛いモノだと思う。せいぜい自衛を。

こう書いたが、Aくんはこの後、鬱で五十代の中・後期をほぼ埋められてしまう。そのまま定年退職し、地域の住民(高齢者のヒーロー)として、役割を得て復活するのはずっと後のことである。この段階で何か、私に気づいてやれることがあったかもと思ってもみるが、思いつかない。長い音信不通の後、回復期に再会し、今後の話が出来たのは良かったと思うが、中学時代から知る彼の華々しい人生を考えると、この時期の持つ意味を考えざるを得ない。人は一色で自分の人生を塗りつぶすことはできないのだろう。そして、この時間が彼に何をもたらしたかも、簡単には決められない。人間万事塞翁が馬は誰の身の上にも起きる。

09/04　昼過ぎ、二時近くなって出勤。何となく雑用をしているうちに時が経つ。時差ボケとも思わないが、旅疲れ。「ヒトクセある心理臨床家の作り方」(金剛出版)の原稿の修正と加筆。

川畑隆君達が編集していた「児相の心理臨床」という自主制作雑誌に連載していた文章を、出版しましょうと声をかけてくれたのが金剛出版にいた石井みゆきさん。

本が出たのは2002年10月だから、まだ随分先の話だ。この頃に、私の研修自分史を本にして、巻頭にカラーヒトコマ心理漫画ギャラリーまで付けてくれた編集者に感謝である。今の出版状況ではとても出せないだろう。

09/05　旅疲れから、出勤が昼過ぎになってしまう。途上で、「木陰の物語」第十九話思いつき、ササッと仕上がってしまう。「ヒトクセ」のほうの家族療法の章、何度も読み直しておおかた完成。

躁状態のH君が企画したH市のプランは、案の定ダウンした。N市のMさんの企画と共に、今月は二つキャンセルになった。ヤナ感じもするが、この空いた時間に勉強しておこうかなんて。

家裁の7日のケースも取り下げになったとか。新件を頼まれかけたが断る。社会勉強の視点からは、調停の仕事も受けておくのがいいのだが、家裁の対応に少々うんざり気味なので。

家裁・調停委員仕事の文化と、自分のベースにある家族心理臨床文化とのギャップを常に感じていた。自分が役に立っていないとは思わないが、お役に立っても余り達成感がない。利用者・来談者があまり信頼できない。

現実なのだろうが、人間の悪くて弱くてずるい部分を引き出しやすい機関機能に違和感が拭えなかった。法とはそういうものなのか？

夕刻、F井君がSVにくる。就職活動は難しいようである。良い奴なのだが、人柄で採ってくれるほど世の中にゆとりがないのか。ケース進展は例によって未熟さと自信のなさが重なって結果を出せない悪循環である。

職業選択にそれぞれの人柄が作用しないはずがない。何を目指すかは、何になる能力が高いかよりも、その人個人の持つ欲望によるところが大きい。

ところが、どういう仕事が上手く出来るかと、人柄の間にはそれ程結びつきはない。むしろ、人柄で仕事をしてしまうと、危ないのではないかとさえ思う。

そういう意味で、彼は相談の仕事は向いていなかったのではないかと今振り返る。教員職に向いている人が、カウンセラーになりたがっているのを、一時期よく

眼にした。今はそんなことも減ったのではないかと思うが、どうだろう。

09/06　夜更かし朝寝のサイクルに、木曜日午前の相談室出勤が挟まると苦しい。眠い目を無理やりあけて出勤。にもかかわらずケースなし。一方、KISWECの土曜日は午後二件の新ケースが入ったという。

　ポータブルDVDプレイヤーが中途半端な修理状況ゆえ、再度修理に持ってゆく。全くこの夏は壊れと修理の繰り返しだった。そう考えると、旅行中の酷い下痢も、壊れと修復のパターンか。ドトールコーヒーで木陰の物語の下書き。

　夜更かし、朝遅めのサイクルは今に至るまで継続中である。午前三時前まで起きていて、朝は 9 時半まで眠る。幸せなことに、この間にトイレなどに目覚めることはない。ぐっすり6時間半は我が人生において、50歳での公務員退職以降の僥倖である。それまではずっと、慢性の睡眠不足、そして居眠りだった。

09/07　木陰の物語の来月号分、「解けるとき」をフィニッシュして発送。その後、大阪に。

まだ第19話である。現在（2016年1月）、第192話を描き上げたのだが、この時、連載192回なんて想像もできない。更に、「家族の練習問題」のタイトルで単行本が六巻も出る事も、連載雑誌が三誌もあることも想像すら出来ない。

　未来に何が起きるかなど、想像できない日常で、その時できることを重ねてきた今である事実に、あらためて思うことは多い。

09/08　kiswecの面接日。朝はSさんの10回目。もう1クール、今度は全家族面接にチャレンジしてみることにしたが、ストレスのかかる状況である。

　午後一件目は、K市家族勉強会に来ているＩさんの紹介ケース。歳の離れた娘の非行問題。しかしこのカップルには、結婚当初から凍り付いた恨みが母親にあったようだ。もっとも、今こうして来談しているということは、それはそれという扱いも出来るようになっているのでもあるが。しかし、長女、次女の命名について、二十数年も経って、妻が誤解していたことを知らされる夫も珍しいだろう。

　三件目はH君が担当。新書「不登校の解法」を読んでいる人だった。男児二人の退行と粗暴、甘え、身体病の頻発。なんだか夫の話に実態とのズレの予感。

　結局、①ケース目はあまり上手くいった感がなく終了した。現実には望んだ変化も起きていたから、投げ出したわけでも、ドロップされたのでもない。しかし家族心理臨床家としては、不満残しのままの終結だった。

　来談者の価値観に、私の我が抑えられなかったのかなぁとも思うが、先方の意地の張り具合が、事態を切り開いた力だったかもしれない。希な経験だった。

　KISWECの家族療法は、ドンドンと言うほどでもないが現在も相談を受けている場所である。決まったスケジュールの曜日に、受付の人がいれた予約に従って相談にのる。千葉くんがセラピストをして、私はバックで見ている。

　来談者の目的、目標に一歩近づく道筋を探すのが役目だと思うので、カウンセリングや家族療法に拘らない。再現性や普遍性など気にもしない。その人にとって有益ならばよい。そう考えると、来談者の前で私は自由だ。

先日受信したXさんのメールが気になっているので、旧知のKさんに転送する。その中味は

『前略　、新聞記事等マスコミ絡みで、個人の発言について神経をとがらせているのですが、現場の実情を知っていただきたく、個人的にメールを書きます。

わが県の＊＊対応は、中央児相の何人かの意見で突然決まってしまいました。当時の所長の持論は「児相は消防署だ」、「誤報でも現場に急行すべきである」というものでした。

しかし、消防署はそのときだけの仕事です。なにもかもやらなくてはならない状況にある、現場の多くの声はきいてもらえていません。知事がマスコミに発表してしまったから・・・・と言う理由と、今の中央児相でリーダー的な存在の意見が強く、後戻りできません。

なぜ初めからこんなに無理をするのでしょう・・・、この対応には、わたしのまわりは皆一様に反対しているのに。何故この対応なのか、いまだにわかりません。金曜日の夕方の通報のケースなど、誤報と推測されてもとにかく落ち度をあとで指摘されないようにと、調査する間もなくとんでいきます。本末転倒ではないかとみな思ってもどうしょうもありません。

この対応のために、どれだけの犠牲を強いられているでしょうか。職員は疲れきり、仲間には休職や退職に至った人が何人もいます。ケースにとってもかなり無理なやりかたになっています。泣き声ひとつでも、学校等集団で確認がとれない時には、全て訪問して，安否確認しています。児相管内人口＊＊万人、今年度3ヶ月で通告は120件をこえました。異常な状況でこのところ毎日のように緊急保護がでていて、騒然としています。職員は疲れきり、勉強したり、声をあげる元気もない状況です。本当に手をかけなくてはならないケースにどうしても手がまわりません。

限界を超えた、現実を考えないやりかただと思います。他県では真似をしないで下さい。むしろ、批判していただけるとありがたいです。

県に一番して欲しいことは、市町村や調査される側の理解と協力を求める施策です。突然の訪問は、する側もされるほうも極度に緊張します。泣き声ひとつで訪問される側は、踏み込まれたという意識になり、怒るのは当然です。

OのTさんがおしゃっていましたが、事前調査でセレクトしていく力量を持ち、本当に心配なケースに手厚くできることが、いま求められることではないかとおもいます。すべてをやろうとすることはとうてい無理なことです。でもあれもこれも、みなちゃんとやるように言われます。今は、火中の栗を拾うと怖いので、施設も関係機関もすぐに「児相に」と、ますますなってきました。周囲の理解のないところで、児相だけがやろうとしても限界があります。背負いすぎていると思います。事件があるたび、「やるべきこと」がどんどん増えて、何が重要なことかわからなくなってしまいました。警察のようだ・・とよく思います。又、反面ケースがどんどん心が通じなくなっていて、「福祉」でやっていることの限界も感じます。「犯罪」と位置付け、入り口できちんとした警察の対応を行い，その後福祉が援助していくやりかたのほうがいいのではないか・・と最近急に思うようになりました。当児相では「援助」のスタンスで対応困難な事例が多いように思えるからかもしれません。ながくなりました。すみません。

ほんの少し秋らしくなってきました。おいそがしそうですが、御身ご大切になさってください。

＊15年前、児童虐待問題は既に、熱心に現場で頑張っていた人が悲痛な声を上げていた。それから長い時間が経ったが、私達はこの時とさほど変化は起こせないまま、騒ぎだけが過剰化したと思う。

策を誤ったことは、改めなければならない。「過ちを改たむるに、憚る事なかれ」と知りつつ、今更動かせないなど、原発事故問題後の社会の言説と相似形ではないか。

私は、この問題が迷路に突入していくプロセスで、一貫して信用ならないと言ってきた。児童虐待が児童福祉の中核問題であるはずがない。（それは警察の仕事の中心は凶悪事件の解決だ！と言っているのに近い。そんな無茶な話があるものか）

それは今も変わらない。だが現実は、児相職員の個人的力量の問題にすり替えられたり、もっと専門性を等という、何にでも当てはまるようなフレーズで目くらましを繰り返しながら、実はそう発言している人自身

が信じていないという、最低の状況を続けている。

業界人がみんな知っていながら、まぁそれでも何とかなるだろうと思っている内に、こんなはずではない事態に至るのは、よく起きるパターンである。

最近あった地盤補強のくい打ち作業不正が明るみに出たとき、部内者はみんな、知っていたことだったから、業界内に驚きが走ったりはしなかったという。驚いたのは、「本当に建物が傾くんだ！」という点だったらしい。

笑い話ではない。専門家業界はこのように構成されがちなものである。だから用心が必要で、起きた事実に則した検証が必要なのだ。

児童虐待で今、検証されなければならないのは、何故こんなに長期に渡って、このテーマが語り続けられなければならないのかということである。

09/09　朝、長男に典子が旅行の話を大声でしているのを聞きながらうつらうつら。昨日、夜中に遊がやって来た。明後日から一週間韓国に出張だそうだ。あいつは二度目のソウルだが、今回は韓国に事務所開設の計画検分のためだとか。

図書館に寄って、イスタンブール絡みの本二冊他を借りる。仕事場に出てきてまたまた原稿校正。夜、ビデオを久しぶりに借りてきて観たがたいしたことがない。「悪いことしましょ」、リメイク物のコメディだがつまらなかった。「ダーク・エンジェル（3）ザック」はだんだんシリーズモノの出来になってきている。

09/10　「パイロットの妻」アニータ・シュリーヴ著・新潮クレストブックス読了。最後になってIRAが出てきてしまうのが、唐突感いなめない。アメリカでベストセラーになったそうだが・・・。三日ほどで350頁以上を読んだのだから面白くなかったわけではないが・・・。

KBS京都テレビから出演依頼のFAX。日曜の夜で空いているのでOK。学校の安全という話題らしい。

Oくんの修士論文の下書きを読んで、感心する。良く書けていて、良く理解できている。これが実践できればいいのだが。4時半過ぎ、大学院の同僚、中村さんと村本さんが仕事場来訪。後期のクラスターの進め方をうち合わせ二時間ほど。

この春から立命館大学大学院応用人間科学研究科で働き出していた。大学院勤務は初めてだし、要領が分からないことも多いが、中村さんが用意してくれた特別契約教授というのは、本当に私向きのポジションだった。間もなく15年を終えるが、まだしばらくは在職のつもりだから合っていたのだろう。

夜中、ビデオ「バーティカル・リミット」、期待していなかったせいもあるかもしれないが、なかなか面白い話だった。かねがねヒマラヤ登山が観光化している話は聞いていた。それでも登山家は禁欲的に生きるイメージがあった。だがこのベースキャンプの描き方を観ると、「空へ」の作家のエベレスト事件も、そうなのか・・・とあらためて納得させられる。

15 年前のこんなところに、最近見た映画「エベレスト3D」で扱われた商業登山のことが登場している。ジョン・クラカワー著の「空へ」は、凄い本だった。そしてそれを映画化し、IMAXシアターで上映にこぎ着けている人々にも感動だ。

1996年、不幸な山岳事故は起きた。それを忠実に再現した「エベレスト3D」は私にとって、とても印象深い作品になった。作品としてより、この事実と背景に、私がもった関心の深さが大きいのだが。

09/11　澁澤幸子著「イスタンブールから船に乗って」が面白い。夕刻からぼむの集会で大阪に。その前に、梅田シネリーヴルで「イルマーレ」を観る。韓国の不思

議な雰囲気の恋愛映画。岩井俊二だなぁと思う。「ぼむ」は相変わらずのオヤジ話。

終了後、Sに「妻を大学に通わせる」というアイデアを話す。実現できればいいのだが、彼にそれが出来るかどうか。システム論の理屈が分かることと、変化できることのギャップがどこにもあるからな。

帰宅してTVを観て驚く。NY同時多発爆弾テロである。映画顔負けのアイデアと実行力。シュワルツェネッガーがなぜ出てこないのだと勘違いしそうな映像。

どれくらいの人が亡くなったのか。これが21世紀のターニングポイントになったりしなければいいが。

実際、9．11はその後の世界への転換点になった。あの後、様々なことがあったが、一貫しているのは争いへの流れだ。押さえつけていた側の力が相対化され、抑えられてきた者達のエネルギーが増大し、無秩序に吹き出した。

民主革命的だとラベリングされた変化さえ、持続する安定は作り出せなかった。だからといって抑圧された平穏を了承するわけにもいかない。結局、世界は武力と経済のパワーゲームの果てに疲弊しきって和平を目指し、エネルギーが充ちると又、金と武力の世界に逆戻りする繰り返しなのか。

クールな見方をすれば歴史上、そうではなかった時代を形成できたことはないと言うべきなのか。

09/12　朝は相談室に予約が二件。カウンセリングになっているかどうかは分からないが、何かが動くようにやりとりしている。一件目は鬱病の夫を抱えた妻。二件目は一年前、家を出されたと訴えてきた父親が、今度は高校1年の娘の不登校だと訴えている。問題作りの上手い、整理の下手な典型のような人。一緒に仕事している人も大変だろう。

午後は大阪・上本町の都ホテルで、更生保護学会という集まりで15：50から1時間十分話す。私の前は、またまた川上範夫さん。氏を前座にするのは二度目である。そのあと、ムジカのレストランで会食。講演は久しぶりだったがキラク快調でよし！

珍しく雑誌「臨床心理学」など読んでいる。まぁまぁ面白い。「イスタンブールからバスに乗って」読了。またトルコに行きたくなった。

今、自分がある姿の実感と比べると、世の中での自分の立ち位置について、あれこれ考えていたような気がする。だが、それにも何処か空々しいところもあって、結局何処かの内部の重要人物になったことがない。

権力を与えられたことがなく、個人的見解以外の表明をあまりしたことがないなぁと振り返って、立場上の責任を持ったことがないのだと思いあたった。

09/14-15-16　今日から三日間、原家族に焦点を当てたWS．開始。Mさん、Oさん、Kさん、Wさん、Nさんの5人参加。少ないかなぁと思ったが、実際はたっぷりの時間が有益な三日間だった。それぞれの原家族のこと、記憶に残りそうだ。

終了後、H君の車で四条河原町まで出て、MARUZENに。本を二冊、ご苦労さん購入である。同朋舎発行「望遠郷シリーズ・イスタンブール」が前から感じてはいたが、手間ヒマかかった都市ガイドブックであることをあらためて認識。これは写真と情報で埋められた一冊とは訳が違う。都市の教科書のようである。図録がいっぱいなことに、コストや手間のことを思って感動する。

ギャラをいただいた後、こうして本を買って、コーヒーを飲みながらぱらぱら眺めているのはいい気分だ。

仕事場に戻ると児相研MLに川崎君の一週間がアップされている。本を読むひまもなく働いている彼が、ご苦労さんで気の毒。

ここで書いた丸善は閉店した。そして2015年 BALビルの地下でMARUZENは営業再開した。何だか嬉しかった。マニアックな出版社、同朋舎もたしか倒産した。変わらずにあり続けるものなど何もない。そんな時代だからこそ、有限であることは承知で、変わらず在り続けるものを目指したい。

09/17　月曜日、敬老の日ということで両親を比良山麓のブルーベリーの郷レストラン「紀伊国屋」へ典子の運転で。母があまり元気なかったが、父もとても喜んでくれて、親孝行気分になれた。

夕刻、仕事場へ。途上、「アラビアのロレンス」のDVD購入。待望の一枚で、仕上げが丁寧。なかなかいい感じのパッケージものに仕上げられている。後は本体が修理されてくるのを待つばかり。

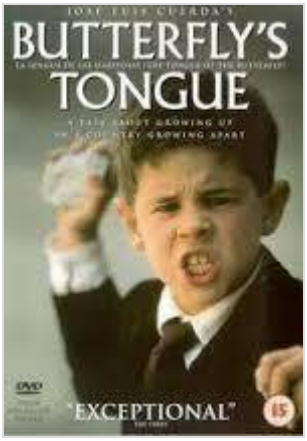
もう DVD を購入することはほとんどなくなった。ブルーレイになったし、wowowやfulu、tsutayaディスカスでカバーできる。十五年でこんなに変化してしまうのだ。

09/18　朝日新聞の児童虐待特集記事に、少し児相の現状に対する同情や共感の含まれた書き方を感じる。そういう流れにシフトし始めたのだろうか。12時30分から朝日シネマで「蝶の舌」を観る。いい映画だった。観ていてスムーズなこと限りなく、なぜこんなにサラサラ世界に飛び込んでゆけるのか不思議な気がした。タイトルバックのモノクロ写真からファーストシーンへの導入といい、幕切れといい過不足ない。そして厳しい映画でもある。母の強さが随所に感じられて家族を思った。

今年度収益見込みを上方修正したという吉野屋の牛丼でお昼。今までと違った年輩の客が店にいる。客層の拡大が起きているのだろう。

メーリングリストにテロ事件のその後が見え始める。時代が動いたと指摘する声の多いのに不安が募る。どうもおかしいなぁと思っているうちに、人間は変な勇ましさで戦争に突入していったのではなかったか。今、パキスタン政府要人は、苦渋の選択を迫られている。どちらにしても市民が戦争の渦中に引きずり込まれるのか。

映画「蝶の舌」はフランコ独裁の始まる夜明け前、家族を護ろうとする母は、裏切りや嘘を辞さない。今がそんな時代ではないと、誰が言い切れるのか。夜中、TVで映画をやっているので見ていたらなんとスペイン映画「ベルエポック」。昼間観た映画の先生役が出演している。ハリウッドに行ったペネロペ・クルスもでていて、なかなかいい味の作品。スペインのおおらかさあふれる物語。



日常的に歴史や社会の教科書を読むことはない。ところが映画を観ていると、突然、その時代の社会背景に引きずり込まれる。ナチ占領下のパリのレジスタンスだったり、ワルシャワのゲットーだったり。そこにある思いがけなさが、私が今いる場所のことを教えてくれる。

09/19　午後一番は家裁で虐待親の親権変更問題。二十八条問題とこっちの調停は関係ないのだが、大いに重なっている。子どもの様子が変わっているし、親の様子も変わっているが、母親の申し立てはそのままゆえ、裁判官と協議の上、調停不成立で審判に移行となる。

四時に出て京阪電車で門真市へ。門真教師勉強会第二クールの最終回。そこそこの人数で、家族造形法を試しながらのY川さん提出のケース検討。さて第三クールが実現できるものかどうか？

門真市、茨木市、八日市市(元東近江市)などでそこそこの期間継続開催していた勉強会は中断した。物事

の継続は本当に難しい。続く秘訣、続かない理由、そういう事にも関心がある。

09/20　木曜日、朝は相談室二件。新ケースは職場の人間関係。専門職の悩みというのはどのジャンルも類似している。午後、いつものhandsにカットに行く。京都の名門フランス料理店「万養軒」が閉店になったと聞いて驚く。時代の波は変化しないことを許さない。

寺町のパソコンショップへ。決心して店員の薦めで東芝リブレットを購入。これで使えるようになるのかどうか・・・。借りていたビデオ「シャフト」は以前に観たものだった。気づかないで又借りてしまった。悔しい老化現象。でも、見始めてすぐ分かったのではあるけれど。

東芝リブレットのこと、ほとんど記憶になかった。「シャフト」など全く心当たりもない。「万養軒」は子どもの頃、京都の親戚の法事の後に何度か行ったことのある老舗高級店だ。

ここぞとばかり大ぶりのエビフライを頼むのだが、たいてい帰路のカーブの多い京津線車内で吐いた。

記憶にあるもの、ないものの区別を見ると、老化は否めない。

09/21　朝一番、携帯電話に沖縄からの講演依頼。Sさんと大学教員の三人トークになるらしい。とんぼ返りの日程になるが引き受ける。

典子の眼鏡を作りに新京極の眼鏡研究社に。作ってもらっている間に、昨日頼んであったノートパソコンの受け取りに。その後、La・masaで一緒に昼食。仕事場に来てトーク2001用の月刊通信を作成。

用紙を折ってカットして、トルコ土産の栞を挟む。京都市内で子育て支援事業を展開しているところから、講師依頼。連続講座というので考えてみることにする。

絶好調に活動中の頃である。求められることがあれば動いている。まぁできる間だからね。最近は新規のお座敷がとんとなくなった。継続プログラムで日程の大半が埋まってしまうせいもあるが、社会資源の人材として、もう新鮮味もないから。でも一方で、本人は飽きてしまった頃から売れるって話もあって。こういうことはわからない。

La　masaは寺町二条のビルの奥まったところ、一階にあるスペイン料理店(仕事場DANと背中合わせのビル)。開店時からランチに足繁く通っていた。今では近隣に他にも三店舗ある店に発展。スタート時点から見ていて、ずっと利用している常連店だ。写真はそこのイカスミのパエリア(私がこの食べ物と馴染みになったのは、30年以上前のスペイン旅行の時。そこでは、パエージャと言っていた。だからパエリヤは何とも語感が悪い。それはセビリヤではなく、現地ではセビージャというのと同じ)。

夕刻からのトーク2001は快調な話になったと思う。第二部の話が思ったより短くなったのが誤算。前半の言い残し話をして、9時まで。

深夜に反省もこめて寝床でテープを聴いてみたが、あっという間に一時間たった。自分のことだからそうなのかもしれないが、聞いてくれる人にも、あっという間の一時間であればいいと思う。オープニングで「遠い雷鳴」の話をした。どこまでピントがあっていたかはわからないが、そんな気分の今日この頃だ。

月に一度の講演会(トークライヴ)を自主開催した目的の一つに、落語家さんの継続自主公演のイメージがあった。依頼される講演ばかり引き受けていると、同じ話をして欲しいという流れが出来やすい。要望があるし、準備も簡単だし、話すほどにこなれてくるから良いのだが、自分がマンネリする。

新しいテーマの話は手間がかかって、達成感、成功率は落ちる。しかし毎月、継続して自主講演会を企画すると、否応なしに新ネタで登壇しなければならなくな

る。ここに生じるノルマ感が自分を鍛えるだろうと思ったのだ。

09/22　昨夜眠り損ねたので、結局午前11時に起床。雑誌数冊を購入して仕事場に。昨日受け取ってきたノートパソコン、Libretto を起動し始める。基本的なセットアップは有料で頼んでおいたので、持ち帰って古い一太郎7のソフトをインストール。とりあえず動き始めるが、一太郎10をまたインストールせねば。日曜日だと思うとなんだか効率の悪い過ごし方をしてしまう。金剛の原稿を郵送。

明日からの産業社会学部での新しい授業「人間コミュニケーション論・実習」のプランを練る。夕方、眠くて二時間昼寝。リズムが乱れている。そのため夜は午前三時半過ぎまで起きていた。

そうか、2001年のこの時から「人間コミュニケーション論」の授業は始めたのか。今年で15年にもなっていたのか。この時始めた基本コンセプトのまま、15年が過ぎた。そしてますます、この形の必要性、必然性が高まっているように思う。同時に、個々にコミュニケーション上の課題を抱えた人が多い印象の時代になってきている。特に男子が目につくのだが、それは受講生の男女比率からも言えそうな気がする。スタートした2001 年、受講はほとんどが女子学生だった印象がある。男子学生が皆無と言うことはなかったが二割未満だった。それが 15 年目の今年、徐々に変化していた受講生の男女比率が逆転した。今、4 対 6 で男子が多い。

09/23　日曜日、アフガニスタンへの対応で田原総一郎番組は騒いでいる。辻本清美一人が女性であり、平和論者として孤軍奮闘している。勇ましい人が闊歩し始める度に、山田太一のドラマを思う。勇ましい人がもてる時代はいい時代ではない。

そして、トルコの軍事博物館でみたように、軍服はその時代に一番豪華にあつらえられていることを思う。男は軍服のようなかっこいい制服が好きなのだろう。

直ぐに異変が起きたわけではない。しかしあの頃の日本社会において、軍隊のこと、徴兵の事等を口走れば、次の選挙では間違いなく落選しただろう。

いま、そうではない空気が蔓延している。その分、心情左翼的言説は抑圧される。右傾化と言われることが起きていると思う。それは決して政治家がそうなのではなく、国民の作りだす空気の反映だ。

夜は「学校の安全」というテーマでKBS京都テレビの番組に出る。発言について思案中である。ノートワープロを使い始めると、移動中の記述量が増える。

＊自分の安全は自分で守る。
＊予防にまず必要なのは個々人の想像力。
＊多くのものは、ミスや被害をゼロにはできない。
＊コストが必ず関係してくるから、対策費は議論になってしまう。
＊過保護は途中でやめられない。いまさら・・・
＊景気や世論に左右されないのは、個人の自己防衛。

2001 年 9 月の日誌は何故かここで途切れている。理由に全く覚えがない。ただ、この時のTV出演は全く愉快じゃないものだった。

登場した他の人たちの話の中身も態度も、うんざりするような時代迎合で、文字通りのマスコミ文化人。愚にもつかない持論の展開に、押し黙って過ごしていた。しかしTVだからその姿は映っていて後日、「団さん、不機嫌そうに座ってましたねー」と何人もの人に言われた。黙っていたらいいか・・・と思ったのは間違いだった。

学校臨床の新展開

― ㉓居場所なき子らの生活保障 ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

高校中退

「おれもう、学校やめて働きたい。」

「学校をやめるんやったら施設を出ていかないといけないで。もといた家にも帰るのも難しいし・・・となると住込みの仕事を探さないと・・・」

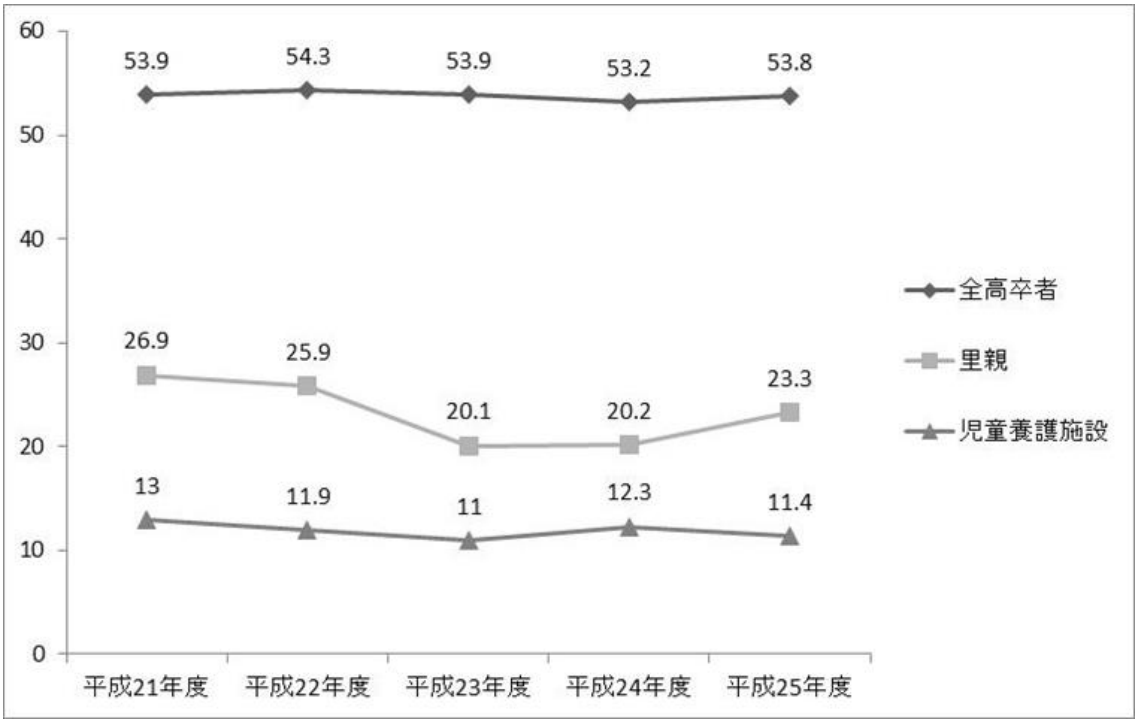
「やっぱり、高校を中退してしまうと、施設にはもうおれないんでしょう？」

彼が「高校中退＝施設退所」となることを何とか避けられないか、そのために何とか学業を継続していけないかと悩む担任の先生。しかし、欠席超過、単位不足により留年決定。本人は「もう学校をやめる。働く」と言い出す。そんななかでの住込み就労先探し。

こんなことは各地の児童養護施設でよくみられることでした。いや現在進行形だよという声も聞きます。

文部科学省の調査(2015)によりますと、公私を合わせた世の中の全高校生平均の中退率は1.5%。このうちのどれくらいの人がが、家を追い出されるのでしょうか。多くは、定時制や通信制など多様な進学先のなかから新たな進路を選び、在宅で生活するのではないでしょうか。一方、全国児童養護施設協議会の調査（2015）では中卒後、高校へ進学した者のうち､半年後には3.5%、1年6か月後には8.9%が中退しています。このうちのどれくらいの人が、施設に残ることができるでしょうか。積極的な展望があっての中退ではなく、仕方なく、社会的自立を強いられる状況では、たとえ仕事に就いたとしても継続は非常に困難です。

厚生労働省（2011）は、「児童養護施設等



（図：「大学等への進学率の比較（値はすべて%）」厚生労働省（2015 年 11 月）「社会的養護の現状について」をもとに筆者作成）

及び里親等の措置延長等について」のなかで、「中学校卒業後就職する児童や高等学校等を中途退学し就職する児童については、卒業や就職を理由として安易に措置解除することなく、継続的な養育を行う必要性の有無により判断すること。」と通知しています。しかし、この実質的運用は、施設によって大きな差が生じているのが現状です。そこで国は 2015 年 3 月、全国児童福祉主管課長会議のなかで、再度、「自立生活に必要な力を身につけていない状態で措置解除することのないよう 18 歳以上の措置延長を積極的に活用することや、中学校卒業後就職する児童や高等学校等を中途退学する児童について、卒業や就職を理由として安易に措置解除することなく、継続的な養育を行う必要性の有無により判断することなどをお示ししているところであり、各都道府県市においては、子どもの状況を踏まえた措置延長等の適切な実施をお願いする。」と訴えています。

いま、社会全体をみると全高卒者の大学等への進学率は 50%を超えています。さらに専修学校を合わせた進学率は約 77%で、約 8 割が進学をしていることになります。一方、全高卒者のうち就職する者は 16～17%ほどでしかいません。しかし、児童養護施設を退所する者のなかで大学等へ進学する者は 1 割程度と非常に少ないのです。そして、またこの数字も施設によって大きく異なります。ある施設では毎年大学へ行っている者がおり、ある施設では大学へ行く者はずっといないなど。

出生後の養育環境が不適切であったため

に施設入所に至った彼らが保護された先によってまたその養育環境や進路保障に差が生じてはいけませんね。

18 歳選挙権を得る

このような状況のなか、国では昨年末から今年にかけて、児童養護施設等、社会的養護の下で暮らす子どもたちへの施策内容を見直す動きが活発になっています。18 歳が選挙権を得るようになるとこんなにも変わってくるのかと思えます。

厚生労働省の審議会では、児童養護施設の対象年齢要件を最大 22 歳までにしようという方向で議論が進んでいます。

また、内閣府「子どもの貧困対策会議」まとめでは、施設退所後の子どもたちに「家賃相当額や生活費の貸付を行うことで安定した生活基盤を築くための自立支援資金貸付事業を創設」し、入所中に自動車運転免許等取得のため上限 25 万円を貸付し、2 年間の就業継続で返還免除とすること。就職をする者については、生活保護基準での当該住居地の住宅扶助額を上限に家賃相当額を 2 年間貸付し、5 年間の就業継続で返還免除とすること。進学する者については、就職する者と同様の家賃相当額に加え、月額 5 万円の生活費を大学の場合は 4 年間貸付、卒後 5 年間の就業継続で返還免除とすること、という案が提言されています。

制度やシステムが変わっても、それを支える職員体制も連動して変革していかなければ、実際の運用面ではこれまでどおりとなってしまう可能性が高いのではと危惧します。

また、社会から施設の子どもはかえって恵まれすぎているという批判もいっぱい出てくるでしょう。何よりも、内部から出てくるのではとも思います。

そのあたりは、次回に。

Ⅳ. キャリア再考への序章

学びの森の住人たち（19）

－学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの－

アウラ学びの森　**北村真也**

2. 認知的個性
――*Cognitive Individuality*

〈認知的個性〉*Cognitive Individuality* というコトバがあります。これは、個人の認知というものは、もともと多様であるし、また、さまざまな環境との関係性において個人の認知は変化し、ますますその多様性を構成していくという考え方です。さらにここでは、個人の発達そのものも個性であると考え、定型的な発達概念の意義さえそこに疑問を投げかけるのです。また、この〈認知的個性〉という考え方をベースにおいた個性化教育や才能教育、あるいは発達障害を抱える子どもたちへの支援教育などの教育的実践も展開されていきます。

これらの実践は、モノローグで単層的な学校教育の中にあって、より多様な実情に対応すべき試みとして注目されますが、あくまでそれは補助的な実践であり、決して学校における教育活動の主流とはなり得ないように思います。学校はあくまで近代モデルとして機能していくからです。それに対して、私たちは不登校の子どもたちを、学びの森という多層的な構造を持つ環境で迎えます。そこは森ですから、もともと雑多なものが共存する世界なのです。雑多であるからこそ、そこは新しい価値を生み、新しい命を育んでいくのです。

不登校という状況の中で苦しみ傷ついた子どもたちは、アウラの森の環境に、あるいは教師や仲間たちによって、癒されていきます。森は多層的な世界であるだけに、一つの層で癒されなくても、どこかの層で癒されることが可能なのです。またアウラの森における学びの世界は、教師主体ではなく学習者主体の世界です。みんなが同じカリキュラムを一斉に学ぶのではなく、一人一人が個別のカリキュラムを、個別のペースで学ぶのです。アウラの森では、環境、そして教師や仲間たち、さらには学習方法までもがこの認知的個性を満たす状況を提供しているのです。

やがて、その傷を癒された子どもたちは、自分の学びの活動を足掛かりとしながら、自信を獲得し始めます。ここでは自律的な学びであることが、より大きな自信となって子どもたちへ回帰していくことにつながります。アッコにしても、サトルにしても、ヒロシにしても、彼らが自分自身の過去を再構築していく足掛かりは、学びの世界にあったのです。毎日毎日、地道に積み重ねられる彼らの学びの世界が、やがてしっかりとした足場となるのです。それは啓発的なワークショップ形式の学びの取り組みと

は大きく一線を介します。地道な日々の積み重ねは、コトバを超えた世界を作り出すからです。サトルやヒロシは、自分で学び終えたプリントが 1 メートルもの高さになるまでに、果たしてどれほど自分自身と向きあってきたのでしょうか？　ここにこそ、彼らの強さが育つわけです。それは、溢れる情報のもとで、コトバの世界に翻弄されていく若者たちの認知のパターンとは大きく異なる点かもしれません。

自律的な学びは、子どもたちの個別の理解度に応じて組み立てられます。多くの場合、不登校の子どもたちの学力は、大変不安定な状況にあります。中学 3 年だったサトルは中1から､中学2年だったヒロシは、小 3 の内容からの学び直しをおこないました。このように、多様な理解状況を持つ子どもたちを前にした時、自律的な学びと個別のカリキュラムはセットで成立します。

個別のカリキュラムが、なかなか今の学校で成立しないのは､「管理」の問題がそこにあるからだと思います｡「個別化の名のもとにみんながバラバラのことをやり始めたら、収拾がつかなくなる」という不安があるのです。一方、アウラの森では、複数の学年の子どもたちが、複数の教科を同時に学びます。しかも、クラシック音楽が流れるたいへん静かな環境の中で学習が営まれます。このような多様な状況が、混乱をせずに成立するのは、彼らが自律的な学びを展開しているからだといえます。子どもたちは、常に自分の課題に向き合うのです。具体的に学んでいる対象は違いますが、自律的な学びを展開しているという点では、同じことを行っているわけです。そしてさらに、そんな彼らを森という環境が包み込んでいるのです。私はここに、認知的個性を尊重する学びの世界を成立させる構造があるように思います。

不登校の子どもたちの多様性を、認知的個性という概念で捉えなおした時、その学びの場は、自ずと一斉型の学校とは異なったものとなっていきます。冒頭で紹介したように、それは個性化教育、才能教育、あるいは支援教育といった枠組みで様々な実践が報告されているのですが、私たちは、それを「学びの森」という枠組み全体で受け止めようとしてきました。子どもたちの多様性を受容するためには、方法論やカリキュラムだけでは不十分だと考えたからです。そこには、大きな木や、クラシック音楽、水槽に泳ぐ熱帯魚などの物理的な環境要素と教師や仲間といった人的な環境要素からなる複合的な〈環境世界〉というというファンクションが必ず必要となっていくことを予見していたのです。具体的な学びの方法論や構造を、森という環境世界の中に落とし込み、その整合性を構築していったときにこそ、そこに多層的な厚みを持った場が広がることを私たちは証明してきたのです。

『幼稚園の現場から』
24・お話あそび会（その１）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

●発表会の意味

ほとんどの幼稚園・保育園・こども園では、年間を通じていろいろな形で教育・保育の成果を保護者の皆さんに伝えています。運動会、作品展、音楽会、そして２学期後半から３学期にかけ、一年間の教育・保育の集大成として「生活発表会、おゆうぎ会」などの名称で実施されています。
今回はこの手の発表会について考えていきます。※文中では「生活発表会」と表します。

［写真はお話あそび会の様子：本文とは関係ありません］

幼稚園や保育園にとって「生活発表会」は、教育・保育の成果を伝えるという意味を持ちながら、園の広報的側面も強い性格のものだと考えます。
子ども一人一人の出番を作り、歌や合奏、お遊戯、演劇などを披露し、招いた家族に我が子やクラスメイトがしっかりやっている姿を披露し、努力の成果を感じてもらって「この園に入れて良かった！」という実感とともに評価を高めてもらう。それは私立幼稚園の宿命である**経営上の大事な開催目的**でもあるのです。

そんな大切な行事ですから**「少しでも良い発表にしたい！」**という思いは誰しもあるのですが、その気持ちが強すぎると「見栄え・出来映え」が優先されて、本来子どもが主役なのに子ども自身が楽しくなかったり、活動への意欲が沸かない状態になってしまう。だけどやらなくちゃいけないというジレンマの中で保育者も葛藤をする。こんな困った問題が生じてきます。

後半で書きますが、私が自分の園の生活発表会を見直した理由は、練習時間の膨大さのわりに当日が過ぎたらもう興味がなくなってしまう活動の浅さ。そして表現活動としての意味が見いだせなかったことです。
どこの園もそうだとは思いませんが、類似した行事が日本全国で行われているとしたら、同じような問題も抱えているのではないかと思うのです。

まずは、生活発表会という行事をとりまく構造について考えてみました。

▶伝統の中で見落としがち

私の園も25年前には、生活発表会という行事を行っておりました。自分は当初から関わったわけではなく、30数年続く園の歴史の中で**「この時期に、この行事を行います」**ということと、**「どうやるか」**だけは伝えられましたが、この行事を通して子どもの何を育てるのか、ということは聞きませんでした。
最初にこの行事の計画を考えた保育者たちは、教育的目的もしっかり押さえていたと思うのですが、長年続けていくうちにそれが霞んできて、年々入れ替わる新規職員に、大切な目的が伝えきれていないという現実もあるのではないかと思います。

「発表会の形骸化」という問題です。

▶気づきにくい構造

各園で伝統的に続いてきた、ということはその活動を経験した人がたくさんいるということです。家族はもちろん、保育者も、園長も。

この活動をいちばん喜んでくれる祖父母の皆さんは、自分の娘、息子とダブらせて孫の活躍を見る。父母も自分の経験と照らし合わせて我が子の頑張りを見る。保育者も自分が指導されたように指導をしていく。皆で懐かしさという合意形成がされているところに、疑問を挟む余地はなかなかありません。「これはやるもんだ」という前提となってしまっている構造があります。

▶教育的意義

教育的意義という言葉は、園内という狭い枠の中ではリーダーの理念もしくは信念によって、いかようにも正論付けられるきらいがあります。

すこし話が逸れますが、運動会で伝統として鼓笛隊を発表している保育園の話です。10月開催の運動会に向けて日々の練習に力が入っていたそうです。単調な練習が続くので、ある子どもが嫌になり家に帰って親に訴えました。そこでお母さんが練習の様子を見に園に行くと、炎天下での練習が長引いており、驚いた母親は･･･言い方はその通りかわかりませんが園長が言うには、「ウチの子を殺す気か」と訴えたそうです。この話は、私ども園長同士の雑談の中で話されたものですが、「そりゃ、やり過ぎたんじゃないの？」と思う私に相手の口から出た言葉は予想外のものでした。

「あの親はわかっていない」「素晴らしい活動を達成することこそ、子どもの成長につながるのに」と主任と意気投合したというのです。まったく最近の親は甘いと当然のように仰いました。

炎天下での長時間の練習はさすがにマズイでしょうけど、親が意を決して苦情を述べるほどの事柄をそんなに簡単にスルーして良いのか？と驚くとともに、その信念に裏打ちされた実績と伝統があるのだろうと思わされたのです。

たとえ練習を嫌がったとしてもやらせる意義はあるのだ！乗り越えた先に喜びがあるのだ！それがわかるときが来る！と確信を持って取り組んでいる園は意外と多いのかもしれません。

水を差すようで申し訳ないのですが、私は生活訓練やマナーを身につける活動での我慢を強いることや、好き嫌いにかかわらず取り組ませることが必要な場面はあると思いますが、表現活動にそれが必要でしょうか？と考えています。

ちなみに、私たちが教育活動の基にしている「幼稚園教育要領」に書かれてある「表現」のねらいと内容には、

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

（1）いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。

（2）感じた考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

（3）生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

とあり、内容解説の本文中にも、自由、自分なりに、親しむ、遊ぶ、創造する、楽しむという言葉が多く使われています。

具体的にどんな活動をしなさいとは書かれていません。そこが各園の創意工夫、私学の独自性を発揮するところですが、教育要領のねらいどおり、**子どもたちは、創意工夫し、自分なりの表現を楽しんでいるでしょうか？**疑問が残るところです。

私の園も、以前はまさにそのような環境の中でやってきておりました。いつの間にか優先順位が逆転してしまった発表会に疑問を感じながらも、「そもそも子どもにとって･･･」という根本にメスを入れられずに日々は流れていくのです。

▶結果オーライが隠れた問題を帳消し

生活発表会だけではなく、園の活動の本流が園長や理事長、主任などのリーダーの考えによって決定されるのが一般的です。

そして、たとえ子ども不在の活動が展開されていたとしても、結果はオーライになるはずなのです。なぜなら、まず当事者である子どもは、その方針の是非について意見を言えるわけでもなく、「つまんない」と言って逃げ出したり、他の子どもにちょっかいを出して叱られたりする程度の抵抗をするだけです。

では、鼓笛の練習に抗議したお母さんのように保護者はしっかり見ているでしょうか？たいていの保護者は、発表までの練習をつぶさに見ることはかなわないと思います。本番でどんなに素晴らしい演技が披露されるか楽しみに待つのです。もし家で子どもが不満を漏らしたとしても、園での状況は想像するしかなく、たいていのお母さんはみんなと一緒に行動することを望むでしょう。**「そんなこといわないでがんばりなさい、お母さん楽しみにしているから」**という声をかけてくれるでしょう。

そう言われた子どもは、頑張ろうと思って練習に取り組みます。

周りの大人がみんなそういう雰囲気でアプローチしますと子どもはとても柔軟にそれらを受け入れ、指導者の望んでいる一定の成果をあげ、子どもたちも何かしらを身につけることができるのです。結果はオーライ！来年も同じようにやろう！

犠牲にしたものは何だったのか？

結果オーライならいいじゃないか！

▶現場での葛藤

どのような方針にしろ、発表会というものは期日と内容が決まっており、そこに向けて練習し完成させるということは避けて通れません。そんな状況の中現場の保育者は「完成度」を見ないわけにはいけません。本番が近くなるにつれ受け持つ子どもたちへの指導・練習量が多くなり、得意な子どもは嬉々として取り組む反面苦手な子どもたちの本音を聞いてあげられず、子どもたちの笑顔が少しずつ消えていったり、ノルマを感じてきたりしたときに、**「このことってどんな意味があるんだろう？」**という根本的な疑問が頭をふとよぎるのです。

しかし、そんなところで立ち止まっている余裕は職員にはありません。その園に採用され、その園のやり方を先輩から教わり、「前回よりも良い結果を！レベルを落とすわけにはいかない！」という意識が高いほど、まずは失敗しないように、そして自分もクラスの子どもたちもより良い評価を得るために「あそこまで頑張ろう！乗り越えよう！」という意識が働くのが普通ですし、社会的義務でもあります。

それさえ乗り越えれば、結果オーライ！

頑張ったぶんだけ達成感や成就感！「よかったよ！素晴らしい！」という評価が待っているのです･･･あくまでも“大人サイド”のものでありますが、その密は甘く先生冥利に尽きるものですらあります。

▶個人の力量とマッチング

園で行われる教育・保育活動の全てに保育者個人としての力量が問われることは言うまでもありません。実力が十分ではない保育者は、ベテラン保育者と同じ教育効果を得るにも時間がかかったり、子どもたちの変化に気がつかなかったり、意欲を盛り上げる言葉掛けが不十分だったりという現実問題はありますので、同じ活動をしていてもあるクラスはイキイキとやっており、あるクラスは嫌々やっている、というような場合は力量差が大きいと見て取れます。

我が園の方針を見つめ直すことを提案する前に、与えられた方針でどれだけのことがやれるか、まず努力してやってみるところから始めるのが普通だと思いますが、次第にその園で必要とされるスキルが上がっていくと、最初に感じたことが何だったか感じなくなってくることもあるでしょう。それゆえ、この手の行事にはメスが入りにくいと考えます。

もし、子どもたちを追い込む指導に問題を感じていた保育者がいたとしても、それを提案する前に身を引くことが多いのも一因でしょう。

「発表会の練習がきつくて、子どもたちを追い込むことが嫌で辞めました」という保育者と会ったこともありますし、「発表会に力を入れている園に勤めていたけど、自分の子どもはそういう園は避けました」という内容がネット上の掲示板でも語られています。

疑問を感じた職員が、組織の中で新しい提案をするのは非常に勇気が必要で、困難なことなのです。

子どもたちの晴れ舞台となる発表会の練習過程でも、子どもたち自身が喜びや楽しさを味わい、考え、創意工夫しながら保育者と一緒に作っていくこと。それが日々の生活をイキイキと盛り上げ、生きる力もつけていけると思うのです。子どもたちが主役になれるように工夫している現場の先生方も大勢いらっしゃると思いますし、悩んでいらっしゃる方もいるでしょう。

今回は、私が取り組んできた拙い実践を紹介させて頂き、皆さんの生活発表会を考えるヒントになれば幸いだと思います。

●生活発表会を見直す

私が原町幼稚園に勤務をはじめた1991年当時（25年前）、1957年園の創立から34年の歴史があり、生活発表会は運動会と並んで年間の重要な行事でした。

原町幼稚園で行われていた生活発表会は、年少児は主にお遊戯、年中長は合唱と合奏、演劇活動が加わり、舞台の上で発表します。

当時は、夜明け前から席取りのために保護者や祖父母の皆さんが座布団を持って入口に並ぶという、家族ぐるみで楽しみにしているお祭り的な行事だったのです。

私は２年間その取り組みを見ていて、疑問がふつふつとわき上がってきました。

疑問は二つ。一つは、発表のために費やす練習量が膨大なのです。年長児は、合唱、合奏、劇（遊戯）と３つの演目を同時期に練習します。

時期になると「子どもたちのあそぶ時間がない」というのが悩みでした。練習練習の日々が嫌になって「幼稚園に行きたくない！」と主張する子もいましたが、25年前の子どもたちは我慢強いです、先生の指導に従って粛々と“頑張って”おりました。

保育者もそんな子どもたちの姿を見つつ、本当は遊ばせてあげたいけど、発表会でお客

さんの期待に応えるためには、**ここで心を鬼にしてやらなければ**、と思って頑張る。結果子どもたちを追い込んでいくことにつながってしまったのです。これはこの行事に限ったことではなく、運動会や音楽会などの発表を伴う行事にありがちのジレンマでした。
（もう一つ加えれば、運動会でもメロディオン鼓隊のマスゲームが“目玉”でもあり、運動会のかなり前から相当の時間を費やしておりました。）

▶ねらいを絞る

まず、この問題の解消のためにねらいを絞り、活動を分散することにしました。
お遊戯的な身体表現は「運動会」へ移し、ダンスや舞踏的表現として同様のねらいを達成することにしました。音楽と演劇活動は「音楽会」と「劇あそび会」（後のお話あそび会）へ日程を振り分けて年間計画を変更したのです。今ではこの３つの行事を「３大表現活動」と呼んでいます。運動会で行っていた鼓隊は音楽会に吸収し、取り止めることにしました。

▶子どもは楽しんでいるか

生活発表会の改革に至った、二つ目の疑問が「ほんとうに子どもたちは表現を楽しんでいるのか？」ということでした。
お遊戯は、もともと音楽に振付を当てはめていくものですからリズムに乗ってダンスすること自体が楽しいわけです。歌や合奏もそれ自体から楽しさが生まれます。
いちばん悩んだのは劇です。
当時行っていた劇は、保育業者さんが販売する発表会のための豊富な教材の中から、音声セリフ入りのＣＤとシナリオを使っていましたので、子どもはセリフを発せず口パクで動くというものだったり、大人や学童の演劇を幼児用に簡単にしたものだったり、大人の決めたシナリオで演技を覚え込んでいくという活動だったのです。
あくまでも私の印象です･･･
「これでは猿回しだ」
なぜなら、子ども自身が楽しめておらず、型にはまった表現を間違えないように発表することに主眼が置かれていたからです。どこが本人たちの表現活動か！と言いたくなるような状況があったわけです。
発表会が終わって「ああ、おわった！」と開放感を味わい、「うまくできた」「まちがえなかった」「がんばった」という達成感と評価は得られますが、「ああ楽しかった、またやりたい！」という感想は出てこなかったのです。その後の子どもたちの姿に生活発表会の余韻などありませんでした。子どもたちはまさにノルマを果たしたのです。

それで思い切って行事を改革しました。
保護者の反発、とりわけ孫の発表を楽しみにしておられた祖父母の反発は大きかったと記憶しています。「楽しみにしていたのに」「なぜ今年からなのか」という声です。
活動の主旨を丁寧に説明し、子ども主体の保育方針を理解して頂けるように訴え続けるとともに、活動をより良いものにすることとに努めてきました。

改革後２年間続いた「劇あそび会」は手探りの状態でした。ごっこあそびに毛が生えたようなレベルで保護者を招待してやっていたものですから「子どもは楽しそうだけど、何をやっているか分からない」という批判も頂きながら、自己満足や子ども目線だけではダメだ、保護者に理解されてこその私立幼稚園の教育活動であるという視点を再度持ちつつ**『やって楽しい見て楽しいお話あそび会』**をキャッチフレーズに20年以上試行錯誤してきました。

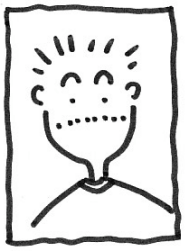
具体的な取り組みについては次号で書いていきます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

福祉系
対人援助職養成の
現場から㉔

西川 友理

A 君の実習中止

ある施設から、実習の中止を言い渡されたA君。

実習先の指導担当者によると、中止の理由は「A君は、注意しても無駄口が減らない。やる気が見られず、ふざけ過ぎている。」ということでした。

この理由に納得がいかないA君です。

「僕は、B君を助けようと思っただけやのに。」

「B君？って誰？」

「他の大学の実習生。1つ年下でさ、引っ込み思案やったから、色々話しかけて。気持ちをほぐしたろうと思って。」

「うまいこといったの？」

「いや、何か、おとなしい奴で…何とか笑かそうと冗談言ったりして、盛り上げてたんやけど。」

「ふぅん。A君は指導担当者さんが言ってはる事に心当たりがないんやね。」

「…いや、そりゃまあちょっと、俺も調子にのって、色々喋りすぎたかも知れんけど…」

「…ふぅん…調子に乗った、って？」

「うーん。いや、まぁ、その。うん…。」口を濁すA君。

「えっと、会議とか、反省会の時とかに、確かにまあ、ちょっとB君にこそこそ話しかけてたことは多かったかな。うん、まぁ、確かに、空気読んでなかった、かな…。」

と、もぞもぞしだしたA君。

そして突然、大きな声で言いました。

「ちゃうねん！僕な、ちょっとああいうマジメな場面が苦手で。なんかふざけてしまうねん！」

「ああ、それで、横にいる子とかに、ちょっかいかけちゃうの？」

「うう、うん、まあ、そんな感じで…で

もさ、そんなんでさ、やる気が見られないとか、実習中止とかそんな話になるなんて思わへんやん。あぁ、もう。なんでやねん。」

学生に「社会常識」をどう伝えるか

社会福祉士の実習指導をしていた頃。

実習に出た学生の行動が、実習先で問題となり、時には実習中止にもなることがありました。それらの問題は、専門知識の不足等よりも、実習生のマナーや社会常識のあらわれ方に起因することが多かったのでした。大学や養成校側には、何らかの対応が必要と思われました。

しかし、これに対して授業時間を割いて指導するのは、いくつか問題があるのではないか、という意見もありました。

まず、時間的な問題です。

挨拶の仕方、訪問先での振る舞い、言葉づかい…実習生は実習先で、想定外の事を起こしてきます。これらのマナーや社会常識を指導をするとなれば、教員はかなりの広範囲に渡る指導をしなければなりません。しかし、実習は本来、専門職としての支援の視点や方法を学びに行くものです。実習前指導では、実習先で専門職としての知識や知恵を得る準備のための勉強をします。マナーや社会常識について、沢山の時間を割く手は使えません。

それから学生の個別性の問題です。学生は皆、生まれ育った環境が違うのだから、それぞれマナーや社会常識の偏りに個別性があります。それを画一的な指導で対応して、果たして意味があるのか、ということです。

しかも、マナーや社会常識について指導すると、学生の普段の生活のあり方にまで踏み込む内容になりがちですから、ちょっとやそっと話をしただけでは、変化させにくいもの、学生自らが変化しようと思い付きにくいものでもあると考えられます。

何より、本来高等教育機関の授業の中で教える内容ではない、という意見もありました。マナーや社会常識などというものは、高校までの人生で、教育され、醸成され、体得していて然るべきものであろうということです。

実習に出る私チェック表

しかし、マナーや社会常識に偏りがある学生は、実習先において、時には実習先施設の支援のあり方に、さらにはその施設の利用者の生活にご迷惑をかけてしまう恐れが多々あるのです。ならば、マナーや社会常識の醸成を促す事は、養成校の現実的なリスクマネジメントとして必要なモノである…という解釈のもと、そのための方法を考えました。

時間的制約や、学生それぞれのマナーや社会常識の偏りなどの個別性を考慮した結果、チェック表形式にすることにし、実習指導に関わる教員や福祉施設職員からのヒアリングを行い、試行錯誤の上、出来た物が「実習に出る私チェック表（以下チェック表）」です。[注1)]

「授業中や実習施設内では、友人同士ふざけあったり、冗談を言い合ったりしな

い」
「約束の時間には、余裕を持って到着する」など、
実習前に実習生に身につけていて欲しい約 40 項目について、「出来ている・多分出来ている・どちらとも言えない・多分出来ていない・出来ていない」の 5 段階に、まず、それぞれ自分でチェックします。

チェック後に「以前の自分と比べてよくなっているところは何か」「今の自分に足りないものは何か」「足りないものを得るための、具体的な改善策」という 3 点を考えます。

その後、指導教員と一緒に自己チェックの結果を見ながら面談をし、自分の姿を振り返り、目指したい姿や、改善策の妥当性について検討します。指導教員は、「“出来ている”にチェックしているけれど、私から見たら出来てないように見えるよ」とか、逆に、
「“出来ていない”にチェックしているけれど、私から見たら出来ているように見えるよ」というように、
本人がチェックした項目に対して、教員から見た事実を元に、教員なりの考えを述べ、一緒に考えます。

この時、指導教員は、思いこみや決めつけではなく、普段のその学生の様子や、実際にあった事実を根拠に話をする必要があります。そのためには、普段のその学生の様子をしっかり見ていないと出来ません。また、この話し合いに至るまでに、お互いに一定の信頼関係がなければ、話し合いはやはり難しいようです。

検討を経て立て直した改善策を、1 ヶ月程度実践してみます。

1 ヶ月後、改めてチェック表を実施し、振り返り、あらたな改善策を設定し、実践します。

これを実習前に合計 3 回実施します。チェック表があれば、確認は学生だけでも出来ますから、具体的な指導検討は、面談をする時間で対応できます。

自分で自分を伸ばそうとする時

「あなたはこれが出来ていない」
「もっとこうすべき」
と、他者から言われると、たとえそれが適切な指摘であったとしても、受け入れるのが難しいことが多いのではないかと思います。

しかし、実際にチェック表をやってみることで、意外な事に気づきました。

このチェック表をやることを、学生が楽しんでいるのです。
「あぁ、これ出来てないなぁ…」
「これは、自信があるよ！」
等とわいわい言いながらチェックします。
「僕、これが苦手で、なんとかしたいんです」
「こういうことを克服したいんだけど、こんな改善策で対応できますかね？」

チェック表により、小さな質問を４０問も答えていくと、自分の姿が立ちあらわれてきます。その中で出来ている部分と出来ていない部分が明確に認識出来る事が、面白いと感じるようです。

雑誌に載っている占いのような心理テストや、「あなたは何タイプ？」といった自分の傾向を探るチャートのよう

なものは、大変人気があります。それらと同じようなものとして受け入れられやすかったのではないかと思います。あるいはまるで RPG ゲームのキャラクターのように、ヒットポイントが足りないとかマジックポイントが高いとか言いながら、ポイントが少ない部分をどうカバーできるかと考える事を楽しいと感じたのかも知れません。

指導教員と話すのも楽しそうに、翌週、廊下ですれ違いざまに、
「あっ、先生！俺ね、改善策頑張れてるんです！」
「私、ちゃんと毎日続けて改善策に取り組んでるよ！」
と嬉しそうに報告してきます。
驚いたのは私達教員の方です。
「…なんだこれ。私達が色々と口やかましく言うよりも、学生はずっと具体的に頑張ろうとしてるやん。しかも楽しそうに！」
そして初めてチェック表を実施したその年の実習では、前年までの様なマナーや社会常識に関する事案が、ほぼ聞かれなかったのでした。

専門職教育ではないけれど

そもそも、マナーや社会常識というものは、突き詰めれば、その社会において、相手を思いやったり、目的を考えたりすれば、その場にあった対応として表われて来るもので、マニュアルがあるわけではありません。
４０個ほど挙げたチェック項目は、それぞれそんな難しい事ではなく、社会経験を積む中で、見て覚えたり、教えられたり、時には叱られたりして、自分なりに習得してきた物です。これらの偏りを無くすためには、現状の自己を知ることが重要だったのです。
また、指導教員にも“話を聞く技術”等、一定のソーシャルワーク的なスキルが求められます。
どうしても相性があわない学生と教員だと、なかなか適切な話し合いになりにくいという難点はあります。
しかし、このチェック表を使った場合、多くの学生は、教員の目から見て出来ていないところを指摘されたとしても、聞く耳を持たないというようなことは、あまりありません。
これは、チェック表によって学生がその時の自分の姿を比較的冷静に把握することが出来、教員と共に「その後の自分のあり方」を客観的に捉えて考える事が出来たからではでないかと考えます。
このチェック表は、実習のために、養成校と施設のリスクマネジメントとして実施したものであり、専門職教育ではありません。専門職教育ではないにもかかわらず、教育という大きなくくりでは、改めて大切な事を気付かせてくれたものなのです。

成長したい欲、
自分で成長しようとする機会と環境

自分が何をしたいと思っているのか、どう成長しているのか、今後どうなっていきたいのか、だから何をするのか。大

人達は子どもに対して、これらをしっかり考えてほしい、考えた上で勉強するなり何なり、行動に移してほしい、と期待をかけ、様々に働きかけます。

しかし、笛吹けども踊らずということわざがあるように、本人がそれらの必要性を感じないでいる時には、大人からの働きかけは、ほとんど意味がありません。

「学生は機会と環境さえ整えば、成長したいと欲し、自分で成長しようとする事」を、チェック表を実施する中で、これに改めて気付かされるのです。

また、教員との話し合いを踏まえて、改善策を考える時、学生は指導教員の指摘に、ただ単に従うのではなく、逆に自分にとって耳に痛い話は聞かないということもほぼありません。指摘を踏まえてきちんと話会って、教員と一緒に改善案を考えようとします。それは「他者からの客観的な視点を、恐れず、軽視せず、現実的な意見として前向きに尊重していく」ように見受けられます。

つまり、このチェック表を実施するたびに、学生達が自ら楽しんで「より良い自分」になろうとする姿を、私は見せつけられるのです。

これは本当に経験からの私見なのですが、20 歳前後の学生と一緒に過ごしていると、彼らには確実に“成長したい”という欲があるように感じます。成長するために適切なハードルになるもの、自分が成長するための課題を探しているように感じるのです。

時には伸び方がわからないと閉じこもってしまったり、成長することが怖い自分へのいらだちから拗ねてしまったり、自分が成長できるとは思えないと背中を向けてしまったりという表現をする学生もいますが、それらもすべて「成長したい欲」が根底にあるからこそ生まれることだと思います。

どうにかして伸びたいと思っている人がいるのだから、その伸びたいという気持ちに自ら気付けるような環境を構成し、さらには、伸びたい方向を自ら選び取れるような支援をする事が必要だと思います。

こうすれば成長できると感じられるハードルである「実習に出る私チェック表」は、その環境や支援のひとつになれているのではないかなと感じます。

このチェック表は今までに、社会福祉士の養成校では児童福祉施設用、社会福祉協議会用の 2 種類を作り、実施しました。

保育士の養成校に勤務先を変えてからは保育実習用も作り、実施しています。

特に保育士は、保育所や児童福祉施設で子どもと共に過ごし、ある意味子どものモデルとなって動くことが重要な仕事です。生活全般において、マナーや社会常識、振舞いに気をつけなければならない場面が多いのです。そういう理由から、実習前指導の場面では、このチェック表にそれなりの重点を置いて行っています。

最初と最後のワーク

もう一つ、私が「最初と最後のワーク」と名付けているワークがあります。

入学したての頃、出来れば第１回目の授業で、ある事例を提示し「このケースに対して、あなたならどう支援しますか？」という問題を出すものです。

そしてその学生が数年にわたる養成課程を経て、卒業に近い、出来ればその学校で受ける一番最後の授業で、全く同じ事例を提示し、同じ質問をします。それに回答した後、入学時の自分の答えを渡し、今書いた答えを比較して、どこがどんなふうに変わったか考える、というワークです。

多くの学生は、入学時の自分の回答を見る時に、何とも言えない、感慨深い顔をします。

「うわー…こんな風に考えてたんだ。」

「知識がついたから、こんな答えが出るようになったんやなぁ。」

「こんな支援、入学当初は思いつきもしなかったな…やっぱり実習で経験した事が大きかったよなぁ。」

そんな中で、過去１人、こう言った学生がいました。

「…もうこの頃には戻れへんねんなぁ。」

それを聞いた１人の学生が笑いながら言いました。

「この時の考え方の方が、クライエントさんの考え方に似てるよね。知識としては、一番素人さんやから。」

彼らは、「ここまで来れたね」という喜びとともに、「ここまで来てしまったね」という、専門職になる責任のようなものも感じているようでした。

入学直後に自分が作ったワークシートが、卒業直前の自分達を客観的に見る、とても大きな材料になるのです。

自らを確認し、自らにハードルを設定するのがチェック表なら、過去の立ち位置をマイルストーンとして今の立ち位置と比較するのがこのワークです。

養成校にいる間に、多くの課題や実習を乗り越えた学生。その成長を自覚することはまた、学生を次の成長に自ら押し出す大きな力になるようです。

私は、１年生にこのワークをする時、「卒業前に、あなたにとても大きな事を教えてくれるワークシートになるから、しっかり書こうね。」

と言いながら実施しています。

まだ答えは見つかりませんが、なんとなく。

極端な話かもしれませんが、20 前後の人というのは、「この社会には様々な生き方があること」と「それを自ら選べる自信があること」の２つを心から認識出来れば、あとは自らが信じる「善い」方向に、勝手に伸びていくのではないかと感じています。

では、そんな自分で伸びていく人達に対して、教員である私に出来る事、やってはいけない事は何なのでしょうか。

もしかすると沢山の事を、もれなく教えるよう気をつけるより、あまりやりすぎないよう気をつけるほうがいいのかもしれない、と思っています。

注１）よろしければ、2010 年の対人援助学会、ポスター発表の要旨をご参照ください。

先人の知恵から
12

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

今回で 12 回目ということは３年も続けているということになる。やっとあ行が終わるが、か行やさ行も諺は多い。気になった諺やよく使う諺、或いは、最近は使われていないけれど、使ったら良いのにと勝手に思っているものを拾って書いている。面白いと思う人は少ないとは思うが、何かの足しにでもなれば幸いである。

さて今回は「お」のつくものから、次の７つを挙げてみた。

- 老いたるを父とせよ
- 老いては子に従え
- 負えば抱かれよう
- 多し少なし子三人
- 傍目八目（おかめはちもく）
- 伯父が甥の草を刈る
- 鬼の閉（た）てたる石の戸も情けに開（あ）く

＜老いたるを父とせよ＞

年を取った人を父のように尊敬せよと言う教え。出典は礼記（らいき）。

年長者を敬いなさいということは、小学校の頃の道徳でよく言われていた覚えがある。その当時の自分にとって、年長者と言うと大人全部だった。大人はちょっと怖い存在でもあり、大人に対し、言葉遣いも決してため口をきくことなど無かった。特に先生に対しては、口の聞き方、態度など厳しく指導されていた。

しかし今の時代、小学校や中学校に行ってみると、子どもたちは正しい敬語を使っていないどころか、ため口で話している。何年も年長であるはずの先生に対して、た

め口になってしまうのはいかがなものか。

そのような状態で、歳を取った人を尊敬しなさいと言う教えは、時代にそぐわないと言われるのかもしれない。自分の親に対してももちろん敬語で話すなどと言うことはない時代であるから、知らない老人に対して尊敬の念を抱くことなど難しいだろうとは思う。

また、老人がみな素晴らしいわけでもないだろう。人々から賞賛されるような、たいしたことをしていなくても、丁寧に歳を重ねて行った方には、顔の表情、しわの一つ一つに貫禄が感じられる。生きると言うことそのものに、さまざまな苦難がある以上、長い年月を生き抜いてきたと言うことの意味は大きい。

歳を重ねた人を敬い、助言を貰ったりすることを有難く思うことは、若者にとってはとても大事なことである。敬老の日は何のためにあるのか、老人との交流で学べることは何か。いまどきは父親に対して尊敬の念を持たない子どもも多い中、余計に難しいことかもしれないが、敢えて、年長者を敬えと言わなければいけない時代なのだと思う。

一方で、年長者も、ただ歳が上だからと、えらそうにするのではなく、自らその重みをかもし出せるような人間を目指さねばならないだろう。不惑の歳を過ぎれば、人間自分の顔に責任を持つべきである。若者たちにものを言う前に、自分自身を戒める言葉としても、この諺を挙げさせて貰った。

＜老いては子に従え＞

年を取ったら出しゃばらずに何事も子に任せて、その意見や方針に従うのが良いということ。本来は「三従（幼時は父に、結婚したら夫に、夫の死後は子に従う事）の教え」の一つで、女性に対する仏教・儒教の教えから来た封建時代の言葉だが、現在は老人のあり方を説いたものとして広く用いられる。江戸いろはがるたの一つ。

前述の諺と、逆の側の話であるが、歳をとったら、大人しく、若いものの言い分を聞き、意向を尊重して、若いものの言うとおりにしなさいよということであるが、年寄りが元気だと兎角揉め事も多くなりがちである。我々年長者は、勿論若い者よりも、経験や知識があり、言いたいことが一杯あるだろうが、そこを我慢して、若い者に任せるのは中々大変な事だ。ついつい口を出してしまう。７０、８０になっても、いまだに一家の主として全ての采配をしているおじいさんやおばあさんを見かけると、お元気なのは悪いことではないがどうもなあと思ってしまう。程ほどにして、道を譲っていくことが後進を育てることにもなるだろうにと。

また、最近、歳を取ったからと偉そうにしている方が、回り近所に迷惑を掛けているというニュースが続いていた。

言葉遣いも、態度も、本当に酷くて目や耳を覆いたくなるような人が出ていた。この人たちはいったいどのような人生を送ってきたのだろうか？誰も信じられず、人を見たら疑ったり攻撃したりすることしか出来ないとしたら、余程酷い目にあってきた

のだろう。そんなことにならないように、歳を重ねて行けば、今は違っていただろう。自分の顔に責任を持ち、自分の心を磨いて、丸く、穏やかになりたいものである。そして、「まだまだだなあ」と思いながらも若者の頑張りを認め、成長を喜べる人でありたいと思う。

老いて子に従っていられるということは、子育ても上手く出来たと言える、最大の喜びの瞬間なのではと思う。

＜負えば抱かれよう＞

一つの事をしてやると、図に乗って更にその上の事を要求すること。子どもにせがまれて仕方なく背負ってやると、甘えて次は抱いてくれということから。「負ぶえば抱かりょう」ともいう。

幼い子どもが次々と甘えてくる姿は、ほほえましく、仕方がないと思えることが多いが、いい年をした大人が、次々と甘えてくる姿は、醜いとしか言いようが無い。

世の中には甘え上手と言う輩がいる。なんだかんだ言いながら、自分の思い通りに物事を進ませていたり、自分は何もせずに人を動かしている人など、「腹が立つほど上手」である。私自身は余り人に物事を頼んだり、お願いしたりすることが苦手な方だったので、たまには真似をして、誰かに甘えてみたいと思うのだが、やりなれていないことはそう簡単には出来ない。

相談に来る方に対して、あれこれしてあげるのは得策ではない。助言も程ほどにしないと、依存を生む。支援者がすべきことは、前に立って引っ張ることではなく、一歩後ろから、見守っていくことであろう。引っ張っていけば、人は自分の足で歩かなくなり、いずれ、背負ってくれと言うだろう。

支援者と言うものの立ち位置、あり方を表す諺として、この言葉をもって、自らを戒めて行きたいものだ。

＜多し少なし子三人＞

子どもの数は三人ぐらいがちょうどよいということ。「多し少なし」はほぼ適当という意味。

少子高齢化の時代にあって、子どもをたくさん生むことが良いことのように言われている。しかし、生めばよいと言うものでもないだろう。筆者自身は５人兄弟であるが、筆者が三人目を妊娠したとき、母親から「三人は大変だけどちょうど良い」と言われたのを思い出す。二人は両手でひとりずつ抱けるので、良いが、三人になると手が足りなくなる。それが又大変だけど、その子育てが出来ると一人前なのだと言われた。四人以上は上の子が下の子を見るようになるから、親だけが大変になるわけではないとも言われた。

そんなものなのかなあと思いながら子育てをして来た。今この諺に出会ってみて、そう言えばと思ったので挙げることにした。

友人関係もそうだが、三人の関係と言うのは難しい。ついつい２対１になりやすい

からで、子どもたちにも三人の関係ができると言うことが、人間関係の成長と大きく関係していると伝えることが多い。

一人っ子では、大人の目が届きすぎ、子どもらしく育つことや、自立的に育つことなどに支障が見られることも多い。二人だと良いように思うのだが、男女一人ずつだとどちらも一人っ子のようになってしまうこともある。また、長子と末子と言う関係のみで、真ん中の子と言う存在が無い。

真ん中の子という存在は、立場上中々難しいものがある。我が家でも三人姉妹の真ん中の子は、自分の存在感についてその薄さにイライラ感を募らせている時期があった。その当時の彼女の言葉は「長女には長女と言うステータスがあるし、三女には末っ子と言うステータスがある。次女にはなにもない。」と言うものだった。親としては、そんなことは考えず、どの子も同じように育てているつもりだが、子どもなりに感じるところがあったのだろう。そうした関係性を意識しては居なかったので、その言葉がとても新鮮だったのを覚えている。谷間と言う言葉は以前からあったが、三人の子育てを上手くやっていくことの難しさを、保護者たちに伝えるのに、娘の言葉を使うことも多かったが、これからは、「多し少なし子三人」を使っていこうと思う。

＜傍目八目（おかめはちもく）＞

物事は利害関係のない第三者の方が当事者よりも冷静に観察ができ、正確な判断ができるということ。「傍目」とは脇でみていること。「傍目八目」は囲碁の言葉で、「他人の打っている囲碁を傍（はた）から見ている者は、対局者よりも八目も先の手が見えるという意から。囲碁も将棋も打っている者同士は勝つことに必死だが、傍観者は局面の全体を見渡す余裕があることから、当事者よりも局外にいて冷静に観察している人のほうが的確に判断できるということ。

その他、「八目」には、多くの数を表す「八」と「目」からなる「やつめ」が本来の形で、多くの目の意味とする説や、八目分得する手がわかるといった意味など諸説ある。

これは我々支援者にとっても、また、保護者にとっても役に立つ言葉ではないかと思う。親子の関係性の中で、勉強や稽古事を教えたりするのは、中々上手くいかない。ついつい感情的になって冷静な対処が出来なくなる。又支援者としても、一生懸命支援に力を入れれば入れるほど、冷静さを失っている人にも良く出会う。

第三者の立場になって考えてみれば、新たなアイデアに気づくこともあるし、第三者から指摘されることもある。それは第三者だからこそ分かったり見えたりするのである。

より良いサービスの提供のために、「傍目」の立場でもう一度眺めてみる、或いは俯瞰的に見直してみると言うことを心がけると良いだろう。

英語では・・・

Dry light is the best.（陰影の無い光線が最も良い）

Standers-by see more than gamestars.（ゲームに参加している人よりもそれを見

ている人の方が多くの事が見える）

＜伯父が甥の草を刈る＞

不自然なことや、物事の順序が逆であることのたとえ。目上の伯父が甥のために働かされることから。目上の者が目下の者のために奔走させられることのたとえという意味もある。

世の中、不自然に思うことは多々ある。特に、目上の人が下の者のために、骨を折り、苦労しているさまに出会うことも増えた。両親は子どものために、あれもこれもがんばって、お金もどんどん出している。特に引きこもりの青年にいたっては、食事の世話、洗濯、掃除、あれもこれもしてあげて、お小遣いもあげている。おかしな話である。

小さい子どもならともかく、自分のことが自分で出来る年齢になれば、やらせていくのが本当だろう。暴れるからとか可愛そうだからと言うのは、親として子どもと向き合おうとしていない話である。

大きくなってから暴れられれば、当然太刀打ちできないだろう。もっと早い段階で追い出せばよいのである。小さいうちから、自分でできることは自分でやらせていくだけでも、変わっていくものだろう。

大人と子どもの関係が逆転しないように、気を付けて行かねばならない時代ではと感じる。

また、大人が子どものためにあれもこれも動いているケースにも出会う。忘れ物をしたと言っては届け、友達の家に行くと言っては送り迎えをさせる。そんなに子どもの言いなりに動く必要はないのではと思うことも多い。もう少し、よく考えて行動をしていかねばならないのではと思う。

＜鬼の閉（た）てたる石の戸も情けに開（あ）く＞

どんなに頑なな人の心も、他人の誠意によってうちとけて来るものだということ。人の誠意が通じない物は無いということ。

対人援助の仕事をしていると、中々こちらの思いが通じないケースに出会う事も多い。一生懸命やっているのに、どうしてわかって貰えないのだろうと思い始めると、人間はついつい相手のせいにしたくなる。自分がこんなに頑張っているのに伝わらないのはきっと相手が偏屈だからだなどと勝手に理解し、納得して気持ちを収めようとしてしまう。しかしよく考えてみよう。

自分が一生懸命やっていることが、本当に相手のためになる事なのだろうか？相手にとって自分は本当に役に立つことをしているのだろうか？有難迷惑や余計なお世話ではないだろうか？正義感や常識を押し付けていないだろうか？

そんなことを先ずよく見直したうえで、尚且つ、地道に、相手に寄り添って、つかず離れずの距離で頑張っていると、必ず気持ちは通じるものだと思う。頑なに人を拒む人ほど、人を求めているように思う。だからと言って押しつけがましく、ずかずかと相手の気持ちに踏み入れば、当然拒否さ

れる。人に傷つけられた人は人を中々信用しない。そんな過去がある事を念頭に入れつつ、ゆっくりと、亀の歩みでほんの少しずつ近づいて行ければ、どんな人でもいつか心を開いてくれるものだと、今までの経験から感じている。

打算ではなく、純粋な気持ちで、へこたれずに頑張ってみることが、小さな小さな風穴をあけてくれると思う。

今回はここまで。

出典紹介

礼記　全 49 編

儒教の経典。五経の一つ。前漢の戴徳が収録した「大戴礼」を甥の戴聖が編集しなおして「小戴礼」とし、これが現在の礼記となった。周末期から秦・漢時代にかけての礼に関する諸説を集めたもので、日常の礼儀作法、冠婚葬祭の儀礼から生活のあらゆる面に及ぶ礼の記述があり、当時の制度・習俗を知る貴重な資料。

越絶書（えつぜつ）　全 15 巻

周代の越の国の攻防を記した歴史書。漢の袁康（えんこう）の著。一説に、子貢（孔子の門人）の著とも言われる。呉と越の争いを記した「呉越春秋」と内容が重複している部分もあるが、文章は本書の方が優れている。

対人援助学マガジン第 24 号
生殖医療と家族援助

例えば、卵子提供による家族形成について⑨

～ドナー家族になる/ならない？～

荒木晃子

骨髄ドナーと卵子ドナー

D 夫：あれから僕も、ネットや知人からいろんな情報を集めたんだけれど、君のほうはどうだった？

D 子：うん・・私のほうも、知り合いに不妊治療を経験した人がいて、その人から採卵のことやいろんな話を聞かせてもらったりしたのだけれど、いまいちはっきりしないことが多くて・・。

D 夫：何がはっきりしないの？

D 子：そうね、例えば、不妊治療の一つに、体外受精っていうのがあるんだけど。卵子を提供するには、私の卵巣から採卵という医療行為で卵子を取り出す医療技術が必要なの。でね、通常、不妊治療でいう「採卵」は結婚しているか、事実婚が証明されている男女間でのみ行う体外受精に必要な医療行為なんですって。

D 夫：ふぅ～ん、ということは、本来ならばレシピエントの女性が行う不妊治療の採卵を、君が肩代わりするってことになる。つまり、そこで君の卵子がレシピエントの代わりに必要だということになるんだね。

D 子：そういうことね。

D 夫：う～む。じゃぁ、卵子を提供するってことは、不妊治療の代役、つまり、レシピエントの代わりに治療の一部を受ける患者になるってことなんじゃないの？

D 子：そう、結果として、そうなるかな。

D 夫：ちょっと待って！それはちょっと話が違うんじゃない？君が「必要な人のために自分の卵子を提供したい」と思っている気持ちは理解できるけれど、代わりに不妊治療の一部を引き受けて患者になる、ってことには容易に賛成できないな。それに、さっき君は、不妊治療は結婚しているカップル、つまり、法律で婚姻関係にあるカップルのことだよね？か、事実婚関係にある、のどちらかのカップルしか受けられないって言ったよね。君が、もし、その関係にあるレシピエント女性の代わりに、卵子を提供する治療を引き受けるとしたら、その医療行為自体が違法になるんじゃないの？

D 子：それがね、日本には、不妊治療に関する法的規制はないみたいなの。詳しくはわからないんだけれど、実際に、いまも卵子提供は行われていて、そのことをテレビやマスコミで公表しているし、レシピエントやドナー、それに卵子提供医療を実施している医療施設に対して、法的問題は指摘されていないみたい。ほんと不思議ね。結局、卵子提供って、骨髄移植と同じように考えればいいのかしら？

D 夫：まさか！実は、僕も、ネットで調べたり、法律関係の知り合いに聞いたりして調べてみた。その道の専門家に聞いたわけじゃな

いから詳しくはわからないんだけれど、確か、近年制定された臓器移植法っていうのがあって、そこには、卵子や子宮など不妊治療にかかわる臓器などは含まれていないらしい。つまり、いくら法律家に聞いても、卵子や子宮の扱いに関しては、現行の法律で定められていないのでわからない、ってことだった。だから、この話は慎重に進めなきゃならないって思った。

D 子：そうか、献血のように簡単ではなく、骨髄移植ほどリスクが高くない・・・ふ～ん、どう捉えたらいいのかよく理解できない。でも、確か、以前、私が骨髄ドナーの登録をしたくて相談した時は、子どもがもっと大きくなってからなら“いいよ”って言ってくれたよね？

D 夫：そう、骨髄移植は、「いまある命」を救うため、つまり救命に必要なことだからね。ちゃんと、法律でも認められているし。法律で認める行為を僕が規制するなんてありえない。確かに、骨髄移植にも身体的リスクは伴う。でも、自分のこととして考えてみたら、自分の家族が生きるために骨髄が必要になれば、その時僕は即提供するだろうって思ったんだ。そう考えると、いま現在骨髄が必要な患者も、きっと誰かの家族なんだよね・・。一番心を痛めている家族では手の打ちようがなくて、誰かの善意にすがるしかないんだろうね、きっと。そう思うと、胸が痛む。僕としては、いま直ぐ骨髄バンクに登録する決断はついてないけれど、来るべき時が来たら熟考するつもりでいるし、もちろん、君が登録することに反対するつもりはない。君に何があっても、僕が支えるつもりでいるからね。子どもたちが大きくなって自立した後は、僕たち夫婦が自分たちの残りの人生をどう生きるか、よく話し合って決めればいいんじゃないかと思うんだ。

D 子：そうだったのね・・今までこんな風に二人で話し合ったことがなかったので、あなたがどう考えているのかわからないでいた。だから、今回も、骨髄ドナーの登録の時のように、君の好きにしたらいいよ、って言ってくれるかもって勝手に思っていた。でも、卵子提供に関しては、ドナーに年齢制限があって、私にはあまり時間が残されてないなって少し焦っていたの。それに、一人では決められなくて、そのうえ、あなたの協力が不可欠だってこともわかった。カウンセリングも受けてもらわなければならないわけだしね。

暗黙のルール

D 夫：そう、そのカウンセリングのことだけど、なぜ、僕も受けなきゃならないのか説明を受けたの？

D 子：うん、それがね・・。そういう決まりだからって説明だった。

D 夫：誰が、というか、何らかの規約があり、必要だってこと？

D 子：ううん、いまのところ、日本に卵子提供を認める法律や規制は無いそうよ。

D 夫：え！じゃ、現在は卵子提供そのものが認められていないってこと？

D 子：それも違うみたい。つまりね、日本には、不妊治療に関する法律そのものがないらしい。だから、卵子提供については、法律に反してもいないし、法的に認めてもいないってこと。なので、卵子提供の手続きや、ドナーになるための決まりは、それを実施する生殖医療専門クリニックとドナー支援をしている NPO 団体が決めているみたい。だから、カウンセリングは生殖医療施設で受けなきゃいけないんだって。

D 夫：え？僕が生殖医療施設へ行くの？卵子を提供するドナーになるのは君なのに？
D 子：そう。
D 夫：なんか腑に落ちないな・・・
D 子：だって、あなたの名前とか子どもたちのことも、全部医療施設の記録に残るらしいし。その記録は、私の提供卵子で生まれた子どもが一定の年齢に達したら、（その子の）希望があれば公開することもありうるって説明があった。
D 夫：ん？卵子提供で生まれた子どもだけに、その権利があるってこと？じゃぁ、僕たちの子どもたちには、それを拒否する権利がないってことかな。もしそうならば、変だね。卵子提供で生まれた子どもには特別な権利が認められて、ドナーから生まれた子どもには、同等の権利が認められないって、おかしいと思わない？僕たちは大人だから、自分のことは自分で決めることができるし、自らの言動に責任もとれる。でも、まだ自分の言動に責任が取れない、というか、社会人未満の子どもたちは、みな平等にその権利は守られるべきだと思う。それを守るのが、僕たち大人の責任なんじゃないのかな。卵子提供で生まれた子どもも、僕たちの子どもも平等に守られるべきだとは思わないかい？（D 子：そう・・・かもね）
D 夫：僕は、パートナーである君の「卵子を提供したい。卵子がなくて子どもが産めないカップルの役に立ちたい」という意思を尊重したいと思っている。だから、気になることや、知らないことの答えを明らかにしたいんだ。僕たちは、卵子提供で生まれる子どもと、僕たちの二人の子どもたちのことをよく考えて、責任ある行動をしなければならないと思っているんだよ。決して、卵子提供に反対するつもりはないことだけは、わかってほしい。
D 子：そう、本当にそのとおりよね。話をして、あなたの気持ちがよくわかったし、あなたが私の気持ちを理解してくれていることもわかった。だから、卵子提供についての疑問や納得できないことをもっとよく調べて、二人で話し合いながら再検討してみたい。それが私たちの子どものため、そして、卵子提供で生まれてくる子どものためになるのよね。
D 夫：そのほうがいいと思うよ。君の気持ちを思うと、提供した後で後悔したり、つらい思いをさせたくない。提供してよかった、その子が生まれてよかったと、皆でよろこびたいんだ。
D 子：それは私も同じよ。

見つけたリスク

D 子：それはそうとして、卵子提供は骨髄移植よりも、ドナーの身体的リスクは低いといわれるのに、なぜ卵子提供は認められないのかしら？
D 夫：うん、その点は僕も疑問に思い、調べてもらったけれど、結局答えは見つからなかった。つまりね、「認める」という意見もあれば、「認めない」といった意見もあるという具合に、国民の総意が得られていないのが現状だといわれた。
D 子：ふぅ～ん、少子化に対する問題意識が国民に足りないってことかしら？
D 夫：それだけじゃないと思うし、移植の際のリスクの問題だけでもないと思う。基本的に、骨髄移植は、一人の患者の命を救うために、その患者に適合する一人のドナーから骨髄を採取するよね。でも、卵子提供では、“提供した卵子でレシピエント女性が妊娠する”まではいいとして、その後女性の体内で

胎児は成長し、やがて出産する。つまり、君が提供した卵子は、やがて新たな人格を持つ一人の人間としてこの世に誕生するってことになる。その点が、骨髄移植と大きく異なる点じゃないのかな。

D 子：そりゃそうよ。子どもが生まれることを願って提供するんだもの。そしてそれは、レシピエントカップルの願いでもあるし、新たな生命の誕生のお手伝いができるってことは、私のよろこびにもなると思う。そう考えると、骨髄ドナーよりも、リスクは少なく、よろこびは大きいとは考えられない？

D 夫：うん、君の言っていることにも一理ある。でもね、国民の皆がそう考えているわけではないんじゃないかな。どう説明すればいいのか・・・。そう、例えば、「血縁でつながるのが家族」と考える人たちにとって、卵子提供で生まれた子どもを自分たちの子どもとは思えないだろう？だって、卵子は君の遺伝子を受け継いでいるんだから、血縁上は、君とレシピエントパートナーとの子どもと考えるだろうね。

D 子：え！？でも、産むのはレシピエント女性だし、法的にも「産んだ女性を母」として認めるんでしょ？

D 夫：そうだよ。民法に、「産んだ女性が母」であることは決まっているんだけど、その法律を制定した時期には、卵子の提供を受け妊娠/出産したとか、代理母が実親に代わり妊娠/出産したという想定がなかった。生殖医療技術が、いまほど進化してなかった。だから、そういった前提なしに、親子関係や夫婦関係などの家族関係を、民法で定めたみたいだよ。

D 子：そうだったんだ・・・ならば、卵子提供や代理出産で子どもが生まれる、という前提の親子関係を定める法律の改定が必要ってこと？。

D 夫：そうなるね。どんな経緯でその子が生まれたか、というより、その子がどういった関係性に誕生したのか、にスポットを当てるか否かも先に検討しなきゃならないだろうし。

D 子：どういった関係性って、どういうこと？

D 夫：つまりね、その子を出産した女性が母で、その母と婚姻関係にある男性が父になる。（D 子：そうなるわね）でも、その子の血縁上のつながりは、ドナー女性にある。（D 子：うん）ということは、その子の誕生には、二人の女性が関わったことになる。それを法的にどう捉え、その関係を法律でどのように関係づけるか、の答えがまだ出ていないんじゃないかな。

D 子：え？だって、産んだ女性が母親になるんでしょ？シンプルに考えると問題ないように思えるんだけど。

D 夫：そう、“提供を受けた卵子で妊娠しても”産んだ女性を母とすると民法にあればね。

D 子：なるほど。でも今は、卵子提供そのものが法律で認められていないので、“卵子提供で生まれた子ども”という前提では、法律が改定されるはずはない、というわけね。反対に、子どもの親子関係の確定には、その前提に、「卵子提供を法的に認める」という条件が付いている、ってことなの？

D 夫：僕たち素人が考えても、そういう結論になるね。だから、もっと時間をかけ、よく話し合ったうえで、決断してもいいと思うんだ。

D 子：そうね、もっといろんな人に話を聞いて、情報を集めてみようかな。

D 夫：うん、それがいい。

（次号に続く）

対人援助学＆心理学の縦横無尽

福島、ふくしま、Fukushima（４）

福島県浪江町訪問記（２）

プロローグ

2013 年６月に引き続き、2015 年 11 月にも福島県浪江町を訪問することができました。今回の訪問は土曜講座での講演の仕込みのためです。以下で、東日本大震災後の福島との関わりについて簡単に振り返ってみました。

なお、対人援助学マガジンには既に３回にわたって連載してきました。今回の拙稿はそれに続くもので浪江町訪問記としては（２）、福島、ふくしま、Fukushima としては（４）となります。

http://www.humanservices.jp/magazine/vol10/19s.pdf
http://www.humanservices.jp/magazine/vol11/16.pdf
http://www.humanservices.jp/magazine/vol14/17.pdf

１　東日本大震災と福島第一原発事故

2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災。その直後の大津波は太平洋側の各地を襲いました。福島県双葉郡大熊町・双葉町に立地する福島第一原子力発電所においては、全電源喪失の事態となり、水素爆発が起き、大量の放射性物質が環境中に放出されました。水素爆発のあった３月１２日以降、大気中に放出された放射性物質は折からの南東の風に乗って北西の方角へと流れ、やがて雨によって地上に降下しました。その影響は浪江町から川俣町、飯舘村は言うに及ばず、福島市にまで及びました。

個人的なことですが、私がかつて住んでいた福島市渡利は放射線量のホットスポットとして有名になりました。

風の通り道は、山と山の間、それは即ち川の上であり、川の周辺には人が集まり住んでいますから、風の通り道は人の住む所に他なりません。福島県浪江町の形は、東西に伸びた形です。そして一部が狭くくびれています。どうしてかというと請戸川という川の流域に人々の生活圏が出来ていたからです。今と違って水運が交通の要だった時代には、同じ川の流域が 1 つの生活圏を形成していたのです。今では請戸川沿いには国道 114 号線が通り、車での往来も容易になりました。

川は低地にありその周辺が山であれば、放射線を含む風が、人の住む場所を通っていくのは半ば必然だったと言えます。事故当時は、事故を起こした原発からの距離で一律に避難をしていましたが、それは全くおかしなことだったのです。原発からの距離ではなく、風がどのように吹くのか、ということこそ重要な情報だったのです。

日本原子力研究所が開発していた緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（System for Prediction of Environmental Emergency Dose Information、通称：SPEEDI）といシステムは、わりと正確に放射線の拡散状況を比較的正確にシミュレーションしていたことが後に分かりましたが、当時は近隣住民には提供されませんでした（文部科学省は外務省を通じて 3 月 14 日に米軍に提供していました）。もしこの情報が人々に伝わっていれば無用な被爆をせずにすんだ人が多かったと思われます。SPEEDI 関係者は、情報を提供することでパニックになることを恐れたなどと言っていますが、これはむしろ官僚達がパニックになったが故に情報提供を控えた、と解釈すべきだと思います。こうした状態のことをエリートパニックと呼ぶことがあります。これは災害社会学者キャスリーン・ティアニーの言葉です。

2　福島との絆が復活

私は 1994 年から 2001 年まで、7 年間だけではあるものの、福島大学行政社会学部助教

授として福島に住んでいました。そのことが、今回の震災後に様々な活動をした原動力であることは間違いありません。震災直後、未曾有の大震災に際して、かつての同僚達がいろいろな形で奮闘している姿を見ながら側面支援はしていたのですが、福島に住んでいたから支援しますというのも白々しいかと思い、自分として何をすればいいのか分からず１年が過ぎていきました。

支援するとかではなく、自分が福島に乗り込むのでもなく、かつての同僚を京都に招いて研究会を行って福島の様子を発表してもらえば良い、そのように考えがまとまった時には既に１年が過ぎていました。2012 年３月 29 日　原子力と生存学研究会・特別企画ワークショップ「震災・大学・放射能～福島大学教員をお招きして」という会合を行いました。福大在籍時の私の遊び仲間でもあった？永幡准教授など４名をお招きしました。

そこから福島の人たちと縁が復活し、2012 年 6 月 12 日には福島大学に招かれて風評被害に関する講演（「風評被害の構造」）を行う機会をいただきました。

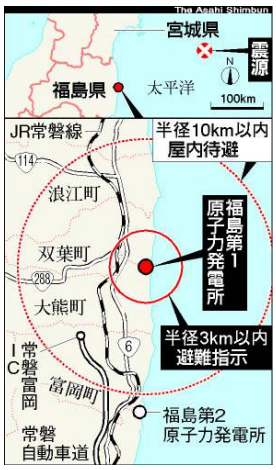
さらに同時進行的に、立命館大学災害復興支援室を立ち上げた今村正治総合企画室長（当時；現 APU 副学長）に誘われ、福島で日本再生大学を作る企画に誘われたり、研究高度化事業（震災復興）に応募したところ採択されたりして、福島を訪問する機会が増えました。震災後最初に福島の浜通り地方を訪れたのは 2012 年 6 月のことでした。バルト三国の１つであるエストニア・タリン大学から来日したカトリン・クラセップ准教授に「福島に行ってみたいか？」と尋ねたところ、行きたいという話だったので企画をしました。茨城大学の伊藤哲司教授の協力も得て、車で回ることができました。震災１年を経た時期、当然、立ち入りできないところも多く福島第一原発から北側の放射線量の低い地域を車で移動しましたが、その時の景色には唖然としたものです。朽ち果てた車がそのままになっているのは当たり前、でした。震災後１年以上経っていても、ほとんど後始末がされていなかったのでした。

2013 年 8 月 23 日には、福島県の内堀雅雄副知事（当時；現県知事）が BKC を訪問する機会があり、若い人たちと意見交換会をしたいというリクエストがありました。ゼミ生と共に私も同席することができました（これがきっかけで福島県と立命館は後に連携協定を結ぶことになります）。

この後、応用社会心理学ゼミ（サトゼミ）の学生の 1 人が、卒論に福島の状況を取り上げる決断をして通い始めたり、ゼミ生の企画が福島県の事業「若者による情報発信事業『いいね！ふくしま』」に採択されたりして、ゼミ生達が福島にいく機会を提供することができました。研究面でも福島との結びつきが増えました。福島と言えば松川事件（1949 年に起きた列車転覆事件をめぐり最終的に多くの無罪判決が出た事件）、ということで法心理学のプロジェクトの一環として福島を訪問することもありました。さらに、『TEA　理論編・実践編』（新曜社）の執筆合宿を行ったこともありました。私が福島大学行政社会学部の教員だったことは、大震災の前までは、私にとって単なる履歴の 1 つでした。しかし、東日本大震災によって新しい意味が付与され、カッコ良い言葉でいえば、絆が復活したのです。私は 1 年ほど福島に行くことを逡巡していたのですが、かつて同僚だったある先生は、福島大学で私の顔を見つけるなり「来るのが遅い！」と笑顔で迎えてくれました。私と同世代だった先生方は学部長などを務めているし、中井勝巳先生にいたっては今では福島大学学長です。

また、元同僚達にいろいろな人々を紹介してもらいました。たとえば、ふくしま土壌くらぶの皆さんです。震災直後から行政に頼らず自分たちで除染を行い、文献を読み、安全・安心な果物作りに邁進してきた人たちです。徹底的に勉強し、徹底的に土壌作りを行い、徹底的に安全な果物を生産し、何よりも、検査も徹底的にやって徹底的に安全確認をしているので安心です。会長の高橋賢一さんは朝日新聞連載『プロメテウスの罠』にも登場しています。一度お会いして話をうかがえば誰でもその情熱と成果に圧倒されると思います（ちなみに奥様は元ミス・ピーチ）。私たちは福島に行くとほぼ毎回、たかはし果樹園を訪れて四季折々の果物を買い求めています。

こうして広がったネットワークのうち、最も大きなものの 1 つが、鈴木典夫福島大学教授から紹介してもらった笹谷仮設住宅（正式には福島市笹谷東部応急仮設住宅）との出会いです。ここには、浪江町の皆さんが住んでいらっしゃいます。浪江町は 2015 年 11 月末現在でも、全域が避難指示区域となっていて居住はできません（町役場は二本松市にあります）。



浪江町民の避難先は、福島県内が約 7 割、県外（現在、和歌山県を除く全都道府県）が約 3 割で約 3,300 人が福島県内の仮設住宅で暮らしています（東日本大震災当時の人口は約 21,000 人。2015 年 10 月現在の住民登録数は約 19,000 人）。

なみえ焼きそば、という名前を思い出す人がいるかもしれません。2013 年 11 月に愛知県豊川市で開かれた第 8 回 B-1 グランプリで 1 位を獲得した、あの B 級グルメも浪江がふるさとなのです。私たちが笹谷仮設住宅を訪れた際には、おいしい焼きそばを作っていただいたこともあります。

3　浪江町の 2 年前と今（2015 年 11 月）

笹谷仮設住宅自治会長の熊田伸一さんに「浪江町の現状を見てみないか」と誘われたのは 2013 年 6 月。その時のことは『対人援助学マガジン』第 14 号において報告しました。震災後 2 年数ヶ月「も」たったのだから、それなりに復興なり何なりが進んでいるのだろうと思ったところ・・・。

浪江駅は、何事も無かったように建っていましたが、駅の近くの民家は屋根が崩れたまま。海に打ち上げられた船はそのまま、自動車もそのまま、という具合でした。繰り返しますが、震災後 2 年以上たった 2013 年 6 月のことでした。

ここまできて、やっと本題です。今はどうなのでしょう？

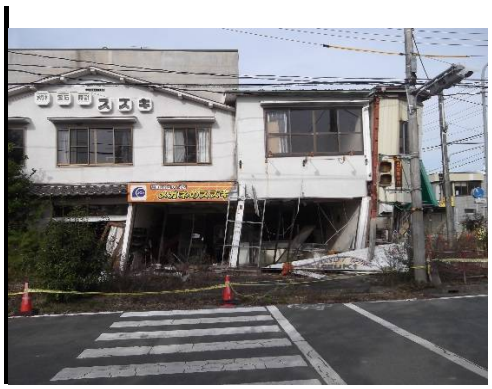
2015 年 11 月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。2015 年 11 月現在、浪江町はその全ての地域において居住が認められていません。その意味で、状況はあまり変わっていません。今回もまた熊田伸一さんのご厚誼を得て、浪江町に入らせていただきました。検問があり、通行証確認が必要です。町民のみなさんは、許可を得れば、立ち入り禁止区域に入ることができます。逆に言えば、自分がかつて住んでいた家に、行政から許可を得なければ戻れない、のが浪江町民の現実なのです。福島第一原発事故がもたらしたこの事実から、私たちは何を学ぶべきなのでしょうか？

まず、県立浪江高校津島（分）校の様子。ここは福島第一原発事故の直後、避難所になっていたところです。なぜなら、原発から 20km 以上離れているから。放射性物質は風に乗って拡散するのですから、距離よりも風向きが重要なはずですが、Speedi のデータは国

民に公表されず、人々は 20km 以上離れた場所として津島（分）校を選び、かえって被爆してしまったのです。このことの責任は誰がとるのか、はっきりしてほしいと思うのは私だけではないでしょう。

津島（分）校にはモニタリング・ポストがあります。数値を見ると毎時 5.089 マイクロシーベルト。この数値がどういうものだか、多くの人には分からないと思います。簡単に考えるために毎時 5.1 マイクロシーベルトだとして、24（時間）と 365（日）を積算（かけ算）すると年間の放射線量が計算できます。44.7 ミリシーベルトになります。国は 5 年を経過しても 20 ミリシーベルトを下回らないおそれのある地域を帰還困難区域と定めていますが、まさにそれにあてはまる地域であることが分かります。さらに、余計なお世話ではありますが、モニタリングポスト近くの地表近くを測定すると 12.2 マイクロシーベルトでした。これは年間で 106.9 ミリシーベルトです。ここで、モニタリングポストが不正確だと言ってはいけません。除染を最大限頑張ってもこれ以上は下がらない値がモニタリングポストの数値なのであり、地表の数値は、その理想値よりはもっと高いことを私たちが理解すべきなのです

次に浪江駅の様子を見てみましょう。ここは海岸から遠く、放射線量もそれほど高くなく、駅もそのまま。しかし、駅周辺に足を運ぶと、傾いたままの店舗など、直ぐに目にすることができます。



さらに、海沿い。熊田さんのご自宅があった、海岸沿いへ。かつての三世代住宅は基礎部分を残すのみです。

最後に、請戸小学校に足を伸ばします。この小学校は、一階部分が津波でさらわれ、二階部分のみが残っています。そして体育館には「卒業証書授与式」の看板が掛けられたまま。もちろん、2011 年 3 月 11 日から残ったままなのです。

繰り返しますが、この写真は 2015 年 11 月 22 日に撮影したものです。震災から 4 年⑻ヶ月、何も手が付けられていない地域が、現実に存在することの意味を私たちは噛みしめなければいけません。

4　福島のかぜを感じる

2013 年 12 月 20 日（金）、学校法人立命館は、福島県と相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的に連携協力に関する協定を締結しました。これを記念して、協定締結記念フォーラムとして、「ふくしまとのこれまで」をテーマに、立命館大学、福島大学、明治大学の学生、立命館宇治高等学校の生徒らによる福島での活動報告が行われました。サトゼミからもパネリストとしてゼミ生が参加しました。締結のために立命館大学を訪れた内堀副知事は、2014 年の県知事選挙に出馬、当選を果たされ、2015 年現在、県知事を務めておられます。

2014 年度、サトゼミ有志は 2014 年度福島県主催委託事業「ふくしまからはじめよう。若い力による風評対策提案事業」に応募して採択され、新しい活動を始めました。

この事業は完全な公募で全国の５７の団体から応募があり、１５の団体がプレゼンに進み、結果的に９の団体が採択されました。サトゼミからの３人は大学の食堂で福島県産の食材を使った「ふくしま定食」をポイント付きで提供し、ポイントがたまった人には、福島の食材を親などに逆に「仕送り」できるというアイデア（逆仕送 RU）を発表しました。

http://www.ritsumei.ac.jp/rs/category/r_na_hito/entry/?param=613

ヘイトスピーチ的な非難も受けましたが、この事業は概ね好評に終わりました。逆仕送 RU はもちろん、Ritsumeikan University の RU のダジャレですが、それはさておき、多くの人にご活用いただきました。

福島の食材を使う、というだけで懸念や不安を示される方がいたのも事実です。そして、ネット上で非難（批判でなく）してきたということもありました。しかし、立命館大学の災害復興支援室のみなさんを始めとして、教職員の皆さんがサトゼミの企画を支えてくれると言ってくれました。それによって多くの活動が可能になったのです。

福島は日本で３番目に広い県です。しかし、「福島第一原発事故」ということが、福島全体のイメージを悪くしたのです。その責任は原発の運営主体にあることは明確です。これまで安全だと言ってきたのに事故を起こしたわけですから。2014 年 11 月の大学祭では、直売企画を行いました。大盛況でした。12 月には立命館大学生協さんのご協力を得て「福島メニュー」を行いました。これも学生の皆さんから指示を受けましたし、逆仕送 RU を受けとった父母の皆さんからも評価をいただきました。「とてもいい事ですね。親子で考えさせられるテーマで子どもと話できました。風評被害がなくなるといいです。続けてください」「思いがけず娘からのプレゼントで、他県の食品を知る機会をいただいてうれしかった」などの声が多数寄せられました。

既に述べたことですが、2015 年 11 月下旬、サトゼミ有志は再び福島県に向かいました。11 月 22 日は浪江町訪問（前述）、そして 23 日は藤原紀香さんのトークショー。その直前、私は内堀知事とお会いして、拙著『心理学の名著３０』を贈呈して記念に写真を一緒に撮りました。気さくでありしかも一本芯の通った内堀知事に感謝です。なお知事は、トークショー挨拶の中で、福島の状況を「風評は根強く、風化は進む」と表現していました。興味深い表現ですが、福島のおかれた苦境を言い表しているようです。

v

そして、11 月 24 日は福島県庁に風評・風化対策監という役職の方にお会いしました。福島県には風評・風化対策監という役職があることにまず驚きます。現在、この役職に就いているのは野地誠氏。短い時間ですが、この役職ができた背景やこの役職の担うべき仕事について聞いてみました。

＊＊＊＊野地風評・風化対策監の話の概要＊＊＊＊

福島県では、風評・風化対策強化戦略を設定している。その目標は、福島県産品や観光客の数値を少なくとも震災前の水準まで回復することである。教育旅行（修学旅行など）は直後に２０％にまで落ち込み、回復したとはいえ昨年度は５０％にしかなっていない。桃の値段も震災前の７０％にしかなっていない。農業・観光、まだまだ復興の途上なのである。

福島から遠いほど、今は情報が伝わらない。しかし、地震直後の状況が強く印象づけられているために、情報が更新されない。復興の状況や子どもは元気、という報道はなかなか無く原発のトラブル・汚染水問題は起きるたびに報道されている。

こういう状況では、福島の農産物を敬遠する空気は変わりようがない。福島の米は食べたくないという人が１７％に及ぶという調査結果もある。食品のセシウム基準は EU などの１０倍厳しいし（食品衛生法に定める一般食品の基準値(100 ベクレル/Kg)以下のものしか出荷しできない)、福島の玄米は全量全袋検査を行っており、最も安全な米なのに、である。ちなみに、本年度の福島米において基準値以上はまだ検出されていないとのことである。

こうした状況において、福島県は 2015 年９月、福島県風評・風化対策強化戦略を決定した。正確な情報を「より伝わる」、「より共感が得られる」よう発信することを目標としている。詳細は（https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/01010d/senryaku-sakutei.html）参照。

エピローグ

以上、これまでの経緯も含め、浪江町の今（2015 年 11 月現在）のレポートでした。

これに加え 2016 年 2 月 7 ～9 日も福島県を訪れました。初めて喜多方市に泊まりました。木之本漆器店当主・遠藤久美氏他と面談したり、震災以降の話を聞いたりしました。実は木之本漆器店は私の母の実家です。40 年ほど前までは「おばあちゃんち」に良く来てましたが、オトナになってからはすっかり途絶えてました。こうして縁が復活したのもうれしいことです。ちなみに子どもの頃しか来ていなかったので、喜多方で酒を飲むという経験自体が私にとって不思議な感覚でした。

最後に、これまでサトゼミでは、福島の問題を対象にした卒業論文が毎年書かれていま

す。2014 年と 2015 年には笹谷仮設住宅の住み込みフィールドワークを女子学生が行っています。浪江町の住民の皆さんに可愛がられているからこそ可能なことであり、関係各位に感謝したいと思います。

さらに蛇足。福島に足を運ぶたび、些少ではあるが寄付をさせていただいている。公的な記録が残るという意味でも、学生が良いことをして新聞に載るという意味でも貴重な場である。

（東日本大震災）

義援金

民報教育福祉事業団

◆8日▼立命館大文学部応用社会心理学受講生有志が2万円　卒業生の天野丞可（しょうか）さん、4年の山地絵里加さんが「東日本大震災からの復興に役立ててほしい」と事業団事務局に届けた。文学部の佐藤達哉教授（社会心理学、元福島大行政社会学部助教授）、立命館グローバル・イノベーション研究機構専門研究員の木戸彩恵さんが一緒に訪れた。

左から佐藤教授、山地さん、天野さん、木戸さん

日本のジェノグラム

早樫　一男

11

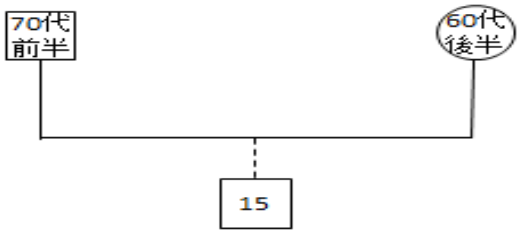
まずは、お知らせです。

４月初旬に「対人援助職のためのジェノグラム入門」が中央法規出版より発売されます。詳しくは、この原稿の最後をご覧ください。

ジェノグラムから思いを巡らせる、想像する

家族について想像する作業が家族理解の第一歩になります。年齢や家族構成といった最小限の情報からでも、まずは、家族に起こりうる可能性をあれこれ考えてみるのです。相談援助の現場にいる初心者はもちろんですが、ベテランの人にも、お奨めしていることがあります。それは、日常生活の中で、興味や関心を持った家族について、ジェノグラムを作成してみることです。相談ケースだけではなく、マスコミ報道などで出会う家族についても、限られた情報から思いを巡らせてみるのです。家族理解について、自分でできるトレーニングをぜひ工夫してください。

さて、次のジェノグラムから想像してみてください。



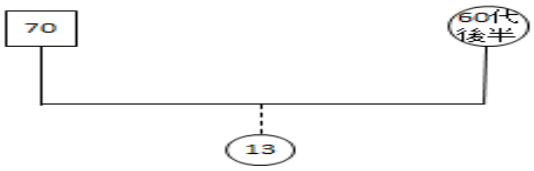
あなたは、どのような疑問や可能性を思い浮かべますか。

とてもシンプルなジェノグラムですね。このようなシンプルなジェノグラムを「スッピンのジェノグラム」と呼んでいます。

１５歳の男性は高齢夫婦（年齢は推定です）の実子ではないというのが、このジェノグラムのポイントでしょう。

家族がわかりますか？

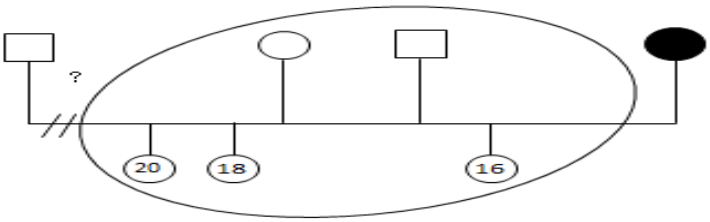
それでは、次のジェノグラムを考えてみてください。どのようなことが思い浮かびますか？



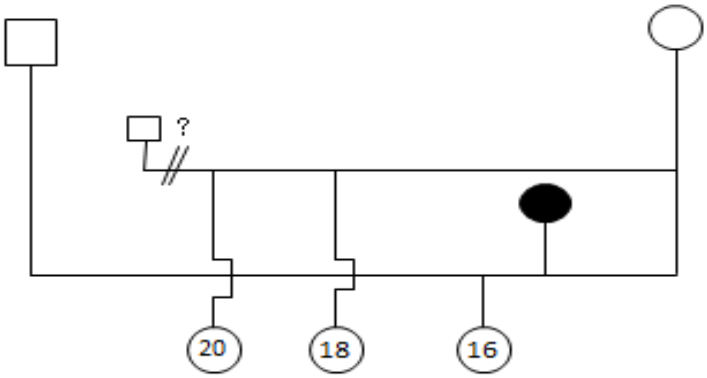
ジェノグラムから思い浮かぶ可能性や疑問など、あなたの中にある「不思議センサー」（不思議だなあとか、一般的ではないなあと感じる感覚）はどんな点で作動しますか？

先ほどと同じようなジェノグラムですね。やはり、子ども（今回は女性）は夫婦（年齢は推定です）の実施ではないというのが特徴です。

最後に、以下のジェノグラムについて考えてみてください。１６歳の女性から見れば、継母には連れ子二人（年齢的に義姉にあたります）がいるというジェノグラムです。なお、継母の夫（義姉の父親の情報は不明です）。



１６歳女性と義姉の位置関係と継母の位置を考えて作成すると、次のようなジェノグラムになります。このジェノグラムは表記の工夫ですが、わかりやすさから考えると、先に紹介したジェノグラムですかね。みなさんはどのように思いますか？



ところで、紹介した３つのジェノグラム（家族）について、わかりましたか？
答えは次号にでもお知らせします。

【対人援助職のためのジェノグラム入門】(中央法規出版)発刊のお知らせ！！

ジェノグラムに関するまとまった読み物があればという願いを込めたのが、一冊の書物になりました。「対人援助職のための家族理解入門」（団士郎著　中央法規出版）の兄弟版になればと願っています。

対人援助職は直接・間接を問わず家族と出会うことになります。具体的には、児童・障害・高齢といった福祉分野、医師・看護師・保健師などの医療保健分野、教員・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーといった教育分野、家庭裁判所調査官・弁護士などの司法分野などです。

多種多様で広範な分野にわたっている対人援助職の方々に、ぜひ、一読してもらいたいと願っています。必ず、現場で役に立つと思っています。

第一章はジェノグラムそのもの解説です。第二章は表記の基本について紹介しています。第三章は読み方、第四章はジェノグラムの扱いと事例、そして、第五章はグループカンファレンスの一端を紹介しています。

発刊は４月初旬　定価は１４００円の予定です。

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第23話

水野　スウ

けんぽう出前あんぎゃ

昨年8月の終わりに、『わたしとあなたの・けんぽうBOOK』という小さな本をつくりました。以来、出前けんぽうかふぇのご注文が一気に急増。これまでに40回近く、全国各地へ憲法を語りに出かけました。この春も、新潟、福井、愛知、信州、広島、京都etc.へと、出前をしに行く予定です。

私が呼ばれる場は、たまに大人数の時もあるけれど、たいていが20〜30人、というこじんまりした集いです。

一見、効率悪いことこの上ないように見えても、私が感じる手応えとしては、むしろその逆。参加している一人ひとりのお顔を見ながら語れるし、「ここまでの話、みなさんに伝わってます？」とコミュニケーションとりつつ、言葉や表現を選ぶこともできます。ちいさな場であればあるだけ、伝わり方の温度が違うのを感じるのです。

人数が多すぎないからこそ、話し終わったあとの「単語な感想」（その日聴いた話の中で、これだけは忘れずにおみやげとして持ち帰ろう、と思うキーワードのこと）を一人ひとり発表してもらって、その日のキーワードを確認しあうふりかえりタイムを、みんなで共有することもできます。そこでシェアされるのは、たとえばこんな言葉たち。

・憲法の話というからてっきり9条の話と思っていた。憲法って、9条だけじゃなかったんだ！
・本当言うと、なんかこわそうで、来たくなかった。だけど聞いてみたら、違ってた、あったかかった。
・憲法の話聞いて、泣くなんて自分でもびっくり。
・憲法13条、こんな私のことも守ってくれていたんだね。
・自分が民主主義しないと、民主主義は守れない。
・不断の努力の、12条するひとに私もなるぞ！
・私もpeaceのpiece、たしかな平和のひと粒になりたいと思った。

——などなど。

どう伝えよう

「話している間中、スウさんはにこやかなえがおでした。だから楽なきもちで、安心して、聴けました」「いったいどうして、難しい憲法や政治の話をわかりやすく、そんなふうにおだやかな表情で語れるんだろう」実はこういった感想をよくいただきます（めっちゃうれしい！）。

自分としてはことさら、えがおで話そう、と意識しているつもりはありません。言えることがあるとしたら、私が本当に大切と感じている今の日本国憲法を、だからこそ愛情こめてていねいに届けようとする時、知らず知らずそんな表情になっている、ということなのでしょう。

その一方で、きつい表情や激しい口調で話さないように、というのは、自分でも意識していることだと思います。もしか私が、あまりに真剣になりすぎて、終止こわい顔で話していたら、きっと聞いている方は自分が叱られたり、責められたりしているように感じてしまうでしょう。そうなったら、こちらの本当に伝えたいメッセージだって、きっとほとんど心には届かない。そのもったいない現実を、数々の失敗を重ねてきてよく知っているからです。

伝える時に努力していることは、そのほかにもいくつかあります。

たとえば、できるかぎり、聴いている人が置いてけぼり感をもたないように、むずかしい熟語やカタカナ言葉は少なめに。使い古されてしまった単語の代わりに、自分なりの表現で——たとえば「12条する」、「13条こそ憲法の核心だと確信」、「憲法は私の味方」、といった、私のふだんの言葉で——憲法を届けること。

それから、一方通行のまま話が終わってしまわないようにこころがけるのも、私にとっては大切なことです。私、先生、あなた、生徒、という関係より、ほんのちょっとでも、自分も参加した、という双方向の感覚を持ち帰ってもらえたらいいな。きっと、その方がずっと心に残ると思うから。出前の最後にみなさんから「単語な感想」を言ってもらうのも、この、参加した感、の一つになればと思ってしていることなのです。

『静かな力』

数々の失敗を重ねてきて、と先に書いたように、私自身、こういった出前の作りかたが最初から決まっていたわけじゃありません。記憶をたどっていくと、どうやら20年ほど前から手探りで学んできたワークショップの手法に、そのヒントがありそう。

1995年の当時はまだ、言葉自体耳新しかった、ワークショップ、という概念。それに最初に目を向けさせてくれたのは、クエーカー教徒の人たちが考えだし、実践を重ねてきた試み、『子どものための非暴力マニュアル』（*A Manual on Nonviolence and Children*）という本の存在です。金沢の友人の三国千秋さんが、その原題を「静かな力」と意訳して、日本語訳の本にしたことからでした（ステファニー・ジャドソン編、三国千秋訳『静かな力——子どもたちに非暴力を教えるための実践マニュアル』嵯峨野書院、1995年）。

その『静かな力』をテキストブックがわりに、三国さんと私を入れた3人で、月に一度のワークショップ自主勉強会をはじめたのです。

毎月、自分たちなりのワークショップを模索する場で、私は自分の存在が認められ、同時に、他者を認めて尊重することの大切さを、体験的に学んでいきました。

私たちが学ぼうとするワークショップの目的は、正しい答えを出すためにするのではないこと。ふだんはあまり考えることもなくやり過ごしていることがらをテーマにして、いったん立ち止まってみなで考えることや、自分とは違いろいろな考え方があると知ること。知った上で、自分はどう思うのか、それを言葉にしていく努力が必要なこと、などなど。

自分でオリジナルのワークショップを組み立てる月もあれば、仲間のつくったワークショップに参加する月もあり、それを交互にくり返しながら、ワークショップってどういうものか、私自身がゆっくりと学んでいく、そこはそんな場所でした。

クッキングハウスから

私にとってのコミュニケーションの学校は、もう一つあります。それが、東京調布のクッキングハウス。ワークショップの自主勉強会をはじめて1年ほどしたころに出逢った場所です。

人呼んで、不思議なレストラン。精神の病いを持つ人たちの、職場であり居場所でもあるそのクッキングハウスでは、メンバーさんたちの一番苦手とする対人関係が、少しでも楽になるためのコミュニケーションの練習、SST（ソーシャル・スキルズ・トレーニング）のワークショップを日常的にしていました。

認知行動療法でもあるSSTは、精神障がいの人たちのためのリハビリプログラムの一つ。自分にも相手にもきもちのいいコミュニケーションのとり方を、練習しながら学ぶSST。そこに何度か参加するうち、これは私にとってすごく必要な学びに違いない、と確信して、当時できるかぎりの時間をつくっては、あししげくクッキングハウスに通いました。

SSTの学びにも、金沢でしているワークショップ勉強会と通じあう部分がいっぱいありました。自分とは違う、いろいろな考え方、もののとらえ方があると知ることや、一人ひとりを尊重して認めることの大切さ、など。

自分のきもちも相手のきもちも大事にしながら、“私”を主語にして話す「わたしメッセージ」の伝え方と、上から目線で、相手を責めたり非難しているように聞こえる「あなたメッセージ」という伝え方があること。「あなたメッセージ」の言い方では、それがどんなに正しいことであっても、私の伝えたいことは相手に伝わらないこと。そのいずれも、二つのワークショップを体験しながら学んでいったことでした。

話すスタイルの原点は

そのクッキングハウスに、毎春、お話の出前に行くようになって今年で12年になります。出前のご注文テーマは毎回、平和に関すること。メンバーさんとスタッフとお客様が一緒に耳を傾けてくれる場所で、憲法9条も、原発も、個人の尊重の13条も、不断の努力の12条も、一年に一つずつ、語らせてもらってきました。

初めての出前の時は、普段よりずっと緊張したことを覚えています。できるかぎりわかりやすい言葉で、声を荒げずに、わたしメッセージで、ていねいに伝えよう、と心しました。精神の薬を服用しているメンバーさんたちの中には、話がむずかしい、つまらない、と感じればすぐに部屋から出て行ってしまう人や、攻撃的な言葉や非難めいた言葉を多用すれば、それをあたかも自分が責められているように感じてしまう人が、少なからずいるだろう、と思ったからです。

今にして思えば、それが結果的に、私が現在、出前けんぽうかふぇで話すスタイルの原点となりました。話を最後まで関心持って聞いてもらえるかどうか、聞いている人たちのリアクションや表情が大事なバロメーター。つまり、聞き手のクッキングハウスのメンバーさんたちが、実は、私の話し方の先生だったのです。

はじめてのおはなし会で、2時間近く、メンバーさんの誰一人部屋を出て行かずに聞いていてくれたこと、それがその後の私の話し方の大切な指針になったのでした。

おつり、いろいろ

こうしてゆっくりと時間をかけてつくってきた、わたし流のお話出前スタイル。その中でも、はじ

めに紹介したようなミニミニ出前けんぽうかふぇのうれしい特徴は、参加した、聞いた、それでおしまい、とならずに、私が石川に戻った後からも、参加した方たちからのおつりが続々とあること。

・けんぽうBOOKをテキストがわりに、憲法の自主勉強会を毎月ひらくことにしました。
——長野で、広島で。
・これまでは9の数字入りクッキーをつくってきたけど、今回はそれとあわせて、13と12の数字入りクッキーをつくって幼稚園のバザーで売ってみました。どの人も数字のわけを訊いてくれるので、なにげに13条と12条の話ができます。
——金沢で。
・スウさんの「13条のうた」を、学童や保育園の保護者さんたちの集まりの席で歌っています。今度は合唱団でも歌います。
——愛知で、福岡で。
・地域の図書館に、けんぽうBOOKを寄贈しています。私のできる12条。
——いろんな市や町で。

こんなふうに時間差で届くおつりの報告の数々が、私をはげまし希望をわけてくれています。おつりの中には、本は読んでくださったけど、まだ実際にはお会いしたことのない方からのものも。

話を聞いたり、本を読んだりした後の、何かせずにはいられない、というきもちは、どうやら単語な感想の多くに共通する、“意外性＝！”と関係がありそうだなと、このところ思うようになりました。

憲法ってこんなもの、と思いこんでいたのが、え、そうじゃなかったの⁉ってびっくりするところから、何かが始まる。自分の知らなかったこと、意外に感じたことを、結構高い割合いで、それぞれがまわりの人に自分から少し伝えてみたくなるらしいのです。

私自身、憲法を学んでいく過程で、そうだったの？知らなかったよ！という発見がいくつもあって、その新鮮な驚きをこそ伝えたい、と思って語っているので、そのきもち、とってもよくわかる。

今までどこか遠くの他人事みたいに思えていた憲法が、我が身にぐいと近づいて来る、自分ごとだと気がつく、そのきっかけって、案外そんなふうに感情が動いた瞬間なのかもしれないな、と思っています。

おこひるかふぇ

昨年、松本と長野のけんぽうかふぇに来てくれたNさんは、「暮らしのこと、憲法のこと、気楽に語れる会をはじめることにしました。スウさんのけんぽうBOOKの紹介もしながら、名づけて“おこひるかふぇ”を」と知らせてくれました。

テレビのニュースを見たり、新聞を読んだり、仕事をしたり、食事を作ったり……。毎日一生懸命生きていて、それで十分だと思ってきたけれど、なんだか最近、胸の中がザワザワ騒がしい。憲法が変わったら、戦争ができる国になっちゃうってホント？　TPPが始まったら、いつも野菜を買わせてもらっている地元の農家さん達は大丈夫？夏の参院選て、そんなに大切なの？　デモやシュプレヒコールは苦手だけど、この胸のザワザワを、誰かに伝えたい！　一緒に考えたい！　そんな気持ちで立ち上げたのが『おこひるかふぇ』です。

おこひる一品、気になる新聞記事、など持ち寄りで。

おこひる、とは、その地方の方言で、ちいさなおひるとか、おやつ、という意味なのだとか。その第一回目はこんなだったそうです。

呼びかけに集まってくれた10数人と、初めてのおこひるかふぇをしました。自己紹介や、どうしてここに来ようと思ったのか聞きあう時間、そしてなかなか政治のことを本音でおしゃべりできる機会がない、若い人たちに関心を持ってもらう

にはどうしたら良いだろう？そんなことも話題に出ました。

「おこひるかふぇ、良いよね！同時多発的にこんな場所が増えればいいんじゃないかな？」と言ってくれた人もいます。

かふぇの最後に、この会に来て、1番心に残ったことをジャバラ本にひとことずつ書いていっていただきました。このジャバラ本はどんどん足していけるので、これからも続けていきます。いろんな思いが積み重なっていくといいなぁ～と思います。

～ジャバラ本より～

・ひとりの想いを3人4人につなげていきましょう！
・考えていること、思ったこと、感じたことを自由に話せる場を持てることが大切だと感じました。
・思っていることをそのまま話せるのが楽しい！おやつ（おこひる）もたのしい！
・ちゃんと考えるようにしよう。
・ママがキーマン。あきらめず、笑顔を武器に、戦うのではなく仲間力で!!
・本当の豊かさとはなんだろう。今の生活を見直すことが小さな一歩になるのでは……。

こんなふうに、憲法と自分の距離がちぢまっていくプロセスを知らせてもらえたこと、私にとっての、とくべつにうれしいおつりでした。

ふつうに話そう

2月の越前への出前けんぽうかふぇのちらしには、タイトルとは別に、「社会のこと、ふつうに話そう、暮らしのことだもの」という言葉が添えられていました。

すっごくいい言葉だね、とちらしを描いてくれた若い絵描きのHさんに伝えると、「それはスウさんからもらった勇気です。最初は勇気がいるけれど、その勇気が暮らしの中で少しづつ当たり前になっていきますように、って思うから。自分はどこの党でもないのに、社会的な話をするだけで政治的とされる、その空気がすごくいやです。政治は社会をより良くする手段であって、社会的なことは自分自身のことなのにね」と、Hさん。

まったく同感。安保や、憲法や、選挙などなど、どれもこれも全部、“せいじてき”とくくられてしまうことに、私もいつもなんだか違和感を感じています。

そうやってひとくくりにして、自分には関係ないこと、と遠ざけておいた方がなんとなく安心という人、もしかしたらたくさんいるのかも。かくいう私からして、紅茶をはじめたころはまさに、政治的なことは自分に関係ない、関心ない、という一人だったので、えらそうなこと、とても言えません。

じゃあ、そんな私にいったい何があったのだっけ？　今思い返してみると、それは決して私一人の力じゃなくって。紅茶に集まる実にいろんな意識を持った人たちが、社会に向けての私のいろんな窓を、コンコン、とノックし、次々とひらいていってくれたのでした。その中で、こんなこと言うとこう思われるかも、ああ思われるかも、と口に出す前から自主規制して、知りたいことも、不安なことも、よくわからないままこの世界を生きていかなきゃいけないとしたら、それは私にとっての安心ではなく、むしろずっと不安が大きいことのように、だんだんと思えてきた。子どもを育てていく中では、社会のことも知りたい、知らなきゃ、と私自身がからだで感じていったのです。

Hさんは、私と紅茶の時間のことを「スウさんは、32年間、安心して、社会のこと、自分のこと、語りあえる時間をつくり続けてきました」という言葉で紹介してくれていました。

意図的にそうしてきたわけではないけれど、ふりかえってみれば、おそらくそういうことだったのでしょう。先ず自分から、きもちを話す。きもちの中の一つとして、今の社会の中で気になって

いることも、話す。意味がわからなかったら、訊く。知らないことがあれば、知らない、という。知らない人のことを、決してばかにしない。だって、それはきのうの自分なのだから。

そういう時間を積み重ねていくうち、いつのまにか、社会のことも、暮らしの話とおんなじように話すのが、その場の当たり前になっていく。それが紅茶の時間だった、ということ。

そんな私にとって今、憲法のはなしは確実に、暮らしのはなしなのだと思えます。その空気を、聴く人たちに届けたい。越前にかぎらず、どの場へ行く時も、私はその想いを持って、出前の旅にでかけています。

未来に向けて

このところ、20〜30代の、子育て真っ最中のママたちがけんぽうかふぇによんでくれることがふえてきました。各地の「ママの会」からよんでもらうことも（2015年から全国各地で「安保関連法に反対するママの会」が続々と立ち上がっています）。

そんな場では、ママが赤ちゃんを抱っこしておっぱいあげたり、おしめかえたり、子どもたちが室内を駆け回ったり……という中で語ります。時には若いパパたちが、2時間はじっとしていられない元気な子どもたちの、保育係も兼ねての参加、という場面もよくあって、なおうれしいことです。

若いママやパパたちに語りながら、私は今、この幼子たちの未来にむけて、憲法を語っているのだ、と感じる瞬間がたびたびあります。

私が“私”という、ほかの誰ともとりかえのきかない存在であること。私には、私らしくしあわせに生きていく権利があるということ。それが、13条の謳う「個人の尊厳」。

だけど、自民党の目指す改憲案では、13条の「個人として尊重」から、個、が削除されて、「人として尊重」という言葉に置き換わっています。個、という言葉には、それぞれの人格や個性、違い、オリジナリティがこめられているはずなのに、それをあえて取っ払ってしまおうって、いったいどういう理由があるのだろう。それは、私が私であるための、あなたがあなたであるための、もっとも大切な自由と権利を、私からうばうことではないの？

私は、いま目の前にいる、この子にも、あの子にも、それぞれがその子らしく生きていける未来を、なんとしても手渡したい。そう願うからこそ、私はこうして、むずかしくない私の言葉で、憲法を語っています。それが、憲法の専門家ではない私のできる、12条。

私が私であるために、あなたがあなたであるために、私は私の、不断の努力の12条を、普段から、息するようにしていこう。13条と12条はまさにコインの裏表、切り離すことのできない一体のもの。そう確信している私なので。

2016.2.7

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

三　七　日

1. 仏は存在するか？

大乗仏教圏の多くでは得度(とくど)をして僧侶になります。得度とは、本来、此岸から彼岸に渡ることなので、仏になることです。だから、「度」と称することもあります。

最近、得度をして間もない友人から質問を受けました。「お参りをしているとき、本当に仏さんがいると思ってお参りをしているのか？」と。

私も同じような思いを持ちました。得度をしたのだから、お坊さんです。お参りのお同行(どうぎょう)の先頭に座ってお経をあげるのです。後ろに座っている人から、「本当に仏様はいるのですか？」と問いかけられたらどうしよう、と思いました。声に出して問われなくても、無言で問われているような気がしていました。

この質問に対する今の私の答えは、「存在すると思います」です。物理的な証拠を示すことはできませんが、私はその存在を信じていま

す。しかし、友人の質問は、どうすれば存在するなんて思えるのかと言うことです。

私は、「御門徒さんの所に行って、お参りをさせてもらうことです」と答えになっていないような返答をします。その理由は、浄土真宗が在家仏教という特質を持っているからだと言うのです。

2. 親鸞聖人と家族

ここで浄土真宗の特質などと言ったのですから、開祖の親鸞聖人の生涯を簡単に紹介しておきます。

親鸞聖人は、平安時代末期から鎌倉時代前期に生きた人です。親鸞聖人は九歳で、天台宗で出家得度をするのです。九歳ですから、天台宗の小僧さんになったのです。私は九歳の少年が一念発起して、仏門を叩いたとは思いません。斜陽貴族の息子として生まれ、母親は消息不明で、父親は政変に荷担して失脚と言うのですから、育てる人がいなくなったので、お寺の小僧さんにされたのだと思います。小僧さんになれば死なずにすむ、と言うのが実情ではなかったかと思います。それだけに、九歳の少年は、不安であったろうし、ずいぶんと寂しかったろうと想像します。

親鸞聖人が比叡山を下りるのは、二十九歳の時です。当時、京都の町で念仏の教えを説いていた法然聖人の弟子になったのです。親鸞聖人は生涯、法然聖人のことを師としてだけでなく、親のような存在として思ったそうです。同じく法然聖人の弟子であった恵信尼という女性と恋愛関係になり、法然聖人の仲介で結婚をしたのです。家族ができたのです。つまり出家ではなくなったのです。出家とは、家族を煩悩の対象と見なす、すなわち仏道を邁進するのに家族をブレーキと考えるのです。だから家族を捨てることです。

結婚を三十代前半頃と考えると四十代後半から五十代は、子育ての忙しかった頃でしょう。この二人の間に五人の子供があったそうです。子育ての忙しさは五十代まで続いたでしょう。この時期、親鸞聖人の主著『教行信証』の執筆中であり、盛んに布教活動をした時代です。忙殺されるように生活をする時代は、振り返ってみれば人生の最もいい時代かもしれません。幸せとは、物質的にまた経済的にゆとりのある

状態ではないのかもしれません。この時代の親鸞聖人の行動半径は 30～40 キロメートルほどだったそうです。決して遠い距離ではありません。親鸞聖人は、遠くに出掛けなかったのです。家族の味を知らずに育った親鸞聖人にとっては、幸せだったのでしょう。いそいそと家族の元に帰っていく姿が想像されます。

六十歳前後より、この夫婦は別に暮らします。親鸞聖人は末娘と京都で、奥様の恵信尼さんは他の子や孫と越後、今の上越市で暮らされます。なぜ二カ所に分かれて暮らすことになったかは、定かではありません。私は、この家族に何かショッキングな出来事があったのではないかとも思います。

京都の長岡京市に光明寺という浄土宗の本山があります。このお寺に法然聖人のお墓があります。このお墓に、30 センチ程の木彫りの童子の人形があるそうです。光明寺の言い伝えによると、この人形は親鸞聖人が置いて行かれたそうです。

この言い伝えが真実であるなら、親鸞聖人は誰か大切な方を亡くされたのではないかと想像します。それも、若い、あるいは幼い方ではなかったでしょうか。関東から京都に戻った親鸞聖人は、親のように慕っている師のお墓に参って、この人形を置いて行かれたのです。先に極楽浄土においでになる法然聖人に、後から行った自分の大切な誰かを、「どうかよろしくお願いします」と手を合わされた姿を想像します。

親鸞聖人は九十歳で亡くなるまで、晩年を京都で過ごされます。この間に親鸞聖人が関東の方々に書かれた手紙が残っています。その中に、自分が死んだら〇〇のことを気の毒に思って、よろしくお願いします、と言う手紙があります。この〇〇というのは、覚信尼ではないかとも言われています。覚信尼とは、京都で自分の世話をしてくれている末娘です。自分の死後、娘のことを案ずるのは、とても自然な感情でしょう。家族というのは、その存在に幸せを感じながら、全員が永遠に生きることはできません。そこには必ず死が訪れます。それぞれが、送る気持ち、送られる気持ちを持つのです。この気持ちはとても大切なものです。自分以外の人を思いやるのです。この思いこそが、人と人のつながりであり、人と仏のつながりであ

ります。

私たちは、大切なつながりのある方が亡くなると、とても大きな悲しみに打たれます。その中で、大切な方が尊い仏となられたと思うとき、仏様とのお付き合いが始まるのだと思います。

ここで親鸞聖人の生涯を紹介しましたが、私は学者ではありませんので、それぞれの事象に対する検証もできません。この親鸞聖人の生涯を通して、人と人のつながりによる喜びや悲しみが、私たちが仏に出会う契機となればと思います。

3. 母の死

昨年の夏のことでした。御門徒の婦人からお寺に電話がかかってきました。受けたのは坊守(ぼうもり：住職の妻のこと)でした。「私はもういくらも生きられないので、後のことをよろしくお願いします」という話でした。

電話を終えた坊守は、すぐに病院に走ったそうです。その夜、私は坊守からその話を聞きました。そのご婦人はかなり重い肝臓疾患に見えたそうです。病室には、二十三歳と十三歳の姉妹とご主人のお兄さんがいたそうです。ご主人は六年前に私がお葬式をしました。

一週間ほどして、そのお母さんは亡くなりました。悲しいお葬式でした。子供たちを正視できませんでした。子供たちは、涙を流していませんでした。子供たちが泣いていないのに、私が泣くわけにもいきません。子供を残していく母の気持ちを思うと、居たたまれませんでした。

七日参りは、子供たちと伯父さんの三人のお参りでした。二七日の頃だったと思います。子供たちが、まともに食事をしていないような気がしました。

「ご飯をちゃんと食べているの？」

「食べる気がしない」とお姉ちゃんが答えました。

「それはそうかもしれないけれど、無理にでも食べてね」と言って帰りました。お寺に戻ってから、

「手が空いている時にでも、行って彼女らを食事に連れ出してくれないか」と坊守に頼みました。

数日後、坊守は彼女らを食事に誘いました。どこに行こうかと、尋ねるとお姉ちゃんが、回転寿司と言ったそうです。お寿司を食べながら、お姉ちゃんが「お父さんが死んでから、

初めての外食です」って言ったそうです。

私は、彼女らのお父さんが亡くなってからお参りをする機会が多くなって、この家の経済状態を想像していました。かなり厳しい生活をしていることは分かっていました。姉は、病院にかかることが多く、母親がよく連れて行きました。しかし、この経済状態ですから、母親は自分の病状には目を閉ざしたのかもしれません。多くの親がそうであるように、自分の病気は後回しです。

私は、四十九日の法要で彼女らに話しました。

「あなたたちは、お父さんが亡くなってから、お母さんと一緒にとても苦労をしたね。今回、お母さんが亡くなって、苦労はもっと大きくなるだろうと思います。いろんな人々が助けてくれるかもしれないけれど、やっぱりたくさんの苦労をすると思います。

世間では、仏などいないと言う人もあります。けれどもあなたたちには、仏は居るのです。あなたたちは、お母さんの病室に時間が許す限り通いました。お母さんが、どんな気持ちで亡くなったかを知っているでしょう。あなたたちのことを心配して亡くなったでしょう。あなたたちのことを思っているのは、お母さんだけではありません。お父さんもあなたたちのことをずっと思っているのです。お父さんも、お母さんもあなた方のことを、ずっとずっと思っているのです。

この思いこそがあなた方の仏であると、私は思います。いつも私は思われていると感じて生きて下さい。それが仏と共に生きることであり、仏によって育てられるという生き方だと思います」

4. 仏の存在

私は、坊さんとして人々の悲しみのお裾分けを頂きます。その悲しみは、単なる悲しみではなく、とてつもなく大きな教えを含んでいます。私は、お参りさせて頂く中で、仏の存在を共に感じさせてもらうのです。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２０）

中村周平

立命館を卒業して 2 年…「卒業式に来るのもこれが最後かな。」就職、進学、起業…それぞれ違う形の夢を追い、晴れやかな顔で大学を巣立っていく後輩たちを見送りながら、そんなこと思っていました。お世話になった教職員の方々も相次いで退官・退職されることになり、いよいよ大学との繋がりも少なくなっていきました。

そんな分かれのシーズンを終え、新しい年度を迎えました。同志社大学の川井圭司先生とは、その後に何度かメールを交わし、ゴールデンウイーク明けの週からゼミに行かせていただくことになりました。もう行くことはないと思っていた大学…それも他大学の門をくぐることになるとは。人も環境も、まったく繋がりのないところに飛び込むことに多少の躊躇はあったかもしれませんが、立命館を出てから止まっていた事故と向き合う時間がまた動き出そうとしていることに様々な想いを巡らせていました。

「最初はゲストスピーカーとして来てもらうことにしましょう。突然、ゼミに参加するよりそちらのほうが入りやすいと思います」、川井先生の計らいで 3, 4 回生のゼミでプレゼンをさせていただくことになりました。川井先生のゼミ(以下、川井ゼミ)は、スポーツ法政策をテーマとして取り扱っていることもあり、体育会所属の学生やスポーツ経験者の学生が多く在籍していました。スポーツへの関心が高い、中には生活の一部となっている方を前にスポーツ事故の現状を伝えることは、どうしても一つひとつの言葉や表現に気を取られてしまいます。ただただ、スポーツに対する批判に繋がってしまったり、本意が伝わらず事故の「被害者」とでしか思ってもらえないことも考えられるからです。また、これからお世話になる(ゼミに参加させてもらう)うえでも、同志社大学、そして川井ゼミに来た目的や想いを十二分に伝えたいという考えもありました。

「カッコつける必要も、卑下する必要もない。ここで学ばせてもらえるチャンスをもらえて。自分がここで沢山のことを学びたくて。それさえ伝わってくれたら…」。上手く伝えることよりも、気持ちを出し切ることを考えました。緊張しすぎてお腹が痛くなるのは毎度のこと。この日は口がパッサパサになりましたが、両ゼミの学生の方に精一杯の想いは伝えることができたと思います。そして、川井先生からゼミに迎え入れたいというお話がありました。年齢も大学も違い、また突然現れた車いすのおっさんを温かく迎え入れてくださった川井ゼミの皆さんには今でも本当に感謝しています。この日から、私にとって第二の大学生活(モグリ)がスタートしました。

翌々週から、二週間に一度のペースでゼミに参加させていただくことになりました。ゼミでは、週ごとに担当となった学生の方々がスポーツに関する新

聞記事を持ちより、その記事からそれぞれが感じた課題を抽出。その課題について、ゼミ全体で議論し合う形式を取られていました。「八百長」、「スポーツ賭博」、「プロスポーツにおける契約問題」、「スポーツ選手のセカンドキャリア」、次から次に出てくるスポーツに関する記事、そして交わされていく議論。オリンピックやW杯などテレビで放映されるものは人並みに観ていたつもりです。また、ラグビーを始めてからスポーツへの関心は大きくなっていたと思います。それでも、聞いたことのないスポーツに関する取り組みや、テレビなどで耳にしていることであってもその裏をかいた濃密な議論など、初めて気づくこと、学ぶことばかりでした。ＰＬＡＹスポーツとＳＨＯＷスポーツという視点、スポーツビジネスやスポーツによるまちづくりといったスポーツを一つのツールとして捉える考え方、日本と海外におけるスポーツの捉え方や位置づけの違い。ただ一言に「スポーツ」と言っても、こんなに多くの考え方や捉え方があることに大きな驚きを感じていました。

あまりにもスポーツに関する知識が乏しかったため、せっかく参加させていただいているにも関わらず、議論に参加できないことが多々続きました。「せっかく機会をもらっているのに、一つも発言できないなんて。せめてちょっとでも知識を、情報を…」、参加した時のゼミでの学びを少しでも吸収しようと、必死に内容を抑えていきました。そして、次第に「もっと学びたい」という意欲が自然に掻き立てられていきました。川井先生のゼミの運営やゼミ生の方々の積極的に参加される姿勢がそうさせてくれたのだと思います。3 時間という限られた時間の中で、充実感というものを久しぶりに感じていました。

また、3 回生のゼミではプレゼンの機会もいただくことができました。川井ゼミでは新聞発表のほかに、テーマ別に分かれてスポーツの諸問題に関するプレゼンも行われていました。「オリンピック・W杯といった国際ビッグイベント」、「八百長、スポーツ賭博」、「スポーツ選手のドーピング問題」、「大学スポーツの国際比較」、そのようなテーマの中に「スポーツ事故」というテーマに関心を持つ学生の方三人とプレゼンさせてもらうことに。「集団でプレゼンするなんて立命の学部ゼミの時以来やわ。懐かしい以上にちゃんとできるかなぁ」、発表の日が近づくにつれて緊張と不安が増していくのが自分でもわかりました。また何より「スポーツ事故」というテーマを共有することにある不安を感じていました。一緒に発表をさせていただく三人は、共に体育会クラブに所属しておられ日々スポーツと学業の両立に励まれている方々でした。スポーツと密接に関わられている方々に「スポーツ事故」を考えていただくことが、クラブ活動へのモチベーションや怪我に対する認識に悪い意味で影響しないかと危惧せずにはいられませんでした。そんな不安をうち消してくれたのは、プレゼンに向けて行なっていたミーティングでの三人の姿勢でした。今出川と京田辺のキャンパスを頻繁に行き来する忙しい中を縫って、ゼミ以外に内容を討議する時間を設けてくれました。そして、自分たちのやっているスポーツに多いけがの種類や、ご自身の怪我の体験談、練習中に誤ってチームメイトに怪我をさせてしまったことなどを積極的に話していってくれました。そのおかげで、軽度傷害と重症・死亡事故には大きな違いがあること、事故被災者や家族にとって経済的な支援が必要である実態と不足している現状など、私自身の事故の経緯を包み隠さず伝えることができました。プレゼン直前のミーティングでは、立命館の修士論文にも目を通していただき私の今の事故への捉え方や想いも知っていただくことができました。

隔週で…ということでスタートした第二の大学生活。川井先生、そして川井ゼミの学生さんたちの存在が、いつの間にか毎週のようにゼミに参加しようとキャンパスに自分を向かわせてくれていました。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第18回

さよなら渓谷

１．前例のない人生

俺が登校拒否になったばかりの頃だ。母と一緒に市民講座に行った。心の問題についての小さな講座だった。その時の講師だった先生は、30くらいの男性だった。京都から来ているとのことだった。おそらく、あの当時、あの年齢だったということは、学生運動がたけなわだった時期に大学生活を送ったのだろう。髪はやや長めで、細身の人だった。

その時の講座の内容は、「心を変えることで、思わぬ力がわくのだ」というような内容だったと思う。メンタルパワーである。自分で自分の心に暗示をかけて、俺はパワーがあるんだと思いこませるという話。今で言えば、ポジティブ・シンキングということだろうか。当時は、悩んでいても、まだ神経科の敷居は高かった。カウンセリングもほとんどなかった。藁をも掴む思いだった俺と母は、講座が終わった後、その先生に個人的なカウンセリングをしてもらえないかと頼んだ。そして、その翌日、その先生と３人で面談することになった。

当時、俺が学校に行かれなかった、直接的な困難の一つは、スポーツが人並みはずれてできないことだった。

「身体が大きいので、体力があるんだと思われて、なぜ、これくらいのことができないのか」と怒られるんです。

「身体が大きい・小さいなんて、運動神経と関係ないよ。私もスポーツはできなかった。でも、私は逃げなかったよ。恥ずかしい思いをしたけど、がんばった」

その先生は繊細で、優しい人だったのだが、

ここがこの先生の限界だった。「私も頑張ったんだから、君も頑張んなきゃ」こういう返し方をしたら、子供は余計に追い詰められることになる。今の社会の価値観で考えるならば、威圧的な暴言で、できない子の自尊心を傷つける先生に問題がある。暴力的なパワーハラスメントである。ところが、当時はまだ不登校という言葉もなく、子供の人権という言葉もなく、議論が煮詰まっていなかったため、先生のいうことには絶対我慢して従わなくてはならないという社会通念のほうに重みがあり、傷付いた子供の目から教育を見ようとする視点がなかったのだった。

それから２年後、俺は大検を目指して勉強していた。母は宗教に頼るようになり、当時、母が熱心に通っていた宗教団体に話を聞いてもらいに行ったことがある。その時、母の通っていた教区の一番上の女性が、こういった。「もう一度、高校を受験して、高校に行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないとうまくいきません」

そのおばさんは、その時俺と初対面。俺がどういう性格なのかもわからない、どういう経緯で学校に行かれなくなったのかもわからない、俺の心理状態もわからない、ただ、当時は大検なんて全然知られていなくて、高校は行くのが当たり前という考えがあったため、高校はいくべきものと決めつけてかかっていた。その当時、俺は 17 歳。それから高校を受けなおしたとしたら、18 で高校一年生ということになる。確かに大人になれば、3 年くらいの年の差があっても対等につきあえる。しかし、高校生くらいの子にとって、3 年というのは大きなギャップである。学校で浮いた存在になることは目に見えている。彼女は、そういう事情も推し量ろうともせず、ただ社会の大勢に合うか合わないかのみで、良し悪しを判断しているのである。

俺は先駆的な不登校だった。先駆者というのはつらい。前例がないことは大それたことと人は思うのだ。世の中変わっていくのだ。歴史に残る偉大な人たちは、いつだって、世間の常識にはないことを成し遂げたからこそ、偉大とみなされるのに、なぜ、前例のないことを人は偏見の目で見るのだろうか？？？？？

俺は、今でも履歴書を書くのがつらい。俺はサンプル通りの履歴を歩んでいない。俺は規格外なのだ。俺の人生は孤独な人生だった。痛恨の思いを抱えたまま俺は、いつしか 50 代になった。

２．自己肯定感の欠如

今から、もう１５年ほど前のことだ。37 歳の頃、俺は、公立の心の健康増進センターで、法律相談を受けたことがある。俺はその当時、激しい強迫症に悩んでいた。すでに心療内科にも何軒も通い、カウンセラーにも何人もついていたが、不安症は治らず、万一、心配が現実になったとしたら、どれくらいのことだったら法律的に許されるのかを知りたかった。藁をもつかむような思いだった。おそらく、俺のような理由で相談に来る人はいないのだろう。男の弁護士さんが相談に乗ってくれたのだが、「漠然とした問題ですねー」と言われた。

「ちょっとしたミスでクビになるんじゃないかという心配があるんです。どれくらいのミスだったら、法律的に許されるんでしょう

か」

「人間ですからね。例えば答案を一枚なくしたとか、それくらいのことは大丈夫だと思いますよ。学生を殴ったりでもしない限りは、大丈夫だと思うんですが……」

「出席簿が盗まれるんじゃないかと思って、机の鍵のしまる引き出しにしまっているんです。それでも心配なんです」

「出席簿なんて、普通は盗まれないものなんですよ。」

確かにそうだろう。学生の答案やら、出席簿は個人情報なので、俺はどうしても管理に神経質になる。とはいっても、普通の人にはそんなものなんの価値もない。盗まれるのは金目のものなのである。

「まあ、そういう不安症があることを専任の先生に話しておくことですね。」

「でも、そんな不安、わかってくれるでしょうか？」

「大学の先生なんかだったら、わかってくれますよ」

その弁護士さんは大らかで、楽天的な人みたいだった。

あれから 15 年が過ぎた。その間に、強迫症はだいぶマシにはなった。しかし、まだ完治してはいない。俺たちみたいな非常勤講師は、いくつかの大学で仕事をもらって生活をしていく。こういう生活を始めて、もう 23 年が過ぎた。非常勤であることに不満はない。非常勤でいいんだと割り切って生活してきた。専任に比べて収入が少ないのは仕方がない。しかし、何よりも怖いのは、非常勤は一年契約の更新なので、常にきちっと仕事をしなくてはならない。ミスやトラブルが起こすわけにいかない。その心配と闘いながら、俺は２０年以上もの月日を生きてきたため、俺は常に絶望的な状況を想定し、予防線に予防線を張って仕事をする習慣がついてしまっているのだ。

俺はよくいえば、真面目だ。しかし、真面目すぎて、自分を追い詰めてしまう。これはネットで調べたところ、自己肯定感の欠如のせいだと書かれていた。確かにそうだ。俺には自己肯定感がない。全然、自分に自信が持てない。だから、常に人の顔色を伺い、些細なことでも怒られるのではないかとおどおどしながら生活している。それは俺が少年の頃に大きく人生に躓き、誰からも理解してもらえない日々が長かったせいだ。

小学校の高学年からジェンダーの問題に囚われ始めた俺は、その後急下降の人生を歩むことになる。俺の人生を折れ線グラフに例えれば V 字型である。そして、左よりも右のほうが長い変形 V 字型だ。V の尖った部分、すなわち俺の人生のどん底は 15 歳の時にくる。この時、俺は心が壊れたのだった。それから少しずつ這い上がってはきたのだけれど、その上がるスピードは遅すぎて、ほとんど平に近い斜めの上昇カーブにすぎないのである。だから俺は、普通の人が普通にしていく、年相応のことをまったくできずに生きてきた。そのことが俺の自尊感情の低さにつながっている。

38 歳の頃だ。ある不登校の NPO に少しだけ参加した。すると、そこの女性からは、「國友さんの表情を見て思うことは、だいぶ立ち直ってはいらっしゃるけど、まだ完全には吹っ切れてはいないというところでいらっしゃるのではないかしら」と言われた。その通りだった。38 になっても、俺の人生はまだ不登

校が重く影を落としていたのである。これだけ長く苦しんできた俺は、様々な葛藤を抱えながら、苦しみ抜いて生きていた。

しかし、普通の人はそれをわかってくれない。俺は天涯孤独なのだ。

３． 異性はわかってくれない。

孤独であることはおおっぴらに言わないように気をつけている。俺が孤独だということをもらすと、人によっては、俺が結婚していないからだ、女性がいないからだという解釈をしてしまう。カップル幻想、結婚はすべきものという幻想に依存している人はまだまだ多い。

そうじゃないのだ。俺が結婚しない、女性とつきあわないのは、どっちみち理解してくれないことがわかっているからである。

Not Gay という電子本を読んだ。アメリカのレズビアンの女性の学者が書いた本なのだが、彼女は元々がレズだったわけではなく、若い頃は男性とたくさん付き合っていたのが、どうしても男性に違和感を抱く部分があって、ある時、ふとしたきっかけで、女性と関係をもったところ、その関係がとてもよかった。それがレズに転向するきっかけだったというのだ。男は無意識に女性を差別するようなことを言っている。女性の感情に鈍感なことをしている。ジェンダー・センサティヴでない女性だったらそれくらいのことは気にしないのだが、ジェンダーに囚われている女性は、些細なことに激しく反応し、男との関係が結べなくなってしまう。

俺はこのくだりに共感した。俺は彼女の男バージョンである。俺は、この連載に書いてきたとおり、男の人とゲイ関係になったことはないが、男同士の友達の方が心地いい。女性は無意識に男を差別することを言っている。男の感情に鈍感なことをしている。もちろん、男性でもジェンダーに鈍感な人はいるのだが、同性の場合は、自分と同じ宿命を背負ったもの同士だからまだ許せる。しかし、女性から言われると、「女のあなたに、なぜ、男の苦しみがわかるんだ！」と俺は激しく反発してしまうのである。

４.『さよなら渓谷』

『さよなら渓谷』(大森立嗣監督・2013) は、やや、観念的な話であることは否めない。真木よう子が出色の演技で、この年の主演女優賞をいくつも受賞したが、複雑な設定の映画である。彼女が演じるヒロインは、高校生の時に野球部の連中に集団レイプを受け、そのトラウマで、男との関係が上手くいかず、自殺未遂や失踪を繰り返し、今は、自分をレイプした男の一人である尾崎（大西信満）と暮らしているという設定である。ストーリーは、尾崎が殺人の容疑をかけられ、尾崎に関心をもった記者 (大森南朋) が解き明かしていく、ちょっとしたミステリー仕立てとなっている。

この映画で、記者の部下の女性（小林杏）は、「自分をレイプした相手と一緒に暮らすって私にはわかりません。でも、その場合だとバレる心配がないんですよね。いつもオドオドする必要もないし……」と述懐する。なるほど、レイプされた過去を十分知っている相手だから、隠し事をしなくてすむから楽な面もあるのだ。

確かに、そうだ。俺の人生に重ね合わせる

と、俺はずっと自分が不登校だという過去に触れられるのを恐れて生きてきた。俺が博多の大学にも受かっていながら、京都の大学に来てしまったのは、一つには過去を消したいという思いがあったからだ。しかし、その一方で、博多の大学だったら、俺がいじめられっ子で不登校になったことを知っているやつも何人もいたから、バレることを恐れてオドオドすることはなかったのかもしれない。俺は、過去のことは全て九州の風土のせいにし、京都での新生活をスタートさせようとしたのだが、俺の大学生活は偽りのアイデンティティの上に築かれたものだったため、うまくは行かなかった。俺の人生の最大の事件（トラウマ）イコール俺のアイデンティティであり、それを隠蔽した形で生きることは、つねに何かが胸につかえているという状況だった。こういう状態で、楽しい人間関係が築けるわけはなかったのだ。

『さよなら渓谷』のヒロインは、尾崎と暮らしながらも、時として彼のことを激しく責める。「私たちは幸せになるための結婚ではないのだ」という台詞も出てくる。尾崎は罪を悔改めようとしているが、むしろ、彼女はそれを断固として認めない。「あなたを私以上に不幸にしたい」というのも彼女の本音であり、彼女は彼を苦しめたいのである。彼女が彼と暮らすのは、彼に罪を忘れさせないための復讐である。彼女は常に彼といることで、「あなたは加害者なんだ」というメッセージを、彼に突きつけ続ける。

この気持ちも俺にはよくわかる。俺は今でも、自分を苦しめたやつを許していない。許してしまったら、俺のこれまでの人生はなんだったのか、トラウマに苦しみ続けた人生は何だったのか、その意味がわからなくなってしまうからである。俺は過去に囚われているので、「いつまでも過去のことを反芻していたら、憎しみが大きくなっていくわよ」と言われることがあるのだが、反芻とは牛など動物たちが消化吸収するためにすることであることを思い出して欲しい。トラウマを背負う人々が、トラウマが大きくなるとわかっていながらも、反芻をやめられないのは、過去を消化吸収できないからなのである。その体験が忌まわしいものであるほど、反芻は延々と続いていく。トラウマの厄介さはそこにある。

こう考えてくると、『さよなら渓谷』ののトラウマの描き方は極めて秀逸である。

と思いながらも、男の俺は、俺のほうがもっと不幸だと言いたくなる。この映画のヒロインと俺が違っているのは、俺のトラウマはまだ認知されていないということである。女性がレイプされるということは、最大級の女性差別であり、トラウマとして認知され、加害者は、殺人と同等の重い罪に処される可能性もある。しかし、男性ジェンダーで苦しみ、女性に凌辱され、男としてのプライドをずたずたに傷つけられた俺の苦しみは、まだ社会が認知しない。去年だったかネットに、30年ほど前の少女時代に性的虐待を受け、その後、精神障害者となった女性の訴えが認められ、魂の殺人として、相手の男に多額の慰謝料を払う判決がだされたという記事が出たことを記憶している。俺は、40年前に自分の魂を殺された身だが、俺が訴えても、慰謝料請求は認めてはもらえないだろう。

これを言うと、「男性被害が認められないのは、男性の被害者は女性に比べると少ないから仕方がない」と反論されるだろうが、少な

いからこそ、当事者のトラウマは余計に重くなる。同情してくれる人、理解してくれる人がそれだけ少なくなるからである。そして、男の被害が日の目を見ないのは、「男は被害者になるべきではない」という抑圧がまだまだ強いからなのである。その抑圧がなくなれば、被害をカムアウトする男性はたくさん出てくることは間違いないのだ。

５．スポーツマンとナード

まだまだ男性被害を正面から見据えた映画が出るのは先のことになるだろうが、『さよなら渓谷』がいいのは、男を完全な悪者には描いていないところである。

記者の男と部下の女性との間で次のようなやりとりが出てくる。「被害・加害という単純なもんじゃないんだ」という男、「加害者に共感していませんか」という女。

この記者の男は、元々はラグビー部でならした男である。しかし、今となっては、妻とも上手くいかず、身体もすっかりたるんでしまっている。映画の序盤で、妻と喧嘩をした後の彼が、服を脱いで、自分の裸を鏡に写してみる場面は、一つの象徴的な場面だ。

彼は、かつては野球部だった尾崎に「スポーツしかやってこなかった人間は、やめると何もなくなっちゃいますよね」と語りかける。どこかしら、彼に引かれ、共感するものを感じているのである。また別の場面で、部下の女が、「でもなんでなんでしょうかねー。運動部ネタって、さわやかネタか、集団レイプ事件、その中間がないっていう」と語る場面があるが、これは男にはピンとくる。

スポーツができなかった俺は、体育系の男が羨ましい。彼らは爽やかだし、目標がはっきりしているし、他の男たちと熱いホモソーシャルな絆で結ばれているので、なんとも男性的な魅力がある。

しかし、こういう男ばかりが集まると、男性性が高まって、男集団のモビングが起きる。集団レイプ事件が起きるのはそのせいである。男からしてみれば、男が女とやりたいと思うのは当たり前のこと。集団になると気が大きくなるし、その時の勢いでやったこと。女性を凌辱しているとまでは思っていない。しかし、女にとっては、それが深刻なトラウマとなり、そのせいで、その後の男性関係まで、うまくいかなくなっていくのである。

俺はこの逆バージョンの男だ。この連載で何度も書いた通り、俺は女の子たちからモビングを受けた。おそらく、俺にモビングをして、俺の魂を殺した彼女たちは、俺のことなど覚えてもいない。その時の感情にまかせてしたことで、それほど深い思いはないのだ。しかし、俺は、そのことに深く傷つき、その後の女性関係が上手くいかなくなってしまった。おまけに俺は男だから、誰も同情も理解もしてくれない。

また、この映画では、かつてはスポーツをしてきた男のしょぼくれた姿が描かれる。その部分も注目に値するところだ。

これはアメリカ映画だが、『ナーズの復讐』（ジェフ・カニュー監督・1984）というコメディがある。ナード（nerd）とはガリ勉やオタクっぽい男性のことを指す。この映画は、大学を舞台に、大きなメガネをかけて、青白い、ナーズたちが、マッチョで体躯のいい体育系の連中からいじめられ、それからコンピューターを使って復讐していくという物語で

ある。今の社会では、肉体的な力よりも知性が尊重されるため、むしろ、ナーズのほうが社会的にはエリートになる可能性が高いのだが、男性的魅力という部分で体育系のほうが数等上であり、そのことがわかっている彼らはナードたちを馬鹿にするのだ。アメリカはとりわけマッチョの伝統が強いというせいもあるが、日本でも同様である。現に俺は、勉強はできないわけではなかったが、スポーツができなかったがゆえに馬鹿にされ続けたのだから。

今でも、覚えているのは、中学に入る時の従姉の何気ない言葉だった。「文化部に入りたい」と思っている俺に、彼女はいうのだ。「男だからねー。スポーツに入ったほうがいいわよ」若い女性たちは見た目の格好良さだけで男を見ている。昔から映画では、「女は娼婦男は軍人」と言われる。すなわち、女優は娼婦を演じた時が一番輝いて見え、男優は軍人役の時に最も魅力的に見える。娼婦と軍人というのは、究極のジェンダーであり、だからこそ性的魅力があるのだ。

『さよなら渓谷』では、レイプされる女が娼婦、運動部の連中が軍人を敷衍させた形である。レイプされる女も運動部の連中も究極のジェンダーの姿だからである。そういえば、ポルノやアダルトビデオでもレイプは頻繁に描かれる。レイプされる女は魅力的だから、レイプしてもいい、そういう考えが若い男の子たちの幼稚な脳裏にあったとしたら、それは大問題だが、その一方で、スポーツができる男のほうが魅力的・カッコいいと、ナードを馬鹿にする若い女性も問題なのである。

スポーツマンを否定しているのではない。しかし、それを間違った形で礼賛するのも問題。過度の男性性は支配へとつながっていくからである。

この映画は、ヒロインが置き手紙を残して去った後、かつてのスポーツマン２人が、しょぼくれた様子で、よりそうところで終わっていく。俺のことを深く傷つけた中学時代の体育教師は、今、どこかで苦しんでくれているだろうか。俺の心を傷つけたことに気づいてくれているだろうか。そんなことを考えた。

加害者になるにせよ、被害者になるにせよ、どっちにしろ、男は痛し、です。

援助職のリカハ□リー

《17》

～「肩入れ」した支援後「肩抜き」できず「喪失」食らう～

袴田 洋子

２週間ほど前、今の仕事、ケアマネジャーを辞めようと思いました。職場の定例会議で、「ケアマネを辞めようと思っています」と、宣言しました。社内での人間関係に疲れ果てたのと、利用者さんの生活を「支える」というよりも「管理する」ように見える最近のケアプランのモデル書式に嫌悪感と虚無感を覚えて、「もう、辞めよう」と思いました。燃え尽き症候群という状態だったのかもしれません。16 年やってきたのだから、十分じゃないか、ここらで一休みしてもいいじゃないか、と、自分を納得させる言葉が次々に頭に浮かんできました。そして、もともとの看護の道に戻って、専門職としての学びを深めていこうと、病院の求人に応募する気まんまんでした。しかし、ケアマネジャーを辞めるということは、担当している利用者さんを別のケアマネジャーに引き継いでもらわなければなりません。これが、最も悩ましいことで、長い方だと介護保険のスタート当時からのお付き合いなので 16 年になっています。時間の長さに関わらず、本人と家族の間に生じる愛憎、葛藤を間近で見て、共に感じてきたと思っている私は、「その葛藤の土俵から、自分だけ降りられない」と思いました。そして、再び、独立開業して、自分だけの事務所で、自分らしくソーシャルワークの仕事をしようと思いました。何度も回り道をして、ようやくたどり着いた「ありのままの自分でよい」なのかなと思います。

《「尊厳死」の実現とは》

仕事をしながら通う専門職大学院の学生となった私は、ぼろぼろに疲れ果てながらも、同志が集う「居場所」を得られて、幸せな院生生活を送っていました。が、実践研究テーマとして

掲げた「尊厳死」の実現を目指す支援について、四苦八苦していました。本人が望んでいない延命治療をされないために、エンディングノートを支援の中で使いたいと考えて、パイロットスタディとして、ゼミ仲間と指導教官にエンディングノートを書いてもらいました。しかし、「自分史」を冒頭に書くエンディングノートというのは、書くのに大変なエネルギーが要ることがわかり（自分もやってみてその大変さが初めてわかりました）、ノートを支援の中で使うことは断念しました。そして、エンディングノートではなく、終末期の医療について、自分の希望を記しておく「リビングウィル」を使ってみようと考えました。

《「支援」のためのリビングウィル》

ネットで、「リビングウィル」を検索すると、いろいろな「リビングウィル」がヒットしました。市町村で取り組んで作られたものもあり、超高齢化社会に突入した我が国では、終末期の医療をどう受けずにいられないですむか、意識が高まっていることが窺えました。そして、いくつかのリビングウィルを見て、回復が難しい状態になった時に、人工呼吸器を付けるか付けないか、心臓マッサージをするかしないか、人工透析をするかしないかなど、７ー８項目の医療行為を希望するかどうかの意思表示をしておくスタイルは、どれも同じように感じられました。似たようなそれらの書式を見ながら、なんとなく「医療サイドの保身のためのもの」のように思えてきてしまい、「自己決定を支援するもの」として、支援の場面で利用できるようには思えず、実践研究がうまく進められないことに焦ってきていました。

そんなところに、新津ふみ子先生の「経営実践」の講義で、ゲストスピーカーとしていらした宮崎のホームホスピス「かあさんの家」の市原美穂さんの話を聴き、宮崎市で作られたエンディングノートがあることを教えてもらいました。それは、宮崎市の医療、福祉、保健の専門職たちと行政が協働で作ったもので、終末期医療に対する希望のイエス・ノーを記入するだけでなく、「自分の想い」を自由に書くことができるスペースが作られていました。

《「家族」を丸ごと支援したいのだ》

そもそも、私が尊厳死の実現を目指す支援のために、エンディングノートやリビングウィルを使うことを考えた根底にあった動機は、本人と家族を丸ごと支援したいというものでした。本人と家族を分けずに、ひとつの「家族」「世帯」として支援する、ということです。これまで多様な「家族」に

出会い、介護が必要になった「親」と「子」のあいだに生じているさまざまな葛藤を目にしてきました。葛藤がありながらも、なんとか堪えて親の世話をする子（家族）の姿を、いつも自分と重なる想いで見ていました。そんな家族たちが抱える葛藤を少しでも減らせるような支援が、リビングウィルを使ってできないかと考えての実践研究テーマであり、終末期医療の希望について記入するだけでなく、普段、面と向かっては言えないこと、言い難いことを、リビングウィルの書面を介して、本人が家族に伝えたい「想い」を伝えるという支援をしたいと思いました。

こうして、本人の想いを記入する「私が伝えたいこと」のページを挿入した袴田版オリジナルのリビングウィルを作成したところに、一人暮らしの末期がんの A さんのケアマネジメントを担当することになりました。

《在宅独居お看取りの支援》

A さんは、数年前に病気で妻を亡くしていて、比較的多い年金がありながらも、借金で自宅を売却したという、波乱万丈とも言えるような人生で、借金の返済のため、金銭管理等も含めた身の回りの世話をしていた息子さんは、「とんでもない奴だ」と A さんに対して激しく怒っているようでした。70 代の A さんの病状の進行は早く、脊髄への転移がんで、あっという間に歩行ができなくなりました。一人暮らし、歩行ができない、末期がん、介護費用は極力抑えて、最期まで自宅にいる＝自宅でのお看取りという、地域でも前例のない実践事例となりました。

寝たきりになった A さんのお世話のために、1 日に 3 回、ヘルパーさんに入ってもらい、食事、洗濯、掃除、排泄、重度の床ずれのケア等、同居家族がいても大変な介護状態になるような状況でした。A さん宅は、通勤路にあったために、私は朝晩、A さん宅に立ち寄って、様子をみることが日常になっていきました。病状が心配だったこともありますが、それよりも、あの部屋に一人でいるのかと思うと、立ち寄らずにはいられませんでした。A さんは、自分のこれまでの生き方を「馬鹿なことをした。子ども達に本当に迷惑をかけた」といつも後悔の言葉を口にし、世話してくれている息子さんのことを褒めていました。私は、リビングウィルに、その A さんの言葉を書き留めて、息子さんに見てもらうなどをして、息子さんの怒りをなんとか減らすことができないかと、家族システムに役に立つことを意識し続けました。これほどまでに濃密な支援実践はしたことがなく、完全に「肩入れ」「逸脱の援助」をしていましたが、自

分がそのような実践をしてしまっている、と客観視できていればよい、とその時は、開き直っていました。が、感情労働といわれるこの仕事の難しさと、自分の未熟さが、そう簡単にはコトを終結させません。A さんが亡くなった直後に、大学院の卒業の時期を迎え、加えて、アキレス腱の部分断裂をして人生初のギプス固定＆松葉杖で、楽しみにしていた卒業旅行に行けず、私は重度の「喪失感」に襲われてしまいました。

《「肩入れ」したなら「肩抜き」》

寂しくて仕方なく、集中力を欠き、援助者としての自分の未熟さを痛感しました。「肩入れ」したのであれば、「肩抜き」を自在にできないといけません。プロ失格だな、と毎日、自分を責める日が続きました。

「親身になる」という表現は、支援の在り方を表す時に、よく耳にする言葉です。親身になりながらも、援助者が自身をセルフコントロールできるって、たいへんな「スキル」のように思います。今月で、A さんの支援が終了して 1 年が経ち、ようやく「過去」のことになってきました。A さんの支援を振り返ってわかったことは、私自身の個人的な感情が相当に入り込んでいたということでした。自分の父親にできればしたい、と思っていることを私は A さんにしていたと思うし、A さんの不器用さが私自身の不器用さと重なって「肩入れ」したと思うし、息子さんの葛藤は、私自身の親に対して抱いている葛藤と重なっていたし、まあ、挙げればうじゃうじゃ出てきます。ちょー感情的な援助者で情けなくなります。もっとクールに仕事ができれば楽なのにな、と思いつつ、次も同じことをやらかしてしまうような気がしますが、もう二度とこんな思いはしたくないと思っています。「ありのままの自分」の支援と、戦略の支援は、同時進行が可能なのでしょうか。

周旋家日記 17「キャリア形成について考える⑥－自己管理（セルフマネジメント・セルフコントロール）－」

乾明紀

１．難しい自己管理

昨年の 4 月、友人が新しい教育支援サービスを始めた。高校中退後、偏差値 30 台であったこの友人は、独自の学習方略を確立し、早稲田大学に見事合格した。さらに、この独自の学習方略を 2 チャンネル[1]に投稿したことで、多くの受験生から「受験の神」と称された。そんな受験の神が始めた教育支援サービス[2]の内容は、簡単に言えば受験生の自己管理（セルフマネジメントあるいはセルフコントロール）支援であった。

自己管理とは、①自分の行動を、②自分自身の行動によって、③好ましい内容（行動）に変化させ、④自分が望む結果の生成を目指すことである。学習成果の向上やキャリア形成上の成功は、この自己管理の成否にかかっているといっても過言ではない。しかし、誰もが経験したことがあるように、高い目標を達成するための自己管理は難しいものである。故に友人の教育支援サービスがビジネスとして成立する訳であるが、それほど自己管理は難しい。

高い目標に到達するためには、時に楽しいことを避け、楽しくない行動を増やすことが必要となる。しかしながら、このプロセスには、苦労（コスト）や苦痛が伴う場合が多い。そして、この苦労や苦痛により必要な行動は先延ばしにされ、自己管理が機能しなくなる。恐らくこのプロセスが典型的な失敗パターンではないだろうか。

また、自己管理を難しくさせているもうひとつの原因として、自己管理の成否を精神力の強弱によるものと捉える「迷信」のような思い込みが挙げられる。例えば、「勉強がコツコツできないのは精神力の弱さだ」と、「精神力の弱さ」を勉強という行動が起こらない理由だと捉えてしまうような場合である。このように捉えると行動の原因を分析することや行動を改善するためのアイデアはでてこなくなる。

さらに、「勉強しない人＝精神力の弱い人」、「勉強する人＝精神力の強い人」というようなレッテル（ラベル）を貼ること（ラベリング）で、自己管理に失敗した際に自らを責めてしまうという弊害もある。

行動による 自己管理アプローチ	精神論による 自己管理アプローチ
①自分の行動を	
②自分自身の行動によって	②自分自身の精神力によって
③好ましい内容（行動）に変化させ	
④自分が望む結果の生成を目指す	

図１　２つの自己管理アプローチ

２．行動による自己管理アプローチ

「自分の行動」を制御するものが「自分自身の精神力」という神秘的で手の届きにくいものとして捉えるのではなく、「自分自身の行動」にあると考えるとちょっとした工夫（環境設定）で行動は変化できることが知られている。

[1] このスレッドは「早稲田への道」
http://babayuhei.sakura.ne.jp/r2wsd/wasedahenomiti1.html
[2] センセイプレイス
http://www.senseiplace.com/

例えば、「早起き」という行動であれば、①「起きる」という行動を、②「目覚まし時計をセットする」という行動によって、③「早起き」という行動に変化させ、④自分が望む結果（「早起き」）を生み出すことができる。また、友人の教育支援サービスを受ける受験生をここに当てはめてみると、①「勉強する」という行動を、②「教育支援サービスを受ける」という行動によって、③「より的確な学習方略に基づく勉強」という行動に変化させ、④志望する大学への合格を目指すということになる。

３．自己管理の手法

自分自身の行動による自己管理の代表的な手法として、（１）刺激性制御、（２）自己監視、（３）自己教示、（４）自己契約、（５）自己強化と自己罰がある（杉若, 2011）[3]。

（１）刺激性制御とは、きっかけを変化させる行動である。甘いものを控えるためにお菓子を見えなくすることやポストイットで予定を書くことなどがこれに該当する。

（２）自己監視とは、自らの行動結果をモニターする行動である。家計簿をつけたり、運動のフォームを録画して確認したりすることが該当する。

（３）自己教示は、行動を変化させる「ことば」を自分自身へ語りかけることである。失敗が許されない場面で、「焦らない、落ち着いて、大丈夫」などと語りかけることが該当する。

（４）自己契約は、自らがこれから実施する行動変容の内容とその結果に対する報酬や罰などについて他者と取り決めを交わす行動である。「次のテストで 90 点以上だったらおもちゃをひとつ買って」と子どもがせがむのも自己契約と言える。

（５）自己強化は、行動に強化子を随伴させる行動であり、自己罰は行動に嫌悪刺激を随伴させる行動である。強化子とは行動を増やすことのできる刺激で、本人の喜びや嬉しさにつながるものが多い。また、随伴とは、行動に刺激が伴ったり、行動の直後に刺激を受けたりすることを言う。宿題をしたご褒美におやつを食べたり、大好きな恋人と一緒に勉強したりすることが自己強化に該当する。行動に嫌悪刺激を随伴させることは弊害も多いことが知られており、自己罰より自己強化による自己管理の方が望ましい。

また、これらの手法の他に、他者の存在を活用した自己管理がある。友人が始めた教育支援サービスを受ける受験生がそうである。友人によるとこのサービスで受験生が勉強するようになるのは、学習コーチが受験生の学習行動を見守るからであるという。受験生と学習コーチが直接会話をするのは週 1 回 60 分だけであるにも関わらず、その際のアドバイスと受験生から学習コーチへ学習行動を報告するというタスクにより、孤独な受験勉強も維持・継続されている。

以上、これらの手法を上手に使い分けることができれば、自分の行動は確実に変容し、その結果としてキャリア形成の質も高まっていくのである（つづく）。

[3]杉若 弘子（2011）．できない,でも(少しは)できるようになりたい：セルフ・コントロールの臨床心理学．心理臨床科学 1(1), 17-20

トランスジェンダーをいきる（１６）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

２つの「障碍」のハザマで

１　始めに

鍼灸マッサージ師免許取得後、1 年間の理療科教員要請過程の勉学を経た後、2 年間のインターン生活が始まる。あるとき、行きつけの喫茶店で、当時付き合っていた男と口論していたとき、思いがけなく心理カウンセラーの女性と出会う。阪神・淡路大震災から 3 ヵ月後に、神戸の鍼灸マッサージ治療院に就職した後も、心理カウンセラーの彼女との電話での交流が続く。彼女とのいろいろな議論を重ねていくうちに、社会的に構築されている男らしさ・女らしさを創傷して「ジェンダー」という概念を知り、体の性別と心理的・社会的な性別が不一致であることに改めて向き合わされ、その現象を、「性同一性障碍」という概念を知ることとなる。そこで当時、視覚障碍と性同一性障碍とのハザマで、何を思考し、現在に至っているかについて記述する。

２　心理カウンセラーとの出会い

鍼灸マッサージの免許取得後、1 年間の理療科教員養成課程の勉学を終えたあと、インターンとして就職していたある日、いきつけの喫茶店で、一人だけ異様に声のキーが高い女性が出入りしていた。その人が、心理カウンセラーであることがわかったのは、私がその喫茶店で、当時付き合っていた男と口論になり、仲裁に入ってくれたことがきっかけであった。

当時、喫茶店で口論になった男は、声や話し方が女性性の高かい雰囲気だったので、筆者の好みのタイプであったのだが、その男に彼女がいると知ったとき、筆者はおもいっきりショックを受けた。と同時に、気持ちが男であると自覚していた筆者は、やはり彼との恋は実らない、と知りつつも、日に日に彼への嫉妬心を強めていき、逃げる彼を追いかけるようにして交際を迫った。そんなさなかの彼との口論は、周囲から見ても異様な雰囲気をかもし出していただろうと、今に

なって懐かしく思い出される。

ところで、彼と筆者の口論の仲裁に入ってくれた高いキーの女性の第一印象は、とにかく声のキーが異様に高かったので、高い女性性を連想させた。そのため筆者は、最初のうちは、彼女との接触を拒絶していた。

しかし、彼女と会う回数が増えるにつれ、いろいろな話をしていたあるとき、筆者はいつの間にか、既存のジェンダー、特に、自己への社会的・文化的な「女らしさ」を押し付けられることへの不満を話題にしていた。筆者のそのような話題に彼女は共感し、自分が心理カウンセラーであることを明かしてた。そして、彼女自身も、既存のジェンダー役割への疑問を持っていることを吐露してくれた。それ以降、彼女と筆者との間で、ジェンダーの話題で意気投合した。彼女との出会いが、後に後述するように、「性別違和感」の正体を明らかにし、約 12 年間、筆者の友人として、この「性別違和感」について議論し合うことになる。

3　衝撃的な言葉に説得と納得

①「性別違和感」に付与された障碍名

阪神・淡路大震災が発生した 1995 年 3 月、インターンが終了し、同年 5 月から、最神戸の鍼灸マッサージ治療院に勤務した。その勤務の傍ら、筆者と心理カウンセラーである彼女は電話で、「性別違和感」について議論したり、京都で会ったりしていた。

そんなある日、筆者がいつものように女性性を押し付けられることへの違和感を話題にしたとき、彼女から衝撃的な言葉を聞かされた。「あなたのように、体の性別と自分が認識している性別が一致しない人のことを、「性同一性障碍」って言うのよ」。

この言葉は、「衝撃的な障碍名」として、当時の筆者の前に立ち表れた。すなわち、今まで抱いていた「性別違和感」は、そのままそっくり「障碍名」として証明されたと感じたからである。

②2 つの「障碍」の間にある質の違い

その一方で、「性同一性障碍」という言葉に対して、以下のようなことにも気づかされ、ショックを受けた。

筆者の場合、生来の「視覚障碍」は、自己の自覚に関わらず、「身体障碍」として認識していた。したがって、この場合の「障碍」という言葉に関しては、比較的自然な形で需要することができた。しかし、もう 1 つの生来の「性別違和感」を「性同一性障碍」として提示された場合、そこには自己の自覚が多分にあり、悩んでいたが、それをあえて「障碍」と提示されたことによって、「視覚障碍」と「性同一性障碍」の 2 つの「障碍」の間に質の違いがあることにいやおうなく気づかされた。この 2 つの「障碍」の間の質の違いとは、両者の「障碍」の間に注がれる社会の側のまなざしの相違である。すなわち、視覚障碍に対しては、差別や排除のまなざしがあるとはいえ、比較的厳格さは少ないと思われる。これに対して、性同一性障碍の場合、いくら「障碍」と提示してみても、視覚障碍とは異なり、身体の領域による性差の厳格さと、ジェンダーの領域による性差の厳格さという 2 つの厳格さによって、視覚障碍より差別と排除のまなざしが強いということである。さらに、視覚障碍の場合は、白杖の携帯や行動・文字情報の制限など、機能障碍による制限や社会的に不利な扱いを受けていることが表面化しやすい。これに対して、性同一性

障碍の場合は、身体に何らの障碍も認められないので、日常生活への直接の困難が本人にしかわからず、まして性別違和感など口にすることもはばかられる傾向にある。このため、「障碍」と提示しても、なかなか表面化しにくい。したがって、筆者の場合は、「視覚障碍」は表面化しても、「性同一性障碍」は「視覚障碍」に回収され、なかなか表面化しにくいことに気づかされた。このため、「視覚障碍」より障碍の質が重度であることに気づかざるを得ない、という状況が、当時の筆者を困惑させた。

③新たに知った、「トランスジェンダー」・「トランスセクシュアル」という言葉

そのような「障碍の質の違い」に戸惑いつつも、生来からの性別違和感を「性同一性障碍」という疾患名として納得した。そして、自ら女性であることへの違和感について、心理カウンセラーからあらゆる角度で質問された結果、次のようなことに気づかされた。

乳房のふくらみや生理・声の高さ、あるいは女子トイレや女子更衣室使用の際の苦痛など、身体レベルでの違和感もさることながら、女性の友達より、男性の友達の方が付き合いやすいなど、社会的・文化的に構築された女性ジェンダーへの違和感の方が顕著に現れていた。そこで、当時の筆者の認識として、ジェンダーレベルでの性別違和感の強い現象を「トランスジェンダー」、身体レベルでの性別違和感が強い現象を「トランスセクシュアル」という言葉も同時に知った。

1995 年当時、「性同一性障碍」という言葉は、社会的にまだ認知され始めたばかりであった。このため、一般的に浸透しているとはいえなかったが、心理カウンセラーとのこのような話し合いによって、「性同一性障碍」という言葉が、当時の筆者の認識として、生来の性別違和感を自己証明する上で納得し、他者への説明に関しても説得力を持つのではという安堵感を覚えた。

④情報収集

このやりとり以後、メディアや書籍による情報収集を行い、その都度心理カウンセラーと議論することになる。

（1）MTF 歯科医師の苦悩への共感

1998 年のある週末の深夜番組である。私とは逆の MTF トランスジェンダー（身体は男性・ジェンダーは女性）の歯科医師のエピソードが報道されていた。そこには、歯科医師の女性性の高い話し方や行動様式のひとつひとつに対する、女性看護師からの突き刺さるような視線に苦悩する様子が描かれていた。視覚に障碍のある筆者は、直接その場面の映像を見ることはできないのだが、歯科医師の語りの内容や声の雰囲気から、その苦悩が手に取るように伝わってきた。

医療現場では、身体の性別が重視される。このため、ジェンダーの性別との不一致への配慮や考慮はほとんどなされていない。このことは、筆者の普段の日常生活や鍼灸マッサージの仕事を通しての体験からも明らかになり、改めて医療現場での性別に対する厳格さをまざまざと見せ付けられたような思いであった。

また、歯科医師自身の男性の身体への強烈な違和感にも注目した。そこには、医学的知識を有する一人の医療者として、この局面をどのように受容するかが問われる内容であった。このことは、鍼灸マッサージ師である筆者自身の問題とも深く関わった。すなわち、一人の医療者として、自己の身体を嫌悪するという感情が「忌むべきもの」として認識されたこと、その「忌むべき感情」を持ってして、医療行為をしていることへの罪悪感が垣間見えたのである。

このドキュメントをきっかけに、筆者のように「性同一性障碍」に悩む人がいることを知り、また、治療法として、精神療法（カウンセリング）・ホルモン療法と手術療法があることを知った。しかし当時は、社会のまなざしや世間体を意識してか、治療に対しては消極的であった。

（2）FTM トランスジェンダー当事者への性別適合手術のニュースを皮切りに「治療」の 2 文字

1998 年 10 月、埼玉医科大学で、日本で最初の FTM トランスジェンダーへの性別適合手術が行われたニュースを視聴した。このニュースは当時のメディアをにぎわせたが、筆者にとっては朗報であると同時に衝撃を受けた。2001 年放映の『3 年 B 組金八先生』のドラマで、性同一性障碍の生徒のモデルとなった虎井まさ衛の NHK でのドキュメント番組では、米国で女性から男性への性別適合手術を受けるための資金をあらゆる手段で工面し、手術を実現させた内容が語られていた。更に 2002 年 3 月には、競艇の安藤千夏（女子）選手が、自ら性同一性障碍であり、「大将」という男性名に変更し、女子選手から男子選手への移行を記者会見で発表していた。これらの情報をメディアだけではなく、書籍でも確認し、しばしば「点字の男読み」で一夜を明かすことも多かった。

このような情報収集を通じて、筆者の脳裏に浮かび上がったのは「治療」の 2 文字であり、手術の必要性への将来像であった。すなわち、どの時点で「治療」に踏み切るか、どの段階で「手術」を決行するかという人生設計図を描くようになった。しかし、決して自暴自棄になったわけではなく、絶えず心理カウンセラーとのやり取りがあった。「確かに、性別に違和感に苦しむのはわかるけど、今（当時のこと）は無理やり、ホルモン療法や手術療法までしなくても。あなたの場合はトランスジェンダーだから、ホルモンを打つにしても、手術するにしても、もうちょっと考えてもいいんじゃないの？」というのが彼女の意見であった。

FTM トランスジェンダーの色が濃い筆者にとってのホルモン療法や手術は、必要性はあっても、すぐに決行しなくてもよい環境がそこにあった。それは、この話題に対して、常に心理カウンセラーとの対話や議論がスムーズに行われていたからである。

（3）特例法施行

心理カウンセラーも、情報収集に協力してくれた。2004 年 4 月、「性同一性障碍の性別の取り扱いの特例に関する法律（以下、「特例法」と表記）が施行され、性別適合手術を終えた人たちへの戸籍の性別変更が認められた。このことについても、彼女との論争になった。すなわち、ホルモン療法や手術の方向性を模索している筆者に対して、彼女はあくまで冷静に、トランスジェンダーの色が強いことを主張し、手術を思いとどまるよう、筆者を説得し続けた。筆者と心理カウンセラーとの議論は、一見平行線のような議論に見えても、そこには双方の歩み寄りを意識した率直な関係性の下で行われた議論であった。このため、切羽詰ったムードにならなかったのが幸いした。

心理カウンセラーとの議論の結果、また人生設計図を描き直した。すなわち、「両親のどちらかが他界してから」という時期区分を設け、この時点では、限られた資源の中で、男としてのリアルライフ構築、すなわち、服装や髪型など、今すぐにできそうな男としての日常生活を送ること、を念頭においた生活を継続することで、心理カウンセラーとの「性別違和感」の件についての議論はいったん終止符を打つことになった。

４　終わりに――「視覚障碍」と「性別違和感（性同一性障碍）」とのハザマで

「僕にとってはね、視覚障害より、性別違和感の方が、障碍としては重度なんですよ」。

2014 年 4 月のある日、筆者は病院の面談質で、ケースワーカーに訴えるように言った。「もし、僕が何らかの病気で入院するとなれば、僕の性別違和感への配慮はしていただけるのですか？」という相談をしていたときの一幕である。「視覚障碍より、性同一性障碍の方が、障碍としては重度である」という感じ方は、1995 年当時、2 つの障碍のハザマで思考したことと同じである。ただ、現在変化しつつあるのが、「むしろ、社会の側に「障碍」がある」ということだ。つまり、視覚障碍であれば、社会の側が公文書の点字や録音データを用意していない、性同一性障碍であれば、社会の側が男女という 2 つの性別しか用意していない、そればかりか、いろいろな書類の記載欄に「性別」が設けられていること、など、社会の側に「障碍を問う」という姿勢である。既存の社会のあり方を問い直し、その問いを社会に還元していくことで、筆者の「障碍観」が少しずつ変化していくのではないだろうか、というのが、筆者の現在の「2 つの障碍」との向き合い方である。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論
（１６）

岡崎　正明

（広島市）

とある公的相談窓口職員の日常

現在高齢者関係の相談窓口という看板の下で働かせてもらっている。
ときどきひとから「どんな仕事なの？」と聞かれ、答えに困ってしまう。施設の相談から、経済的困窮、財産管理、家族との問題や、ときには高齢者虐待なんて話まで。持ち込まれるテーマは実にさまざまで、なかなかひと口で言い表せない内容だからだ。
おまけに役所の窓口ということもあって、制度利用の事務仕事なんかも結構ある。
そこでこの機会に、ある日常的な３日間の様子を書き記し、みなさんに私の職業生活の一端をご紹介したいと思う。
興味がない人にはどうでもいいかもしれないが、やってみるとこれがなかなか。あらためて自分の仕事を振り返る、いい機会になった。結構がんばって動いてるやん、俺。
なお、この内容は私の実体験をもとに、登場人物や状況を改変・修正・創作した、あくまで架空の３日間であることを断わっておく。フィクションだが、「だいたいこんな感じかー」というのが伝われば幸いである。

〇月×日　月曜日
週の始まり月曜日。エンジンがかかるのに少々時間がかかるのは、私だけではないだろう。ベッドでしばらくボーっと「今日から仕事だなんて夢ではないだろうか」などと考えてしまう。なんとか脳と体を叩き起こして出勤（ここまではノンフィクション）。

職場に着くと一気に現実に。そういえば、虐待ケースで２年前に入所されたＡさん

（80 代男性）が、先週末に施設内で転倒して怪我をしたとの連絡を受けていたことを思い出す。その後の様子を聞くために施設へ連絡。担当者が不在とのことで、また後ほど連絡することとする。
　次に以前から気になっているＢさん（70 代女性）宅への訪問日程の調整を、同僚の保健師とする。同居の息子から激しい暴言があり、派手な親子喧嘩を繰り返す。来週の水曜日の午前中なら在宅しているのではないかとのことで、その日の訪問に決める。

　その後先週金曜の夕方に対応した相談の記録を書く。記録はできるだけその日のうちに書くべきとは思いつつも、終業間際だったり、対応でバタバタしていると翌日以降に持ち越すことが。それでも要点はメモっておき、必要な場合は記録よりも前に上司に相談する。記録の仕事はケース対応すればするだけ増えるが、記録を書く時間は対応すればするだけ減ってしまう。どんなケースワークの現場でも起こる、宿命的ジレンマというやつだ。

　10 時を過ぎたあたりで、開業されているＣ司法書士がそろそろ出勤されている時間なので連絡をとる。以前から関わりを依頼している、認知症のＤさんの成年後見人申立て手続きの件で電話連絡。家族間に意見の食い違いあり、その調整に手間取ったものの、なんとか話し合いが進みつつあるとのこと。

　その後メール連絡が来ていたＥ包括のＦさんに電話連絡。現在進めている、ある小学校区での高齢者の見守り活動組織の立ち上げについて意見を交わす。来月立ち上げ準備のための会議を、地域の町内会長さんや社協の役員さん、民生委員さんと開催する予定。そこでの議題や進め方について協議。打ち合わせを来週することに。

　昼前になって郵便物が届く。毎月届く事業所からの市の委託事業の報告書のチェックと、報酬の支払いのための事務処理を進める。

　そうこうしていたらお昼休憩に。今日は職場に届く配食弁当を食べる。残り時間で先日買った小説の続きを読む。

　午後一番に来客。先週も相談に乗ったＨさん（８０代男性）だ。息子夫婦と同居していたがケンカになって一時友人宅へ。１ 人暮らしの希望をされたため、転居や施設入所、生活保護についての相談に乗ったが、最終的に息子と仲直りして戻ることにしたとのこと。３０分ほど話をされ、「世話になった」と表情良くお礼を言って帰られる。本人さんの希望もあって、こちらから息子さんにも連絡することとなる。明日が仕事が休みとのことで、明日電話することに。

　午前中つながらなかった施設の担当者に連絡。Ａさんの怪我は幸い軽傷だったとのこと。家族への説明も滞りなくできたと。Ａ さんの施設入所については、当初家族は強く反対していたが、話し合いを重ねて何とか理解してもらった経緯があるため、怪我への反応が心配されたが、特に問題なかったようでほっとする。その他、数件の虐待ケースが入所されており、近況も合わせて聞きとる。

午後３時から虐待ケースの処遇検討会議。包括・担当ケアマネ・訪問看護などの関係者が集まる。先週Ｉ包括から連絡があった、Ｊさんご夫婦（８０代認知症の夫婦）の件。数年前に妻が脳梗塞で倒れて麻痺が残り、今は夫が全面的に介護をしている。その夫が最近認知症の症状が進んできて、介護がうまくできなくなってきており、食事や飲み物の世話を忘れたり、怒りっぽくなって妻を叩くことがあるとのこと。
夫の介護負担を軽減させるため、サービスを増やしていくこと。また、夫婦の意向を聞きながら、施設入所に向けても検討を進めていくことに。

会議後に同じＩ包括で先月、経済的虐待の疑いで相談があったＫさん（８０代女性１人暮らし）のその後の動きを聞く。別居している甥がお金の管理をしているが、充分な年金があるはずなのに様々な支払が滞っている。先週久々に甥が本人宅を訪れ、最低限の生活費を渡したが、次回いつ来るかも分からないとのこと。
ケアマネや包括職員が甥に連絡するもなかなかつながらないとのことで、今後の対応を課長や係長も交えて協議。Ｋさんの意向を聞きながら、年金口座の変更手続きや、成年後見人の本人申立てを検討することに。
また近日中に支援関係者で集まって処遇検討会議を行い、情報の共有と今後の役割分担などを話し合うこととした。

包括との話し合いが終わると、もう夕方近く。残った時間で今日対応したケースの記録や、新規ケースのファイル作成をしていたところ、Ｌ包括から電話が入り、新たな虐待通報を受理したとのこと。内容からすぐの保護を必要とするような緊急性はないため、明日朝会議をすることとした。

〇月△日　火曜日
Ｌ包括の担当者が来所し、新規でＭさん（９０代女性）の虐待ケース会議。課長、係長、保健師も出席。本人はグループホームに入所。金銭管理は隣町に住む娘がしている。本人の年金額から考えて毎月の利用料は十分払えるはずだが、すでに半年滞納。施設側が何度も督促し、話し合いをするも支払いが履行されないとのこと。経済的虐待疑いのケースとして対応することを決め、明後日開かれる施設と娘との話し合いに、Ｌ包括が同席して相談に乗っていくこととした。

会議終了後、Ｌ包括の職員と別の虐待ケースＮさん（ネグレクト。８０代男性）のケースで協議。家族の介護に不適切な面があったが、介護サービスを受け入れることで状況が改善されてきたとのこと。家族も以前より協力的になってきているとのことで、引き続き関係者で注意しての経過観察を依頼。

昼近くになり、昨日のＨさんの息子さんに電話連絡。これまでの相談経過を伝え、家族の苦労話も聞きつつ、いつでも相談に乗れることを伝える。息子さんとしても本人の対応に困っているところもあると。介護予防の運動教室などについて話すと「本人が興味を持つかも。外で人と交流するのはいいことだと思うので、１度詳しい話が聞きたい」と。管轄の包括センターから連絡させることとし、電話を終える。

Ｅ包括のＯ保健師に電話連絡し、Ｈさんの件を依頼。息子さんに連絡してもらうこ

ととする。２時間後、Ｏ保健師より連絡があり、「今度息子さんが包括に来所されて話をすることになりました。また結果を報告します」とのことだった。

午前中に対応した、Ｍさん・Ｎさん・Ｈさんのケース記録を作成。その間に高齢者の公共交通機関利用助成制度の問い合わせ電話と、障害者控除の証明についての問い合わせ電話があり対応。そうこうしているとお昼休憩。近くのうどん屋で済ませる。

事務所に戻り、昼休憩も残り１５分程というところで、以前から関わりのあるＰさん（７０代女性）の親族が来所され、話を聞く。Ｐさんは認知症と思われる症状があるが、病識がなく、１人暮らしをしている。被害妄想があり近所の人に苦情を言ってトラブルになったり、泥棒が入ったとの思いから１１０番通報をしたりということがあった。民生委員から連絡を受けたＱ包括が訪問したが、本人「自分でできる。困っていない」と支援を受けようとしない。病院嫌いで受診も拒否。
親族の方が心配して時折差し入れを持って訪問しているが、ここ最近外出が増え、自力で帰られなくなって警察に保護されることがあったと。転倒して膝を痛めたとのことで、明日親族の方と訪問して受診につなげ、この機に介護保険申請に結びつけることに。
親族の方の話では自宅内はゴミが溜まっており、暖房もない状況。このまま放っておけない思いとのことで、医療保護入院の検討も視野に入れることとなる。

その後Ｑ包括職員に状況を伝え、同行訪問を依頼。また近所の整形外科Ｒに連絡して協力を依頼する。明日の訪問に備え、地図で自宅の確認、公用車の手配などをする。

Ｓさん（８０代男性）の甥御さんから電話。Ｓさんは軽度知的障害の１人暮らしの方。若い頃は清掃の仕事をして生計を立てていたが、定年退職後は年金生活。最近認知機能の低下のためか、お金や通帳がどこにいったか分からなくなったり、食事をきちんととれていなかったりということがあり、甥御さんが申立人となって成年後見人選任手続きをすることとなる。電話はそのための相談だった。

午後３時にＴ病院訪問。Ｕさん（８０代女性）ケースの退院に向けたカンファレンスに出席。同居の娘さんが介護していたが、清潔面や食事面、医療的ケアでも適切な介護ができておらず、脱水症状で入院となった。ネグレクトの心配あり。娘さんなりに介護しているが、自身も病気がちだったり、借金で経済的に苦しくてサービスが使いにくかったりがあるとのこと。娘さんの同意を得て、包括や介護サービス事業所、区役所も参加しての話し合いとなる。

午後４時半に帰所。別件で来所していたＱ包括の職員と、明日のＰさん宅訪問前にこれまでの経過確認や、今後の支援方針を協議。この日の仕事が終わった。

〇月□日水曜日
始業後、同僚から昨年まで担当していた業務のことで相談を受けていたところ、相談の電話が入る。県外に住む家族の方で、本人が１人暮らしをしているが、最近弱ってきて心配。介護サービスも考えたいと。担当地区の包括を紹介する。

月曜日に途中までしていた、市の委託事業の報酬を、事業所へ支払う事務処理の続きをする。今月分の送付が無い事業者に電話確認。実績入力をする端末に入力後、報酬支払いのための書類を作成する。途中、別の助成制度の問い合わせがあり対応。

１０時になりＰさん宅訪問。ご親族とＱ包括職員と現地待ち合わせ。呼鈴を鳴らし、声をかけるが反応なし。不在のようで結局この日は会えず。帰宅されたら分かるように、ドアに書置きの手紙を挟んで帰る。帰りにＱ包括の職員と今後の対応を相談する。

事務所に戻り、Ｖさん（８０代女性）のことで担当ケアマネが来所されており話を聞く。以前から同居の娘夫婦との関係がうまくいっておらず、不審なアザが見つかることもあったが、最近は落ち着いているケース。近況報告があり、今後の対応を協議する。

この日は昼当番のため、１２時から食事はせずに電話や窓口対応。慣れない後期高齢者医療保険の償還払いの手続きなどを受ける。「年金のことはどこに聞けばいいのか？」といった電話もあり、年金事務所を案内。

午後１時から昼食で外へ。入ろうと思ったお店に以前相談対応した方がおられ、気まずくなってもいけないかと思い場所を変える。休日に街中で対象者の方や支援関係者に出くわすことも。最近は顔に見覚えがあっても、相談対応した人か、関係者かも分からないことが多い。アラフォーあるある？

昼食後、ケース記録をつけていると電話相談あり。認知症の母を持つ娘さんから、成年後見制度の相談。経済的に厳しいとのことで、法テラスで法律扶助の相談を勧める。

Ｉ包括よりＫさんの処遇検討会議の日程が関係者への調整ができ、決まったとのことで連絡あり。その他、別件Ｗさん（８０代男性）の件で近況報告あり。以前は息子から暴言・暴力があったが、最近はショートステイなどの利用で家族の介護負担が減った結果、状況は改善。しかし本人徘徊癖があり、昼夜を問わず出歩いて道路も車の確認をせずに横断することがあるなど、心配な様子があるとのこと。家族と相談して管轄の交番との連携や、デイサービスを増やすなどの対応をしていくとのことだった。

その後午後３時から外出。高齢者の見守り活動組織作りの事業で、今年度から取組みを始めたＸ包括の担当するＹ小学校区の社協役員さん、町内会長さんらと、地域の集会所で意見交換。地域の方への広報の仕方について相談。特に町内会未加入者は回覧板も行かないため、どうするのか？見守りをしてくれる協力者をどのように集めるのか？といった内容について話し合う。
地域の主体的な活動がなくてはならない事業だが、高齢化や町内会加入率低下で課題も多い。町内会長さんたちから、地域活動の苦労や、市への要望、さらには厳しめの意見までたくさんいただいた。耳の痛い話だが、言ってもらえるということは期待してもらっているということだ。

５時前に事務所に戻り、意見交換の内容について課長らと協議していると終業時間となった。残った仕事は、また明日だ。

以上、まだ１週間を乗り切るまではあと２日を残しているが、だいたいこんな感じで日々仕事をしている。
これを読んで「意外と大変そうだな」とか「案外楽そうだな」とか、いろんな感じ方があると思う。私自身、民間での経験がそれほどないので比較できないが、今のところ苦しくならない程度の業務量になっている気がする。適度な感じで仕事をさせてもらっていると思う。
そういう意味で言い訳できない。いい仕事しなければなあ。

発達のアンバランス

新版K式発達検査をめぐって　その⑬

大谷　多加志

はじめに

就職してから数年後のこと。K 式発達検査講習会の受講希望者が急増した時期がありました。2007 年、特別支援教育がスタートした年でした。特別支援教育が画期的だったのは、それまでは学校では支援の必要性が十分に認識されていなかった「発達障害」に光を当てたことです。教育現場にいたわけでもない外野の目線ですが、その当時の「特別支援教育」は希望と活気に満ちたもののように見えました。TEACCH や構造化など、新しい概念が脚光を浴び、発達障害を持つ子どもたちの特性理解と支援方法に関する研修会などが頻繁に開催されました。結果として、「発達障害」の社会的認識は、飛躍的に高まったと思います。K 式発達検査講習会の受講希望者が増えたのもこの一環であり、発達アセスメントの重要性についての認識と、そのツールとしての発達検査への関心が高まったためでした。その頃から、微妙に違和感を覚えることばがありました。その一つが「発達のアンバランス」です。あちこちで目にする検査報告書に、二言目には「発達のアンバランスがある」ということばが出てくるような印象を持ったのです。もちろん、領域ごとの結果に大きな差がある場合など、合理的な解釈と思えるものが大半です。しかし、「領域間には差はないが、領域内で見ると発達のアンバランスが・・・」、「領域間、領域内のいずれも差はないが、反応の傾向を見ると発達のアンバランスが・・・」など、半ば発達にアンバランスがあることを前提としたような報告書を目にすることもあり、何となく違和感を覚えました。今回は、この「発達のアンバランス」ということばをテーマに考えてみたいと思います。

発達のアンバランス

発達障害とは何でしょうか。自閉スペクトラム症という診断名の「スペクトラム（連続体）」が示すように、その状態像は様々であり、特定の状態像を提示するのは不可能であるように思います。一方で、「発達障害」について一定の共通イメージは形成されてきているようにも思います。医学的な診断基準はひとまずおくとして、身近な感覚として理解しやすいのは、コミュニケーションや対人関係、想像力、感覚などに困難さを持つという点でしょうか。例えば「言葉は流暢に扱うが、一方的で会話がうまく成立しない」という事態はコミュニケーションの問題と考えられますし、「同じ手順を踏まないと納得できない。こだわりがある」とか「それが守られないとパニックを起こ

す」という事態は想像力の障害によるものと考えることができます。このような状態像を指して「発達のアンバランス」ということばが用いられているように思います。

杉山（2011）は、発達障害について「発達凸凹」ということばを用いて説明しています。「発達障害＝発達凸凹＋適応障害」であると捉え、発達凸凹が生活上の困難につながっている場合に、「発達障害」として支援の対象とするべきであるとしています。これは①発達障害の状態像が様々であり、②生活上の困難の程度と特性の強弱は必ずしも比例しないことを考慮し、③支援の必要性によって発達障害の診断を行うという考え方に基づいています。この発達凸凹の考え方は興味深いものですし、発達の凹凸つまり「発達のアンバランス」が発達障害の大きな特徴であると考えられていることの１つの表れとも言えるでしょう。

知能検査における「アンバランス」

一方、知能検査で用いられる用語に「ディスクレパンシー」ということばがあります。これは日本語では「不一致」を意味することばで、個人の持つ知的能力（例えば、言語を扱う知的能力や、パズルなど空間的な操作に関わる知的能力など）の間に明確な差がある場合、能力間に「ディスクレパンシー」がある、ということが検査結果から示されます。

少し脇道に逸れますが、このとき何をもって「明確な差」があると言うかというと、それは統計学的な基準によって示されます。例を挙げてみます。ある中学生が、学校の試験で数学は 50 点、英語は 75 点という結果だったとします。さて、この中学生の数学の学力と、英語の学力に差があると言えるでしょうか？

実は今示した情報だけでは判断ができません。一見すると、点数は英語の方がよいので英語の学力の方が高いと思えるかもしれません。しかし、もし平均点が数学は 30 点、英語は 80 点だったとしたら、どうでしょうか。数学は平均点以上、英語は平均点以下の結果になり、評価が逆転してしまいます。そのため、実際には各教科の偏差値（順位）を比較します。偏差値は、順位がちょうど中間（100 人中なら 50 番）なら 50 になります。さて、では偏差値で比較して数学は 45、英語は 60 であったら、どうでしょう。数学と英語の学力に差があると言えるでしょうか？偏差値が 15 も違いますので、差があるような気がします。それでは 45 と 55 だったら？あるいは 45 と 50 だったら？どのくらい数値が違えば、差があると言えるのでしょうか。このとき、統計学の考えでは、ひとまず数学と英語の学力に差がないと仮定し（これを帰無仮説と言います）、偶然で偏差値 45 と 60 という結果になる確率を考えます。そして、偶然でその結果が生じる可能性がある水準以下の場合、統計学的に差がある（有意差がある）と言うのです。

話を戻します。知能検査の「ディスクレパンシー」も同様に、測定した能力の種類ごとに偏差値のような数値を算出し、その数値を比較することによって能力間に差があるかどうかを判断します。特別支援教育が始まった当初、この「ディスクレパンシー」に注目が集まりました。知能検査の「デ

ィスクレパンシー」は、主に情報処理過程に関わる能力間の差を示すものでしたが、例えば自閉症の子どもの場合、聴覚的・言語的な情報処理より、視覚的な情報処理に優れる傾向があります。知能検査の結果で、視覚情報処理＞聴覚情報処理という結果が示されれば、視覚支援が有効であるなど、支援の方針や手立てを示す根拠にもなります。

ここに、最初に述べた「発達のアンバランス」ということばへの違和感の原因があるように思います。発達障害の方には、発達凸凹（発達のアンバランス）があります。また、情報処理過程にも得意・不得意があることが多いため、知能検査の結果で何らかの「ディスクレパンシー」が示されることも少なくないでしょう。しかし、知能検査は、発達障害の特徴であるコミュニケーションや対人関係、想像力、感覚の問題などを直接的に評価するものではありません。つまり、コミュニケーションや対人関係、想像力、感覚などの問題を持つ人であっても、知能検査で評価されるような情報処理過程には特に偏りはないという場合もあるはずです。発達障害であれば、知能検査や発達検査の結果にも必ずアンバランス（ディスクレパンシー）があるはず、という考えが暗に感じられること。これが違和感の正体のように思いました。

発達検査における「アンバランス」

K 式発達検査の講習会においても、「領域間でどのくらい指数が違えば、有意差があると言えるか」、「プロフィールの凹凸がどのくらいあれば、アンバランスだと言えるか」というご質問をよく受けます。しかし、K 式発達検査に関して言えば、検査法上は「ディスクレパンシー」を示す基準はありません。先に述べたように、検査法上の「ディスクレパンシー」は統計的な根拠によって示されるものです。K 式発達検査の場合は、特にそのような統計的な差を示す基準を作っていないのです。

ここまで、「発達のアンバランス」ということばに対して、やや批判的なことを述べてきたように聞こえるかもしれませんが、発達障害の特徴に「発達のアンバランス」があること自体は間違いないですし、どのようなアンバランスがあるのかをアセスメントしておくことは非常に重要です。ただ思っているのは、知能検査や発達検査を使う時に、これほどまで「アンバランス」にとらわれなくてもよいのではないか、ということです。数値に差があっても無くても、どうしてそのような結果になったのかを考えることができればそれでよくて、むしろ「アンバランスがあります」で何となく落としどころを作ってしまうと、それ以上の深さの検討を止めてしまうことになりはしないかと思うのです。

船曳・廣瀬・川岸・大下・田村・福島・小川・伊藤・吉川・村井（2013）は、自閉症スペクトラムの様々な特性の程度について多面的に評価するためのツールである MSPA（multi-dimensional scale for PDD and ADHD）を開発していますが、その中では MSPA で自閉症の特性について評価し、ベースとなる知的、発達的水準は別の検査で評価するという形式を用いています。発達検査を実施したからといって、その子ど

もの発達のあらゆる側面について、全て理解したり、何かを言い切ったりする必要はないのです。ただ、目の前の子どもの行動、反応をよく観察し、その背景について思いを巡らせ、できるものなら何か役に立つことを 1 つでも見出す。そういうことができる検査者でありたいと思っています。

引用文献

船曳康子・廣瀬公人・川岸久也・大下顕・田村綾菜・福島美和・小川詩乃・伊藤祐康・吉川左紀子・村井俊哉　(2013)　発達障害者の特性理解用レーダーチャートの（MSPA）の作成、及び信頼性の検討 児童精神医学とその近接領域．54(1), 14-26.

杉山登志郎　(2011)　発達障害のいま　講談社現代新書.

バックナンバー

第 10 号　発達検査でわかること
第 11 号　通過・不通過
第 12 号　解釈・見立て・所見
第 13 号　検査手続き
第 14 号　導入
第 15 号　発達検査でわかること②
第 16 号　発達検査のもつイメージ
第 17 号　発達心理学用語講座（K 式編）
第 18 号　発達心理学用語講座(K 式編②)
第 19 号　行動の発達的意味と機能
第 20 号　K 式をめぐる私ごと
第 21 号　改訂に向けて
第 23 号　発達相談①

10 代の母という生き方 ⑭

大川 聡子

★まえがき

前号から引き続き、若年母親グループに関わるボランティアグループメンバーへのインタビューを基に、ボランティアの若年母親に対する認識と支援について明らかにし、若年母親を支える地域づくりについて考察します。

3. 若年母親に関わることの難しさ

1) 【相反する役割期待】

(1) 《母親役割を重視して若年母親をとらえる》

①〈子どもをしつける親として振る舞うべき〉

C さんは、若年母親に最も必要だと思うことは「人の話を聞く」姿勢だと考えていました。スタッフが「Z」が始まる時のあいさつや、今日の流れの説明をしていても、メンバーが友達と話をしている様子を見て、もう少しけじめをつけて欲しいと言う思いを持っていました。

B さんも、子どもをしつける存在として、若年母親自身も親らしく振る舞って欲しいと望んでいました。

（メンバーは）人の話聞きやれへんわね。それが一番（必要だと思う）。（スタッフが）説明してはっても、こっちの友達と隣同士で話したり、（略）「今から（Zを）します」言うても、お隣同士でピャーと話したりしてやるから。ああいうの、もうちょっとけじめつけた方が。（Cさん）

一応、親やねんからね。その(人の話はきちんと聞くという)こと、子どもに言うて聞かせていかなあかんねんからな。（Bさん）

②〈子どもより親の欲求を優先している〉

A さんは、A さんの世代が育児をしてきた時代は子どもが第一でしたが、若年母親は子どものことよりも自分のことが優先となってしまいがちであり、関わり方が難しいと感じていました。

A さん　そういう（自分を優先している）のはちょっと感じるかな。私らの時はね、子どもが第一というか、そういうので来ましたからね。そういうのが、ちょっと分からないかな。(A さん)

自分犠牲にしても子ども優先やもんね。昔はね。今はどうなんやろね？（Cさん）

(2) 《10 代であることを重視して若年母親をとらえる》

①〈自分を優先することは仕方がない〉

B さんは、母親達の年齢を考えると、自分を優先することは仕方がないという思いを持っていました。

そら(子どもよりも自分のものを)欲しいと思うわ。年からいうとな。子どもよりも親のほうがな。そんな思ってもええ年齢やわな。（B さん）

②〈いざとなれば子どもを一番に考えると信じる〉

A さんは、自分中心に考えているように見える若年母親も、いざとなれば子どもを一番に考えるだろうと「信じて」いました。

いざとなったら子どもをね、あれしやる（第一に考える）とは信じてますけど。(A さん)

2) 【若年母親との距離の取り方の難しさ】

(1) 《若年母親側の認識を知りたい》

①〈どのような存在ととらえているのか知りたい〉

B さんは、ボランティアが母親からどのように認識されているのかを気にかけています。しかし、母親側からボランティアに声をかけることは少なく、どのように思われているのだろう、自分達に気を許してくれているのだろうか、という思いを持っていたが、自分の中にとどめていました。

どない向こう（母親たちは）思ってはるのかなって、私は思ったりするんですわ。だから、おばちゃんらに気許してくれてるんやろかなあ。どんな目でおばちゃん達を見てはんのかなあ、って思ったりするんですわ。（B さん）

⑴ 《拒絶されることへの恐れ》

①〈関わることで疎ましく思われることへの恐れ〉

B さんは、若年母親に積極的に話しかけるのを躊躇する理由として、こちらが親切と思ってしたことが相手側にどう受け取られるか分からないこと、相手のバックグラウンドが分からないことを挙げていました。

あの子なんか、１人しょんぼりしてたら、ちょっと声かけてあげたいけどなあ。余計なことなんかなあって、１人思ったりする時あるんですわ。「小さな親切、大きな迷惑やったら困るしな」思うて。（Bさん）

⑴ 《積極的にかかわることの難しさ》

①〈母親たちの周囲の人から助言をもらって欲しい〉

ボランティアは、参加当初のスタッフからの助言や、《拒絶されることへの恐れ》を持っていることから、「自分から積極的に関わることはできないが、何か困ったことがあれば、周囲の人に助言をもらって欲しいという思いを持っていました。

困ったことがあったら、周りの人に（Bさん）
助言してもろてね。（Cさん）
ちょっと声かけてくれはったらええかなと思うだけで、こちらから言うていく事はないと思うんですけどね。（Bさん）

②〈母親側から話しかけてくれればより親しくなれる〉

B さんは、〈疎ましく思われることの恐れ〉から、ボランティア側から話しかけにくいと考えていました。そのため、母親側から話しかけてくれればより親しくなれると感じています。

嫌でなかったら、向こうからお話しなさっていただいたほうがね。より親しくなれるんじゃないかなと思ったりしますね。（Bさん）

⑵【雰囲気づくりに徹する】

①《グループに来所しやすい雰囲気づくり》

〈小言は言わない〉

ボランティアが母親達に積極的に関わりにくい理由として、来所しやすい雰囲気作りへの配慮が挙げられました。ボランティアは、若年母親は育児に対して既に周囲から意見されているだろうと考え、これ以上意見することで、母親がグループ「B」に来にくい状況になることを恐れています。子どもをきちんとみているのならそれで良い、と 10 代らしい育児を容認する発言も聞かれました。

家で言われてたとして、ここへ来てまたそんな小言みたいなこと言われんのが嫌やって思って来はらへんようになったらいかんもんね。そやから、なんにもね？（同意を求める）なんにも。ただもうそこへ来て、なんかあったら、「どうしたん？」「ここ、ケガしてやった。どうしたん？」とか、そんなことぐらいは聞くけど。なんにも「ああしたらいいよ」とか「こうしたらいいよ」とかは言わなかったですね。（Cさん）

〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉

ボランティアは、母親に意見することに対しても「自分の子でもない」からと配慮をしています。そして子どもをきちんと見守ることが、自分達の役割であると認識していました。

（グループに）来やすいようにね、してあげな。やっぱりね。ついついね、私らでも家でも孫に、自分の子でもないのに孫にポンポンとこう言うでしょ。そんな言わんとこかな思うねんけど、ついついね。そういうことやっぱり言われたら、その子自身も嫌やんか。そやから、なるべく言わんほうがええの違うかな。ただ、赤ちゃんさえちゃんと見守ってあげたら、もうそんでいいのかなと思ってね。（Cさん）

〈ほっとできる場づくりに徹する〉

ボランティアは、母親達がほっとできる場作りを意識し、小言のようにとらえられかねない忠告はせず、母親達を見守る姿勢をとっています。

そやから、ここへ来たらもうほっとしたいからね。もうよそからはいろいろ聞きたくないと思うけどね。（Cさん）

親切がな、ひょっとしたら向こうに対してな、苦い言葉になってもいけないし。ここへ来て、ほっとしに来てはんのやったら、それ（こちらから声をかけない）がベストじゃないですかね。（Bさん）

(3) 【関係を構築する】

①《母親達との関係構築》

〈親しみを持って話しかけてくれた〉

若年母親達に「慣れさせられた」というBさんは、「しょんぼりしている母親に声をかけてあげたい」といった、若年母親と積極的に交流したいという思いを持っています。こうした思いに共鳴したのか、母親もBさんに対し気安く話しかけてくることもあるそうです。

ちょっとさっき隣で気安く…まあ話し方はね、ちょっと。でも、案外なんか親しみ持ってくれるような、もの言いをしてくれはったからね。ああっと思ってたんやけど。さしてそんなに(母親達が)変わったとは思わないんですけどね。（Bさん）

Ⅳ．考察

1．ボランティアが持つ若年母親への認識の変化

若年母親は、「10 代」であり「母親」であるという、2 つの側面を持っています。こうした母親達を支援するボランティアは、《母親役割を重視した若年母親のとらえ方》と、《10 代であることを重視した若年母親のとらえ方》という、相反する役割期待の中での葛藤が見られました。またボランティアと母親との関わりの中で、《若年母親側の認識を知りたい》という思いはありますが、《拒絶されることへの恐れ》から、関わりたいという思いを持ちつつも若年母親達に積極的に関わることができない状況にありました。しかし、直接的に関わらなくとも、〈子どもを見守ることがボランティアとしての役割〉と認識し、〈ほっとできる場づくりに徹する〉ことで、ボランティアは若年母親を間接的に支援しています。このことから、ボランティアは「B」において母親達と関わる上で距離の取り方に戸惑いつつも、適度な距離感を保ち、関係を構築していくきっかけを作っていると考えました。

若年母親は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取っているため、もしボランティアが小言ととらえられるようなことを言えば、若年母親との関係を築くことは困難だったでしょう。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず少し想像力を広げ、自分たちの思う「親切」が彼女たちにとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、パターナリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」ととらえ、場づくりに徹していました。こうした状況を若年母親達がどのように受け止めているのかは明らかになりませんでしたが、ボランティアに親しみを持って話しかけてくる母親もいることから、母親達もボランティアの役割に気づいており、お互いに理解を深めようとしている過程にあると考えました。このように、ボランティアは若年母親達を見守り、理解しようとすることで、母親達と関係を構築している過程にあると考えました。

大川（2010）の調査では、周囲からの反応に傷つく若年母親たちの存在が示されましたが、ボランティア側も【距離の取り方の難しさ】を感じていることが明らかになりました。これまで若年母親と関わったことのない多くの人々には、彼女らが妊娠や出産に向けてどのような思いを持ち、どのように生活し子育てしているのか、その実態は分かりません。若年母親の実態を知らず関わり方が分からないことが、偏見につながっていくことも考えられます。しかしボランティアは若年母親と関わることにより、母親への視点に変化を生じさせ、若年母親の育児を受け入れ理解しようとしていました。このように地域住民が若年母親の実態を知る機会を作ることが、若年母親の育児支援の一つとして必要であると考えます。

2. 若年母親とボランティアをつなぐ試み

「更生」を目的にボランティアへ参加する更生保護女性会メンバーと、「同年代の母親との交流」を目的に集まってきた若年母親達は、それぞれの目的が異なりますが、こうしたグループがなぜ機能するのでしょうか。その背景には、母親同士という仲間意識と土着性があると考えます。ボランティアは、グループでの若年母親の振る舞いに戸惑いつつも、「母親なのだから、子どもをみてくれると信じている」といったような、母親である者同士の期待を持って若年母親達を見ていました。近隣住民からの意識を敏感に感じる母親達も、ボランティアは受け入れ、グループは機能しています。田間（2001）は、ある個人が、「女性」というアイデンティティを持ち、それが個人にとって重要なアイデンティティである場合、その個人は自己の重要なアイデンティティを維持するためという理由によって母性を主体的に内面化しやすい、といいます。ボランティアは、母性を主体的に内面化したことにより、同じ「母性」を持つ 10 代の母親たちを愛情を持ったまなざしで見守り、支えていると考えられました。さらに、同じ地域に住み生活圏域をともにしているという土着性が、より親しみを感じる要因となっていると考えられます。

こうした、社会的に不利な要因や多様なニーズを持ち、地域におけるつながりを求める人々と、ボランティアとして積極的に地域住民に関わりたいと考える両者を結び付けることは、意義深い取り組みであると考えます。グループ「B」において、ボランティアと母親達とをつなげたのは保健師でした。こうした社会的なニーズを持ち、地域から孤立しやすい人々と地域住民を仲介する役割として、保健師の存在は非常に大きいと思います。保健師の多くは保健所、市町村等の行政機関に所属し、支援が必要な対象者に向けて、個別あるいはグループ支援を行っています。また、地域住民の組織化活動を行っており、地域の住民活動にも精通しています。こうした特徴を生かして、保健師は支援が必要な人と地域住民を仲介し、関係を構築する機会を提供できると考えます。

地域住民とボランティアをつなぐ取り組みとしては、児童委員が子育てサロンを主体的に行っている地域や、乳幼児健診の際に地域の児童委員を紹介する地域もあります(厚生労働省, 2009b)。今後は、地域住民ボランティアや専門職が連携して、お互いの専門知識や経験を基に支援が必要な人々を支える地域づくりを行っていくことが必要でしょう。

若年母親がグループ「Z」等で、親族でなく同世代の母親でもない異なる立場を持つ人々と弱い紐帯を構築することで、若年母親が社会的に不利な状況から移動する機会を作り、地域に受け入れられていると認識することができると考えられます。このような場を継続的に設けることが、若年母親だけでなく、地域住民同士がともに支えあう地域づくりの一助となるでしょう。

研究の限界

本稿はまた一部の団体のメンバーの語りであることから、得られた内容に偏りがあります。しかし、これまで明らかにされてこなかった、若年母親に関わる地域住民の認識について分析することで、若年母親の地域における理解を促す方策を検討するための一助となったと考えます。

おわりに

本稿では、地域住民ボランティアへのインタビューを通して、地域において若年母親と地域住民がどのように関係を構築しているのかを明らかにしました。周囲からの視線を敏感に受け取る若年母親にとって、地域住民との関係構築は大きな意味があります。地域での支援枠組みを構築していくことで、若年母親が育児をしやすい環境を整えるのみならず、固有の支援を必要とする人々がともに支え合える地域づくりの第一歩となると考えます。

謝辞

インタビューにお答えいただき、いつもグループ「B」を温かい雰囲気で包んでいただいたボランティアの皆様、またインタビューにご協力いただきましたグループ「B」の歴代スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

＊プライバシー保護のため、データの内容を一部改変しています。

引用文献

Flick Uwe (1995):Qualitative forschung/小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子, 2002, 質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論, 春秋社

Granovetter, S. (1973): The Strength of weak ties, American Journal of sociology, 1973(78), pp1360-1380/ 野沢慎司 (2006): リーディングスネットワーク論, 家族・コミュニティ・社会関係資本, 第 4 章, 大岡栄美訳, 弱い紐帯の強さ, pp123-158.

Greene, S. (2007): Including Young Mothers: Community-based participation and the continuum of active citizenship, Community Development Journal, 42(2), pp167-180.

平尾恭子, 上野昌江(2005):10 代で出産した母親の母親行動とソーシャルサポートとの関連, 小児保健研究, 64(3), pp417-424.

片桐清一(2001):若年妊娠の社会的背景とその支援, 周産期医学,31(6), pp745-748.

厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009a):子ども虐待対応の手引き 平成 21 年度改訂版 http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv36/index.html (最終閲覧日 2014/09/23)

厚生労働省雇用均等・児童家庭局(2009b):児童委員・主任児童委員活動事例 http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/index.html (最終閲覧日 2014/09/23)

Marshall, T.H., Bottomore T., Citizenship and social classes (1992) /岩崎信彦, 中村健吾訳, シティズンシップと社会的階級, 法律文化社, 1993

松田茂樹(2008):何が育児を支えるのかー中庸なネットワークの強さ, 勁草書房.

大川聡子(2010):10 代の母親が社会化する過程において、顕在化する支援ニーズ, 立命館産業社会論集, 46(2), pp67-88.

定月みゆき(2009):若年妊娠・出産・育児への対応, 母子保健情報, pp53-58.

田間泰子(2001):母性愛という制度, 勁草書房

電脳援助 Ver.14

浅田英輔

Literacy

最近よく取り上げられる、「ネットリテラシー」という言葉。今回はこれについて考えてみようと思う。

Literacyは、letterを語源に持ち、もともとは「識字率」を指す言葉のようだ。
調べてみると、「文章や約束事をうまく読み解く力」くらいの意味で使われている。ネットリテラシー＝インターネットリテラシーとは、インターネットをうまく使う力、正しく利用する力といった意味あいといえる。インターネットがあればいろいろなことができる反面、危険も存在する。動画サイトでは著作権がからんで問題になることもあるだろうし、出会い系サイトでは身の危険にさらされる可能性もあるだろう。ショッピングサイトでは、支払いをしたのに商品が届かないだとか、サイトの写真と違うものが届けられたりとかといった問題も起こるだろう。
つまり、危険な目に合わず、情報をうまく利用し、自分からも問題のある発信をせずにいるということ、また「やりたいことのやりかたを調べられる力」「やりたいことが問題ないことか調べられる力」も含めて「適切なインターネットリテラシー」といえる。

⭐著作権について

これは電脳援助12で詳しく書いたので今回は省く。
著作権の侵害は「10年以下の懲役または1000万円以下の罰金」だそうだ。最近できた法律だと、「無断アップロードされているものだと知っていて、かつそれが本来は有料であると知っていてダウンロードした場合」は「２年以下の懲役または200万円以下の罰金」だそうだ。「知らなかったって言えばいいんだろう」「子どもがやったらないいんじゃないか」などあるかもしれないが、最近は厳しくなっている様子。また、子どもがやった場合には親の責任を問われることもあるだろう。
アップロードについての著作権、ダウンロードについての著作権、両方に気をつける必要がある。

⭐規約

　我々がインターネット上でメールアドレスを登録したり、[OK]を押したりしているものは、たいてい「契約」がなされている。Amazonでも楽天でも、YouTubeでもGmailでもTwitterでもFacebookでもメルカリでも、パズドラでもグラブルでもだ。iPhoneを購入したときは、AppleID取得のときに規約が表示されているはずである。ID登録するということは規約にOKしているということだ。多くのサイトで「規約に同意しますか？」という文章が出てきているはずだ。これを全部読んでいる人はいるのだろうか。でも「全部読んだので同意した」ことになっているはずだ。例えばAppleの規約では、Appleともめたときの対応まで書いてある。

以下引用。AppleのLegal Information & Noticesより。

> 全ての紛争を含め、お客様による本サイトの使用に関する問題は、抵触法の規定を除き、アメリカ合衆国法及びカリフォルニア州法が適用されます。お客様は、カリフォルニア州サンタクララ郡の連邦裁判所及び州裁判所の人的管轄権及び裁判地に同意するものとし、当該管轄権又は裁判地については異議の申立てを放棄するものとすることに同意します。

　つまり、Appleともめた時は、カリフォルニアに行かないとだめなのだ。そしてそれに文句はつけられないことに同意させられているのだ。iPhoneを使っている人は、全員これに同意しているのだ。

「ふつー」に使っている分には問題ないのだが、何かうまくいかないことが起きた時やトラブル時に確認が必要な場合がある。ある人は、何年も使ってきたTwitterアカウントが凍結された（Twitter社により、アカウントを使えなくされた）そうだ。特に問題のある使い方をしていたわけではないようだが、スパムアカウントと判断されたようである。こういったときは、多くは弁明の余地があるものだが、どちらにしても管理している会社のいうことを聞かなければならないという規約になっているはずだ。

※　スパムとは

　　SPAM、スパムメール、迷惑メールなどと呼ばれる。明確な定義はないようだが、一般的に「不特定多数に対して断りなく送られるメールなど」といえる。はがきのダイレクトメールと同じである。商品の宣伝のこともあるし、出会い系サイトの宣伝や、詐欺への導入のこともあるし、個人情報を集める目的のものなど、様々である。はがきと違うのは、システムさえ作れば、ほぼ自動で大量の処理ができるということである。しかも、これはそれほど難しいものではない。うまい誘い文句と目的のものへの誘導する仕組みさえあれば、手間をかけずに顧客獲得できるわけである。「そんなのに引っかかる人はいない」と思うが、1000通だしても10000通だしても労力は変わらないので、宣伝としては非常に優秀である。もちろん、「こんなものを送ってくる企業は信用できない」という逆の宣伝効果も期待できるのだが。

著作権のところでも書いたが、いろいろなロゴや写真を使う場合は規約の確認が必要である。例えば、パズドラのキャラクター画像を使うときにはどうしたらいいか。何を確認すべきか。そういうことは規約や公式ページに書いてあるはずである。

そういったことを調べることができたりするのがネットリテラシーといえる。「この画像をそのまま使って大丈夫かな？」「こういう使い方をしてだいじょうぶかな？」という疑問を持てることが大事である。

⭐クレジットカード

インターネットの大きな利点の一つになっているのがクレジットカードが使えることである。特にショッピングの部分では、インターネット普及に大きな影響を与えたといえるだろう。これがなければ買い物をするたびに銀行に振り込みにいったり、代引き（物が届いたときに配送業社に品物の料金を払う）ということになるだろう。クレジットカード決済に慣れると、違うやりかたをやるのは非常に面倒くさいものである。

ただ、やはり危険は多く潜んでいることに間違いはないだろう。「後払いだと思って使い過ぎてしまう」といったものはもちろんだが、基本的に数字などのデータで管理されているものである。いくら強固なセキュリティが施されていても、それを破ることは不可能ではない。なによりも、データ流出のほとんどは電子的要因ではなく、人の手によるものである。つまり、暗号を破られたとかハッキングされたとかではなくて、「置き忘れた」とか「落とした」とか「こっそり持ち出した」とかそういうことなのである。

そう考えると、クレジットカードはマイナンバーなんかよりもよっぽどゆるゆるである。ネット上のサイトで求められるのは、クレジットカードにかいてある番号、有効期限と、裏にかいてある数字くらいではないか？人のカードを悪用するのは簡単なのである。

対策としては、カードの枚数を少なくする。これで「管理しなければならないもの」が少なくて済むことになる。財布を紛失したときなど、カードの枚数が多いほど危険が多いといえるだろう。もちろん、どういうサイトでカードを登録するかという問題も大きい。求められるままにカード情報を入力すると、不正請求などの被害を受けるのは簡単だろう。クレジットカード決済代行サービスを使うのもよいかもしれない。

どちらにしても、カードの枚数を減らすとともに、カード情報を入力する場面を減らすということも有効と思う。

⭐SNS

SNSも電脳援助第５回で書いた。便利で楽しいけど使用には注意が必要。ここでのネットリテラシーとは、情報発信の部分になるだろう。どのサービスが、誰にみられているのかといったことは最低限わかっておく必要がある。不特定多数の人にみられたくないもの、みられてはまずいものはTwitterに投稿すべきではない。

以前、問題のある投稿を「リツイート」（人の投稿を、自分の知り合いにも広める行為。楽しい話題や面白いネタなどになされることが多い。知り合いの知り合いの知り合いというふうに広まっていく）された人が、「勝手にリツイートしてんじゃねえよ」と怒っていた人がいたが、Twitterとはそういうものなのである。リツイートされたくないものは投稿すべきではないのだ。

気になったものは、「こういう財布を拾いました」といったツイート。「どこどこで財布を拾いました」程度ならいいのだが、「何千円入っている、写真のような財布を拾いました。落とした方は連絡ください」といったツイートは、善意でなされたものではあるのだが、悪意のある第三者が利用しやすいともいえる。「よかれと思ってすること」は必ずしもよいことではないだ。

Twitterは全く知らない人の投稿をみることができるが、Facebookは承認が必要（全く知らない人には基本的にみえない）なので、Twitterに比べると拡散範囲が狭いものといえる。相互了解のもとの「フレンド」なので、基本的に知っている人たちにみえるようにできる。とは言っても、友達の友達の友達は、たいてい全くの他人である。無防備に投稿するのは危険ともいえる。

よく問題にされるのが、顔が入った画像。自分を広めるのは大いに結構だが、友人や自分の子どもなどの写真を投稿することだ。問題のないことも多いが、嫌がる人もいる。また、「プロフィール写真」に自分の子どもの写真を使っている人がいるが、私は大いに疑問がある。「それは自分ではないだろう」と。自分の子どもがかわいいのはわかるし、「かわいいでしょう？！」と見せたくなるのもわかる。残念ながら、うちの子どもが一番かわいいのだ。

SNSは、投稿したものを誰がみることができるのか、どう広まっていく可能性があるのか、どうされたら不満をいうべきなのかといったことをある程度把握して使う必要があるだろう。

もうひとつ、ネット上には意外と悪意ある人がいるということだ。おもしろそうなコンテンツと見せかけて、スパムだったりすることも多い。少し前にFacebookにおいて「スラムダンクのその後」みたいなサイト誘導があったが、あれもスパムだ。登録した覚えのない出会いサイトやショッピングサイトがタイムラインに表示される場合、こういったスパムをクリックした結果であることも多い。それほど大きな被害があるわけではないが、自分の知らないところで登録されているのは怖いものがある。「面白いからみんなに知らせよう」という善意のもとに、ウイルスのようなものをばらまいているということになる。

⭐メール

拡散性の高いSNSと比べると、個の意味合いが強い。知っている相手とやりとりする分にはそれほどリテラシーがどうとかを気にする必要はない。メールで最も注意が必要なのは、迷惑メールだ。最近の迷惑メールは様々な工夫がされている。いわゆるフィッシング（大手企業からのメールにみせかけるもの。URLをクリックさせることで様々な問題につながる）メールはどんどん見分けにくくなってきている。大企業であるほど、企業のトップページに「弊社を装ったフィッシングメールについて」などと注意点が書かれているので、そういうところを確認するのもよい。

⭐調べる

ggrksという言葉があるが、ネットで調べるということが難しい人もいるようだ。たとえば、私はExcelを使って仕事をいろいろと便利にするのが好きだが、関数やマクロの使い方に習熟しているわけではない。ごく簡単な関数でさえ、毎回調べて使っている。絶対値を使いたい時は「Excel関数　絶対値」を調べると、ABSを使えばいいことがわかる。数値の計算をしたいのだが、その値が文字列になっていて困るときは、「Excel　文字列を数値に」と調べると、数値の1を掛ければいいことがわかる。上にある、Facebookの公開範囲の設定の仕方がわからなければ、「Facebook　公開範囲」と調べればいいのだ。検索のコツは、できるだけ一般的ではない、調べたいこと固有の言葉を入れることだ。上記の例でいうと、「Excel関数」だけで調べると、目的のものにたどり着かないだろう。「絶対値」だけでもだめだろう。

パソコンの仕事が上手な人は、知識が豊富というよりは、調べるのが上手な場合が多い。「何という言葉で検索すれば、目的の情報が得られるか」を知っているということは、とても大きな強みなのである。

今の子ども世代はいわゆる「デジタルネイティブ世代」だが、彼らは検索が得意なのだろうと思っている。うちの子どもたちも、調べるのがうまい。そして、わからないときにすぐにスマホで検索するということが身についている。われわれ大人世代の中には、「すぐ調べること」に抵抗が強い人も多いような感じがある。年をとると思い出せなくなるのだから、素直にその手元にある便利な機械を使おう。

危険はあるし、調べるものは多いし、気を使うことも多い。でも、インターネットの便利さは捨てられるものではない。

うまく楽しく使いたいものである。

Let’s リテラシー！

講演会＆ライブな日々⑥

シンガーソングカウンセラー

ふるかわひであき

「中国、韓国、日本のお母さんが手をつなぎ、子ども達を戦争に行かないようにつながりましょう！」というメッセージを込めた歌を作り講演会＆ライブで歌っている。

そんな話を中学３年生の男の子としていると、今までニコニコと私の話を聞いていたこの男の子が急に顔色を変えた。

「なんで日本が韓国や中国と手をつながないとあかんのや！あいつらが日本の領土を奪っとる張本人やないけ。竹島も尖閣も日本のもんじゃ！」

「従軍慰安婦とか南京大虐殺とかで因縁付けてくる輩となんで仲良くできるんじゃ」

「朝鮮人と中国人は日本から出て行け！」

何とも言えない嫌な感じの言葉を連発した。

まるで２チャンネルさながらの内容。

そういう情報をどこから手に入れたのか聞いてみると、彼は私にスマホを見せてくれた。

彼が保存しているフォルダには、中国や韓国を非難するサイトや動画がいっぱいあった。

カウンセリングをしていると、こんな若者に会う事が最近増えた。

普段はニコニコを大人しいのに、特定の話題になるとまるで人が変わったように攻撃性をむき出しにしてくる。

なんでそんなにむきになるんだろう・・・。
イスラム国の兵士達はみんな若者だ。

昨年の空爆で死亡した、イスラム国のテロリスト実行犯の一人、ジハーディ・ジョンは２７歳だった。

人質を殺害し、村を焼き払い、テロを続け、自分達の正義を押し通そうとする若者達。

テロに対する国際社会への批判や空爆による報復には、またテロで報復する。

なんで彼らは聞く耳を持たないのだろうか・・・。

遠い国の若者の話だと思っていたら、こんなに身近な所にも聞く耳を持たない中学生がいる。

古今東西と問わず、世界は自国と他国の間に起こる問題に直面する。

ヨーロッパでは難民の受け入れについて、ＥＵ諸国で意見が割れている。

難民を受け入れているドイツでは、学校に行きたくない少女が家出をして、男友達の所に泊っていたのに、避難民に誘拐されたというデマを流した。

そのことがきっかけで大きな騒ぎになった。

少女が驚いて、あれは嘘だったと撤回したので事無きを得たようだが、実にきな臭い話だ。

逆に避難民がひどい扱いを受けているというデマを、避難民を保護する団体の職員が流した事件も発生している。

ドイツでは自国民を守ろうという一部の団体が、かつてユダヤ人を弾圧した時のように、ファシズムによる外国人の排斥運動を始めている。

日本ではヘイトスピーチの問題が、国際的にも注目されている。

ネット上の発言に対して行われる、いわゆる「炎上」といわれる袋叩き。

リベンジポルノに２チャンネル。

どれもだいたい若者が中心の話だ。

耳を貸さない全ての若者にあてはまるかどうかは分からないのだが、この中学生はひどいいじめを受けていた。

自分がいじめられた腹いせに、なんの関係もない外国人を攻撃する。

そんな分かりやすいが、どこか怪しげな解説をしたいわけではない。

中学生の彼は語った。

「ヘイトスピーチとか聞いてたらスカッとすんねん。警察とか、見ている人がやり込められていくのが面白いねん。みんな遠巻きに見てるだけで何にもできひん。文句言う奴がいたらスピーカーとか街宣カーで大声でみんなでやっつけたらええねん。悪いのは外国人なんやから、言われても仕方ないんや」

ひとりぼっちでいじめを耐えているよりは、大義名分を持った仲間たちと一緒に行動する方がはるかに温かい気持ちになるのだろうか。

世界中でイスラム国の兵士になりたいという若者がいて、その対応に各国が手を焼いている。

なんとか考え直させようと、家族も必死になって説得する。

しかし、周りが説得すればするほど頑なになるところもある。

新興宗教に走る若者のようだ。

第二次大戦の時は、親が反対するのにも関わらず、多くの若者が特攻隊に志願して、その若い命を散らしている。

日本中が戦争を鼓舞するような働きかけを国民にして、それを受け入れないと非国民と言われ、村八分にされる。
それが嫌なのであからさまに戦争に反対できないのだが、気が付けば自分の子供が特攻隊に入り、名誉の戦死を遂げたいと言う。

そして、もう親でも誰でも彼らの固い決意を変えられない。

彼らをこんなに頑なに変えてしまう根底には何があるんだろう・・・。

そんな問いかけを歌で綴りたい。

たかが歌で世の中を変えることなどできない相談だ。

だけど歌い続けることで見えてくることもありそうだ。

平和を願う歌を歌い続けたい。

養育里親

～もうひとつの家族～

12

坂口　伊都

大波小波

養育里親として暮らし始めて、半年が経とうとしています。早いような、やっとここまで来たような両方の想いを感じています。先日、この子と私達夫婦が初めて外出をした里親会の新年会に 1 年ぶりに行きました。当時は、初めての外出ということで 3 人とも緊張して、新年会に参加したことを思い出しました。

養育里親としてこの子と暮らし始めてから皆さんの話を聞くと、戸惑いの中で悪戦苦闘しながら生活をしている様子が実感を持って伝わってきて、私達だけがアップアップしているわけではないのだと感じました。新年会の参加人数が、大人と子どもを合わせると 40 人を超えていて驚きました。去年よりもさらに参加人数が増え、賑やかな新年会を目の当たりにすると、里親に対する社会の意識の変化が伝わってきます。その大きな要因として、児童相談所のワーカーの里親に対する意識の変化が大きく関わっていると思います。

子どもの居場所として、里親宅が選択肢としてカウントされていくことは大事だと思いますが、中途養育は養育経験があっても無くても、子どもを育てていくことは簡単ではないことを再確認していく必要を感じています。新年会の自己紹介で私が、「イライラしたり、喧嘩したり、仲直りしたり、毎日ジェットコースターに乗っているような日々を過ごしています」と話すと、うんうんと頷いてくれる里親さんがいました。里親をしている方の年齢も様々です。お孫さんを連れて来られて、これからできることとして養育里親を目指している方がいました。これか

ら児童養護施設で実習をするそうです。夫さんもにこにこと笑い、妻と同じですと話されていました。その笑顔が何とも晴れやかで、素敵でした。そんな方々と出会うと励まされます。

この正月に残念な経験をしました。「その後どう？」と気遣ってくれる方もいましたが、子ども達と新年の挨拶を交わしているのにも関わらず、里子にだけお年玉を渡さない人がいました。ドラマなどでは、そういう仕打ちをする人がよく描かれますが、現実社会でも変わらないことが身の回りで起こるのだと知りました。里子本人が、お年玉をいろいろな大人からもらうことが初めだったので、その一部の人が意図的に渡されなかった事実に気づかなかったのが救いです。もちろん、うちの子 3 人にそれぞれお年玉をくれる方がほとんどでしたから、気づきにくかったのだと思います。この子が傷つかなければ、何でもいいやと開き直りましたが、いろいろあるものだと改めて思い知らされました。里親登録の頃から相談に乗ってもらっている知人がいるのですが、私のエピソードを聞いて「日本で養育里親をするって、本当に難しいことなのだね」としみじみ言われました。徐々にですが、里親が世間に知られるようになってきつつあります。しかし、日本にはまだまだ社会的養護の場で暮らす子ども達に偏見があったり、差別的な扱いを受ける事実があります。

実際に養育里親をして一緒に暮らし始めていろいろな波を感じているところです。今回は、この子と里母の私の間で起きた衝突について書いていきたいと思います。どうぞ、最後までおつきあいください。

試練？

子どもと暮らし始めて、初めの 3 ヶ月はお互いに慣れない状況と緊張で過ごし、その後からいろいろな諍いが起こり始めると言われていています。いわゆる「試し行動」というやつです。我が家も御多分に漏れず、この状況に陥りました。試し行動だと推測がついても、どのように対応していけばいいのか書かれた本が見当たりません。その子によって表出の仕方が違うので書き様がないのでしょうが、養育をしている当事者は「頭でわかっていてもどうすればいいのよ」が本音です。

我が家では、この子に〇〇しようねと言うと動かなくなる、止めなさいと言えばわざとしているように見える、犬の扱いが乱暴、反抗的な態度が出て、返事は「あっ、そう」になることが増えていました。この子も含めて、家族全体がイライラする時があり、里母の私は、自分の言うことを特に聞かないと感じ、イライラを募らせていました。娘、夫、知人共に口をそろえて、この子が私の言う事を聞かないのは、私が特別な人だから甘えているように見えると言ってくれましたが、その時はどうしてもそんな風に感じられません。それどころか、私のことが嫌なのだろうなとしか思えない。自分自身の状態がいい状態にないと感じていたので、この子に何か注意をしなければならない時は、できるだけ他の家族に言ってもらうようにしていました。どうしていったらいいかなと冷静に考えている私とイライラが蓄積されていく私の両方がいました。

そんな時、この子が宿題の途中でゲームをしようとしていたので、宿題が終わるまでゲームを預かろうとすると、力づくで手元に持っておこうと抵抗しました。宿題が終われば返すのに、何故ここまでするのかと不思議でしたが、力づくで保持することをここで許してはならないだろうと判断しました。私は体育会系ではないので、身体を張ることは避けたかったのですが、ゲームの取り合いをすることにしました。取り合いになっている間も、果たしてこの方法でい

いのかと、どこかで冷静に考えていましたが、咄嗟の判断をしていかなければなりません。また間が悪く、家の中にはこの子と私の二人だけで、間に入ってくれる家族もいない中、この子がものすごい力でゲームを引っ張るので、「何故、父ちゃんなら渡すのに母ちゃんには渡さないの？」と言うと、その瞬間に力が緩みました。この子自身も何かを感じている部分だったようです。それが、男性と女性の違いなのか、言う事を聞く人の優先順位があるのかわかりませんが、何かがあるようです。

ゲームを確保すると、次にテレビをつける、消すの繰り返しが始まりました。私が消すと、この子がつけるので、「テレビ、つけません」と言いましたが、聞き入れません。そこで起こったのが、リモコンの取り合いです。「あ～、悪循環だ」と思いながらも今更、引き下がれません。リモコンバトルが終わると、今度は犬を触りに行きます。「もう…」と思いながら、「犬触りません。自分の部屋で少し考えてきて」と言っても、誰が言うことを聞くものかとなっていきます。仕方がないので、犬を別の場所へ移動させ、犬に触れないようにしました。私とこの子が接触し続けてもバトルになるので、この子から離れて犬と台所にいると、2 階に行くのではなく玄関の外に出て行ってしまいました。「大丈夫かな」と不安になりながらも、今は距離を置いてクールダウンすることが得策だろうと思い、追いかけませんでした。

この子を追いかけない代わりに「ごめん、この子とバトってしまった。誰か帰ってきて」と家族に SOS を出しました。そこに帰ってきてくれたのは娘でした。娘にその辺りにこの子がいないか確かめると、玄関の前にいました。娘は、「どうしたの？家入ろう」とこの子に声をかけますが、「あいつがいるから入らない」とこの子が言います。「あいつじゃないでしょ。ママでしょ。宿題すればいいだけのことでしょ。見てあげるから」と上手に声かけをして家へ誘導してくれました。娘が、スーパーマン、女神、救世主に見えました。娘の誘いに乗り、この子も何事もなかったかのように宿題を見てもらっています。この子の怒りという感情は、どの程度のものなのだろうと疑問に感じました。次の日になれば、何事もなかったかのように振舞うのだろうか。現実のトラブルに直面しないで、テレビをつけたり、犬を触ったりしてごまかしているようで気になります。この子のことに関してわからないことが山積みです。

その後は、この子と娘、私の 3 人で落ち着いた雰囲気での夕食になりましたが、この子からゲームの話が出てこなかったので言い出すまで待とうと思い、ゲームを返しませんでした。夫がこの日は、帰りが遅く、次の日は朝早くに出ていく勤務だったため、家族での話し合いは次の日の夜までお預けになりました。

翌朝、この子が起きてきません。あまり言わない方がいいだろうと思い、「時間だよ」という程度の声かけをしましたが、布団をかぶり起きようとしません。あまりに起きてこないので、これは学校に行かない可能性が高いと、仕事を休む覚悟を決めました。学校に遅刻していけるか、それとも休むのか。休むとなると、私とこの子の二人で長いこと過ごさなければならない、「さて、どう過ごせるか」と考え始めていました。困りましたが、この子が昨日の怒りや気まずさ、納得のいかなさを今朝も覚えて抱えているのだとわかり、ホッとした一面もありました。

この子が布団を頭までかぶっている姿が、何となく待っているように感じたので、そっとめくって「起きないの？」と声をかけその場を離れました。様子を伺っていると、ごそごそと起き出して朝食をとり、学校に行く支度を始めました。そして、私の所に来てぶっきらぼうに「今、何時？」と聞き、「〇〇分だよ」と答えると自分から登校して行きました。

私は、昨夜眠れなかったし、今朝になって身体のあちらこちらが痛いし、何とも言えない辛さを感じながら過ごしていました。この子は、どんな気持ちで今日一日を過ごしているのだろうと思いを巡らせ、これから一緒にやっていけるのだろかと不安が募り、この出来事は避けては通れなかったのか、私の対応を変えるべきだったのか…。答えは出ませんが、このような体を張ったバトルは、これ１回きりでこれ以上必要ないということだけは、思い切れました。

握手

家族には、事の次第を伝えていました。私が、引き下がらなかったのは力や暴力で問題を解決する行為を許すことができなかったからだと伝え、家族で話し合いをしようと投げかけました。もともと話をすることが上手ではないこの子と私の間の出来事を話す時、できるだけ私が話さない方がフェアだろうと考えたからです。

夫が先にこの子から話を聞いてくれていました。「何か、父ちゃんに言うことあるやろ」と声をかけ、話していました。夕食後、夫が「お母ちゃんと仲直りしたの？」と言うと「えっ、もうした」と言います。会話をしたら仲直りなのかもしれません。「お母ちゃんに謝ったのか？」と聞くと、茶化したように謝るので、家族から突っ込まれていました。

私が「何で、怒ったかわかる？」と聞くと「宿題しなかったから」と答えます。「そうではないよ。この家では、力や暴力で何とかしようとすることは認めないからね」と伝え、「テレビをつけたのは何故？」と尋ねると「見たかったから」と返ってきました。「見たかったからじゃないよね。お母ちゃんに消されたからつけたのだよね？」と話を続けていくと、どうしたらいいかわからないような表情になっていきました。「人が怒っていることを別のことでごまかそうとするのは良くないよ。この家では言葉で話し合っていくからね。次に同じようなことがあったら、自分の部屋で考えてみて」と伝え、最後に握手をしました。これで仲直り。

子育てをしていて、子どもと握手をして仲直りした経験は初めてでした。その後、この子のゲームのルールを家族で話し合って決めました。平日は、宿題が終わってからする。休日は、もう止めなさいと言われたら止めるというシンプルなものです。この子自身が実行できそうと思えるかどうかで決めました。この子は、「これからは、ちゃんとするから」と言う時が、何回かありました。「ちゃんとする」という言葉が抽象的過ぎて、その場しのぎの言葉に聞こえました。ハードルが高い目標を立てても意味があると思えなかったので、ゲームをしてもいい時間まで決めていません。児童養護施設では、ゲームは１日１時間で、職員がゲームを管理していました。家庭では、ある程度子どもが何をしているのか把握できるので、様子を見ながらゲームとの付き合い方を学んでくれればと思っています。この先、大人がゲームを管理しなければならなくなるかも知れませんが、まずは見守りからスタートしてみます。ゆっくりと一歩一歩、この子と歩調を合わせているようです。

この子に、「お母ちゃん辛かったから、もう二度とあんなことをしたくないと思っている」と伝え、「あなたも辛かったよね」と話しました。バトルの後は、この子が私の膝の上を犬２匹と一緒になって取り合っています。「ゲームを取りたくないから、宿題してね。わかっているよね。」

と声かけしています。イライラが募る感じではなく、のんびりと行きましょうという雰囲気に変わっていきました。いつまで続くかわかりませんが、雨降って地固まるというところでしょうか。

養育者の気持ち

今回、上手く回っていないなと感じた時、私の中に迷いがありました。それは、母親としての役割と仕事としての感覚のどちらを優先してこの子と向き合うべきかという迷いでした。

養育里親ですから、家庭での子育ては、実子と同じような感覚に傾くことが多かったです。一緒に暮らすのだから、少しでも母親らしいことをこの子にしてやりたいと私が願ったのです。実子と同じようにこの子と接していると、いろいろな部分で実子の時とこの子とのズレを感じました。

例えば、実子に「〇〇するの止めて」あるいは「〇〇して」と頼めば、すんなりと止めたり、してくれたりしますが、この子は言われればどんな些細なことでも言われたことの逆をします。以前に「言う事を聞くのが嫌なの？」と尋ねたことがありますが、「ううん」と首を振りました。この子を見ていると、何か言われると条件反射のように反対のことを身体がしてしまうようです。この部分は、実子の子育ての中には体験してこなかった大きなズレの部分でした。そのズレを感じながら、母親としてこの子に接していこうとするとイライラが募り、自分は求められていないと感じていきます。夫に懐いている姿を見ながら、夫のように上手く立ち回れない自分を駄目だと感じ、気持ちに余裕がなくなっていき、周りの人がいくら甘えているのではないのと助言をしてくれても、それを受け入れる余裕が全くありませんでした。この流れを変えないといけないなと感じ始めていた矢先の出来事でした。

今回のバトル後、母親としての感覚から仕事モードに切り替えました。意識をして母親感覚を隣に置き、仕事モードでこの子を冷静に観察するところから始めました。意識を変化させると、この子が何か言われると動けなくなるなら、言わなければいいと気づきます。

例えば、この子が学校に行きやすくするために登校時間が近づくと、私がバタバタと家事をして、この子の登校のための行動に注目しないように変えました。内心、ハラハラしていますが、自分で準備して出かけられる子です。私は、玄関で「いってらっしゃい」と見送ることが母としての役目だと無意識に感じていたように思います。それをするためには、玄関を出る時にこの子のそばで見送らなければなりません。ドアで見送ることに目的を置くと、この子が登校するまでの間、ずっとこの子に注目し続け、言ってもなかなか動かないことに苛立っていくという悪循環になります。母親としての役割にこだわらなければ、いってらっしゃいを言えない日があっても、遠くからしか声をかけられなくても、この子に注目をせず、早くしなさいと声を変える回数がぐっと減ります。言ったら余計に動けなくなるのであれば、言わない方が利口です。言われなくても、この子が自分の力で登校できる体験を積む方が、よほど意味がありますし、この子を認めていきやすくなります。

こうして、私達二人の関係が落ち着いてくると、笑い合う時間も増えていきます。犬と私の膝の上を取り合い、きょうだい喧嘩のようにしていると、この子が甘えているという言葉がそうだったのかも知れないと私の中に入ってきます。当たり前のことですが、関係が良好になれば、情の部分は後からついてくるのです。先に母親の役割にこだわったことで、優しくなれなかったのだと反省をしました。この先どうなる

かわかりませんが、現時点でこの子は、わかりやすい甘え方をしてきません。目が合えば、顔を隠しますし、身体をさすろうとすれば逃げていきます。この子は、私が思っているような母親を求めていないのです。そのような中でも、私の膝に頭をのせてきたり、身体をくっつけたり、私の視界を遮るように顔をのぞかせる姿が少しずつ出始めてきています。

この子と私の衝突は、お互いにとってほろ苦い経験として残るでしょう。この衝突がなければ気づけなかった自分の未熟さを痛感します。親になるときも、いろいろな失敗を重ねていったことを思い出します。この衝突は、失敗だったかも知れませんが、失敗を恐れてはいけないのでしょう。失敗したら、やり直せばいい。その失敗を何回も繰り返すのは愚かですが、修復していくその過程の中で賢さを身につけていけばいいのだと学びました。

周辺からの記憶 10

～2012 年度　福島～

村本邦子（立命館大学）

毎年、年度終わりにシンポジウムをやっているが、今年は 2015 年 12 月 12 日、「『東日本・家族応援プロジェクト 2015』から見た被災地の今」と題するシンポジウムを開催した。5 年目というプロジェクトの折り返し地点を過ぎたところで、現地の受け入れ窓口となってくれている方々を招いて、それぞれに見えている風景を共有し、これまでを振り返りながら、これからを考えていくことができたらと思ったのだ。そこから新たなネットワークが生まれることも期待した。

午前の部では、現地協力者の方々を中心に連携に焦点を絞って現地の状況を報告してもらった。あらためて感じたことは、私たちの曖昧模糊とした企画持ち込みに対する戸惑いと、それに何とか応えようとする先方の努力だった。それが良かったか悪かったかを言うことはできない。もともと互いに何ら義務のないところで、やるかやらないかの選択があり、やるのなら良いものにしようという意志があるというだけのことだ。何が良いかは、それぞれが決めることだろう。戸惑いつつも、プロジェクト実施のための体制や新しい企画を作ってきたことが現地の力になっていることを聞き、私たちの呼びかけに応答してくださった現地の皆さんにあらためて感謝と敬意の念を抱く。

午後は、各地でのプロジェクトの院生報告だったが、去年に引き続き東北各地の状況を横断的に聴く貴重な機会となった。少し前、「他者を介して聴く」という言葉に出会ったが、自らの感覚を根拠に語るだけでは、自らの枠組みを超え出ることはできない。プロジェクトを通じてそんな積み重ねが実現していったらいいし、そのための場を開くこともまた大学が果たすべき役割だろう。

2012 年度　福島準備

＜実施体制＞

2 年目の福島。年度初め、昨年、共催してもらった福島県中央児童相談所にコンタクトしたところ、今年度、国が「東日本大震災中央子ども支援センター」という組織を設立し（実質は恩賜財団母子愛育会に委託)、被災 3 県にそれぞれ現地窓口を設置したという。福島県では、NPO 法人ビーンズふくしまに委託され、子ども関係の支援者研修もその業務となるため、ここを中心に企画を運ぶということになる。時間経過とともに支援体制が組織化されてきたのだ。

幸い、ビーンズふくしまは、昨年、二本松で本プロジェクトに関わってくれていたということで（二本松チームは荒木穂積先生が運営)、話は早い。ということで、今年度は、 東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口(NPO 法人ビーンズふくしま)と NPO 法人きょうと NPO センターの共催、福島県と福島県中央児童相談所の後援を頂いての実施となった。

＜事前学習＞

10 月 17 日の研究会に、ビーンズふくしまの中鉢博之さんを招き、皆で「福島の子育て支援の復旧・復興の現状とその後のあり方」について話を聞いた。

福島県は、浜通り、中通り、会津の 3 つの地区にわけられるが、浜通りは震度 6 弱がほとんどで、余震もたびたび起き被害が大きく、とくに海沿いは甚大な被害を被った。原発から半径 20 キロ圏内では避難生活を余儀なくされ、いつ自宅に戻れるか見通しが立たない。20～30 キロの避難指示解除準備区域は自宅に戻ることはできるが、放射線のこと、事故が本当に収束したのかなど不安がある

避難状況としては、全町避難・全村避難で現在も一時帰宅しかできない町村、一時は全村避難していたが帰村した村、1 つの市の中で避難地域が区分され、避難が分断されている地域がある。家や家族を流された、原発事故によって職を失った、今後の生活の見通しが立たないなかで、子どもと関わる余裕のない家庭もある。地震・津波による PTSD、長期避難生活によるストレス、避難による家族との分離、家族分離による育児ストレスの増大が課題である。

中通り、会津は震度 4 から 6 強で、家屋にほとんど被害がなかった地域もあれば、建物が倒壊し、行政の庁舎や公共の施設等も使用不能になって庁舎移転を余儀なくされた地域もある。津波被害はなかったが、浜通りから避難してきた子どもに、津波被害を目撃した子どもたちがいる。原発から離れていても 20 キロ圏内より線量が高く、自主避難者が多い地域もある。福島市・郡山市・伊達市・二本松市など主に中通りの都市部で、山形県・新潟県などへの県外避難があり、放射線量がそれほど高くない地域でも、自主避難者が増え、母子避難が多くなっている。

その一方で、浜通りからの避難者が仮設住宅・みなし仮設住宅で避難生活を送り、放射線という目に見えないものとつきあいながら生活している現状がある。子どもは 1 日 3 時間までしか外に出さない、食べ物の選択、外遊びができないなど、日常生活がすっかり変わってしまって、体重や運動能力など、発達にも影響が出てきている。

放射線についての考え方・捉え方が異なることによるストレス、自主避難に伴うストレス、母子避難による家族間におこる問題でのストレスや対立が課題となっている。

このような状況下で、福島県は、平成24年10月より子どもの医療補助を18歳まで拡大し、心のケアの取り組みとして『お子さんとパパ・ママのための心のサポートブック』を発行した。屋内遊び場確保事業、地域の寺子屋設置支援事業（仮設でのコミュニティ再生支援）、そして東日本大震災中央子ども支援センター事業が施策として取り組まれ、中央子ども支援センター事業をビーンズ福島が運営している。その事業は、ビーンズこころの相談室 「まめの木プロジェクト」と、うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトから成る。

相談室事業から見えてきたことは、震災後のPTSDに対処するような相談は当初の想定よりも少なく、震災前からあった課題が、震災を機に顕在化したケースが多いということ、被災者にとっての心のケアの取り組みは、カウンセリングという手法だけで解決できるものではなく、その生活や被災によって起こった課題に対して丁寧に寄り添っていくことが大事ということだった。

うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトの方は、2011年9月から土曜の午後、仮設住宅での子ども向けの遊び・学習支援を通じた支援活動から始まり、教育委員会からの依頼や保護者からの要望もあって、平日の夕方も実施するようになり、徐々に実施地域も拡大した。さらに、保護者会やイベント実施によって、地域で子どもを支えていく力を取り戻すことも視野に入れるようになった。子どもたちが落ち着きを取り戻し、地域の評判も良く、避難生活が続く限り必要な活動であると考えているが、ボランティアやマンパワーの不足や資金的な見通しが立たないことが問題。その他、県外避難している母子の支援にも大きな課題があるということだった。

院生たちは、さらに、それぞれの視点から事前学習をして現地に臨んだ。

11月30日（金）福島入り

2年目の福島。今回は、教職員7名、院生5名という大所帯である。遅れてくる人もあったので、教職員6名と院生1名で会場の下見。プログラムの材料の買い出しに行き、皆で袋詰めや見本作りなどの作業をした。今回からのパートナーであるビーンズ福島のスタッフも3人参加してくれ、わいわいおしゃべりしながら一緒に準備するプロセスは、互いに知り合い、一緒にプロジェクトを実施するチームとしてのウォームアップになった。

準備終了後は、場所を移して、食事会。ビーンズのスタッフになった経緯を聞かせてもらうことで、若い人たちの動きを知った。HP 作成をしているスタッフによれば、「立命館×福島」で検索してビーンズふくしまに辿り着く福島市民が結構あるとのこと。大きな組織の強みでもあろう。プログラムの申し込み状況はひと桁代だが、昨年、一緒にプログラムをやった児童相談所の職員も申し込んでくれているということで、年を重ねるごとに定着していったらいいなと願う。

福島の現状としては、まず学校が除染され、グラウンドも使用されているが、プールは親の許可がいるとのこと。親の判断や基準の違いは、子どもたちの人間関係にも影響を及ぼしていることだろう。福島市内の除染はまだ 1 割しか進んでおらず、放射性物質が含まれる物の処理ができないことが、除染作業をさらに遅らせている。場所によって放射線濃度は異なり、山の裾の地域には放射線が溜まりやすいということだった。

2012 年 12 月 1 日（土）

＜支援者支援セミナー＞

朝起きると雪だった。ホテルロビーで待ち合わせて会場へ行き、会場の設営をする。10 時半から 12 時は支援者支援セミナー。ビーンズ福島や会場となっている市民活動サポートセンターで支援活動をされている方々が集まってくれるが、朝から初雪が降り、スノータイヤに替えなければならないので、出足が悪いということだった。東北だ。今回、共催となってくれたきょうと NPO センターからも野池くんが駆けつけてくれる。

まずは自己紹介と現状。最初に、支援の難しさが語られた。子育て支援をしていても、若者の就労支援をしていても、心の相談室にもあまり人が来ない。福島から子どもや若者がそもそも少なくなっているということなのだろうか。仮設住宅の支援でも、イベントが多いためなのか、何かやってもボランティアの方が多い状況だという。

福島は、目に見える被害は少なくても、気持ちの上で影響を受けている。これまでは近くに職場があって、ほとんどの人と気があわなくても、その中で3人と気があえばそれでよかったが、その3人がバラバラになったら行動できなくなる。また、放射線のことで、外から「こんな（放射線の）高いところにいて」と言われる。「私たちはここで暮らしているのに」と思う。外の人は心配しているつもりでも、心理的に圧迫される。元気に働けば解決していくことも多いと思うが、補償金のことある。個人的な苦難ならば、ここを乗り越えればと思うが、公的な責任でこうなったのだし、仮住まいということもあり、前向きに立ち上がると言ってもなかなか難しい。微妙な立場だと思う。

他方、震災以前からの課題として、人との関わりのなかで援助を求めにくくなっていて、たとえば同居している祖父母に手助けしてもらえるはずの環境で、まず支援機関の方に言ってくる。大家族であっても、子育ては母の責任という意識が強く、祖父母の眼が気になる。被災ゆえの問題というより、元々あったものが表面化している。支援者が解決してしまうのでなく、家族を巻き込む支援が必要。

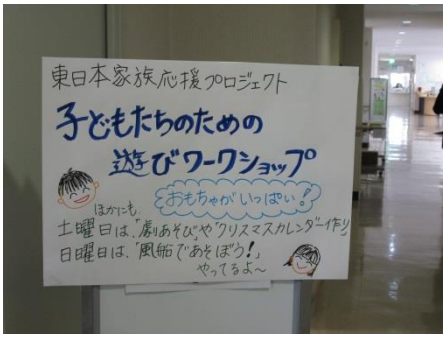
それから、支援されるばかりでなく、自分たちで動き出せることが重要だという話に移っていった。「支援対象者の自分」となると動けなくても、誰かのためなら動ける。やってあげるのでなく、これまで応援してくれた皆さんに感謝祭をやろうとか、彼らが自分たちでやっていくっていうことを支援していければいいんじゃないかなと思う。仮設に引きこもっている人たちに向けて、焼き物や農園など仮設にいても自分たちでできることを立ち上げられないか企画中という方もあった。

子育て支援にしても、子ども達をどう育てていくのか、どう育てていきたいのかを一緒に考えることで、コミュニティとしてまとまっていけるといい。親自身、人とのつながりが薄くなってきているので、これを機会につながりを作っていけたら。旧体制ではなく、仮設であらたにできたコミュニティを主体的につくっていくことで、人とつながるのは面倒だけど良いものだというのを体験し、そのノウハウを持つと、た

とえ移動しても、次のところでまた作っていけるだろう。

昨年は、先が見えずどうしようもない状況で無力感に圧倒されている印象が強かったが、今回は、そのなかでやれることをやっていこう、人と人とがつながって、知恵と工夫を重ねていけば、きっと何かできるはずという希望を感じた。「福島を新しいステージにして大きなビジョンと小さな行動で、情報交換をしながら進んでいきたい」と最後にまとめてくださった声を聴き、遠くにいる私たちも彼らとつながりながらできることを続け、福島の人々の力を伝えたいとあらためて思った。

午後にあった尾上さんの「支援者のためのドラマ表現ワークショップ」でも、「被災者（被支援者）は支援者になれる」というテーマが浮上したということだった。



＜遊びワークショップ＞

14 時から 15 時半は、クリスマスのアドベント・カレンダーを作る遊びワークショップ。今年も親子での参加が多かったが、昨年に比べて、子どもたちが自由に伸び伸びしているのが感じられた。去年は、子どもの数より多い大人たちが見守るなか、子どもたちは統制された範囲で安心して遊ぶことができた。それだけ不安が高く、親子の結びつきは緊迫していた。もちろん 1 年経って不安が減ったわけはなく、根底にはさまざまな思いを抱えておられるだろうが、それでも、自分たちはここで生きているのだ、その中で精いっぱいやっていこうという大人たちの覚悟があり、子どもたちの安心と日常が取り戻されつつあるのだと感じられた。

昨年も来てくれた親子もあり、昨年来てくれた子どもが、今年は自分でチラシの情報を見つけ、友達を誘って参加してくれたという例もあった。子どもがカレンダー作りをしている間、同じフロアのラウンジでお母さん同士がお茶を飲みながらおしゃべりをしている姿も見られ、親子が離れて楽しめるようになって良かったと思った。プログラム終了後、子どもたちがかわいい文字でアンケートを書いてくれ、「また来年、会おうね～！」と手を振ってくれた。

プログラムと並行して、東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃを使った遊びコーナーを設置していたが、そちらでも子どもたちが楽しげに遊んでいた。今年もカプラは大人気で、協力しあって高く積み上げる子どもたちがいたり、たくさんのおもちゃと一緒に壮大な街を作る子どももいた。

プログラムの前後、チラシを見た学校の先生や保護者から相談したいと話しかけられる場面もあった。できる範囲のアドバイ

スをしたが、やはり、震災による負荷によってもともとあった問題が浮き上がってきた印象を受けた。プログラムの付き添いで来てくれていた保護者たちと立ち話するチャンスもいくらかあり、被災の状況や子どもの様子を聞かせてもらった。「良かったこともいろいろある」、「このように応援してもらっていることがありがたい。子どもたちもしっかい大きくなって、お返しできるようになってくれたら」とおしゃっていた。去年、参加して、仮設での支援にクリスマスカレンダー作りをやってみたという方もあった。クリスマスカレンダーを作ることが直接支援につながるわけではないが、「クリスマスカレンダーづくり」という場を開くことで起こってくる出会いや関係の展開が意味を持つのだと思っている。漫画展も同様である。

夜は懇親会。会場に向かう道はクリスマス用にライトアップされ、広場でイベントをやっており、夜の街はにぎわっていた。

2012年12月2日（日）

＜漫画トーク＋遊びプログラム＞

去年の漫画展は1階の入り口を入ったスペースでの開催で、センターに入ってくる人が必ず眼にする場所が確保されていたが、今回は場所が取れなかったということで、3階のひと部屋だった。わざわざ入ってきてくれる人しか見ることができないのが難点。せっかく準備した今年の冊子がないというハプニングもあった。残念だが、体制が変わったこともあり、やむを得ない。

私の最初の思惑としては、漫画展が開く偶然の出会いや会話がもたらすものを大事にしたいというものだった。受付でのさりげないやり取りや立ち話、お茶を飲みながら交わされる言葉、ノートに記されたメッセージを見ることなどが互いを力づけるだろうと思った。漫画展にアテンドすることになった清武くんや団さんは見事にこれを実現してくれていた。

並行して行われた「風船で遊ぼう」に集まってくれた子どもたちも、楽しい時間を過ごしたようだ。昨日のプログラムに参加して、「今日も絶対に参加する！」と言って来てくれた子もいた。「来年も絶対に来てね！僕も絶対来るから！」と何度も約束して帰った子もいたという。来年があるとわかっていることのありがたみを思う。また、子どもがプログラムに参加している間、漫画トークに参加した保護者もあり、良い表情で戻ってきたということだった。こんなささやかな積み重ねが応援のメッセージとして届くと嬉しい。

プログラム終了後、片付けをして、昼食を食べながら来年に向けての反省会をした。現地の声としては、福島はイベントが多く、放射能に関する講演やこの状況をどう乗り越えていくかという研修が多く、今後は、何かを教えてもらうのでなく、「答えが出ないことを一緒に考え、寄り添ってもらえる存在」が欲しいということだった。どんな

形でそれができるのかわかっているわけではないが、現地の人たちの声に耳を傾けること、声にならない声に耳を澄ますこと、その一方で情報を求め学び、批判的に考える力をつけることが重要なのだと思う。

2012年度　シンポジウム

2 年目のプロジェクトも無事終了し、2013 年 2 月 10 日にまとめのシンポジウム「東日本大震災と対人援助」を開催した。午前は、「復興支援と対人援助～サービスラーニングの視点から」と題して、院生たちの報告、午後は被災地からのゲストを招いての報告とディスカッションだった。一日を通して、専門性と人間性、日常と非日常はつながっているということがテーマとして上がっていたように思う。

初年度より参加している臨床心理領域の院生西木多賀子さんは、サービスラーニングとしての学びについて、「技法を身に着けることも大事だが、それだけでは一方通行の支援になってしまう。･･･まずは現地のことを理解しようと努めること、そのうえで必要なことを考え、最大限できる準備を丁寧にして現地に赴き、できないことは他の人と協力していく、現地の様子に合わせて柔軟に対応していく。当たり前だが、支援者中心であってはならないということを学べたことはとても大きなことだった。」と言い、「プロジェクトへは社会人院生の参加が多かったが、現役生は特に目先のことに忙しいのもあって、直線的な学び、最短距離での学びに関心が向きがちだと感じた。社会に出ていると、社会と自分の繋がりを考え、社会の中での位置づけを捉えるということが学びとして身についているのかもしれない。その感覚を大学院で身につけるには、クローズな学びだけではなかなか難しい。臨床領域の院生にはぜひ参加してほしいプロジェクトだと思う。長く関わり続け、今年の学びが、来年の学びに繋がり、それが毎年毎年積み重なっていく。そのようなゆっくりとした関わりや学びも知っておくことが必要だと感じた」と報告してくれた。スタートした当時には考えてもいなかった副産物だった。

合わせて、この時期、1 ヵ月にわたり、朱雀キャンパスで漫画展をやった。通りすがりに偶然眼にする状況下、一定期間継続して開催したことで、立命館大学の関係者、外部からわざわざ足を運んでくれた人、たまたま通った人が見てくれ、予想を上回る反響をもらった。

一定の想定のもとにスタートさせたことが、想定を超えて発展していく。これは物事がうまく行っている良い兆しである。

つづく

病児保育奮闘記

(9)

子どもサポート H&K
大石　仁美

ネットの偉力、しみじみと

ホームページを検索しやすいように一新して10カ月。急激な変化はないにしろ、会員数がこの数年120人前後で推移していたのが、気が付くと150 人近くにまで増えていました。じわっとその偉力が少しずつ目に見えてきて、う～ん　やっぱり今の時代はネットじゃないと駄目なんだとしみじみ思ったことでした。

また入会者にも少し変化がありました。今までは勤務医さんがほとんどで、あと私学の教員と公務員さんがぼつぼつという感じでしたが、大手の企業にお勤めの方や銀行員さん、それから外国籍の方が、「ネットを見て」と言ってお見えになりました。やはり新しい風が吹き始めたようです。

開設当初から、ホームページは作っていたのですが、(デザインはおしゃれでかわいらしく身内で楽しむ分にはよかったのですが)、外部から検索しにくいというのが難でした。上位に上がるにはそれなりの手技操作があるらしく、プロに依頼してやはり正解でした。

チラシもずいぶん作りましたが、いくら配っても効果はうすく、今必要としている人の目に留まらないかぎり、ただの紙屑のようです。私も新聞にはさんであるチラシは見ませんもの。かりに目に留まっても「そのうち・・・」なんて考えている人は中身はほとんど読まないです。「そのうち」が何時やってくるのか、予測がつかない。で、その時になってあわててネットで探す。そういう人はわりと多いです。そういうときはお話を伺って、今日だけ預かって欲しいという人には、会費の要らない他の施設を紹介するようにしています。

ただチラシも、保育園の説明会で、全員に配ってくれる園もあり、これはかなり有効で本当にありがたいことです。そんなわけでチラシは保育園に渡す分だけを印刷することにしました。

現在、登録会員を希望してこられる方は、やはり知人の紹介という方がいちばん多いですが、その方もホームページはきちんと読んで来られます。仕事を続けていくための担保を実に早い段階から準備をしておられるのです。仕事に対する前向きな姿勢は、仕事の専門性もあるでしょうが、人生の歩み方にあるのでしょう。将来の生活設計が実

に丁寧です。一人で動ける妊娠中に見学に見えて、予約して帰られる方もいらっしゃいます。そうした方にとって、「子どもサポート H&K」は安心を担保できる最も使いやすい施設だと言えます。その意味で自信を持ってこの仕組み・・・つまり行政の支援に頼らない独自のあり方を堅持していこうと思っております。さてこの先どんな展開が待っているのか、不安とワクワク感の入り混じった心持がいたします。

インフルエンザの嵐ふく

年末から温かい日が続き、年が明けてもコートなしで歩ける日々。暖冬も度が過ぎれば気味が悪いと思っていたら、一月半ばに急激な桁外れの寒波の到来。もしかしたら、そろそろやってくるかもと思っていましたら、本当にやって来ました、寒さと一緒にインフルエンザが。一月半ほど流行の時期がずれたので、A 型のあとに B 型が流行るのではなく、A も B も同時進行。それも急激な広がりで、あちこちで学級閉鎖の学校が続出。そうなると、学校が休みで行き場のない低学年の子ども達が困ります。

学級閉鎖で同窓会

2 月のはじめ、同じ園を卒園した小学生が 5 人そろいました。それぞれ違う私学を受験した子ども達で、久しぶりに顔を合わせ、にぎやかなこと。こんなところで同窓会だなんて不思議なことですが、学級閉鎖になったため一時保育でやってきたのです。さすが私学に行っただけあって、午前中は自主学習。「あっ、うちと同じや」とドリルを見せ合ったりして、漢字や計算問題をこなしていました。午後からは、ゲーム三昧。3DS とかいうゲーム機を持ってきていて、皆で横一列に並んで見ています。覗き込んでみると、鮮明でリアルな立体画像が目に飛び込んできました。操作ボタンでまるで自分がその中の人物のように動き回ることが出来るんですね。景色も実場面のように変わっていきます。「うひゃ～まるで異次元の世界でついていけないわ」玩具もえらく進化したものです。「目が悪くなるから、一時間以上はダメよ。」「うん、わかってる」そのうちゲームはトランプに切り替わり、点数をつけながら、きゃあきゃあと騒がしいことでした。こんな日が 3 日ほど続きました。

隣の部屋では乳児の世話に忙しく、小学生には手が回らないという状況でしたが、友達が集まったおかげで、勝手に遊んでくれて助かりました。食事とおやつを出して、あとは時々声掛けする程度でしたが、子ども等はそれで十分嬉しかったようでした。

保育園児も次々と

保育園児も次々やってきました。どの園も流行り始め、一人が完治しないうちにまた次の子がという具合です。A 型に罹患した子は症状が激しく、40℃近い熱と嘔吐を伴う子もいて、目が離せません。幼いながらも母親が仕事で忙しいことを理解していて、「ママおしごと」とつぶやいて布団の中でじっと耐えているのです。なんともいじらしいことです。三日ほどで熱も下がり、元気に遊び始め、一安心というところですが、解熱後三日は登園できないため、引き続き病児保育室で過ごしま

す。こんなふうに、毎日入れ替わりつつ、5〜7 人の子ども達がやってきて狭い部屋はいっぱいです。インフルの検査で（ー）の子は別室にしないといけないので、スタッフ 3 人で手一杯。引退宣言したジージも引っ張り出して、歌遊びや絵本の読み聞かせ等で小さい子のお相手をしてもらっています。私はわたしで、朝 6 時から子どもたちとスタッフの昼食づくり。出勤してからは、ケアーと経過記録に目を通し、与薬や水分補給の準備。子どものおむつ替え。幼児のトイレ介助。合間を見てハンドタオルの洗濯やその他雑用など保育士の半人前は働きます。

「すごい！大繁盛やね」　いやいや、何事も程々が良いです。「程々って、どのくらい？」　目が届き、ゆったりケアーできる 2〜3 人かな。　「そんなんでええの？」　そう。こんな異常事態はもうたくさん。この状態がもう一か月も続いているのです。忙しいというのは心が滅ぶというけど、全くその通りで、夜 7 時に片づけを終えると、もうへとへと。草花を愛でる等の感性は消失です。儲け？　そんなことはどうでもいいです。

今日は何人？

この日は幼児 5 人と小学生 1 人、それに発熱の乳児 1 人の計 7 人でした。はやく収束してくれることを祈るばかりです。

もうすぐ春休みだぁ〜

ネットを見て新しく会員になられた方から、もう春休みの保育依頼が来ています。上の子は、保育園を卒園した後、小学校に入学するまでの期間。下の子は、初めて保育園に入るので、慣らし保育の期間預かって欲しいという依頼です。はやくも次の仕事の準備をしなければと背中を押されています。

春休みの一時保育は、この事業を始めた当初に親からの要望で始めたものですが、毎年希望者が多く、私たちも親たちの切実な思いに出来るだけ応えてきました。特に年度替わりで保育園が数日おやすみする期間、親たちも一番忙しい時期なのです。

元気な子たちを預かるので、それなりに準備が必要で、それで 3 月のはじめに通信で希望者を募り、人数と年齢をつかんでから保育計画を練り、物品の調達やら、保育者の確保やらに奔走しなければなりません。既に希望者を募る前からこちらのほうも申し込みが数件来ています。

時間の流れに体がついていけない今日この頃。でもやるしかない！と自分に言い聞かせながら、ひとつひとつ足を地につけてこなしていこうと思っている私です。

ラホヤ村通信

（7）

高垣愉佳

言葉と配慮

「メリークリスマス」がキリスト教徒のみを特別扱いしているので、近年は「ハッピーホリデー」という言い方が推奨されている話は以前にも取り上げた。今回は言葉に込められた配慮の例として、まず映画でもよく出て来る「なんてこったい！」を取り上げたいと思う。直訳としてまず頭に浮かぶのは「Oh my God!オー・マイ・ゴッド」。実際始めて耳にしたのは、買ったばかりのホットドッグのソーセージのみを、飛んで来たカモメに見事にかっさらわれた女性が叫んでいた時だった。初めて耳にした時は、こちらの方こそ「なんてこったい！」と叫びたい気持ちだった。私の「なんてこったい」の奥にあった気持ちは「本当に Oh my God!とか言ってるよ。」だったのだが、他にも色々ないい方があり、ネイティブの人達は割と頻繁に口にすると段々分かって来た。他にも、ダッシュしたものの、一歩間に合わずバスに乗り損ねた学生さんは「Oh my Guh!オー・マイ・ガシュ」と叫んでいたし、インターナショナルセンターのボランティアさんはしょっちゅう「Oh my Heaven!オー・マイ・ヘブン」と叫んでいた。友人の旦那さんの車で出かけた時、駐車場が見つからなかった時に彼が「Oh my Goodness! オー・マイ・グッドネス」と言っていた。「今、Oh my goodness って言ったよね。オー・マイ・ゴッドっていう人やオー・マイ・ガシュっていう人とか、中にはヘブンとか言う人が居るけど、グッドネスとどう違うの？」と聞いてみた。「意味は同じだよ。でも、アメリカって色んな人が居るからね。神を信じてる人も信じていない人も。神を信じてる人がオー・マイ・ゴッドって聞いたら、そんな所で神を使うなと思うかもしれないだろ？グッドネスは宗教関係ないから、どこで誰に使っても大丈夫な言葉だから。僕は仕事で色んなお客さんに会うからね、この言葉を使うようにしてる。」との事だった。大人しい性格の人でも「なんてこったい」は普通に口にしていたので、この「なんてこったい」が自然に口をつくようになるのはアメリカンナイズされた一つの目安になるのかもしれないと思ったが、やはり私も根っからの日本人のようで、残念ながら今日まで遂に口にするには至らず、「Wao!ワーオ」と少しオーバーに言ってみるくらいが関の山のままだ。

『色んな人への配慮』という事に関して、他にも手紙の名前に付ける敬称？が挙げられる。私が日本の学校で習ったのは、男性には Mr.未婚女性には Miss、既婚女性には Mrs.だった。が、アメリカのコミュニティーカレッジの英語クラスで習ったのは、そ

れとは異なっていて、女性は全て「Miz」にするというものだった。それは、既婚か未婚かという事で様々な事を感じる人が居るし、男性は既婚未婚問わず「Mr」なのに、女性だけ結婚してるか否かで表記を変えるのは差別であるという考えから、既婚か未婚かによらず女性には「Miz」をつけるべしという事だった。

まだ学校教育に導入されるには至っていないが、「She」や「He」をやめて、誰に対しても「They」を使ってはどうか？という意見も出てきている。実際の場面では「They」を使っている人を見た事はないが、「Guy」を使っている人は時々見かけた。女性の話をしてるのに「Guy」って？？？と思って理由を尋ねてみたが、残念ながらその人の回答は「うーん、よく分からないけど、最近はテレビドラマとかでもよく Guy 使ってるし、こっちの方がかっこ良くない？」という回答だった。多分、「They」にしても「Guy」にしても、トランスジェンダーの方たちの事も含めた配慮からなのではないかと思う。誰に確かめたわけでも無いので、これは全くの憶測に過ぎないのだけれど。

その他にも差別に通じないようにとの配慮から、あからさまに国籍や人種を尋ねたりする事もマナー違反とされていた。「where are you from? あなたどこから来たの？」という尋ね方は良く使われていた。この聞き方は OK らしい。というのも答えを選ぶ余地があるからだ。答えは「West side. 西の方」でもいいし「California カリフォルニア」でもいいし「La Jolla ラホヤ」でもいいし、「Japan 日本」でもいい。 もちろん嘘を答えるのは良くないが、嘘にならない範疇で、その時々のシチュエーションに最もふさわしい答え方を選ぶ余地を、答える側に残した問い方だと思う。大勢が集まる国際パーティーなどで東洋人を見かけるとつい「Are you ○○？」「日本人？」「中国人？」「韓国人？」などと声をかけたくなりがちで、実際そうして声をかけている人も見かけるが、一歩間違えば「いきなり国籍聞くなんて、この人もしかしてレイシスト？」というような誤解を招く恐れがあるという事は頭の片隅に入れておいた方が良いかもしれない。

このように、アメリカでは使う言葉に対する配慮をよく感じた。一流ホテルなどに行くと、何となく「マダム」と言われるのではないかという気がしていたが、残念ながらそんな事は一度も無かった。間違っても「奥さん」とか「お母さん」とか「お姉さん」などと呼びかけられる事も一度も無かった。それは「マダム」が英語ではなく、実はフランス語であるという理由からだけではなく、アメリカ社会なりの配慮やマナーが背景にあるように思う。お酒屋さんでビールを買おうとしたところ、子供と間違われて「お嬢ちゃんにはアルコールは売れないなぁー。」と言われ、身分証明書を見て実年齢を知ると「どんな魔法を使ったらこの年齢でそんな見た目になるんだ？」と大爆笑しながら謝られたという事はあった。

私には子供は居ないのだが、日本では友人の子どもと遊んでいる時などに時々勘違いされて「お母さん」と呼びかけられる事がある。こういう時にはかなり複雑な心境になる。市場や百貨店の食料品売り場などを歩いていれば「奥さん」や「お姉さん」と呼びかけられる事は日常茶飯事だ。「奥さ

ん」や「お姉さん」でない人がこのような呼びかけをされたら、恐らく「お母さん」と呼ばれて私が感じるのと似たような感覚に襲われるのではないか？と思う。言葉にしてみると、「私の事呼んでるんだろうけど、それちょっと私とは違うんだよなぁ。。。」という違和感のような感覚だ。もっと極端に感じる人であれば、勝手に決めつけられた事に傷つく事だってあるかもしれない。

どこに行っても、誰と話していても「You」もしくは「ゆか」とファーストネームで呼ばれる。相手がホームレスの人の時にも、ものすごく有名な人だった時にもそれは変わらなかった。この気持ちの良さ、自分自身という存在が丸ごと認められているという感覚。筆舌に尽くし難いこの感覚を味わってから、私は英語嫌いが直ったを通り越して英語が好きになった。

チップ

アメリカで食事をするとチップを払わなければいけないというシステムがある。強制ではないけれど半強制のようなもので、レシートにチップという欄があり、いくらチップとしてあげるかを記入するようになっている。飲食費のだいたい１０％～２０％の範囲内の金額を書くというのが一般的だ。サービスがとても悪くてチップを払いたくないと思ったなら、もちろん０円でも構わない。逆にサービスに感激したのでもっと払いたいと思うなら、いくら払っても良い。そうしてお客さんからもらったチップの行方がどうなるか？というのは店によって違うらしい。１日毎に全てのチップの総額を従業員の数で割って均等に分配される店もあれば、そのテーブルを担当した人にチップのほとんどが直接渡る店もあるようだ。同じお店でも親切な店員さんもいれば、不親切な店員さんも居る。親切な店員さんと不親切な店員さんの落差があまりに激しい時には、レシートのチップ欄は０円と記入して、親切にしてくれた店員さんに直接チップを手渡してもいい。

このチップ制度、日本人には馴染が無いので抵抗感を示す人も居るが、私は気に入っていた。ラホヤ村で人種差別を受けた事はほとんど無かったが、一度ダウンタウンのカフェに行った時にラズベリーパイとアイスコーヒーを注文したのだが、何度言ってもオーダーが伝わらないという事があった。「は？発音が悪すぎて何を言ってるのか分からないわ。」と言われて、それを真に受けた私は色んな発音やイントネーションで何度も何度もオーダーを繰り返した。途中で、遠くの方に居た店員さんが「ラズベリーパイとアイスコーヒーですね。すぐご用意します！」と叫んで私の方に走って来てくれた。そして先ほどから私の発音が悪すぎて聞き取れないと言っていた店員さんに「あなたはもういいから厨房の方に下がって。」と指示を出して私を救ってくれた。その時になってはじめてやっとあれが嫌がらせだったのだという事に気づいた。あの店員さんは困った顔で何度も何度も色んなイントネーションや発音で「ラズベリーパイとアイスコーヒー」と繰り返す私を見て楽しんでいたのだ。あからさまな人種差別は無いが、そういう形での嫌がらせは残念ながらある。みんな通る道なので気にしてはいけないと、駐在経験が長い日本人が後になって教えてくれた。助けてくれた店員さんは「あなたの発音は最初からちゃんと伝

わってたから大丈夫よ。遠くに居た私の耳にもちゃんと届いてたから。アメリカには色んな人が居るの。ごめんなさいね。」と謝ってくれた。その後、助けてくれた店員さんにはとても仲の良い日系人の友達が居て、その友達がいかにいい人か、また嫌がらせをされている私を見て日系人の友達の事を思い出してとても心が痛んだことなどを話してくれた。私は助けてくれた店員さんに大変感謝したので、レシートのチップ欄には０円と記入して少し多めのチップを助けてくれた店員さんに直接手渡した。

このチップ制度、いい事をした人が報われる、頑張った人が報われるシステムとして使えるように思う。頑張っても、いい事をしても、時給が一律なのはアメリカも日本と同じだ。もちろんチップ欲しさにただ媚びを売る店員さんが増えるような事は困るが、正直者が得をする、いい事をしたらいい事で報われる、チップ制度は使い方によってそれを可能にしうるような気がする。

番外編：おもてなし in スペイン

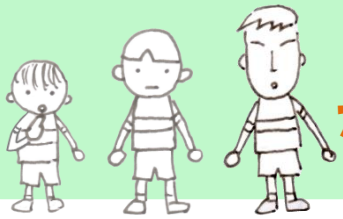
昨年、スペインへ行った。一緒に観光していた友人たちととある美術館に行った所、残念ながら改装工事中で中に入る事が出来なかった。工事の埃よけのシートを見てドイツ人の友達が「ほー、これはすごい配慮だねぇ。」と感心して言った。「どの辺が？」と私が聞くと、「だって中には入れないし、外側も改装工事中だけど、こんな感じの建物ですよって、来た人がイメージ出来るようにシートに写真をプリントしてるじゃない。これ見ただけで、本物の建物を見たような気になるじゃない。」との事だった。私からしてみれば写真は写真。のぺっとしていて、実に安物臭く、綺麗に修正がかけられていて、本来の建物の味などは全く感じられないので、特に何の感動もしなかったのだが、とにかくそのドイツ人の友人は「スペインはなかなかやるなぁ。」といたく感動していた。東京オリンピック誘致の際に「お・も・て・な・し」とかいう殺し文句で誘致を勝ち取っていたが、日本人の考えるおもてなしと外国人が考えるおもてなしとはだいぶ異なる可能性があるかもしれないよと思った。

ドイツ人絶賛のスペイン流おもてなし

知的発達障害の家族の日々

6

大谷　多加志



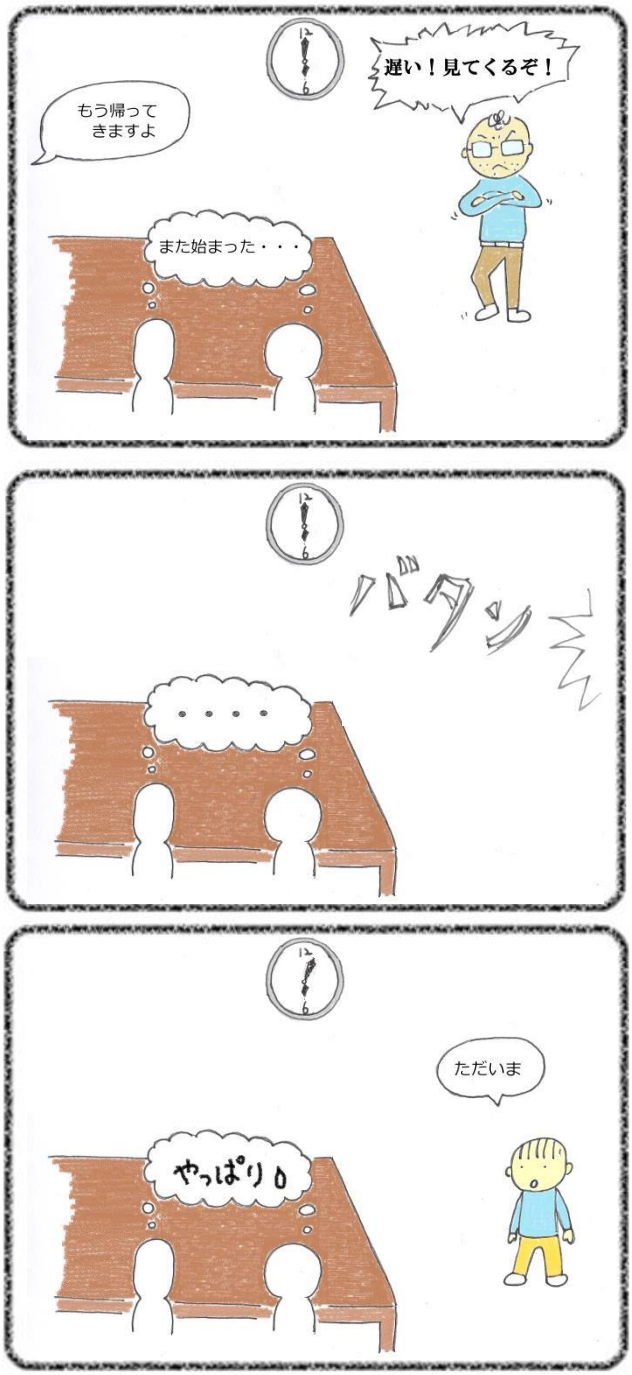
間が悪い

父と弟はどうにも間が合わない。近所の踏切に電車を見に行った弟が暗くなっても帰って来ないと、落ち着かなくなり「見てくる！」と言い出す父。いつもそのうち帰って来るので、「ほっとけばいいのに」と気にしない他の面々にもいら立ちながら、家を出ていく。

すると決まって数分後に、弟が帰ってくる。それもいつも行き違いになる。いるはずもないのに、父は踏切の周辺や線路沿いの道を探しているのだと思うと、気の毒になる。

帰ってきた弟は、「腹減った！」と言い、すぐに夕飯を食べたがるが、父が帰ってきた時、先に食事が始まっている腹立たしいだろうと思い、結局待つことになる。

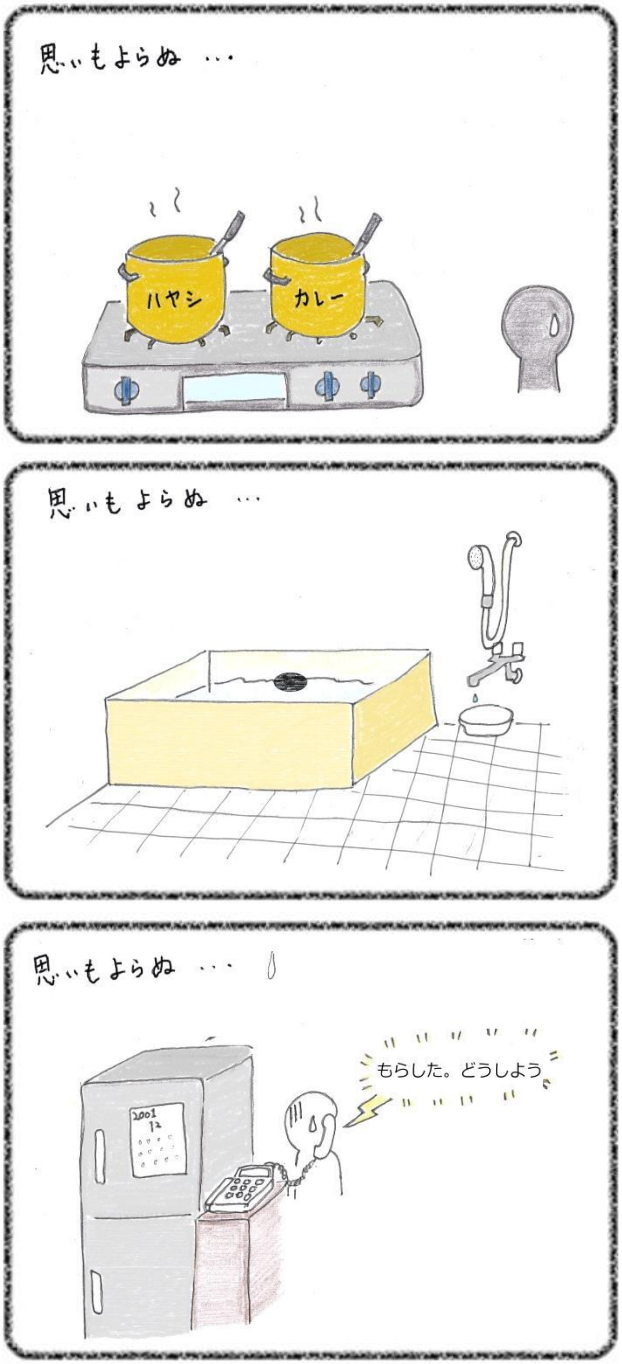
基本的に父は弟に甘い。子どもの頃は一番年下だし、知的障害があるからだと思っていたが、今は弟の障害について父が罪悪感を持っていたことが根っこにあるのだろうと思っている。あれから 20 年、２人の間の悪さは、相変わらずだ。



思いもよらぬ・・・

子どもが生まれた時、哺乳瓶やおむつなど、色々な育児用品を購入した。そのとき見たカタログに「おしっこキャップ」というものがあった。おむつを替える時に赤ちゃんがおしっこをしたら、それをかぶせるというのだ。結局購入はせず、おしっこをひっかけられることもなかったが、“そうか、いつどこでうんちやおしっこをするかわからないんだ！”と思い、最初は身構えながらおむつを替えていた。お風呂でもうんちに警戒していた。お風呂のうんちを警戒したのには、たぶん訳がある。過去に“お風呂に浮かぶうんち”を見たことがあるからだ。

障害を持つ家族と暮らしていると、ときに思いもよらぬことに出くわす（もちろん、他の家庭でもあり得なくはないのだろうけれど・・・）。お風呂のうんちを含め、思い出したものを書いてみた。



①小学生のとき、カレーとハヤシライスが同じ日の食卓に出るようになった。
②中学生のとき、お風呂場で弟のうんちを踏んだ。
③大学生のとき、「外出先でもらした」と電話で SOS を受けた。

だからどうということはないのだけれど、日常に意外性があったなぁと、振り返ってみて思う。

①のカレーとハヤシライスが同じ日に登場するようになったは、ある出来事をきっかけに弟がカレーを食べなくなり、

なおかつ父はハヤシライスを食べないため、弟用のハヤシライスと父用のカレーが並ぶようになった。弟がカレーを食べなくなったのは、父が作ったカレーがきっかけだった。たまたま母が不在か何かで、珍しく父が夕食を作ったのだが、それがカレーだった。そのカレーに、ルウが溶け残っていて、さらに運の悪いことにそれが弟に当たったのである。「辛いもの食わされた！」と憤慨した挙句、その後は誰が作っても、どんなルウを入れてもカレーを食べなくなった。こういう柔軟性のなさも、弟の特徴だ。弟には知的障害の診断しか出ていない。今の診断の基準や傾向だったら、どういう診断名になったのかな、と時々思うことがある。

②は私が中学校で、たぶん弟は小学校の高学年の頃。お風呂に入った時点で、何か漂う臭いに違和感を覚えたのは記憶している。最初、何かを踏み、湯船に浮かぶ物体を見つけても、すぐには頭が認識できずにいた。さすがに弟も気づいていなかったわけはないが、何も言わずに知らん顔をしているのが、なんとも腹立たしかった。

③は、私が大学院生、弟は養護学校の高等部を卒業し、仕事をしている頃だった。日曜日で、両親は用事で不在。弟は電車で遊びに出かけ、最後に残った私も大学に用があって家を出ようとしていた時だった。出掛けに鳴り出した電話に出てみたところ、「おれなんだけどぉ、、もれちゃったんだ。どうしたらいい？」と困惑した声。どうしたらいいかはこっちが聞きたい気分だったが、とにかく現在地を確認し、動かないように言い含めて車で迎えに出かけた。弟は、他者の視点があまり理解できない。そのため、“待ち合わせ”の意味がよくわかっていない。自分からは待ち合わせ場所に見に来たりはするのだが、自分は待ち合わせ場所から平気で動いてしまう。それで、行き違いになるのだが、彼目線では「待ち合わせ場所に見に行ってもいつもいない！」という認識になる。たぶん電話を切った直後に待ち合わせ場所に行き、すぐに来ないことにしびれを切らせて（じっとしていられなくて）うろうろしてしまうのだと思う。この日も案の定、待ち合わせ場所にはいなかった。勘を頼りに探したら幸運にもすぐに切符売り場に立ち尽くしているのを発見し、事なきを得た。

もらしたのは大きい方で臭いも強かった。車で来たのは正解だったなと自画自賛。家を出るぎりぎりのタイミングで連絡をとれたことも含め、我が家では「幸運だったなぁ！」という感想でまとめられる出来事になっている。

対人支援点描（５）

「入院に頼らない精神医療④　資格制度の良し悪し」

小林　茂（臨床心理士）

1.　心理士の国家資格化を巡って.

もう話題としては古いのかもしれないが、2015 年 9 月、心理職の国家資格化の法案が通った（注１）。

これまで医療分野でいえば専門職としての予算の根拠がなく一般職採用と同じ扱いであったり、福祉分野でいえば専門職配置加算の対象にならず専門職としての位置づけがなかった。教育分野においてもスクールカウンセラーとして週 1 回勤務で何かと成果が問われて評価を受ける状況にある。これでは、まるで料理人がしっかり調理場に立つことが許されないまま、調理の出来や能力や資格の価値が評価されるようなものといえる。

このような現状が資格の整備により、良い方向へと変化しないかと期待している。素直に喜びたい。もしかしたら国の資格化されたことで財源の根拠が示されて、採用においても一時的に雇用の増加が生まれるかもしれない。資格制度が整備されることの恩恵もあると思われる。

だが、制度による雇用条件や環境整備の損得よりも、地域で入院に頼らない精神医療を考えるうえで、支援チームを形成する中に心理士が加わるなど支援の多様性と質が向上することが期待できることが大きいのではないかと思う。この点、大いに期待したい。しかし、気になることがないでもない。今回は、その気になることを取り上げたい。

２．制度の小前史

これまで度々、心理士の資格制度についての議論がなされてきた。世代的に私が生まれる以前の話になるが、1964 年に日本臨床心理学会の立ち上げから心理士の国家資格化の問題が始まっていたという。

国家資格化が学会発足の第一目的ではなかったと思われるが、主要な目的の一つであったようである。それが第 5 回(1968 年)の大会では、国家資格の位置づけを巡って紛糾し、後に学会そのものが分裂する事態にまで至った。60 年代の安保闘争、70 年代の全共闘など時代背景として私には計り知れないメンタリティがあったと思われる。

（話がそれるが、私が牧師になったあとの赴任地で、当時、この時代に青年期を過ごし今

は年配になった方々から、「牧師は必要悪だ」「教団、教会、牧師の制度は権威で、堕落している」と糾弾されたことがあった。前任者も潰瘍になり血を吐き出しながら退任され、その後を私が引き継いだのだが、最初、何が何だかわからなかった。しかし、これが未だに学生運動の残滓を引きずっている世界があるのだと体験的に知った出来事であった。あれもこれも反権威主義の図式に当てはめて「反対」「反対」では何も生み出さない。個人的なこの出来事から、その当時の様相とメンタリティを少しだけ察するくらいである。）

その後、1982 年、日本臨床心理学会を退会した国家資格化推進派の方を中心に日本心理臨床学会を発足させ、その前段階として臨床心理士という民間資格が作られるに至った。

2005 年に一法案 2 資格案（「臨床心理士」「医療心理師」）が提案されたが医療関係者の反対により法案化されることがなかった（注 2）。

しかし、2014 年に再度法案が 1 資格に見直され（この時は衆議院が解散したため未審議となった）、2015 年 9 月、ようやく法案が通過するに至ったのである。

こうして観ると、心理士の国家資格化の道のりは、2015 年から遡り約半世紀に渡る取り組みであったといえる。

３．資格化されると何が問題になるのか

（１）資格は支援者が求めるもので必要から反対

資格制定に関して、日本臨床心理学会の第 5 回大会で問題とされたことが、心理士の資格は「いったい誰のための資格か？」という論点であったという。当時を知るものではない自分が簡単に断定できるものでないが、この問いかけの意味するところは、そもそも資格制度というのは支援者側が気にしていることであって、利用する側のために資格制度が必要とされるものではない、という理由があったのではないか。しかし、当時の社会背景からすれば、「体制と反体制」「権威と反権威」という図式の力動はなかったのだろうか。たとえば、「国による資格制定は、体制に組み込まれることであって、その資格をもって自らの立場を位置づけるのは権威的である。」というような見方である。

（２）臨床心理行為は医行為であるので反対

一法案 2 資格案（「臨床心理士」「医療心理師」）が提案されたときにみられた話題であるが、この時の日本精神科診療所協会からの言い分であるが、以下のようなことが指摘された。①心理援助は医行為であるから問題である、②心理援助が多の職種に無用な影響を与えるから問題である、③心理援助の範囲があいまいで科学性に乏しいから問題である、④医療分野以外の心理の資格化は問題である、というものであったと思う。精神保健福祉士の国家資格化の際にも同じような反対意見が出された。要するに、医師の既得権の問題ではないか。自分たちのテリトリーを守りたいということだろう。公認心理師の法制化の際

でも問題とされたのが、医師の「指示」か「指導」かという話題であったように思う。

だが、振り返り、（１）（２）の資格化の反対の理由は、正当で益するものであったのだろうか。

４．やっぱり必要な資格制度

日本心理臨床学会、日本臨床心理士資格認定協会等による臨床心理士資格制度は、当初は心理援助を行う支援者の質を保証し、公的資格の前段階の位置づけで始まった。だが、意図するわけではなかったろうが、民間の資格は、NPO 法人による〇〇セラピーから学会認定資格まで心理系（的？）の資格制度を乱立させることになった。（ついで言えば、臨床心理士の社会的浸透により、臨床教育学、臨床哲学など、臨床〇〇という言葉も広がった。一時期、大学の学部学科に「国際」とつけるのが流行したことがあったが、乱暴しすぎると“言葉の力”やせ細るから、どこか抵抗感がある現象に感じている。）

それ故に、玉石混交状態の状態から、ある一定の水準を保証する意味で公的資格が社会的必要となっていると思う。

また、世界の国際学会に参加する研究者・実践者が増えると、当然、自主的に国際比較が生じ、公的資格についても意識が向くようになる。公的資格がある国ばかりではないと思うが、多くが制度化されて活躍している姿を思うと必要性を感じるのは自然な動きであるといえる。

最後に、ある専門として力を持ちながら、資格制度がないために職場で同僚、他職種と同じように働けない不遇と、支援者としてのサービスが制限されるユーザーへの不利益は解消される必要がある。

こうした外的変化を含めたもろもろを突合せると、今回の資格制度の整備は、良い方向性であると思う。

５．有用な資格制度となることを願って

けれども、また別の問題も生じる。これは、先行する他の資格制度の話題からの考察である。

たまたまソーシャルワークを専門とする友人から聞いた話題だが、韓国と日本のソーシャルワーカーの合同の研究会の場で微妙な温度差があったということである。韓国では日本に比べ制度が遅れていて、その分、ソーシャルワークの実践を頑張っているということであった。

また、北海道私学幼稚園協会苫小牧・日高支部の研修に参加した際、幼稚園と幼稚園教諭・保育士の養成校を経営している講師の先生が幼稚園教諭と保育士の質の低下の問題を話題にされていた。特に認定こども園の制度が出来て保育士の給与と労働条件が多少良くなったことから幼稚園教諭を避けるようになったという。幼稚園を運営する側の活動理念へのこだわりも大事なことであるが、幼稚園の先生になりたいという願いよりも田舎より都会で経済的な条件が良いところが優先されてしまう昨今の風潮に危機感を訴えていた。

もちろん、このような話題は、この時、この場に限った主観的な印象かもしれない。同じ働くなら労働条件が良い方が良いのもわかる。だが、安定や良い条件を優先する限り、その範囲での取り組みしかやらなくなるのではないか。また、制度の不備や、労働環境の不利を乗り越えようとする力が物事の新しい局面を作り上げ、支援の力を育まないだろうかと感じる自分がいる。制度というものは、ある水準を均質化し保証するが、一歩下がって見渡せば、人も組織もその範囲でしか活動を許さない縛りにもなる。有資格者を活かしもすれば、堕しもする。真に人と社会に益する資格となるか、これからが本当のスタートといえる。

注１
「心理職の業務の適正化を図る公認心理師法が 9 日、参議院本会議で全会一致で可決、成立した。文部科学省、厚生労働省を主務官庁とした、心理職として初の国家資格が誕生する。国家試験は指定試験機関が年に 1 回以上行う。施行は公布日から 2 年以内。施行 5 年後の見直し規定も盛り込んだ。関係団体にとっては、半世紀にわたる悲願がようやくかなった。

公認心理師法は、衆議院文部科学委員長の提案による議員立法として成立した。衆参それぞれの委員会では、受験資格に関する留意事項など 6 項目の付帯決議が付いた。

公認心理師は名称独占の資格で、保健医療、福祉、教育、司法・矯正、産業などの分野で活躍することを想定。医療分野では診療補助職とせず、心理的支援の対象者に主治医がいる場合に限り、医師の指示を受けることを義務づけた。

養成ルートは三つあるが、そのうち 4 年制大学と大学院で計 6 年間学んだ人が国家試験を受けるルートが基本となる。」

注２
心理士の国家資格化を目指す議員連盟間で双方の合意の下「臨床心理士及び医療心理師法案」との名称で、両資格を一つの法案内に明記する形での法案化をみた。その後、医療心理師国家資格制度推進協議会の参加団体の日本精神神経科診療所協会、日本精神科病院協会、日本精神神経学会、日本医師会から反対された。

「あ！萌え」の構造：序論

（4）

応用人間科学研究科　齋藤清二

15.「カップ焼きそば現象」について

前回のおさらい

前回、「萌え」と「恋愛」は異なるのか同じなのかという問題について論じているはずが、いつの間にか「カップ焼きそば現象」についての議論になってしまった。もちろん，本来ならば再度「萌え」の話題に戻すべきであるのだが、そこで戻さないのが私のやり方なのである…とは言っても、もう前回のことなど忘れている人が多いだろうから、再度「カップ焼きそば現象」のオリジナルな定義（by 南千秋、齋藤により修正）を掲げておく。

「焼きそばを食べたい時」と「カップ焼きそばを食べたい時」は違う。これらは既に別の食べものである。「カップ焼きそば」は「焼きそば」に近いものだが、焼きそばに勝ってもいないし負けてもいない。これを「カップ焼きそば現象」と呼ぶ。

加えて、南千秋によって「カップ焼きそば現象」の実例としてあげられている三つの現象を以下に示す。

１）「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」
２）「くま」に対する
「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」
３）「新茶」に対する
「ハルカが入れたお茶（実は古いお茶）」

最初の、「焼きそば」に対する「カップ焼きそば」の例については、前回既に詳細に

論じた（え、ちっとも詳細じゃないって、まあそうとも言うが、それはちょっとおいておく…）. その結論を以下に再度簡単にまとめておく。

カップ焼きそば現象とは、“A と B は、同じものではないが、異なるものでもない” という A と B の関係を表すような現象である。

さらに、A＝萌え、B=恋愛をこの図式に代入して言い換えると、「萌え」と「恋愛」の関係は、以下のようになる。

「萌え」と「恋愛」は同じものではないが、異なるものでもなく、それは「カップ焼きそば現象」の一種である。

以上が、前回の議論の要約である。さあここからさら議論を続けて行こう。（「え、またですかぁ」なんて声が聞こえるが、私は気にしないのだ）

一応、分析の対象となっているアニメの URL を再掲しておく。

http://gyao.yahoo.co.jp/player/00252/v10080/v0993400000000542672/

16.「くま」と「ふじおか」について

「カップ焼きそば現象」の二つ目の例としての「くま」と「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」は、一見して分かりにくい。いったいこれが、前の例とどこに共通点があるのだろうか？　千秋は言う。

例えば、私のこのくまのぬいぐるみ。くまに似てはいるが、決してくまではない別のもの。「ふじおか」という名前まである。

千秋によれば、これが日常的にある『カップ焼きそば現象』の一つの例であるという。しかし、それを聞いている冬馬（南家おかえりの登場人物の一人。千秋と同じ学年のボーイッシュな少女）にはさっぱり分からない。

実際アニメの中では、登場人物の一人であるタケルおじさん（実際には南家三姉妹の従兄）が、くまのぬいぐるみである「ふじおか」の前に一人で座って、悩み事をぶつぶつと語っているところを見て、千秋がそれを「あれも『カップ焼きそば現象』のひとつだ」と説明するのである（描写が分かりにくいのはご容赦。実は南家の登場人物の相互関係については、筆者は不勉強である）。しかし、その説明を聞いた冬馬は、さらに混乱する（まあ、当然ではある）。

筆者も、千秋の説明の意味がすぐに分かるわけではないのだが、ここでは「千秋が変なことを言っている」と考えるのは質的研究者の正しい在り方ではない（←いつから質的研究者になった？）。そうではなくて、「千秋がそう言っているというデータがあるのだから、きっとそれを説明できる理論があるはずだ」と考えるのが正しい態度である。そのような態度をとることができる能力（性質）を、グレイザーと

ストラウスは「理論感受性 theoretical sensitivity」と呼び、グラウンデッド・セオリー・アプローチをはじめとする質的研究を実践する研究者には必須の能力であるとした（らしい）。もちろん、この能力は「妄想感受性 delusional sensitivity」と呼び変えることもできる（これはグレイザーとストラウスが言っているわけではない）。

私達がここですべきことは、このシーンにおいては「カップ焼きそば理論」が実際に働いているとの想定に基づいて、「くま」と「ふじおか」の関係についての意味の解釈を探求することである。この作業は「くま」と「ふじおか」とその関係いう具体的な例と、「カップ焼きそば理論」という抽象的な理論の間を、循環的に往還しながら解釈を勧めるという作業になる。このような活動は、どちらかがどちらかを因果的、直線的に説明したり、規定したりということとは全く違って、解釈学的循環などと呼ばれている（らしい）。別な言い方をすれば、理論から演繹的（deductive）に実例を解釈するのでもなく、実例から理論を帰納的（inductive）に作り上げるのでもなく、その両者を縦横無尽に駆使することを通じて、新しい発想を abductive に創造することを目指すということである。

前項で確認したように、カップ焼きそば現象とは、“A と B は、同じものではないが、異なるものでもない”という A と B の関係を表すような現象である。そこで、A=くま、B＝ふじおか、を代入してみると、「くま」と「ふじおか」は同じものではないが、異なるものでもない、ということになる。しかしここで、千秋は「『ふじおか』はくまに似ているがくまではない」と喝破する。つまり、ここまでとてもややこしい話を延々と続けてきたが、ひとつの結論は、「カップ焼きそば理論」とは「相似」という抽象化された概念についての一つの説明であるということが分かる。これが、「カップ焼きそば現象」としての第二の実例である「くまとふじおか」を詳しく分析したことによって浮かび上がった一つの成果である。なーんだ、そんな単純なことだったのか、と読者は言うだろう。しかしこの議論がややこしく感じられるのは、実はいくつかの問題点が一緒に重なっているからでもある。

まず、くまのぬいぐるみに「ふじおか」という固有名詞がつけられているということが事態を複雑にしている。これを、**「くま」と「ぬいぐるみのくま」は同じものではないが、異なるものでもない（つまり相似である）、**ということの一例なのだとして論ずるならば話は少しすっきりする。「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と、「くま」と「ぬいぐるみのくま」の関係を比較すれば、この両者の関係はほぼ同じである。しかし、どこにでもあるくまのぬいぐるみではなく、「ふじおか」という固有名詞によって命名されていることで、このくまのぬいぐるみは、俄然個別性を帯びてくる。

確かに、もし実際に一頭のアラスカ

熊を南家に連れてきて、そのくまとふじおかを並べてみれば、くまとふじおかはある意味対等である（実際に台所でフライパンを使って焼きそばを作り、それとペヤングのカップ焼きそばを並べて食卓に出した状況を想像してほしい）。しかし、それは現実的ではない。くまのぬいぐるみを家庭におくことはできるが、アラスカ熊を家庭に飼っておくことはできない。ここが、焼きそばとくまの違うところである。

「ふじおか」と名付けられたくまのぬいぐるみを、アラスカ熊と対等なべつなものであると思う人は少ないだろう。この南家のシーンでも、くまは現実にはそこにいない。いるのは、「くま」に似ている「ふじおか」というぬいぐるみ人形だけである。それでは、タケルはなぜ、「ふじおか」に話しかけているのか？ このような疑問を生じさせることも、このシーンの理解を複雑にしている理由の一つである。タケルは「ふじおか」に悩みを打ち明けることによって、（実際には「ふじおか」は何も応答しないにもかかわらず）一種の癒やしを得ているらしい。これは「ふじおかというぬいぐるみ」の働きなのか、あるいは「ふじおか」の背後に存在する「くま」の働きなのか、あるいはそれは別に特定のくまのぬいぐるみでもなんでもなくて、黙って話を聞いてくれる（ように見える）ものならばなんでもよいのか。それは、現実に話を聴いてくれる特定の誰かの代理物なのか？

話は突然跳ぶが、この世界には俗にいうカウンセラーとか心理療法家とか臨床心理士などという人種がいて、彼らは一応専門的な訓練を受けており、悩みをもったクライエントの役にたつために一生懸命その役割を果たすのが仕事である。彼/彼女らの仕事とは何かといえば、自分から何かを話すのではなく、ただひたすらクライエントの話すこと（最近ではちょっと洒落て”物語”や”語り”などともいう）を聴くのである。さすがに最近では、何にもしないでただ聴いているだけではだめだと言われることが多くなり、色々みたてをしたり、専門的な技法で介入したりもできることが必要だと言われるようになってきてはいるが、それでもカウンセリングの基本が傾聴であることに変わりはない。それでは、カウンセラーが一生懸命傾聴すると、なぜクライエントは癒やされるのか？ 自分からは何も語らず、ただ聴いているだけなら、それはロボットや人形や、くまのぬいぐるみ（や鰯の頭）でも良いのではないのか？ これは当然の疑問であろう。

こういう疑問を向けられると多くの人は、「それはもちろん、生身の人間同士の関係性が大切なのであって、ロボットや人形じゃあだめですよ、はっはっは（乾いた笑）」と言うのであるが、でも、それって本当に本当なのか？ 生身の人間に話を聴いてもらいながら話すのと、くまのぬいぐるみに向かって話すのとでは、本当にその効果は違うのか？ 実は、この疑問に正確に答える実証的な研究結果（エビデンス）は

ない。その理由は、そもそもくまのぬいぐるみに向かって真剣に悩みを話すなどというシチュエーション（実験群）と、それと見分けがつかず当事者にはどちらかわからないが実は何もしていないような状況（統制群）を人為的に設定して、無作為割り付け試験で効果の差を見るなどという研究がデザインできないからである（もしできるという人がいたら、ぜひやってみてほしい）。しかし、もし本当にそういった体験をするクライエントがいるとしたら（経験的にはまちがいなくいる）、そして南家に訪れたタケルがくまのぬいぐるみのふじおかに向かって自分の悩みを話すことによって癒やされたとするなら、その時彼らを癒やしているものはいったいなんなのだろうか？

想像を強引に膨らませてみよう、もし「ふじおか」が「くまのぬいぐるみ」ではなくて「仏像（例えば阿弥陀如来）」であり、タケルが深く仏教を信仰している人だとしたら、タケルが仏像に向かって座って何か（例えば波阿弥陀仏）を唱えているだけで、そこで何か癒やしに近いことが起こる可能性はあるのではないだろうか。もし「ふじおかが」ぬいぐるみではなくて、なんらかの萌えフィギュアであって、タケルがそのフィギュアに超萌えているオタクだったとしたら、さらには「ふじおか」が実際にイヨマンテの熊であり、タケルが熊を神として信じている（縄文時代の？）人間だったとしたら、そこに似たようなことが起きる可能性はないだろうか。もしこれらの状況において、なんらかの癒やしと呼べるような体験が生じるのだとしたら、それを引き起こしているものはいったいなんなのだろうか。

この南家に起こったできごとに限って言えば、「ふじおか」の背後にあるものは、おそらく「ふじおかのもつくまの形相」と無関係ではない。タケルがイヨマンテの熊に対して畏敬の念をもっているかどうかは分からないが、そこにあるものはもちろん現実のくまではなくて、ふじおかの持つ「くま性＝bear-ness」とでもよぶべき、実体をもたない抽象的な性質であると思われる。ここで再度、「ふじおか」と「くま」の関係が、「カップ焼きそば」と「焼きそば」の関係と等価であったということを思い出してほしい。カップ焼きそばと焼きそばは同じものでもないが違うものでもない。しかし、「ふじおか」と「くま」の関係を見た時に、さらにもうひとつの関係を付け加える必要がある。それはふじおかという個別のものと、ここには現実には存在しないがふじおかのもつ性質である「くま性」の関係である。個別で具体的なものである「ふじおか」はくま性をもつが、くまが「ふじおか性」をもつとは言えない。つまり、ふじおかとくまは相互に入れ替えることが不可能なのである。そして我々は、個物であるふじおかを通じて、普遍的なくま性に触れることができる。ふじおかは広い意味ではくまの一種である。しかし、くまそれ自体は（少なくとも“今ここ”では）見ることも触れることもできな

い。ここでの「くま」は、実体を持たない抽象的な「くま性」であり、しかしタケルも我々も、少なくとも今ここにおいては、「ふじおか」を通じてしかその「くま性」に触れることができないのである。

ここまで論じてくると「ふじおか（くまのぬいぐるみ）」と「くま」との関係、そして、その関係と「カップ焼きそば現象」の関係がようやく明らかになってきた。（え、それでもさっぱり分からないって、まあそれも当然なのであるが）。賢明な読者諸君はもうお気づきのことと思うが、「くま」と「くまのぬいぐるみであるふじおか」の関係は、前回論じたモーツアルトのオペラ魔笛において論じた、「パミーナ」と「パミーナの絵姿」との関係とよく似ている（つまり相似である）。もちろん、パミーナはお話の中の登場人物ではあるが、実体のない抽象的な概念ではなく、あくまでも一人の登場人物としての実体を持っている。しかし、タミーノがパミーナの絵姿に一目惚れした“その”時点においては、パミーナはそこには存在せず、タミーノは「パミーナの絵姿（二次元画像）」を通じてしかパミーナ（あるいはタミーノを魅惑する「パミーナ性」）に触れることができない。「パミーナの絵姿」は、確かに「パミーナの代わり（代理物）」に過ぎないかも知れないが、タミーノが実際にパミーナと出会い、結ばれるために、通常では達成することが困難な試練に挑戦し、堪え忍び、それに打ち勝つために必要な力を与えるものはこの「絵姿」なのである。このことをよく分かっている千秋は、「おじさん、話し相手がほしいんじゃないのか？」と問う冬馬に対してこう断言する。

お前はさっきから何を聞いていたのだ？「ふじおか」は話し相手代わりではない。「話し相手のくま」なのだ！

「くまとふじおか」の事例を分析した結果、前項で述べた「カップ焼きそば現象」および、それと「萌え」の関連についての定義は少し変更（改良）しなければならないことが分かる。改訂版は以下のようになるだろう。

カップ焼きそば現象とは、“ＡとＢは、同じものではないが、異なるものでもなく、さらにＡとＢは相互入れ替え可能ではない”というようなＡとＢの関係を表す現象である。

「萌え」と「恋愛」は同じものではなく、異なるものでもないが、相互に入れ替えることはできない。それは「カップ焼きそば現象」の一種である。

だいぶ長くなったので、今回はここまでとして、次回はいよいよ、ハルカの入れたお茶をめぐる「カップ焼きそば現象の真髄」にせまりたいと思う（乞うご期待）。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン１「SM クラブの受付」～

エピソード４：現場にあるもの

しすてむ❤□きよたけ

エピソード１で綴った葛藤を再度書くことになりますが、書いていくうちに「やっぱり書かないほうがいいかも？」と問うている最中です。読んでいる人はそんなにいないだろうと思う一方で、少なからず現場に影響を与えてしまうことも、無きにしも非ず、と思う時もある。また、そもそも、人って、言いたくないことや敢えて隠して過ごしていることもあると思うから。

しかし、今回も「SM クラブの受付」を書くに至りました。当時、ボスに「何か書いてもいいよ」と言われたことがあったのですが、それはできなかったことを振り返ると、もしかすると今、過去の出来事だから、振り返ることができるようになったのかもしれません。そして、影響を与えることもあるかもしれないと思いつつも、書いていいと言われていたことが、今に繋がっているようにも思っています。

これらを振り返ると、タイミングはその時々に訪れるし、それを活かすもその人ができることだと思うので、適度にやり過ごして生きていくことも人にとって大切な営みの一部のように感じています。当然、人は他人に言わないことだってある、そのことを大事にできないだろうかと問うている自分に気づいたということです。

前回の話題にもあげた（と思う）職種や嗜好の印象から、「人には言えない」という言葉を置くならば、言わずとも社会的にネガティヴな職の位置にある、と書き（書いたっけ？）、公開している自分を問うと、ネガティヴな局面だけではないと感じる機微があったのだと思います。

「人には言えない」職。だが、無くならないという現実。たとえ、法が変わったとしてもあり続ける現状を通し、「人には言えない」ことがあるからこそ、成立している「職」「場」もある。客やキャスト、僕ような受付といった「人」がいる。

そこで働く人たちの試行錯誤している姿は、内容がどうであれ、一先ずそこで頑張ってみようとしている姿でした。嗜好は受け入れがたかった僕を振り返ると、彼女たちに、次第に受け入れてもらっていたのかもしれません。

僕は、現場に入ったことで、人って、変化に順応する一方で、初めから容易に受け

入れられるものではないことも感じました。（「清武システムズ」も変化のための装置と言って動いているので、意味不明だったり、場違いだと不信がられることも多く、このことも気づき経験の一つとなっています）。

結論、僕が思っていた性風俗のイメージは、キャストや同僚たちによって変わったということ、そこには、そもそも知人だった、貴子の不気味で繊細で華麗である才能に興味を持ったことが影響していました。

これらがあるから今の僕は、以前に比べ「受付だった」と気楽に話すようになったのでしょう。そして、書き始めて、渦中にいると気づかないことも多かった～と知りました。

渦中ではないことを活かして、渦中にある人でありたいものです。あたかもまとめて主審を出すだけの存在になんかなりたくない、と思っているのでしょう。

SM クラブの受付から脱線しているようですが、僕の中ではそうでもありません。

プレイがあるから、日常を感じることがあると思うのです。嗜好への共感はともかく、僕の気づきは、非日常を味わうことで日常を意識していたからです。言い換えれば、いつもと違うことを導入することで起こる気づきがあるのでしょう。

嗜好体験はなかったとしても、僕も SM 経験者に変容していたのだと思います。前述したことは、エピソード 1 で軽い雰囲気で書いたことと重なりますが、僕にとって予想外な場、人により貴重な経験が創られていたということです。

「言えない」現象も、そこにはそこの意味があるように思います。そして、「言えちゃう」現象には個人の変化、周辺の変化によって始まる気がしてなりません。

そこで、今回は僕の体験には、そもそも「予想外」が前提にあったと気づいたので、まず、どのような前提のもとで性風俗業界が認識されているか、綴ります。気づき体験になった元とでも申しましょうか。

自分の体験を鏡のようにして書いていきます。当時調べたり、動いてみた経験や体験、風俗でお遊びする人の周りにいる女性の声なんかを交えています。そのあとに、本エピソードに入っていきます。いずれも、五月雨式の綴りなので、答えは明示しておりません。

※注意 or 耳寄り情報※

プロローグ以降、お食事中の方は、表現により、不快に感じる場合がございます。好まれる場合もございます。

プロローグ

風俗を通じて知る日常の性的行為

～個人と役割、そして、ちまたで聞いた声から～

性風俗に対するネガティヴな印象とは一体どのようなものだろうか。

ネガティヴ・ヴォイスを整理すると、性

的に淫らな人だとか、身体を売っているだとか、メンタル的に問題がある、または、そんな仕事をするからメンタルに問題を来たすといったものだった。覚えているくらいだから、もしかすると僕もそんな印象を持っていたかもしれない。

ココロと労働形態

この業種には、精神疾患を持っている人も少なくはないと聞いたことがある。ここだけで判断することは如何なものかと思うが、一度考えたことがあった。キーワードとなったのは「勤怠」。勤怠を通して綴ってみたいと思う。業界外でも、話題に上がるので、あえて共通のキーワードなんじゃないかと思った。

彼女たちの勤怠を思い出してみると、当日お休みすることだってあった。薬を常用している人や障害者手帳を持っていた人もいたのではなかろうか。かといって、彼女たちを病人として扱ったことはなかったほどに、皆と待機室で過ごし、プレイに出かけていた。とても仕事熱心だと思った。

一方、すぐに辞めてしまう人もいた。辞めたけど業界内を渡り歩きたどり着いている人もいた。続かないのだ。

職場外の人から聞いたことだが、完全に他の仕事に転職したいけど、他の仕事をしたことがなく、行けない人たちもいるらしい。全く別の分野に行くことはそう簡単ではなく、経験を活かし、歩んでいるようだ。

メンタル的な課題に着目されることだってある。もちろん、僕があった限りの話なので、一概にそんなものはありません！と断言仕切れない事実かもしれない。だが、そうでない事実もあるので、綴ってみる。

雇用形態から書いてみよう。性風俗は、出勤するも欠勤するも自分で判断して良い。シフト制であり、人員が足りないから何としてでも出勤しなければならないという職場ではない。だから、一般的な感覚で、当日欠勤は怠惰だと断言し難い。だが、一般的な感覚で問えば、勤怠が悪いと都合よく働いている人のように受けるし、向上心がないようにも捉えられる。また、客の不満を言おうものなら、その人の人となりやプレイ技術の無さが問われることもある。

しかし、同じような勤怠状況や転職の繰り返しは、他の就労の場でも起きている。僕の場合は、定職に就かず、同じような動きをしていた。経営者が変わって人員カットでサービス悪化や負傷、長時間労働による体調不良、ある人は ok と言ったけどいつの間にか勝手にしているとなり、批判される等が契機だった。打破を試みたが、はじめに言ったよね？とか、決定事項だからという言葉一つで進まない現状に直面した。そして、次の職場へ流れていくこともあった。

風俗嬢とアルバイターだった僕、どちらが怠惰かの判断をするつもりはない。しかし、共通していることは、雇用形態が個人の働き方を問われ、口出しすると煙たがられる。

一つの職場の状況と個人という関係だけで職を転々とするわけではない。アルバイトは溢れている。他の職場も求人を出して

いるので、「次の場所は他にもある」こと。就労の場と個人、加えて他の職場の求人があるといった両側面が、転職の機会になっている。一つの会社が、提示する勤務形態だけが、個人の勤怠へ影響しているとも断定し難いということになる。

これらを通し、風俗嬢と同じような勤怠現象は、他でも起きていることだと思う。しかし、性風俗業界は、キャストに場を提供し、個々人に源氏名という屋号を持たせ、個人運営がなされている。だから、僕が知るキャストは、自分のペースで責任持って働いていたと感じていたので、個人のメンタルの強さを問うこともなかったのかもしれない。

むしろ、最前線の運営形態である気もしていた。勤怠を通し、個人を問うこと自体が社会から外れてしまっていることだけに目が向けられやすいのではなかろうか。

カラダと労働内容

では、なぜ性風俗嬢に対するネガティヴ・イメージが生まれるのだろうか。

何を扱っているサービスか。ここに着目することで、違いは一目瞭然かもしれない。言うまでもなく、「性的行為」に触れる仕事。これが、多くの対人サービス業とずば抜けて違う職である。

当時僕は、世間の「性的行為」に対する認識が、風俗嬢に対するネガティヴな印象に、もしくは、相互に与え合っているのでは？という問いを持っていた。

常識とされる解釈は、同時期に複数の人と性的関係を持つことは淫らである、とされていること。そんなこと言わなくてもそうでしょう、と言われてしまうことだろう。わかりやすい例が、浮気や不倫。

そうした行為を最も反対者となる人たちは、彼氏や彼女、妻や夫、お母さん、お父さんたちであろう。であるならば、当たり前に認識されている、性的行為の対象も言わなくてもいいほどに決まっているということになる。

彼らは、「新しい人も見つかってよかったね」とか「いろいろな人とどんどん性的関係を持つといいよ」なんて、誰よりも容易く言わない人たちである。むしろ、不特定多数の人と性的行為を持つことに対し、最も、嫌悪感を持ち合う人たちだろう。

いろいろな人と性的関係を持つ人たちを「イチャイチャコミュニケーター・略して、イチャコミュ」なんて言ったら、バッシングがあらゆるところから来そうだ。

性風俗話に戻すが、性風俗に対するネガティヴな印象は、当たり前とされている「性的行為」や「性的関係をもつ相手」に対する認識がいかなるものかを映し出しているのだと思う。性風俗は、ご法度と思われる行為を行う場であることが、当たり前であるからだ。当たり前の場だけでなく、特定の相手だけと行うのではないので、ご法度意見に拍車はかかる。加えて、生身を使ったサービスに対するお金の支払いがあることも含まれるだろう。一般的に了解されている性的行為に金銭は伴われないことが背後にある。

だが、大賛成とまでは言わずとも、「性風俗に行く男」を了解する彼女や「性風俗で働く女」を了解する彼氏も存在する。みながみな、性的行為は（性風俗には可能プレイに境界があるので、どこまでを性的行為とするのかという問いもありますが）夫婦や付き合っている相手とだけ行うべきである、と思っているわけではなさそうだ。できれば、親い間柄だけにしてくれ！レベルの人である。

「性風俗利用者の彼女」たちから聞いた話を上げると、「素人と浮気されるよりプロのところに行かれた方がいい」という人。

どうやら彼女たちは、嫌だという前提は、前述した内容と同様のことを思っているのだが、それほど排除的な感情を持った人たちではないのだ。

また、「性風俗で働く女性の彼氏」たちから聞いた話では、「他の男に触れられていると思うと嫌は嫌」、「仕事でやってる」、「プライドもってやってそうだし」、「彼女＝風俗嬢だけではないでしょ」と言った具合に、性風俗で働き、性的行為を持つことと浮気は、同等ではないようだ。いずれも、性風俗が、性的行為の場所であるが、性的行為と関係性が常に同等であるわけではないということではなかろうか。

一方、そう割り切れるもんではない！と性風俗嬢を批判する話も耳にしたことがあった。この話を重ねると、風俗嬢だからしていること、それをどこで行うかで、周辺の人の認識も変わることに気づかされる。

推定、昭和初期にあった出来事話題だった。夫の浮気相手が「玄人」であり、風俗に行っていたことまで夫はバレてしまったようだった。そして、夫が浮気した相手が「玄人」だったことに何らかの敗北感を持ったそうだ。

こんな具合だった。「玄人に本気になったとか何って示しの付かない話なのか！恥ずかしい」。玄人に本気になってしまう男は、情けないという印象を受けたし、そこに伴った感情は、浮気をされたらされた方の恥でもあるかのようだった。

しかし、「玄人」だからこそ起こりうることで「本気にさせられる」からこそ「玄人」だとも考えられると思う（そうでなければ、リピーターにはなり得ないので）。

そう思うと、きっと今はおばあさんであろう、当時風俗嬢の彼女に会ってみたいと思ったくらいだった。そんなことから、男が、「情けない」というのも、僕は、完全に納得できるものではなかったし、妻の「恥」とするのもいかがなものかと思った。しかし、どれも現実であり、発せられる言葉。それもまた現実なのだと思う。人間は感情ある生き物だから。

彼女が発した、行動はこんな具合だった。風俗嬢は、妻に責められ、妻の介入により客であり他人の夫である彼とは、別れさせられたそうだ。妻が浮気相手の風俗嬢にお金を渡したようで、「お金で解決」だったそうだ（一人の妻の解決法？）。

風俗嬢の彼女が本気であれば、「金」を渡されることで、切ない恋になったと思う。妻としては苦しい心境だっただろう。夫は

そのあと、後ろめたさと切なさを残しただろう。

みな、それぞれの心境を含めた日常を迎えたのだろう、と僕は思う。時が解決しているような気もするが、もしかすると誰もが、操ることの出来ない時間とともに、楽しかった思い、後悔した言動の両方を含め過ごしているかもしれない。

行為に着目したことで、風俗嬢だからしていることが浮かんできた。そして、もう一つ。性風俗嬢という「玄人」だから責められてしまう実態を担っている場合も出てきた。これらは、当たり前に思っている「性的行為」の解釈が反映されている可能性があるということだろう。

だが、「性風俗利用者の近くにいる彼女たち」や「彼氏たち」を比べると、行為は嫌だけれども、風俗嬢を了解している場合もあった。違いは何であったのか。風俗嬢が仕事をしている時間に会うのと、そうではない時間である。時間内で会うのか、外で会うのかで、了解の範疇は変わるということ。また、従事している時間で、周辺にいる彼女や彼氏の認識に違いが生まれるということだ。

昭和初期の話は、今でもとても興味深く残っている。「お金で解決」という言葉だ。風俗に行けば、男がお金を払う。妻の支払いにより、感情と払い手の性別を抜きにして言えば、彼女は、普段の仕事のやり取りがなされていたことになる。

もう聞く機会はないので、想像になるが、「お金で解決」を謀られたことにより、一個人だった彼女は、風俗嬢として意識したということもあるだろう。または、時間外も玄人を徹していたかもしれない。玄人を隠して、徹していただけかもしれない。

そうなれば、バレてこじらせたのであれば、男が玄人とのプライベートお遊びに慣れていなかった、もしくは、彼に魅了され玄人を忘れたとか、もしくは、風俗嬢の彼女が、玄人であることを示す何らかの形がなかったのだろう（それは、大きな勘違いの行為へと発展するから、現代の派遣型風俗嬢は店舗型よりリスキーだと思う）。

本気恋愛に発展したのであれば、それは、役を捨て性風俗という舞台から出たということでもあろう。

いずれにせよ、一般的に性的な関係を持つこと自体、とても慎重に扱われ、慎重であるのだろう。家族や彼女に堂々と性風俗に行くということや働いているということも言わないよう、誰にでも言う仕事じゃないし、言えない事情が前述の通りだろう。

働きたくなる

人は、言わないことがあるにもかかわらず、「言えない」という言葉になる。ここまで、そうした現象の細部をしてきた（とでも言ってみましょうか）。しかし、僕は、「言えない」現象に対し、そこまで興味はない。

人は、そういうことだって含めて暮らしていることも大事だと思うから。そもそも僕は、この仕事をしたい！とか、これになりたい！という思いがあまりないので、関心は、そこで「働きたくなる現象」だ。

性風俗業界にいると「言えない現象」は、

話題にあがることがなかったよう、彼女たちも当たり前だと分かっている。うまいことやり過ごして、かわしている人たちと出会ってきたことを振り返ると「働きたくなる現象」への関心に拍車はかかる。

では、風俗嬢という名のやり過ごし上手な人たちは、どこから集まって来ていたのだろうか。

僕が働いていた時期、専門学校生、大学生や大学院生、企業勤めをしている女性が働いていた。そこでしか働けないというわけではない人たちだった。

一般的に現在の性風俗店は、HP や広告で求人を出しており、女性も男性のように性的行為に触れる機会は増えた。女性にとって、敷居が高い業界ではなくなってきている気がする。

男性であれば、性風俗、地域、嗜好で検索をすれば、web 上で店と出会うので、どこで、何かをしたかという自身の性的目的により引きつけられる。女性の場合、労働であるので、それとは違うだろう。

僕自身、バイトを探す女性になりきって、検索をしてみた。収入、時間、身なりこの辺りが検索キーワードになった。

検索していくと、飲食、訪問営業、テレアポ、単発バイトと自分の現状に合わせた都合によって絞られていった。この辺りはまだ、一般的な求人サイトである。もっと、短い時間で高収入、仕事以外の時間を重視させようと思えば、「短時間　高収入」とバイトサイトから外れ、すぐさまブラウザから検索をかけた。だいたいこの辺りから、女性求人が出てくる。女性限定の高収入アルバイト。チャットレディもあるが、この辺りで風俗店に出会う。

自分の都合により出会うこともあるのだが、一方、店の運営形態の変化が拍車をかけている可能性もあるだろう。昔とは随分変わり、風俗店は増加した。風営法が変わり、店舗型、待合室型は減り、また、これから出すことは不可能に近いが、無店舗型が登場した。派遣型であり、ほとんどの女の子はラブホや自宅に出向く営業形態だ。店舗がないから、HP 上で女の子を紹介する。

インターネットが流通しているので、昔よりも女性が、男性向けの性サービス産業を知る機会が開かれるようになった。男性向けであることには違いないが、女の子も自分がどんな店や女の子と働くのかイメージがつきやすい。加えて、女の子も多様なジャンルの風俗店を知る機会になったとも言えるだろう。性風俗店を通して男性の性癖を知ること、自分の許容範囲や興味を知る機会にもなる。そして、HP 内に求人、応募フォームも用意されている。

応募動機に「HP を見て」という人も少なくはなかった。また、SM に興味があるとか、どんな性癖の人がいるのか知りたい、コスチュームが好きなど SM 自体への興味関心を持っている人もいたので、業界の中でも興味関心により店舗に引き寄せられる。

かといって、興味関心だけで集まってくるわけでもなかった。学費や生活費をそこから出しているキャストもいたので、「お

金」というキーワードも含まれている。

昔であれば、お金が必要で性風俗を選ぶ場合、返済のためという目的があった。僕が小学生くらいの頃から違っていたと思う。記憶に残っているのは、「ブルセラ」で、お小遣い稼ぎになっていた。いずれも、「お金が必要」という括りでは、今も昔も変わらない労働理由。しかし、僕が働いていた頃は、金銭的マイナスがあるからたどり着く職ではなく、マイナスになることを憶測して、先手を打つかのようにたどり着いているようだった。

こんなことを考えていたくらいなので、当時の僕は、「昔よりアルバイト求人は増えたのだから、見知らぬ相手と性的接触がある仕事を選ぶとなれば、意を決し、応募してくる職」のように思っていたのではないだろうか。ところが、「受付」をしたことで、「そうでもなさそう」という解釈に変わっていたようだ。入店しやすくなっている。

もちろん、それぞれ事情はあったのかもしれない。だが、思っていたよりも、自分のしたいことやこれからについてを懸命に考え、選択しているようだった。普段の時間の使い方や趣味と嗜好、それらに合わせて選ぶ、店舗運営や労働条件があるように。

街中に可視化されない店舗

これらを、「サービスの提供者が増えている」とするなら、いろいろなサービスがあることは、人の多様な欲望の受け皿にもなるので、肯定的に捉えられる。しかし、そう言い切るにはまだ早い気がしていた。

現在の性風俗経営、無店舗型の増加は、

いいことばかりではないとも思っていた。言い換えれば、素人でも登録し、事務所（一人暮らし程度のマンション一室）を借用したらいいので、店舗型よりも安い資金で起業できるのだが、そこからが一筋縄ではいかない現状がある。

広告や SEO 対策をしておかなければ、店が知られることはないので、客の連絡は来ない。さらに、女の子がいるから、始まるため、女の子に教育やフォローをする人がいなければ、女の子はそこでの楽しみを見出すことなく辞め、次へ行ってしまう。女の子と経営側、どちらか一方だけでは成り立たない現場だ。

もちろん、それらは、客が来ないことで崩れることもある。ともなれば、店は、客と会わずして、違いに相手に信頼を置くのか。ドタキャンされてしまおうものなら、キャストは受付を信頼できなくなるのだ。

僕は、いくつかの店に問い合わせをした

ことがある。受付がさっぱりわからなかったから、どんな受付対応をされるのか、知りたくなったからだっただけなのだが、運営されてない店があることを知った。

なかなか電話に出ないことや何度かけても出ないことがあった。出るが、女の子が出勤していないので、予約話にまでたどり着けないこともあった。今すぐ予約をしようとしてもはぐらかされたり、HP 上に女の子の出勤が曖昧に載せられていたり、すべて問い合わせしてくれたら対応するといったものが、運営されてないと感じた応対の一つだった。

しかし、上記対応が、運営されていないと断言はできない。しっかりと運営されている店舗でも、そうした対応をすることもある。キャストが買い物に出かけていたり、自宅待機をしている場合があるため、例え案内時間をプレイ中の時のよう、「◯分後にご案内可能です」と言っても、あやふやに聞こえる場合もあるかもしれない。ただ、HP がしっかりしていると、客の安心材料になっているようではあった。

店がいかにして客を信頼するのかということは難しい。電話予約のため、客が来店するとも限らない現状があった。何を持って必ず来る確約とするのか、ここが店舗型と比べ難しいのだ。非通知によるご予約を受け付けないことや事前連絡を番号通知でしていただくなどの対策がとられている。

来なければ、キャストがいい気するわけがない。他の予約を取れることだってあるため、キャスト・受付ともにいい気はしない。冷やかし態度をとられようものなら、クソ客とか出禁とか言ってしまうくらい腹立たしい事態なのだ。

多少オーバーかもしれないが、全ては、「信頼関係」から始まっているということかもしれない。しかし、店舗型は、「信頼関係」から始まらずとも、在ること、顔を合わせることで示せていたので、人と人との信頼が、信頼関係の始まりだとは断言できない。

「信頼関係」から始まるとなると個々人が気を使い合うので、運営のし辛さや働きにくさが生まれるように思う。「信頼関係」を個々の人間の関係性だけで言っていては、互いに窮屈な事態があるということだろう。場所の有無、今となっては HP や広告が信頼にも関係しているのだから。

個人と所属

受付が、電話が鳴るのを待つだけ、そして、鳴るための HP 作成や広報に必死になっているだけだと、コールセンターや IT 系会社になってしまい、風俗店ではなくなってしまう。

僕が何をしていたかを振り返ると、女の子といる時間に何をキャッチして、店と女の子を合わせたら、どこに反映していけるのかを考え、動くこと。役割をもって、その役割を徹していない時間に起きたことを、役割に活かすといった動きをしていた。

これらは、キャストとおしゃべりをしている時、「所属をしないで一人でしてたら手取りは多くなるけど、違うんだよね」という話に影響されていたのかもしれない。

無店舗型は個々人の関係次第という状況を作りやすい。先に書いた風俗嬢との性的行為が、浮気か否かの話のよう、個人で行えば、プロなのかアマなのか分かりにくい。風俗嬢としては成立しないと解釈していた。

僕は、所属をすること、そして、どこの嬢であるか示されることが、キャストが働きやすいと思う環境であると考えていたのだろう。所属していることを表せる振る舞いができる状況かどうかが、信頼関係を個人だけに託してしまわない秘訣だと思っていたかもしれない。

アマチュア体験記録

ここで、再度触れるのだが、業界素人の僕が、これまで綴ってきた考えに至る体験をし、また振り返っているのか。だいぶ前に辞めたし、業界のエキスパートを目指している者でもない。当然、経営者でもなかったので、詳しいことは知らずして、それとなく過ごしていただけだったと言えばそうかもしれない。しかし、素人の僕が、ボスやその他の受付、そして女の子たちから教えてもらうことが多かった。「性風俗」そして「SM」に対し、ネガティヴな印象で認識する世の風潮はあるが、僕は、違う体験をしたのだと思う。

と言うことで、そろそろエピソードに入る。今回のラインアップは、「1.　入店手続き〜書類編〜」、「2.　入店手続き〜名前とビジュアル編〜」、「3.　ユニフォーム」、「4.　マニュアル」、「5.　マニュアルは何処へ」、「6.　女性の前でエロ本を読む」、「7.　拉致られた!?と思った」です。

1。入店手続き〜書類編〜

初出勤日。確か、「遅番」の 18 時からだった。

この日、出勤するにあたり雅さんから、「そんなにすることはない」と告げられていた。そうは言われても、多少なりとも不安はあったのだろう。バイク駐車場に到着したのは、20 分前だった。喫煙スペースでコーヒー片手に一服をし、店へ向かった。

アルバイト経験はあったから、職場の説明をされるイメージはできていた。しかし、どのような実務を行うのかイメージを持っていなかった。いや、そうだろうか。「性風俗」や「SM」という言葉を意識しすぎ、実務に気が回っていなかったのだと思う。

予定時刻 10 分前。店の扉を開き、階段を上った。階段一本道、緊張感で先の見えぬ坂道のようだった。面接の時に体験した狭い空間、そして、女しかいなかった場所。さらに、彼女たちは応じてくれるが、無言だった衝撃。戸惑いを引きずっていた。

しかし、そんなこと考えなくてよかった。雅さんしかいなかったのだ。密室に女の子がぎょうさんいるより、雅さんと二人の方が、気楽だと思った。

ところが、そうでもなかった。雅さんは、淡々とパソコンの前に座りお茶を飲み、僕は「その辺に座ってて」と言われそのまま。ワンルームの部屋に男女二人きりといった状況だった。

僕は、雅さんの近く、受付の机の横に近づいていった。「あの〜僕 SM ってさっぱり

わからないんですけど…」「あ、大丈夫よ」「あ、そうです！？」（この日は、大丈夫だった）。

「この書類書いて」と言うことで用紙を受け取った。『入店届』だった。どの職場でも記載するようなものだった。名前や生年月日、連絡先、緊急連絡先、前職そんなことを書いた。書き終えた後、ポラロイドカメラで顔写真を撮られ、入店届けに貼って完了。

未だに覚えている。あの時の無愛想な顔の写真を。しかも、眉毛を切りそこなったついでに、ラインカットにしていた。ヤンキーが仕事に困り、たどり着いた先が風俗業界だった的に思った。

2.　入店手続き〜名前とビジュアル編〜

そこならではの記入項目があった。名前と、体にまつわること。「ここって入ります！？」と源氏名について尋ねると、「そこはいいわよ女の子が書くところだから」。「へへへ。あとタトゥーとかも書いてありますけど」、「そこも空欄でいいわよ」、「あ、はい」。結構テンション上がった項目だったのだが、僕には無関係だった。むしろ、今思えば、恥ずかしい質問だったと思う。

源氏名やタトゥーは、店側が知っておくキャスト事項で、かつ、直接接触あるお客さんに提示する事項だ。客の要望から「受付」の立場を言うならば、男の名前だとか服で覆われた中身なんて、どうでもいいのである。どうでもよくないときは、対応に不満があったときくらいで、基本的に受付の名前なんてどうでもいいのである。「受付」という名が、既に源氏名のようなものだと思う。

3.　ユニフォーム

この日を迎える前、雅さんから「黒のパンツ、スラックスのような」と「襟の付いたシャツ。白とか」と服の指定があった。領収書を持って来たら清算するとのことだった。

「着替えは、ここでしてもいいし、女の子の前で嫌だったら、あっち（客の待合室）で着替えてもいいわよ」。わざわざ移動しなくてもいいと思い、その場で着替えた。

その服はもう二度と着ることはなかった。黒のスラックスに白のＹシャツを購入してきたのだが、どうもそんなの着なくてよかったらしい。店から言えば「黒服」的な格好に見えたようだ。

この日以降、普段履いているパンツとシャツ、不要であるがネクタイを着けて行く

ようになった。一体、スラックスと白のシャツはどんなものをイメージして伝えられたのかは、未だにわからない。

思い当たることと言えば、初対面の日、僕は短パンとＴシャツ、キョンキョンに釣り上げたリュック姿で登場していた。少しは、ちゃんとした格好を望まれていただけだということだろうか。

4.　マニュアル

僕が入店した店を知る始まりは、「女の子が読むマニュアル」。勤怠、待機室での過ごし方、お客さんとの接客マナーなど、全部で 30～40 項目くらいだったと思う。みなのスタートだ。

「サービス」と記載されている内容は、かくかくしかじか法の下で運営しているから始まり、何を提出していて時間は何時までで、どんなサービスはしたらダメかだったと思う。届け出を出している店であり、そこにある約束は、女の子は、受付案内所（僕がいる建物内）で、会っちゃダメ。時間は日の出から深夜０時までだから、それ以外の時間に待機室にお客さん来ちゃダメ。ざっと言うとそういうことだ。

その他、営業方針だとか、禁止行為、お店のシステム、どこでプレイをするのか、店との連絡について、出勤、予約からプレイ後までの流れなどが記載されていた。もちろん、Ｍ嬢さん用と女王様用に分けられてあった。

確か、共通の項目に「向上心を持って努力する」もあった。曖昧だし、懸命に知識や技術の習得をするイメージを持つ人もいたようだった。だが、僕はもっと手前の過ごし方が、マニュアルに反映されると思った。

僕と彼女たちの過ごし方を振り返ってみると、彼女たちが話し始めると、僕も考えさせられ、月に１度出すイベントコースや限定コースの話しになっていた。経験をイベントに活かしていくキャストを知った。また、イベントにせずとも、だらだら喋ってしまったり、聞いて聞いてという「好奇心」たっぷりのキャストは、リピーターをつけていた。

憶測だが、お客さんとのプレイに関することや自分ができないことを喋ってしまうキャストの方が、無理をせず、自分のできる範囲を見つけ、楽しむことが上手かったのだろう。もちろん、これらはプレイ中は、手探りということもあるだろうが、それ自体をお客さんと楽しむことができる人たちだと思っていた。「好奇心」が「向上心」につながっているかのようだった。

5.　マニュアルは何処へ

女の子と話す内容には注意のような項目があった（女の子が読むマニュアル）。自分で判断をするようにとも記載されていた。

このことについて「話していましたけど…」と前回女の子同士が戯れていたことに触れた。慣れるまで時間がかかる子もいる、そうじゃない子もいるなど当たり前の返事だった。あと、風俗業界だから、時に大変な子も出入りすることがあるような話もあ

った。「あ、そうですかー」で終わった話だ。

どー考えてもマニュアルのこの項目は、要らないような気もした。みな、自分の判断で呈示していると思ったから。しかし、世間がイメージする風俗嬢に合わせられているような気がして、入り口としては納得する事項でもあった。

それにしても、僕が面接時に見たパソコン前で戯れ合っていた光景とマニュアルが、あまりにも一致していなかった。だから、このマニュアルからスタートするが、人は共に過ごせば、それなりに仲良くなってしまうものだと思った。

6.　女性の前でエロ本を読む

SM が分からないし、興味ないことを告げていた。この日、待機室に置いてある本を手にした。ガサツに置いてあった本を手に取り、パラパラとめくった。

エロ本を堂々と読むことや女の人前にして、いや、そもそも女の人に勧められることってそうそうないことなので、読む自分が滑稽だった。でも、SM に触れたことがなかったからか、堂々と行けたもんだった。知らないが故にやれることは、往々にしてあるものだと思った。

しかし、最初に手にした本は、『マニア倶楽部』だったもんだから、初心者の僕には、ツッコミたくなることが満載だった。

『マニア倶楽部』は、日本に一つしかない「投稿 SM 専門誌」。しかも、排泄が多い号を手にしていたものだから、「雅さん、黄金を希望するお客さんは多いですか？」とか「僕、全然、興奮しないけど受付できますかね！？」とか尋ねた。

「同じ性的嗜好じゃなくていい」「違う方がいい」と言われ、そんなもんかと思った。また、黄金を希望するお客さんが、増える「季節」があると教えてくれた。

僕は、「うんちは季節物」と解釈をし、そうしたことで、限定物だと認識し、とても貴重なものへと変換していた。「それぞまさに黄金だ！」と、そんな解釈いらないのに、しておいた。テンションは上がったけど、性的興奮の範囲ではなかった。

でも、「黄金」は女王様が M 男に行う、ご褒美にだったりもするらしく、僕の解釈は安易なものだっただろう。さらに、当時僕が見た『マニア倶楽部』は、目隠しをされて排泄をさせられている写真だったから、これは M 嬢がすることだと判明した。

SM に興味がないという嘘を僕はついていたと思った。ついつい質問をし始めていたのだから。さらに、教えてもらいつつ、誰が、何を、誰に、いつ、行うかで呈示されるものの意味が大きく変わると考え始めていたほどだ。

次々と置いてある本を手にしてみた。プレイをしているように、そして、コスチュームの素材もわかるように映されたグラビアページが連なる『スナイパーEVE』。写真とともに言葉が添えられプレイであるように描写されていた。

また、この雑誌には各地に在る SM クラブ、ラウンジや BAR、そこに在籍する女の子の紹介がされており、僕が在籍することになった店も掲載されていた。

その他、緊縛の本や愛撫の仕方の本などアートなのか身体の不思議なのか、エロなのか、それらをジャンルに分けるなら、分け手の嗜好次第じゃないの、と思うほどに、様々な本が置いてあった。日本には、それだけ、性的嗜好は溢れているし、拘りが混在しているのだと思う。他にも、ジャンプやマガジンも紛れており、どれだけ分かれていようとも全く違う世界で生きている人なんていないということだって感じた。

雅さんが何か探し始めてくれ、「清武くんはこれが好きなんじゃないかしら？」と『S と M』という本を渡された。「この本ね、男の人が書いてるから、ちょっと違う気もするのよ。読んでみるといいかもしれないわよ。持って帰っていいわよ。読み終わったら元に戻しておいてね」。即、リュックにしまった。

7. 拉致られたと思った

この日の夜、雅さんに「・・・に会ったかしら？」と聞かれ「え？？」というと、「今夜時間ある？」「はい」「連れて行くわ」ということで着いて行った。

店を出る前「ご飯食べた？」、「いえ、食べてないっす」「どこか寄りましょうね」。

キャッチのお兄さんや呼び込みをしているガールズバーの女の子たちと酔っ払いで騒つく道を通り、餃子をご馳走になった。

そのまま歩いて別のビルへ。「マジかよ・・・またカーテンかよ（勤めていた SM クラブもカーテンばっかり）」と思いながら、入って行った。狭い BAR、ラウンジのような飲み屋だった。しかし、通常とは違った。

騒がしい音楽そして、暗闇、よく見ればテカテカして露出が激しいコスチュームを着た女性たち。気づけば、目の前に長身痩せ型、眉間にピアスにタトゥーまみれの女性が立っていた。

何か大声で喋っているが、声はかすれ声。音楽に紛れていくかの如く、何言ってんのかさっぱり聞こえなかった。とにかく、チラっと見られるその視線は、怖くないわけがなかった。

「お前誰だよ」とか思いながら、「わかった？」と聞かれ、「え？」。「わかったか？」ともう一度聞かれ「あ、はい。」ととりあえず、わかったことにしてみた。音楽煩いし、怖いし、帰りたかった。

次の出勤日を告げると、その日は一人で来るように言われた。マジ誰なんだと思いつつ、のちに知ったのだが、この人が責任者で『ルーブル・ガガ』さんだった。

このまま、「タクシーで帰りなさい。次の出勤の時に領収書を持ってきたら清算するわよ」と雅さんに言われ帰宅。

着替えぬまま、座り込み『S と M』という名の本を開き始めた。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁!!ロートーク about 熟女コースー』

綴り人/しすてむ・きよたけ

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。しすてむ・きよたけは、アイディアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。既にあるシステムと fet.するという意味で清武システムズです。動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋ら Night！」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyo です。

今のところ水曜日の 22:00ーです。そのうち清武システムズ HP に録音のリンクを貼ります。

S・V 羅針盤のない航海

川﨑　二三彦

序

序の序

9 年あまりの児童福祉司経験を経て、私が某児童相談所の「相談判定課長」となったのは、「児童虐待の防止等に関する法律」が制定、施行される少し前のことだ。

世はまさに、というと大げさだが、少なくとも児童福祉の業界、とりわけ児童相談所に身を置くものにとっては、まさに嵐を前にして強風が吹き始め、海上は不気味なうねりを増しているような状況だったろう。

だから、振り返ると、私が児童福祉司として地域を担当し、相談援助にいそしんだのは、従来型の、（というより、今となっては＜旧来型の＞というべきかも知れない）ケースワークスタイルによるものであった。児童福祉司としての実践については、紆余曲折がありながらも、最終的に「子どものためのソーシャルワーク」シリーズとして 4 冊の本にまとめたのだけれど、だからといって、児童相談所におけるケースワークの何たるかが理解できたというわけではない。むしろ、それが何

かを追い求め、探求し続けるプロセスの中で生み出されたのが、先ほどのシリーズであった。

なお、そうした探求のプロセス自体を描き出そうとしたものが、後に発刊した「子ども虐待ソーシャルワーク」に収録した「専門性

と処遇力、その２」である。

要するに、この時代を通じての私の関心は、児童相談所の児童福祉司が行う実践的ソーシャルワーク論の探求であり、その確立であったと言っていい。ただし、この探求は、世が児童虐待時代に突入して頓挫する。

それはさておき、児童福祉司という第一線の現場で働くケースワーカーから、課長という職名のついた、いわばスーパーバイザーの役割を担う立場に置かれた私は、ソーシャルワーク論のさらなる探求を行いつつ、それまでの経験を生かして、現役の児童福祉司の力になるよう努力するべく、意気込んで新しい職場に赴任したのであった。

初日

辞令交付の後、次長の案内で、関係職場に挨拶まわり。

それを済ませて課長席につくと、どうであろう、机上のケースファイルを何気なく見ると、A福祉司の児童記録票の１号用紙[*1] の記入の仕方が間違っている。実は彼の新人時代、別の職場で児童福祉司をしていた私は、ふとした機会に、その間違いに気づいていたのだけれど、それが未だに改まっていないことがわかっていささかショックを受ける。一体どのようにして改善すればいいのか、考え込んでしまった。

夕方６時前、女子高校１年を退学するという児童本人から相談の電話があった。「帰宅が遅い」「男の子から電話が鳴った」等という理由で親から暴力を受け、家出しているという。これに対して、すぐさま次長が電話に出て応対したのには驚いた。＜児童福祉司の経験がある次長だから？＞とは思うが、現在は役割が違うのではないかという疑問だ。その後すぐ、B福祉司が出身中学に連絡し、そのような人物がいたかどうか確かめようとしたことにも驚いた。彼は担当福祉司ではないのだが、電話１本で相談の事実を伝えて良いのか、プライバシーとか今後の相談のことも考え、たとえ調査をするにしても、具体的な方法についてはもう少し検討してかでもよかったのではないかと思ってしまう。なおかつ、卒業中学を間違えて電話し、かけ直すはめになった。私はそこでようやく声を掛けた。

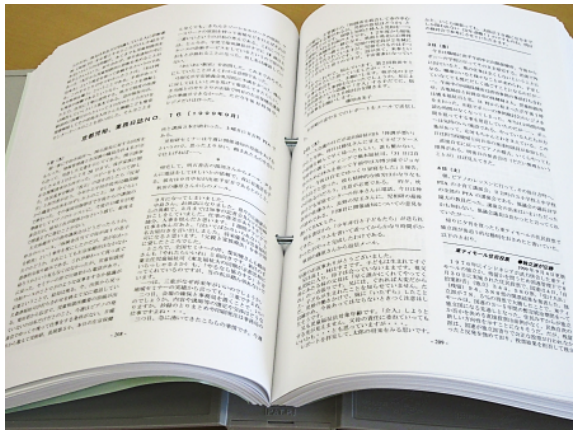
「Bさん、まだ電話だけの情報ですし、それだけで断定的な言い方をするのはどうでしょう」

いきなり学校へ電話するという行為を緩和したかったのだが、当人はむっとした様子。

心理出身の前任の課長は、児童福祉司に対するスーパーバイザー役を担うようになってから、児童福祉司に対する親和性が大きく増したと話していたが、児童福祉司９年を経験した者としては、むしろ自分自身のケースワークと比較して、ついつい批判的になってしまうのではないかと案じてしまう。特に 10 年以上の経験があるベテランのB福祉司とは、いずれぶつかるような気がして心配だ。

業務日誌

実は、課長になったその初日から、なぜか私はこんな業務日誌を付けるようになった。児童福祉司時代、仇のようにして書き続けた面接記録から解放されたからかも知れないが、気づくと、課長としてこの児童相談所で務めた５年間で、原稿用紙にするとおそらくは 2500 枚をかなり超えると思われる原稿が残されたのである。



あまりに膨大な量になってしまったので、これまでは読み返すこと自体諦めていたのだけれど、昨今、スーパーバイザーの役割の重要性が盛んに取りざたされるようになったことをきっかけに、改めてこれを読み直し、当時の私が何を感じ、何を悩み、スーパーバイズについて、どのように考え、試行錯誤していたのかを示すことで、現在の対人援助に何らかの刺激を与えたいと考えるようになった。

新連載を開始しようとする所以である。

*1 児童記録票のトップページ。氏名、生年月日、住所等が記載されている、いわばケースのフェイスシート。

紙芝居

絵と文　柳たかを（マンガ家）

小学校3年生の春、風邪をこじらせて肺炎にかかり昭和31年の春から半年間、寝たきりで過ごしました。
運良く助かりましたが体力はガタ落ち、運動が得意な子供ではありませんでした。
家の周り路地裏は、戦後の団塊世代の子供があふれていた。
当時は、三角ベースというゴムボールを使った野球、馬跳び、ビー玉、べったん（メンコ）などが定番の外遊びでした。
運動音痴な僕は、外遊びは下手くそで、あまりいい思い出がない。
好きなことは、父親の昔話に耳を傾けること、折り込みチラシの裏にマンガを描くこと、描きなぐりながらいろいろ想像に浸ることでした。
楽しみは、夕方「チョンチョンチョーン」という拍子木の音を合図に始まる紙芝居。
もらった10円玉を握り締め、紙芝居のいる公園に一目散。
紙芝居のおじさんが、自転車の荷台にくくりつけた大きな紙芝居舞台の引き出しから水飴、スルメ、酢昆布、型抜き飴、煎餅などを器用に引っ張り出し売ってくれる。
子供から見料を取ることは法律で禁じられていたので、10円前後の駄菓子を売ってその代わりにしました。
当時思い出すのは、けっこうただ見の子供が多かったこと。
昭和30年は、わずかなお小遣いさえもらえない子供がまだ大勢いた貧しい時代でした。

やぶにらみ日記

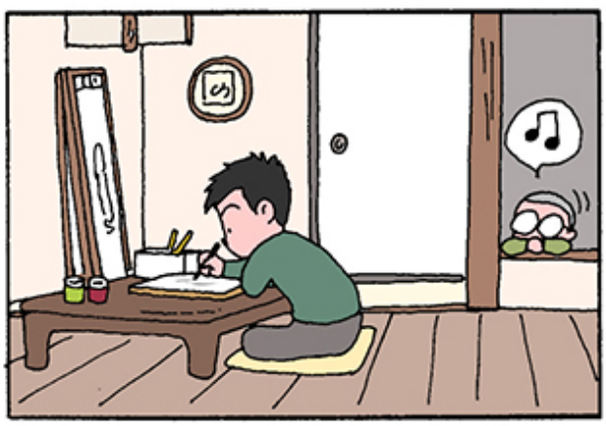
New！東成区の昭和(15)

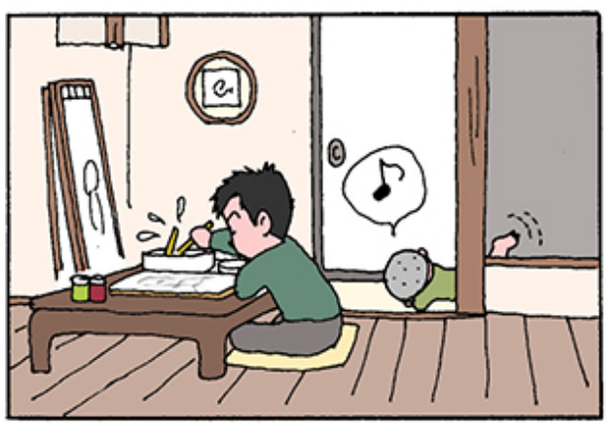
New！東成区の昭和(16)

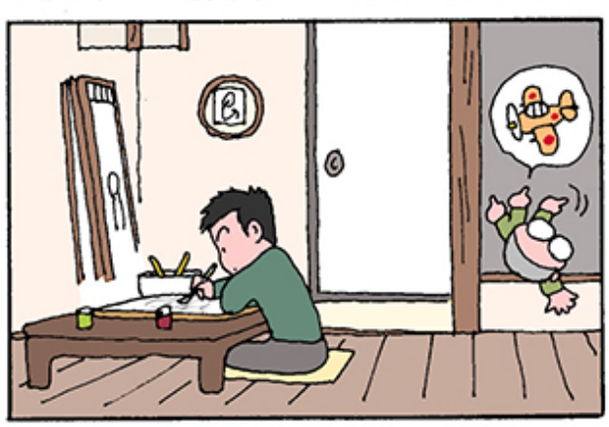
やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(17)

New！東成区の昭和(18)

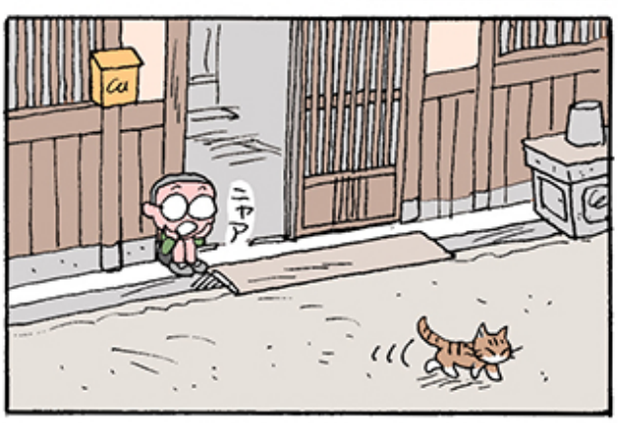


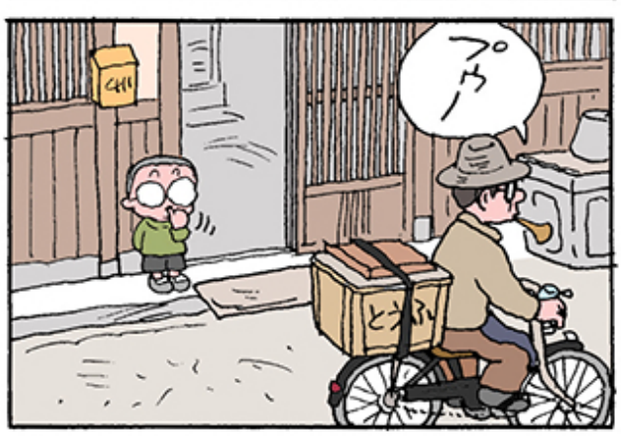




やぶにらみ日記

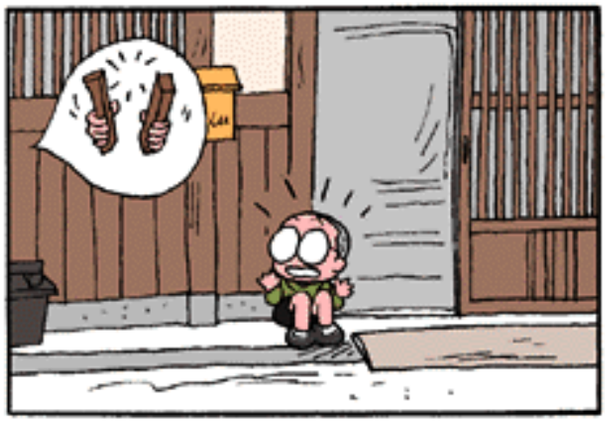
New！東成区の昭和(19)

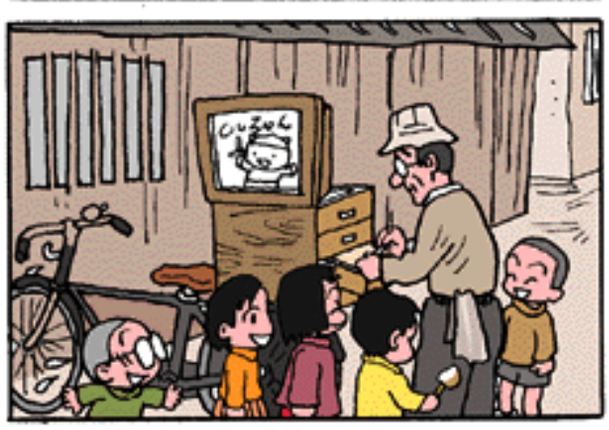




やぶにらみ日記

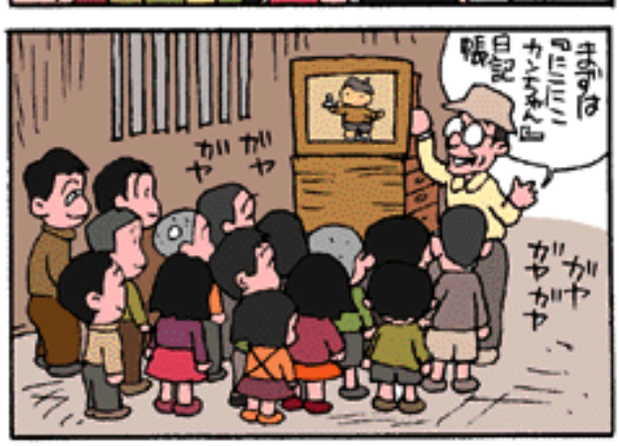
New！東成区の昭和(20)





やぶにらみ日記

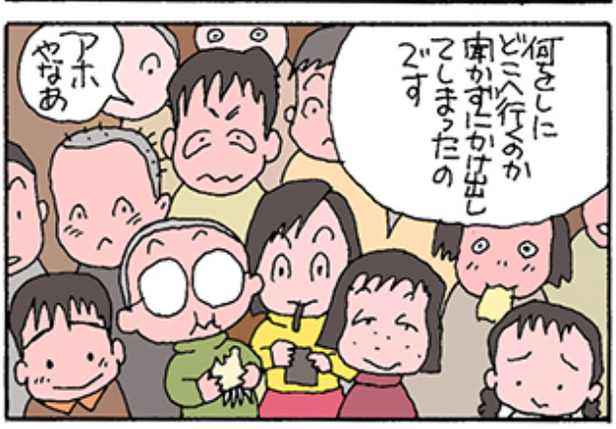
New！東成区の昭和(21)



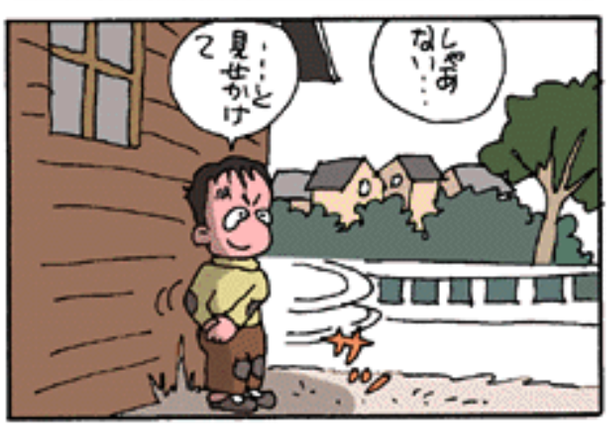
New！東成区の昭和(22)

やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(23)

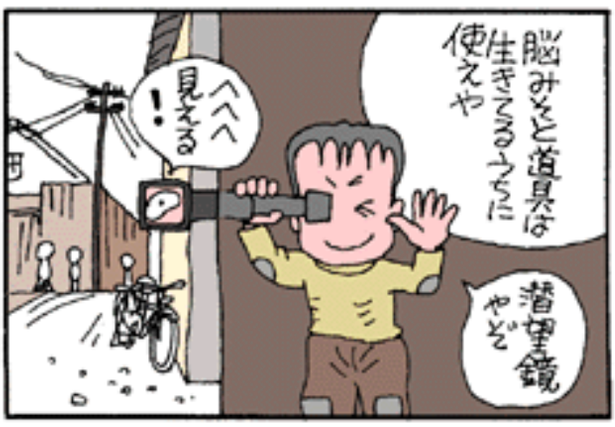


New！東成区の昭和(24)

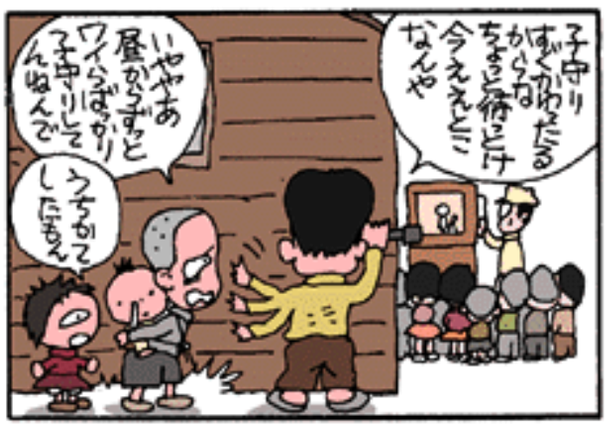


やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(25)

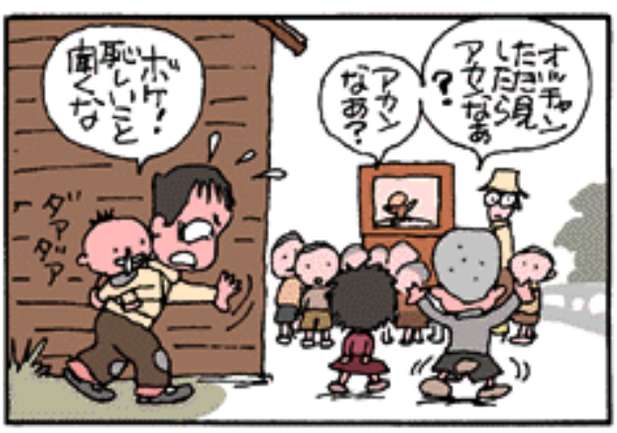


New！東成区の昭和(26)



やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(27)



New！東成区の昭和(28)

編集後記

編集長（ダン シロウ）

◆24 冊、6 年目が終了する。40 人程の連載執筆者に支えられて、マガジンはますます成長気流だ。長期連載が一区切りする方、リニューアルで開始する方、新規の参入者。当然の継続発展の姿が現れ始めている。

こんな事態を作り出せている背景としては、ITインフラの整備が一番大きい。だが、ペンを持ったら誰もが小説家になれるわけではないのと同様、IT環境が整備されたからといって、自動的にこんな事が出来るわけでもない。やりたいと思っていた者にとって、好都合な時代になっただけのことである。

一方、手段が引き出すモチベーションもあって、アメリカ社会の度重なる銃乱射事件も、ネットに溢れるヘイトスピーチ、誹謗中傷もこの現れだろう。簡単に手段が手にはいることで、行動が誘発される。

結局のところ、あなたは何をするのか？はいつの時代にも問われている。私達は多くの場合、今自分のしていることは何となく分かっているが、十年後にそれがどのような意味を持つのか、持たないのか等まるで知らない。

だから今自分のしていることが、ある意味ですべてである。今できない者はずっとしないのだろう。なぜなら時間はいつも、今の連続だからである。「明日から始める」と言う人の明日は永遠に明日である。

今日、今、何をするか、何をしているのかが問われているのだと覚悟すれば、世界は分かりやすい。予言や占いにかまけているヒマなどない。寿命の有限は誰に解説されるまでもない。今日、今が晩年であったことを知るのは、死んでからのことだ。

♯　今号からの新連載は、**川崎二三彦「S.V.羅針盤のない航海」**。児童相談関係の人には待望の開始だろう。それに伴い、「映画の中の子どもたち」は不定期連載化されるらしい。

♯　そして、新しい執筆者「奥野景子」の連載決意表明文も、執筆者短信の末尾に掲載した。

更に次号第 25 号から、他にも新連載の予定が複数ある。ますますの活況ということになるだろう。

♭　また今号では2冊、本誌連載にゆかりの新刊書の告知がされている。

「10 代の母という生き方」
大川聡子著（晃洋書房）

「対人援助職のための
ジェノグラム入門」
早樫一男著（中央法規出版）

詳細は執筆者短信、本文をご覧下さい。

編集員（チバ アキオ）

正規雇用になりたい！という願いを持って、活動をしている方に出会うことが増えた。ニュースになっているように、今後も正規雇用が増えるという状況はしばらくなさそうである。

対人援助の質を確保するために資格をつくるということを長年われわれの領域では行ってきた。その資格も、公務員法との兼ね合いで業務独占にはならず、名称独占で進められてきた。その結果、資格を持って援助職をしている人と、資格を持っていないけれど支援をしている人がいるという状況になっている。

資格を持つことが一定、サービスの質を保証する、いわゆる保証付きの証しであった。ところがこれには前提があったのではないかと思う。「労働条件は同じ」という前提で！というものである。現在、援助職の募集もご多分に漏れず「非常勤」「期限付き常勤的雇用」「人材会社からの派遣」…という文字だらけ。その結果、さまざまな話題が聞こえて来る。

経験が積みあがらない、収入が少なく不安定なので自己研鑽のための研修費用に充てるお金がない、私は常勤ではないからここまでの仕事で充分でそれ以上やると損だ、常勤の人がそこまでしかやらないのに私がやる必要があるのか、常勤がろくに内容もわかっていないし自分より経験も少なくそんな人に使われたくない等々。

これからは援助職がどんな資格を持っているかでは支援の質の保証にならないのではないか？むしろ確認するべきなのは援助職の労働条件ではないか。きちんとした労働環境を提供している職場は、職場が持つ支援に関する考え方もきちんと持っていることが多い。短期間で人が替わるということが対人援助においてどういう影響をもたらすのか？ということがわかっているのかが見えてくる。

そして資格という商品は、非常勤ではなく常勤になれる可能性が高まりますよ！と労働環境の不安をあおり、援助職を消費者にしていく。いわば、労働の不安と資格という商品は対になっているといえる。むしろ、労働環境の不安をベースに資格はなりたっているともいえるのである。

利用者のためにという資格も、利用者の方を向いているようで、実際は自分の懐をみているといわれてもしょうがない。…これらは私が感じているこの業界のある一側面である。もちろん、これがすべてではない。ただ、「資格」云々という尺度だけでサービスをはかるのではなく、その他の視点からもサービスを観てほしいし、観ることができるようになるといいと考えている。

そのためには援助の現場等の生の状況を知ることができないといけない。現場ごとに公式な発信だけでは不十分なことは明らかである。守秘義務もあるし、組織の発信の意図も絡んでくる。このマガジンではそのチャンネルではないところからの発信である。私体験に価値があることは昨今の援助モデル、ナラティブ視点を持ち出すまでもなく明らかである。われわれの社会は私体験で構成されている。援助者と被援助者で成り立っているわけではない。保育所に入れないけど、一方で保育士の労働条件が悪く、なり手がない。

高齢者施設に入りたいけど、一方で援助職の労働条件が悪く、なり手がない。

公式な見解だけ、業界のしがらみに引っ張られたものだけ、資格ムラの情報にひっぱられたものだけが世にあふれる。おいっ！それだけではないですよ！！！っていうのが対人援助学マガジンです。安心して下さい！書いてますよ！

編集員　オオタニタカシ

ここ 1～2 ヵ月、学会誌に投稿する論文と格闘していた。締切日に無事提出できたものの、部屋には校正途中の原稿や資料が山のようになり、その処分にそこそこの時間を要した。考えてみると、対人援助学マガジンの執筆時にこのようなことはない。ページ数が 5~10 ページくらいであれば、紙に印刷しなくても何とか全容の把握ができることもあり、途中で原稿の印刷をしていないからだ。後始末に手を取られない、これもペーパーフリーの利点だ。書き終わると、何かを処分したりすることなく、先に進める。バックナンバーなど、以前の資料を見返すのは Web 上ですぐにできる。できたものはしっかり形に残しつつ、重しにはせずに次へ次へ。このようなフットワークの軽さ、私は好きです。

■ご意見･ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場Ｄ・Ａ・Ｎ

対人援助学マガジン

通巻24号

第6巻　第四号

２０１６年３月１５日発行

http://humanservices.jp/

第25号は2016年6月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年5月25日！

新規執筆者を常に募っています。連載誌ですが、必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数、書いていただけるよう設定しています。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

一時期、砂漠漫画を多量に描いていた。漫画展にもそんなものばかり展示した。岡田隆介著「家族の法則」の装画を依頼されたときもまだ、そんな名残があって砂漠漫画を描いた。

砂漠に魅了されたのは映画「アラビアのロレンス」の1シーンである。マッチの火を吹き消すと、いきなり砂の地平線が現れる。一生忘れられないなぁと思うほど、この映像編集に感動した。

映画「イングリッシュ　ペイシェント」の冒頭の砂漠も忘れられない。もっともこちらはひ弱な都会人の憧れの表れだろうから、せいぜいバンカーショットで、砂と戯れているくらいが関の山だったのかもしれない。

サンドプレイというのは私の業界では箱庭療法なのだが、夕陽の砂漠を作った子には会ったことがない。

私は子どもが帰った後、片づけの済んだ箱庭に、砂紋を描いて、遠くに夕陽を眺めるかのようなファンタジーに浸ったことがあることを告白する。

2015/02/27　団士郎